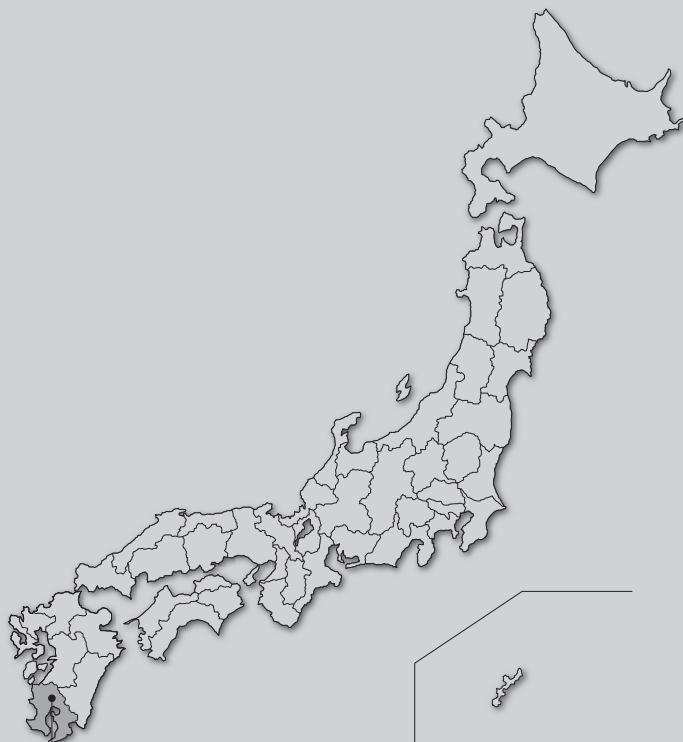


南九州・鹿児島島の民具

Mingu of Minamikyushu District-Kagoshima

川野和昭



南九州・鹿児島島
Minamikyushu-Kagoshima

凡 例

- 1) この表は、以下の資料をもとに作成したものである。
 1. 『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録Ⅲ 産業（Ⅰ）』1986年
 2. 『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録Ⅳ 産業（Ⅱ）』1987年
 3. 『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録Ⅵ 民俗』1989年
 4. 『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録ⅩⅢ 民俗（2）』1996年
 5. 小野重朗著『南九州の民具』慶友社1969年
 6. 『鹿児島の歴史と文化 部門別展示図録』鹿児島県歴史資料センター黎明館1983年
 7. 『鹿児島の歴史と文化 テーマ展図録』鹿児島県歴史資料センター黎明館1983年
 8. 鹿児島民具学会編『かごしまの民具』慶友社1991年
 9. 『鹿児島県歴史資料センター黎明館常設展示解説図録』鹿児島県歴史資料センター黎明館、1996年
- 2) 本表の分類（掲載順）は『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録』の分類（掲載順）に準じた（下記目次参照）。
- 3) 「名称」欄の民具名は、『国際常民文化研究叢書6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構2014）に記載の名称に揃うよう心がけたが、[民具名一覧編]に記載のなかったものについては便宜上つけるか、空欄のままとした。
- 4) 「鹿児島での主な呼称」欄は、「鹿児島での呼称」に記載したもののうち代表的なものを選んだ。
- 5) 「説明」欄の文章は、上記参考文献から引用したものに、川野和昭が適宜加筆・訂正したものである。
- 6) 「画像ファイル名」欄に記載のあるものは、本叢書277ページ以降の画像一覧にまとめて掲載した。
- 7) 「画像ファイル名」について
画像はすべて「黎明館所蔵品目録」に掲載のものである。画像ファイル名は、「文献記号_目録番号_親番号_資料名」の構成となっている。
なお、鹿1～鹿4までの文献記号は出典を明示するため便宜上つけたが（下記参照）、目録番号（資料番号）と親番号（台帳番号）は黎明館の整理による。
鹿1 = 『黎明館資料目録Ⅲ 産業（Ⅰ）』、鹿2 = 『黎明館資料目録Ⅳ 産業（Ⅱ）』、鹿3 = 『黎明館所蔵品目録Ⅵ 民俗』、鹿4 = 『黎明館所蔵品目録ⅩⅢ 民俗（2）』
例) 鹿1_図0061_N3998_スキ
→ 『黎明館資料目録産業Ⅰ』に掲載された目録番号（資料番号）61、親番号（台帳番号）N3998の「スキ」であることを表す。

目 次

農業・養蚕	p. 231	商業	p. 261
山樵	p. 239	衣	p. 262
狩猟・畜産	p. 241	食	p. 265
交通・運輸・通信	p. 243	住	p. 271
漁撈	p. 248	年中行事・信仰・娯楽など	p. 273
生糸・染織	p. 257		
手工・諸職	p. 258	画像一覧	p. 277
鉱業	p. 261		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
農業・養蚕				
耕耘・播種				
犁	オコシ	オコシ、ガンコ、ガンコウ、タシキイザイ、タスキ、スキ、カラスキ	南九州には地につく床木の部分が長い①長床犁と、それが短い②短床犁がある。 ①長床犁：スキ先は、床木に対してまっすぐについて、掘りだした土が左右にはね落ちる。シマズキ（トカラ）、イーザイ（奄美）、ウザイ（沖縄）とも。 ②短床犁：刃は先端部分がまっすぐについているが、後半は左斜めによじれていて、土が左側へはね落ちる。これを改良犁ともいい、南九州では歴史は浅い。奄美では大和犁という牛にひかせる。底部が長くて重いので直線に進むには安定して便利であるが、方向転換がやりにくいこと、起こした土を反転させるのがうまくいかない。	鹿1_図0061_N3998_スキ
	ネコススキ	ネコススキ、オコシ	奄美・沖縄独特の犁。背にあたる木が猫の背のように曲がっている。シマイザイとの違いは形と、犁先の違い。同じ長床であるが、イーザイは袋とじて鍛造品。袋縫じの合わせ目が下でフィラと関連性がある。	鹿1_図0085_N977_オコシ
	イーザイ	シマイゼ、スキ、ユザリ、ヒラスキ、ハテシキイザイ、ハッテイシキイザイ、シマユザリ シマイザイ（大島郡知名町）、オコシ、シマズキ（トカラ）、イーザイ（奄美）、ウザイ（沖縄）、イーザイ、イーゼイ、シマイザイ（沖永良部島知名町）	在来のもを区別するためシマイザイとも。イーザイという名称は、スキサキをつけた部分が地上をいざるように進むことから来た名称。スキサキはペン先形をしており、農具のヘラの刀によく似た形をしている。主に畑作用。	
馬鍬	マンガ	モガ、タモガ、モウガ、マンガ、マーガ、マクワ、マガ、マグワ、マガ一、モーガ、ウマーガ	牛馬に引かせて、荒起こしをした田の土を細かく砕きながら、田面の高低をならして平らにする「代かき」に用いる。大島郡与論町では、イシビキと称して、サンゴの石を引いて代かきをすることも行われていた。 ▼モガ（大隅半島・東串良） 綱をかけて引っ張る部分が鉤形になっている。鎌倉時代に地頭が持ってきたものの名残か。	鹿1_図0117_N1771_モウガ
	ワタイモガ	ワタイモガ、ウネタテ、カガツマンガ、ウネタテモガ	畑作用具。大隅の畑作地帯でよく使われるが、ワタイは畝をいう語のようだ。麦まきのウネタテに用いるが、その他粟、大根など浅く植えるもののウネタテにも用いる。深く植えるときはナカヒキを用いる。モガと同様牛にひかすが普通。	鹿1_図0559_N1552_ウネタテ
均し具	ナラメイタ	ナラメイタ、マンガイタ、ナデイタ、ナラメダケ、ナデダケ	平らげ板の意であるが、人によってマンガイタとかナデイタという。杉の厚板で作られ、モガ（馬鍬）に装着する。モガと同様に牛にひかせて田の泥の上をすべらせていく。エブリを畜力を使って引くようなものではなくに能率がよい。南九州に点々とみられる。板の代わりに竹を用いたナラメダケ、ナデダケというものもよく見られる。	
	イシビキ	イシビキ	土をくだき、田面をならめる二役がある。与論島など、下がサンゴ礁の水田で、まず手杵で田の底を打って水が抜けないようにしてから用いる。	鹿1_図0132_N2325_イシビキ
	エブリ	エブリ、ジナラシ、シルチャ、シリ、スリチャ、ノロヒキ エブリ（大隅～南宮崎）、ナデボウ（大根占）、タナデ（川内）、ナデ（屋久）、オシ（出水）、ムタオン（始良）、ノロヒキ（指宿地方）、シログワ（長島）、スルチャー（奄美）	▼ノロヒキ（鹿児島県指宿市新西方） 名称が多様。マンガで田をすいたあとで、さらにこのノロヒキで泥の面をならして田植えをする。同形の小型のものでモミカキがあり、モミや麦を乾燥させるときにかき広げるのに使うが、共用することはない。	鹿1_図0183_N3782_スリチャ
	ナデボウ	ナラメボウ、ナデギ、ナデボウ	特に阿久根市、出水郡、出水市地方。ナデイタと同じ用途で使っている。丸い長い棒で、やや重い木を丸く削って作る。これの端をもって、大きな扇状にすべらせて床面を平たくする。	鹿1_図0169_N1208_ナラメ棒
苗代鍬	ナデイタ	ナデイタ、スリコン	串木野地方を中心に北薩にひろがって使われている。杉板に手をつけたもので、自家製。鍬で苗床の部分に泥をあげ、その表面を平らにする。床の上に糞をまいたら、水に浮かないように上から静かになでて糞を泥の中へすりこむようにする。	
田植縄	タウエナワ	タウエナワ、タウエナワ、タウエツナ	ツノウエが少なくなり、ワクウエ、サオウエでも、まず先に田にモトツナを垂直にはって基準線を作る必要があり、そのために長いタウエツナがある。自製したもの、あるいは糸巻棒をタウエツナノワクに巻きつける。中央がたるむのでタウエツナノシンボにひと回しして泥に立てる。	鹿1_図0194_N2093_タウエナワ
田植竿	シャクボウ	シャクボウ、ゴダケ、タウエジョウギ、タウエザオ	▼ゴダケ、タウエザオ（鹿児島市小山田町） 等間隔で田の苗を植えていくのに用いる。長い竿に等分して印がついてある。二つ割りにしたり丸のままの竹を用いるが、水に浮いて流れやすいので、両端近くに串を備えて泥にさしている。大隅半島中央部の鹿屋市、曾於郡では木製の棒を用いてそれをジョブザオという。	鹿1_図0200_N949-1_シャク棒
田植杵	タウエワク	カタツケ、タウエワク	三角形、六角形、梯子形のものなどがある。南九州を通じて田植正条植の方法は、田植え縄だけの方法からタウエワク、さらにタウエザオへと移行してきた地方が相当に多く見られる。	鹿1_図0214_N736_カタツケ（田植用カタツケ）
田舟	タブネ	タブネ、ナエブネ 直蒔用：ミウエブネ、ミエブネ、タブネ、ナエブネ	水田で使う運搬具。明治の終わりごろまでは湿田が多く、田植えをしないで直播き、実植えをしていた。この中に堆肥と種籾をよく混ぜたものをのせて、指でつまんで点播する。田植えにはこの舟に苗をのせて、引きずって退きながら植えていく。また作業用に泥や農具をのせたりして運搬するのにも用いる。もとは多くが深い湿田であったので、稲は直播きをしていた。エブリやタウエツナの出現より先に、ミウエブネを用いた直播きが基本であった。	鹿1_図0220_N1133_実植えブネ 鹿1_図0226_N1965_ナエブネ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
風呂鍬	オデグワ	オデグワ、ヘラクワ、ヒラクワ、マムシノピント、ヒラクワ、ノウチグワ、エッチュウグワ、イタグワ	▼オデグワ、ヘラクワ、ヒラクワ、マムシノピント（肝属郡大根占町）木の台に鉄の刃をはめたものを総称する。柄が台にはまる所は巧みにできているが弱い。浅い面をけずったりするのに適し、サラサラした土では特に仕事はかどる。種子島に分布するヒラクワは、刃が平たく土がふくれているものは、その形からマムシノピントとも。やや深く耕すのに適している。マムシノピントというのは、鉄製の刃部の形が甍の頭に似ているところからいい、先端が広くヘラに近付いている。柄の角度45度くらい。鹿児島のはヒキグワ、ウチグワの中間くらい形でとにかく重い。畑を新しく開墾するときに用いる。 ▼イタグワ（熊本県天草郡河浦町新合、平床）下天草島から上天草島にかけてひろく見られる古い鍬。刃の板部はイチイガシで作り、裏側の中央に低い稜線がある。これは泥土が付着するのを防ぐという。刃と柄との角度は約30度、鉄の刃先は二枚の鉄板で台の先を挟む形になり、釘でとめてある。柄が裏側にとび出ているが、これは柄を丈夫にし泥をつけないようにする働きがあるという。畑作に全面的に使われた。持ってみて極めて軽い。サイツクワともいうのは下天草の崎津から売りにきたからだという。このように刃先だけに鉄を少つけた鍬は熊本山地から、鹿児島山地にかけて残っている。	鹿1_図0416_N1900_ヒラクワ 鹿1_図0424_N2232_オデグワ
唐鍬	トンゲ、ヤマンガワ（開墾用鍬）	ヤマクワ、ヤマグワ、マドグワ、立鍬、マルグワ、在来鍬、オキナワクワ、ハビル、トンガイ、マルガ、ヒラガ、トンゲ、チヌハシ、カイタクグワ、クワ、トーゲ、トチムン、トウゲ、トウガ、ヒラトウゲ、トウガ、トンガワ、トンガ	▼トウゲ、ヒラトウゲ（大島郡瀬戸内町油井）幅の狭い鍬を一般こうよぶ。幅の広い鍬をヒログチ、トチムンと呼ぶのに対する名称のようである。南九州本土でヤマクワと称するものに相当する。幅がせまく、肉が厚く、重い。刃先が矢筈状になっているのが特徴。山野の畑の耕作や開墾に用いられる。硬い土を打ち起こしたり、土中にある根などを切り打つのに適当で、矢筈形の刃先が機能を発揮するという。 『成形図説』では「南島鍬」の名前で紹介されている。 ▼ヤマクワ 荒地、固い土地の荒起こしに使われている堅牢な鍬。唐鍬のことで、鹿児島本土ではヤマクワ、ヤマンガワ、ヤマグワ、奄美地方ではトーゲと呼ばれる。金属製の風呂無し鍬の一種。打ちこんで起こすため肉厚。	鹿1_図0276_N3155_トンゲ 鹿1_図0293_N1233-2_トーゲ
金鍬	クワ	クワ、改良クワ、ピッチュウグワ、イモウエ、イモウエグワ、エッチュウゴイ、ハンカンキ、トウガ、エッチュウグワ、ハタガ、フタマタトンガ、カンキ、クワンキ、カンギ	▼カンキ（薩摩郡里村里）鉄刃の肉が厚く、やや湾曲している。ミミが普通の鍬にくらべて大きく、頑丈である。畑の打ちおこし、畝立て。山の傾斜地などで使った。クワンキ、カンキとも。	鹿1_図0325_N533_鍬
田打鍬	ウチグワ（タウチグワ）	ヒルバ、ヒヤゴイ、タウチグワ、ヒラガ、トチムン	主に奄美。刃の幅の広いものは田打ち用、狭いものは畑作用とに分類できる。 ▼タウチグワ（大島郡沖永良部島）田を耕すだけの鍬。南九州本土では田打ち専用の鍬というのではなく、人力で田を耕すときはミツマタなどを用いている。専用のタウチグワがあるのは種子島から南で、中でも奄美では特徴のあるのみがみられる。旧型は柄が抜けないように特に刃の後端と柄の下部とにつっかい棒を入れる。新しいものは刃がうすく軽いものでトチムンと呼ぶこともある。使い方は田に水を引いて、膝上まで泥につかりながら、これをふるって泥を荒起こしする。このあとマンガで代掻きを行う。奄美ではこのような人力での泥起こしが行われている。後にヒルバとよばれる鉄刃のみの鍬に移行する。	鹿1_図0251_N2587_ヒルバ 鹿1_図0256_N2725_タウチグワ
板鍬	イタグワ	イタグワ	全体が木でできた鍬。全体が大きく、柄がとても長い。柄と台の角度が急で非常に重たく、地面を這うようにして使用。黎明館の資料目録では、この資料は川内周辺のもので特殊なもの。儀礼用に木で作った鍬もある。	鹿1_図0396_N706_イタグワ（板鍬）
備中鍬	マタグワ	マタグワ、ミツマタグワ（甌島、天草、宇土地方）	鹿児島では主として田の打ちおこしに用いた。甌島、天草、宇土地方では、三つ又鍬といい、刃身と柄のなす角度が小さく、柄が短い。段々畑の粘土質や小石混じりの土壌では、軽くて上部で最適の農具。奄美では刃身が分厚く、柄も根元がひとまわり大きい。角度が大きく、刃身の穴と刃部との鍛接は打ち起こしても折れないように工夫してある。サンゴ礁の固い土石からなる畑では、打ちおこしや芋掘りなどに重宝する。一方、奄美と甌島の離島を中心に、フタマタグワがあり、用途は三つ又鍬と同じだが、それより軽くて手軽に使える。	
	ミツマタ	ミツマタ、ミチマタ、ミチマタゴイチ、ミチマタゴイ、ミツマタグワ、マタグワ	ミツマタとミツマタグワとは区別して使われる。 ▼ミツマタ 三又になった刃が短く柄は長くそれらのなす角度も70～80°と大きい。刃の厚いものは水田の土を打ち起こしたり、粘土質の刃竹を打つのに用い、刃のうすいのは麦の間を掻くものなどで、一般に広くみられる。 ▼ミツマタグワ 形は刃の長い鍬によく似ているもの。刃が長く、柄は短く、角度は小さい。柄の両端をにぎって腰をかがめ力を入れて水平に近く打つ。この地方（熊本県宇土市網田、戸口）の土質は粘土質で重いので鍬よりも刃の細いミツマタグワのほうがよく通る。	鹿1_図0479_N3552_ミツマタグワ
	フタツマタ	フタツマタ、フタマタ、フタツマミ、マタクエー、フタツマタクワ、フタマタクワ	▼フタツマタ（大島郡住用村和瀬）享保時代のころ、鍬を股状にして土との接触面積を少なくして、作業効率を上げる工夫がなされた。三股鍬（備中鍬）や二股鍬がそれで、全国に普及していった。二股鍬は江戸時代、「たこ備中」とも呼ばれた。 ▼フタツマミ 鹿児島でつくられるものとは、耳の作り方・楔の打ち方が異なる。外側を作り、楔を縦に入れて真ん中を加えている。	鹿1_図0477_N3398_フタマタ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
手鋏	テグワ	テグワ、トゲヘラ、アナキトンガ、イシトング、イモホリトンガ、カタテグワ、ユリホリトウガ、クサトイカッ	▼手鋏（大島郡三島村黒島） 片手で持って使うクワの意。主として焼畑の開墾用。傾斜のある足場のわるい土地で、木の根竹の根の残った土をほるには、片手で仕事をするほうが便利。畑の仕事もこれですませる場合もしばしばあるが、イモ植え、イモ掘りなどにも使う。甌島ではこれと全く同形のもので、ユリホリトウガと違って野生のカノコユリの球根を掘るのに使っている。奄美ではサトウキビの茎を切り倒すのにこれとほとんど同じ大きさの手鋏を使っている。 ▼トゲヘラ（大島郡瀬戸内町古仁屋） 全体の形態はトウガ（唐鋏）で、刀部はヘラの形という形態的特徴による名称。片手で持って、イモ植え、除草などに用いる。土を掘るのに用いる（鹿1_図0518_N2584_トゲヘラ）。 ▼テグワ 手鋏、片手でも使える小さなクワ。鹿児島周辺の島々でいろいろ見られる。焼畑の開墾用、イモ植え、イモ掘り、ユリ根掘り、サトウキビの茎を切り倒す、等。傾斜地で土を掘るには、片手で仕事をするのが便利。	鹿1_図0518_N2584_トゲヘラ 鹿1_図0521_N2927_テグワ
篋	ヘラ	ヘラ、フェラ、イモウエ、ピラ、クサトリヘラ、クイピラ、フィラ、ヒーラ、フイーラ、ペラ、ガークピラ(与論島)	▼ヘラ トカラから奄美、沖縄の島々に分布する、細長くやや平たい鉄の刃をもった小農具。芋苗の植え付け、畑の除草、一部ではアワの間引きなどに使用される。ヘラのタイプは ①股木型：V字型の自然の股木をつけたもの（奄美、沖縄に分布） ②孔板型：三角形の板に孔をあけたもの（トカラ列島の口之島、平島、悪石島、本島から離れた宮古島、八重山諸島） ③直柄型：直柄に刃の根元を曲げて打ちこんだもの（トカラ列島の宝島と小室島のみ）がある。 ①②は向こう押しに使うという一つの使用法しかもたず、手鋏式にもって上から下に打ち下すような使用法はないが、②は時には逆手にもって掘り棒のようにして使う。③は股木型よりも刃が細長く、厚い。また、柄と刃との角度も大きい。使用法も、向こうに押して芋植え、除草に使う点では股木型、孔板型と同じだが、手鋏式にもって上から振り下ろして芋のさぐり掘りによく使う点では、より掘り棒的機能を持っているといえる。	鹿1_図0539_N864_フェラ 鹿1_図0553_N3965_ヘラ
株切り鋏	カブキリ	カブキリ、カッキイ	▼カブキリ、カッキイ（宮崎県東諸県郡高岡町） 株切りのことで、稲を刈った後に残る株を切り取るためのもの。刃にハガネが入っている。元は一株ずつ株を切らねばならなかったが、現在では改良スキが株切りとすき返しを両方一度にやってしまう。刃が菱形でうすい宮崎型と、二等辺三角形に近く厚い鹿児島型とある。	鹿1_図0563_N1108_カブキリ
畦叩き	アブシウチブリ	アブシウチブリ	水もれを防ぐため畦を叩きしめる棒。アブシは畦、ブリは叩く棒という意味。	鹿1_図0571_N3120_アブシウチブリ
畦切り	アゼキリ	アゼキリ、アゼキイ、ミミキリ、アゼキリガマ、アゼキイガマ、ムギタキリガマ	押切の刃を使用。畦塗りする前に畦を切り揃える。アゼキリ（包丁形）とアゼキリガマ（鎌形）がある。	鹿1_図0573_N2257_アゼキリ
種入れ	タネモノイレ	タネモノイレ、耳付種壺	種籾を入れる。天井から吊ってネズミに食べられないようにした。耳付種壺はラードを入れる油壺（ミンガメ）の転用で奄美のものか。	鹿1_図0580_N640_種モノ入れ 鹿1_図0581_N927-1_耳付種壺
種蒔機	タネマキ	播種機、タネマキ、ムギマキ機	麦の種まき用。	鹿1_図0583_N707_ムギマキ機（麦播機）
育成・管理				
大足	タゲタ (カシキ踏込)	タゲタ(鹿児島県一般)、アシダ(大隅東海岸)、フミコミゲタ、フンコミゲタ(種子島)	▼アシダ（肝属郡東串良町） 鹿児島県一般としてはタゲタという呼び方が普通だが、大隅東海岸ではアシダという。他の地方に比べて前後に長く、アシダの裏には丸棒の縦棒を入れるのが普通。水田にカシキとって山から切ってきた柴や、ソハとって青刈り大豆の葉茎を撒いておき、それをアシダを歩いて歩き回って踏みこんで緑肥とする。その他の作業に用いたとは聞かない。 ▼タゲタ（輝北町） 昭和初期まで、水田に肥料とする草木の若葉を踏み込むのに用いられた。材料は杉板。四隅についている縄を引き上げながら田面を歩く。	鹿1_図0587_N178_タゲタ
田下駄	タゲタ	タゲタ	▼タゲタ 水田耕作用の下駄で二種類あるが、それぞれ用途が異なっている。種子島南部の田下駄の一種は孟宗竹で輪を作り、その上にスギ板を固定し、中央部に鼻緒をつける。湿地用で手縄はついていない。種子島南部は湿地が多く、足のめり込みをなくし、作業が簡単にできるように考案された。除草などの中間作業には使用できない。孟宗竹の輪は体のバランスを保つもの。	
雁爪	ガンヅメ	ガンヅメ	▼ガンヅメ 稲作の田植のあと、稲株の間を中耕と除草を兼ね、しゃがんだ姿勢で右手で稲株をにぎり、左手でガンヅメをもち、土中に打ち込み、手前に引いて土を掘り返す。土を掘り起こす取機に稲株の根も切るため、地上部の生育もよくなった。のちにタイチグルマ（タグルマ・回転除草機）が流行するが、乾田や水の少ない田ではうまくいかないので、大正・昭和期でもガンヅメが愛用された。	鹿1_図0608_N646_ガンヅメ 鹿1_図0617_N1154_ガンヅメ 鹿1_図0636_N2248-2_ガンヅメ
田掻き	ソロッパ	ソロッパ、ゲタ、クサカッ、ジョイ、ハッタンボ、セッタ、ヒガレダカカジイ、ガン、ガメ、ムタズイ	▼ハッタンボ セッタ、ジョイ、ヒガレダカカジイ、ガン、ガメ、ムタズイ、ソロッパといわれる金属製の爪を植えた木に、舟形の鉄輪をはめて連結させたもの。転車つき八反より以前に流行した。田に水を溜めて押し引いたりして草を削り取り、水に浮かせて腐敗させる。ただしガンヅメを打った後、凸凹になった泥土を平坦にし、次の田の草取りが楽におこなわれるようにする役目も担い、ガンヅメ作業と並行しておこなわれた。このあとハッタングルマが使用され始める。	鹿1_図0716_N423_ソロッパ 鹿1_図0724_N1517-1_ゲタ（取っ手なし）
回転除草機	タグルマ	タグルマ、タグイマ、タウチグルマ、タイチグルマ、ハッタングルマ、タイチグルマ、ハッタンボ	▼ハッタングルマ 八反車。稲株が張らないうちに除草し、泥土の回転をおこなうもので、普通田植え後2カ月以内に縦、横、縦と三番車まで済ませる。その後泥土がねまったところを見計らって田の草取りをする。できるだけ地中に深くくい込ませて、泥土を大きく回転するのが理想とされた。除草剤の普及と根株を傷つけないようにとの指導により姿を消した。	鹿1_図0713_N1471_車

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
草掻き	クサカキ	カカジイ、クサカッ、クサトイ、タノクサトリ、クサカキ、クサトリカギ、クサトイカッ、クサカギ、カギ、カック	▼カカジイ ワタイモガと同じ発想で、畝の間をまたぐ形になっており、除草する(鹿1_図0797_N489_カカジイ)。 ▼クサカキ もともと一般的な形。引っ掻いて取る除草機。焼畑のときに草を集めたりする作業にも使う(鹿1_図0809_N3289_クサカキ)。 ▼クサトリカギ(鹿児島市東桜島) 先にはハガネが入っていて丈夫にできている。主として畑の草取りに用いるが、タバコ・サツマイモの根方に土をよせるのに用いたり、粟の中を掻いたりする。片手で持って手前に引きながら水平にちかく土をかき切る。薩摩半島の畑作地帯のみ分布している。	鹿1_図0797_N489_カカジイ 鹿1_図0809_N3289_クサカキ
源五兵衛犁	ナカヒキ	ナカヒキ、テスキ、ナカヒッ、ヒッ、ウネタテ、ヒッグワイ(指宿郡開聞町川尻)	▼ナカヒキ(隼人町) 粟、麦、陸稲、そば、大豆などの畝間を、後退しながら引いて、中耕と根元への土寄せをする道具である。また、豆類や大根などの種をまくための畝たてにも用いられる。鹿児島島の畑三毛作の代表的な農具。 ▼ナカヒキ ナカヒッと訛って呼ぶ。ウネタテと呼ばれるときもある。麦の畝と畝の間などを、これを引いて後退していくと、土が左右にわけられて中耕と土寄せになるし、豆その他をまくための畝立てにも用いられる。形にもいろいろ変異がある。 ▼ナカヒキ(肝属郡吾平町神野) 杉の木の上部に鉄刃がとりつけてある。柄と横柄も杉製である。中耕や土寄せに用いる。やや軽いので上部に重しをのせて引いたものと思われる。	鹿1_図0742_N2279_ナカヒキ 鹿1_図0744_N3412_ナカヒキ
畝立犁	スキ	テスキ、ウネタテ、ムギノウネタテ	▼スキ(熊本県天草郡苓北町) 鹿児島県始良郡あたりではテスキ、川辺郡ではウネタテ、ムギノウネタテと呼んでいる。向こうに押して畑に種まきの畝筋を作るのに用いる。同じく畝を作るナカヒキがあるが、ナカヒキとは逆に、向こうに押して前進しながら使う点が相違している。	
鋤簾	ジョレン	ジョレン	土木で用いるものと同じ。畑の畝を引いて、そこに種を蒔いていく。	
土入れ	ケランテ	ケランテ、マメカッセ、ツチカブセ、マメカクシ(有明町、鹿屋市)、マメカッセ・カッセ(輝北町)、ツチヨセ(加治木町)、アトカッセ(日置郡松元町)、ケランテ(大隅一帯)、ツチカブセ(粟野町)、ツチヨセ(加治木町)、マメカクシ(鹿屋市)	▼マメカッセ 大豆やアワの種子をまいた時の土被せ農具。柄の先に3本の分枝した刃があり、両側の2本はスプーン型で土をかき寄せるように内側に曲がっている。まん中の刃は棒状で下を向いている。柄を握って後退りに引いていくと、まん中の刃はウネの底を引き、両側の2本で土を被せる。のちにはまん中の刃は不要になったとみえて、2本だけのものに代わっていった。名称が各地で異なる。 ▼虫の鱗の手に似ているからケランテという。土寄せ。鹿児島になくはならない農具。引いていくと、畝が立つ。真ん中ですじをつけて種を蒔くと同時に、種を広げたりする役割もする。畝を立ててすじをひいて、種を蒔く。さらに両側で土を被せる。中耕にも使う。真ん中がないのが新しい形。	
	ツチイレ	麦用土入れ、麦用カブセ、ツチイレ、麦土入れ、ツチイレ、ムギノツチイレ、ツチイレキ	全国的に用いられているものと同じ。麦を蒔いた上に土をかける。	鹿1_図0755_N346-1_麦用土入れ
培土器	バイドキ	ツチヨセ、バイドキ、カルチ	上下で使い分けることができる合体型の土寄せは、上の部分で畝を作り、下の部分で土を掻く。	
油差し	アブラサシ	アブラサシ	水田のウンカを退治するために水田に油を差す。底に穴があり、棒を差し込んで出し入れを調節できる。長い竹の竿につけて使って稲穂に油をさしていくが、水面に油が浮く程度で効果がある。ブリキ、竹、アルミ製など、いろいろな形がある。	
モグラ獲り	モグラトリ	モグラトリ		
鴨の罾	カモノワナ	カモノワナ	▼カモノワナ(始良郡隼人町住吉) 秋の田に稲穂をたべにくる鴨をとるためのワナ。ハザに垂れている稲穂と田の面との間にこれを仕掛け、ハザの下をくぐって行動する鴨が首をのぼして通ろうとすると、首を突くことで締められる。捕えた鴨は食用にするが、害鳥駆除の意味が大きかった。	
自転車揚水車	ミズグイマ	ミズグイマ、ミツグイマ	▼ミズグルマ、ミツグイマ(肝属郡串良町) 用水溝からその水面よりも高い田に運び上げるためにつくりつける水車。水を汲むのはマダケの一節を皮を剥いで用いる。5月から8月まで使い、終わると外して家に持ち帰る。南九州を通じて同じ構造だが、これがみられるのは広い平地の地方で山間にはない。	
収穫				
鎌	カマ	カマ、カセダガマ	▼カセダガマ(加世田市小湊、屋敷) 耕地の狭い加世田郷では農業もままならないため、内職として始めたのが大工や鍛冶職であった。この鎌は両刃で厚く、刃こぼれしにくい。山間の多い鹿児島の地形に合っている。その上、切れ味は刀のごとく見事である。	
鋸鎌	イネカリガマ	カマ、イネカリガマ、イニカルガマ	ノコギリガマという言い方は鹿児島にはない。一般的な直角形に対して、ノサ形。刃が斜めになっているので、ノコギリを引くようにして切ることができる。 片刃、モロハのものもあり。	鹿1_図0833_N673-3_カマ 鹿1_図0848_N1364-2_カマ
穂摘具	ツメ	ツメ、タケベラ	▼ツメ(トカラ列島悪石島) 5cm程の真鍮の板を親指に合わせて響曲させた「爪」を使用した収穫方法がおこなわれている。使用法は両手の指にはめ、中指と薬指の間に穂首を抱き込み、ツメで押しつけて摘みとる。これを腰から下げたコスケと称する籠に収穫するものである。 ▼ヘラ(トカラ列島悪石島) 細竹の片側をナイフ状に削り出し、粟の穂首を根じ切るように摘み取る。	

名称	鹿兒島での主な呼称	鹿兒島での呼称	説明	画像ファイル名
黍刈鎌	キビカリガマ	キビキリ、キビカリガマ、カマ	▼キビカリガマ（奄美地方） 伐り倒したサトウキビの葉を落とし、頂の部分を持ち捨てるための鎌で、刃の先1/3ほどが二又に分かれている。二又の間にキビの茎をはさみでなければ葉が落ちるといふ仕組みになっている。「カマ」とは言うものの、キビの茎を引き上げるようにして切ると茎が尖って危ないので、上から打ちつけるように落して切る。鉈に近い。	鹿1_図0866_N1314_キビキリ
	ハカマオトシカマ	ハカマオトシカマ	キビを刈ったあと、ハカマを落とすためのもの。補助具。	鹿1_図0877_N2867-2_ハカマオトシカマ
稲刈機	イネカリキ	イネカリキ	ハサミで切って束ねる。束にする機能はついていないので、後ろから拾っていかなくてはならなかった。	鹿1_図0883_N2099_イネカリキ
掘棒	ホリボウ	キンツ、キンツツ、キンツキ、ヤマイモホイノキンツツ、タバコノキンツツ、タケノコノキンツツ	▼キンツ（始良郡横川町下野） 鉄刃は平板で反りはない。刃の根元を柄にはさみこみ、上から鉄輪をはめてしめてある。主に山芋掘りに用いる。刃の歪曲しているもの、とりつけ部がソケット状になっているものもある。種子島が南限である。（鹿1_図0887_N4158_キンツツ）刃先が平たいが、鍛造品で袋とじ。カーブがあって土を引きあげる。この形の掘棒は、ラオス北部でもモン族などが使用している。	鹿1_図0887_N4158_キンツツ
	タイモホリボウ	タイモホリボウ	▼ホリボウ（大島郡知名町竿津） 枝を切り、先端を尖らせただけのものである。田イモ掘りに使用する。	鹿1_図0890_N3181-2_田イモ掘棒
	アサングイ	クシ、アサングイ、アサリグイ	▼アサングイ（大島郡伊仙町伊仙） 木の柄に真直の鉄棒をとりつけたもの。いもを収穫するのに用いる。奄美では海辺の貝やタコ、ウニなどをとるのにも用いる。 ▼アサリグイ 奄美諸島ではヘラ（小形手ススキ）と別にこの掘り棒がよく使われる。芋をあさったり、海辺の貝やタコ、ウニなども取る兼用。そのもつとも古い形の木の棒は奄美や沖永良部島で見られる。 ▼クイ、グイ、クイー、クイピラ ヘラが平たいのに対して細長い形をしており、土をほる小農具である。用途はイモ畑のイその成熟しているのをさぐりあさって掘り取るのに使う。持ち方は逆手にもつこともあるが、普通は向こうむきをもって押すようにして使う。	
	ネン	ネン	木の先端を尖らせたアサリグイ。	鹿1_図0896_N3707_ネン
脱穀・調製				
扱管	クダ	クダ（笠利町、徳之島）、テクダ、コーシギ	細竹で作った稲の脱穀用の管。2本の細竹のそれぞれ片方にワラをねじこんでつなぎあわせて作ったもの。右手に持って、てのひらと親指、ひとさし指でもって稲穂を1本ずつさぐる。左手に稲束をもち、数本ずつクダでさき落として行く。脱穀した稲はウス（白）とアジン（縦紋）で精白する。徳之島・奄美大島本島からトカラ列島に分布している。 ▼クダ（鹿児島郡十島郡口之島） 二本の細いリュウキュウ竹のそれぞれ片方にワラをねじこんでつなぎあわせてある。稲の脱穀に用いる。徳之島・奄美本島からトカラ列島にかけて分布している。竹の長さは使う人の大きさにあわせてつくられる。	鹿1_図0903_N3797_コーシギ
扱管	テクダ	クダ、テクダ、クダバシ（与論島）	沖永良部島から沖縄の一部地方まで使われている。2本の細竹を約3分の1ぐらいのところでワラを結んで、片方を1回転させてねじり、パネのような弾力性をもたせて作る。これはクダバシとも呼ばれるようにハシのようなかつこうの竹を結びあわせたもの。脱穀した稲はウス（白）とアジン（縦紋）で精白する。	鹿1_図0900_N2335_クダ（テクダ）
	ムギコギイタ	ムギコギイタ	穂を棒の間にうちかけて、中に入れて引いてしごく。使う人の身体にあわせてつくってあり、黎明館の資料では竹の長さが左右異なり、右利き用と左利き用がある。 ▼ムギコギイタ（鹿児島郡三島村大里） 台は杉材で、手前にくるにつれてうすくなるように削ってある。台の端に2個の穴をあけ、長短2本のきんちく竹がさしこんである。麦の穂先を竹の間にはさんでしごくのに用いる。	
千歯扱	センバ	センバ、カナクダ、センバコキ、マルセンバ、イネコキセンバ、ゴケダオシ、コメセンバ（稲抜き用）、ムギセンバ（麦抜き用）	▼カナクダ（川辺郡大浦町） 金管で古く竹箸という竹管で1本ずつの穂をしごいて脱穀していたのが金属性になったための名称で、センバは千束もこげると驚いた名である。片足で踏み板をふんでいてこぐのは、引く力でもちあがらぬようにするためである。歯が直線にならんでいるのをコメセンバ、やや中くぼみに弧状にならんでいるのをムギセンバとって使い分けることもある。これで脱穀すると穂のままでもとれることが多く、そのために後でいろいろの道具で叩く必要が出てくる。大正中期に入ってくるまでは、クダバシでこいでいた。	鹿1_図0945_N2055_センバ

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
唐竿	メグイボ	メグイボウ、クンマンボ、ムギウチブットー、メグイボ、メグリボウ、メグイボ(鹿児島・宮崎)、プリビヤ(熊本県)、マメウチボ(大島郡与論村那間)	<p>麦や大豆の脱穀をする。手に持つ方の長い棒につらねる回転棒のほうは変異がある。</p> <p>A型：数本の細い棒を横に並べて綴つたものを回転棒にとりつけたもの。叩く面が広くて軽く、よく回転する。南島と薩摩半島の西半を除いて南九州本土にひろく分布している。</p> <p>B型：ただ一本の相当太い棒を回転軸に固定して回転させるもの。回転は良いが叩く面がせまく、重い。薩摩半島のあちこちに点々と分布、三島・十島にも分布。</p> <p>C型：数本の細い枝を2つに曲げたものを束にして縄にぶら下げて回転部としたもの。回転軸はなく振り回すだけ。軽いが、なかなか技術が難しい。種子島と屋久島の一部にみられる。</p> <p>D型：1本のやや太い棒を縄で結び垂れたもの。回転させるには、回転面が竿と並行でなく30°以上の傾きをもたせて叩く。でないとも棒と竿が触れあう。薩摩半島の西の海辺のひろく分布し、屋久島から三島・十島でもみられる。</p> <p>▼マメウチボ(大島郡与論村那間)</p> <p>奄美でよく見られる形で、手に持つ方が長い。④のさらに古い形といえる。</p> <p>▼ムギウチブットウ(大島郡喜界町川嶺)</p> <p>檜でつくられた短い柄に、長い杉材の丸太が回転軸によってとりつけてある。短い方を持ち、長い棒を回転させて麦、大豆、ソラマメなどの脱穀に用いる。メグイボのさらに古い形と考えられる(鹿1_図1174_N2860-2_ムギウチブットー)。</p> <p>▼奄美に、回転棒のほうが長く、保持する棒が短いものがある。この形状は中国の雲南でもみられる。</p>	鹿1_図1135_N219_メグイボウ 鹿1_図1174_N2860-2_ムギウチブットー
芒落とし	サシ	テサシ、サシ、サーシ、サシガッチ、ムギサシ、ガツタイ、カッターンツクジイ、トンコサシ	<p>▼サシガッチ</p> <p>麦や稲の脱穀に用いる。古い品種ほど長いイゲ(トゲ)がついていて、これが脱穀、乾燥、貯蔵に邪魔になるので、これを取りさる。長さは1mほど、下部の四角に膨れた部分をクシの歯のように切り込んである。片手でもって、持ち上げては刺し突く。この形は甌島にしか見られない民具だが、本土に同じ働きをもった「サーシ」という同じ働きを持った竹製の農具がある。これは甌島にはない。</p> <p>▼サシガッチ(甌島のみ分布)</p> <p>スギ材を用いて自作。ノコギリで歯を切りこむ。実を落とした稲のイゲ(トゲ)を落とす。片手で持って上下に動かして突き刺すようにし、足で稈を集めては刺す。</p> <p>▼サーシ、ツクジイ(川辺郡大浦町)</p> <p>薩摩半島の西端の野間半島を中心に分布。木の先を3つに割って、タケの筒3本をはめて固定したもの。筒は3本まとめて結んである。筒の下端は内側からけずって刃のように鋭くしてある。</p> <p>▼トンコサシ(薩摩半島東端、大隅半島佐多町、根占町、種子島、屋久島)</p> <p>サーシ、ツクジイと似ているが、中央の竹竿とまわりの竹筒を固定するのに横にヌキ竹を通してややルーズに止めてある。刺すたびに動いて当りが軟らかい。</p>	鹿1_図1183_N11_サシ 鹿1_図1195_N2165_ムギサシ 鹿1_図1198_N3145_ガツタイ
麦叩き	ムギタタキ	ムギオトシ、ムギタタッポ、ムギタタキサーシ	▼サーシ(大島郡三島村黒島)	鹿1_図1204_N2908_ムギタタッポ
麦打台	ムギウチダイ	ス、ムギウチダイ、ムギウチダナ、ムギウツダナ、トボシダナ、パンコ、ムギウチパンコ、ダイ	馬の鞍の形、縁状の簧、板を横に置いたもの、自然石、横置きにした臼、菊目石(与論島)など様々ある。もとは米も打ち付けていたらしい。ラオス北部、中国雲南地域にも同じ類型のものが分布する。	鹿1_図1209_N450_ス(麦打ち台) 鹿1_図1214_N1490_ムギウチダイ
巻棒	マキボウ	マッポ、マキボウ、マキダケ(竹製)、カラハシ(鹿児島市・鹿児島郡・日置郡)、シメボウ、カラミ	<p>▼マキボウ</p> <p>麦の脱穀は回転脱穀機以前には麦束を作って叩きつけるという方法が多く用いられた。これは粗雑に自製したものが多く、麦束の縮めてある部分にこの縄をまわし、棒を交差してハシで束を挟むように強く締め、その束を振りかぶって大きな石、ムギウチ台などに穂の部分のうちつけて実を落とす。</p> <p>▼縄と棒の連結の方法の違いにより、N・H・門の3つの型がみられ、東南アジアには、N字型のみが分布する。もとはイネの脱粒に使っていた。南九州のほかは門字型が九州山地、四国山地など焼畑地帯にある例があるのみ。</p>	鹿1_図1225_N2281_マッポ
叩き棒	タタキボウ	タタッポ、タタキボウ、ナガボ、アワウツボウ、ウチボウ、タタッポ、(使う目的によって)アワウチボウ・マメウチボウ、メグイボ(大隅半島)	<p>▼ウチボウ、タタッポ(鹿児島市上福元)</p> <p>脱穀用の叩き棒。大隅半島部ではメグイボというのはこの棒の名である(連枷が分布していない)。スギの自然枝の太いものを用い、太い先の部分がやや曲がっている。棒を体の横で回転させるように後ろ下から頭上に回してうち下す。連枷が海辺の平地の地帯に広くみられるのに対して、ウチボウは内部の山地帯に分布する例が多い。</p> <p>▼タタッポ(始良郡始良町春花)</p> <p>打ち棒のことで、ほどよく歪曲している杉の自然枝を用い、握りの方を細く削ってある。底には効率をたかめるために、約5cm間隔に8個の切りこみが入れている。ナタネ、アワ、ソバ、大豆などの脱穀に用いる。使う目的によってアワウチボウ、マメウチボウなどともいう(鹿1_図1246_N2262_タタキ棒)。</p> <p>▼ナガボ</p> <p>脱穀用の叩き棒。ソバの脱穀用具として大隅地方で盛んに使用されている。スギの枝はほどよく歪曲しているので、末口をにぎり、根元でむしろの上に並べたソバを叩く。</p>	鹿1_図1246_N2262_タタキ棒
	ナタネウチ	ナタネウチ、ナタネタタキ、ナタネタタツ	▼ナタネタタキ、ナタネタタツ(出水郡野田村)	鹿1_図1290_N482_ナタネウチ(ナタネたき)
	アワタタキ	アワタタキ、アワタタツ	▼アワタタキ、アワタタツ(加世田市益山)	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
まとおり	マタボウ	マタボウ、マメウチボウ、フタマタ、マメウチボウ、シュノボウ	▼マタボウ、フタマタ（鹿児島市吉野町）、マメウチボウ、シュノボウ（熊本北部） 又棒の意。二又になった木の枝をそのままに用いて、ナタネ・大豆・ソバなどの脱穀に用いる。堅木の類ならなんでもよく、皮つきのままの方が使いやすい。ウチボウにくらべてはるかに軽いで、ただふりかぶって叩く。分布はマタボウ、メグイボ、ウチボウが複雑に交錯して用いられているが、薩摩北部から熊本にかけての山地よりの地方によく分布しており、米麦以外の穀物をよく作る地方に分布しているといえる。 ▼マタボウ（始良郡福山町佳例川） ツバキの枝で、皮つきのままである。タタゴに比べるとはるかに軽い。大豆、ソバ、ナタネ、麦などの脱穀に用いる。フタマタともいう。	鹿1_図1260_N3992_マタボウ
鬼歯	ドンジ	ドンジ、アワウチドンヂ、マメウチドンヂ、モミタタキ	▼アワウチドンジ、マメウチドンジ（串木野市下名） 大きな木槌のこと。代表的な脱穀用具だが、薩摩半島・大隅半島にはほとんど見られず、薩摩郡・始良郡から内陸部にはよく用いられている。槌の木口で叩くのでなくヒラで叩く。粟の脱穀、大豆にも用いることがある。 ▼ドンヂ（曾於郡松山町泰野） 杉材の槌部に杉の柄がとりつけてある。アワなどの脱穀に用いた。アワウチドンヂ、マメウチドンヂともいう。	鹿1_図1264_N768_ドンジ
		オンバ、ドンジ、チイチ、チイチー モミタタキ・カッサウチ（薩摩半島）、ドンジ・アワウチドンジ・モミウチドンジ（薩摩郡・出水郡・始良郡）、オニバ・ヤマイン（山犬）・ヨコベ（熊本）	▼モミタタキ 南九州の西側半分的地帯にわたってひろくみられる脱穀用具。名称と形態にいろいろ変化が多い。粟・麦・米の脱穀したものを用いて、イゲノギなどの長い毛や荒い皮を取り去るために木槌の断面部で叩く。作業能率が上がるように、叩く面の断面には水を刻んでいる。	鹿1_図1271_N179_ドンジ 鹿1_図1279_N3011_チイチ 鹿1_図1284_N3569_ドンジ
足踏み脱穀機	アシフミダッコクキ	ダッコクキ、アシフミダッコクキ		
箕	ミ	ミ、ミー、日置箕、帖佐箕、セクナモン（宮崎）、バラミ	▼ミ 南九州で広くよばれるが、宮崎県ではセクナモンとよぶ。細工物の意らしい。生産地の名で日置箕、帖佐箕などとよぶ。穀物とカッサ（カスクズ）を分け前へ押し出して吹き捨ててしまう。ユってカッサ（くず）が上がってきたらそれを取り除き、そのあとにヒル。風による選別（風選）もおこなう。 体部を竹だけでバラ編み（アジロ編み）したものもあるが、弱いので穀物には使わず、茶の選別に用いている。南限は種子・屋久までで、奄美の島ではみられないが、穀物をミと同じ方法で精選することは行なわれていて、ハラという平たくて縁のついた丸い円箕を用いる。 ▼日置箕 日置箕の特徴は、途中で竹の皮と身を使い分けて、手前はクズがすべりやすく、奥は穀物が引っ掛かるようにしている。角部の部分を折り返す形状で製作する。 ▼バラミ 日置箕と同じU字形の片口箕であるが、網代編みで角部も折り返しがなく編み上げてあるのが特徴で、円形のバラと共通の箕である。東南アジア、中国西南部などにも共通して分布する。	鹿1_図1011_N481_ミ 鹿1_図1012_N732_ミ
ばら	バラ	バラ、バラ、ハラ、サンバラ、ザンバラ	平たい竹籠のことである。ふつうは蓆やモロブタなどを使うところにバラがさかんに利用される。竹の農産する南九州の特徴が生かされている。 箕の南限は種子・屋久までで、奄美の島ではハラという平たくて縁のついた丸い円箕で穀物をミと同じ方法で精選することが行なわれている。作るときは平たい網代を編んで、外縁の上に載せて押し込み、内縁をはめ、抑え縁をあててとめる。東南アジアから鹿児島まで、この技術は共通している。因みにサンバラのサンは、三つくり、三つ越しの網代編みの意味である。 ▼バラ（大島郡知名町芦清良） 身竹を網代網にあんである。縁竹には皮竹を使い、シュロ紐で止めてある。底は一重である。ウスでついた椶を片口の箕と同じようにあおりふるう。トカラ列島以北の片口の箕に対して、円形である点に特徴がある。	鹿1_図1036_N1345_サンバラ 鹿1_図1044_2756_ハラ
汰板	イタユイ	イタユイ、イタユリ	穀物の実とクズを選り分ける。板は網代形に目が切つてある。横に開いている穴から出すようになっていて、吊るして使用。	鹿1_図1029_N4054_イタユリ
扇風機	センプウキ	センプウキ	離れたところに置いて、風選するときに使った。	鹿1_図1051_N767_センプウキ
唐箕	唐箕	トウミ、トーミ		鹿1_図1067_N2084_トウミ
通し	トオシ	コメユイ、ユリ、ユイ、コメトオシ、ユイガマ、ムギユイ、フミユイ、フイ、アワトオシ、ミー、コメモラシ、アラモラシ、トオシ	▼トオシ バラの中央部を透かし編みにして、穀物とクズを選り分ける道具である。鹿児島より北になると底が全面透かし編みとなり、胴部が立ち上がった籠型になる。バラとセットで東シナ海、南シナ海をとりまく形で分布し、バラ文化圏ともいえる一つの圏を構成する農具である。 ▼コメトオシ バラの真ん中の部分が網代の透かし編みになっている（鹿1_図1097_N2430_コメトオシ）。	鹿1_図1097_N2430_コメトオシ 鹿1_図1110_N2757_フミユイ
籾通し	モミトオシ	モントオシ、ムットオシ、モミオトシ、コメーオシ、アラトオシ、ツツラモミトオシ	▼ムットオシ 鹿児島のうち、熊本、宮崎との接触地帯のもので薩摩、大隅ではみられない。胴部が立ちあがり、底が別材になっている。 底が全面透かしで胴部が立ち上がっている。北の方の影響を受けてつくられたもの。	鹿1_図1096_N2367_モントオシ 鹿1_図1100_N2434_モントオシ
万石通し	センゴクトオシ	センゴクトオシ		鹿1_図1131_N1003_千石通し
堅杵	テギネ	キネ、テギネ、アジン、アジム、アジム・アジム（与論島）	▼テギネ 与論島では、ほとんど自然のままの幹の中程を少しけずり細めてある。中央を両手で持ってやや斜めにつき下す。向かい合って2人でつくのが普通だという。穀物の脱穀精白に使うのが最も大切な仕事であった。南九州を通じて与論島のものが最も大きな堅杵だろう。始良郡栗野町稲葉崎の正月の餅搗き、肝属郡大根占町の味噌搗きでは、近隣が集まって、大きな臼にテギネで一度に大人数で搗く。	鹿1_図1293_N10_キネ 鹿1_図1333_N3865_アジン

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
横杵	ヨコギネ	キネ、ヤマトアージン、ヤマトアンジム、チイチー、ナデギネ、シチ(与論島)	脱穀は白の縁を交互に叩きながら行うので、杵先の横に打ちつけた傷がみられるものは、脱穀に用いたものだと見分けることができる。 ▼ナデギネ 横杵。奄美ではシチ(穂の意)。 ▼ヤマトアージン(奄美) 「ヤマト」は本土(鹿児島)から伝来してきたものを指す。	鹿1_図1337_N1104_キネ
搗臼	ツキウス	ウス、ミソツキウス、モチツキウス、コメツキウス	ツキウスはヒキウスやスリウスに対する言葉で、杵で搗くので付いた名。ただウスと言えばツキウスのことである。大別すれば①多人数で味噌搗き、餅搗きなどにつかう大きいものでミソツキウスとよばれるもの、②一人または二人で米・粟などを脱穀したり、精白したり、餅を搗いたり、その他日常ちょっとしたことに使う小さなもので、モチツキウス、コメツキウスなどと呼ばれるものに分けられる。脱穀は叩いて広がった穂を集めるのに縁を杵で叩き、それを交互に繰り返すので、縁にその跡があるかどうかで見分けができる。	鹿1_図1370_N2819_ウス
木摺臼	スリウス(木製)	スルス、スリウス、モミスリウス、ヒッコロ、シルシ、スルシ(奄美の島々)、スリウス(九州本土)、ヒキウス・ヒッコロ(揖宿郡開聞町)	▼シルシ、スルシ(奄美の島々) 上ウス(トジ=妻)、下ウス(ウト=夫)。上ウスの横木は貫いており、その中央の孔に下ウスの尖りがはまって固定できるようになっている。上ウスの凹みに糠を一升ほどいれ、上下の臼の合わせ目の面は平面ではなく円錐形をしているので、糠はそこを下りながら摺られて玄米になる。回すには、上ウスに耳をつけ、縄をかけて向かい合って座った人が交差した縄を左右に引く方法と、やや長い横木を立ったままで一人または二人で左右に半回転ずつさせる。目がつぶれるとノミで切っていくので、上下ともだんだん短くなっていく。 ▼スリウス(九州本土) 直径が大きく、傾く面が広くており、目のある面はあまり傾斜せず平面に近い。目は放射状だけでなく並行線も用いている。臼をまわすにはT字形のヤエギを使う。靱摺りのほか栗摺りにも用いる。	鹿1_図1392_N2246_スリウス 鹿1_図1397_N3826_スリウス 鹿1_図1399_N3924_スルス
土摺臼	スリウス(土製)	タカウス、ツチウス	▼タカウス、ツチウス(始良郡隼人町) 上臼と下臼の磨りあう面にはタカ(竹)の籠をはめて、その中に白の目状に堅木のうす板をはめこみ、その間を粘土をつめて固定してある。板の目が磨滅すれば泥土と竹籠の竹も少しずつとれるので目をたてる面倒がなく、重いのでよく摺れる。部落でも持っているのは1、2軒ほどしかなかった。	
踏臼	フミウス	フミウス、フムス	▼フムス(熊本県球磨郡始良町) 熊本球磨郡から宮崎南部の海辺にかけて広くみられる。屋根の下、傍に手をつかまるもののあるところに設けてある。片手は掴まり、もう片手で長い細竹をもって臼の中を突き混ぜる。この踏む位置に水をためる槽をつけて落し水で粉を搗くしかけにしたものをサコンタロ(迫の太郎)というが、水車式のデングリに代わってしまった。	
筵	ムシロ	ムシロ、ムシウ、イムシロ、トグワムシロ、ムッシュ	ムシロとネコブクは作り方が違う。ムシロは「織る」、ネコブクは「編む」。稲藁がないのでムシロが作れなかったため、九州山地沿いにはムシロ市とって、ムシロと小豆など焼畑作物と交換をしていた。	
猫筵	ネコブク	ヌンブー、ニクブ、フムウッス、ネイック、ネッブ、ネコブク	▼ネコブク(日置郡金峰町尾下) ワラの細縄を用いて編んである。主としてアワやナタネのような小粒のものを乾燥するのに用いる。 ▼ネッブ(日置郡金峰町尾下) 藁の細縄をタテヨコに編んで作った敷物で穀物などの乾燥用に使う。蓆とちがって細縄ばかりで編まれているので、厚く緻密で何十年でもつ丈夫なものである。熊本の八代附近から球磨にかけて多いが、薩摩・大隅には少なく、この尾下部落にはどの家にも十枚ほどずつあり、ハタも持っているのは例外である。奄美の島にも点々とあり、蓆以前の古い敷物だったと言える。奄美諸島にも多く見られる。	鹿1_図1437_N2726_ニクブ 鹿1_図1445_N3012_ネイック
柄振	モミカキ	モミカキ	ノロヒキ(エブリ)と同形の小型のもので、モミや麦を乾燥させるときにかき広げるのに使う。ノロヒキと共用することはない。	
あま	アマ	アマ、アバ	▼アマ、アバ(熊本県球磨郡五木村) カゴアミの粗目に編まれて、底はなく対角線に竹が入っている。その上に箕子のように編んだものをはめる。乾燥していない稗や粟の穂をこのアマに入れて火で乾かした。イロリの上に台を置いてアマをのせ、数時間熱して乾いたものを蓆に広げて上から素足で踏むと、ぼろぼろと良く落ちるし、糠殻も良くとれ精米し易くなる。	
紙藁蓆	カミゴザ	カミゴザ、カミフロシキ	和紙を張り合わせて作った敷物。紙をすいたかすの繊維で作った。穀物を乾かしたり、この上に寝れば温かい。雨にひどく濡らさない限り何年でもつ。竹籠や箕などがいたむと、貼り付けて修理するなどした。	
収納				
吠	カマゲ	カマス、コッパイレカマス	粟は精米しにくいので、いつも囲伊裏の上で乾燥させなくてはならない。粟を入れたアワカマゲはすすで真っ黒く固くなったものだった。粟は粒が小さいので漏れないようにするための意味もあった。	鹿1_図1453_N3505_コッパイレカマス
	クブキ	クブキ	両側が綴じてあり、袋状。糠を入れた。	鹿1_図1454_N2147_クブキ
俵	タワラ	トウラガ、タワラ	タワラのこと。	
籾漏斗	モンジョゴ	モンジョウゴ、タケジョウゴウ、タワラジョウゴ	▼タワラジョウゴ 俵に米を入れるのに用いる。注ぎいれる口の小さい俵にとってジョウゴは必須のものであった。カラタケなどでバラアミ、ショクアミなどの編み方でつくられている。	鹿1_図1466_N3588_タケジョウゴウ
米刺し	サス	サス	米刺しのこと。竹製。	
枡	マス	マス、トマス、ウクシ、マシ	▼トマス(熊本県葦北郡葦北町) 一斗入る枡の意。大正年代までは俵が用いられ、その内容は重さでなく枡ではかるものだったのでいろいろの種類があった。角型、丸型とあり、角型で手が直角になったものがあり、傾けてこぼしたすには便利だという。丸型は俵を用いていたときによくつかった。	鹿1_図1472_N1476_トマス

名称	鹿兒島での主な呼称	鹿兒島での呼称	説明	画像ファイル名
穀物入れ	ムンイリマゲ	ムンイリマゲ	与論島。萱の巻きあげでキンチク竹で巻いている。ムンとは米のこと。鼠がかじらないようにした。焼畑地帯は種粟やイモなどの種物を吊るした竹棒の両端にネズミノメサシ（アリオシ）を結びつけて鼠の害を除けた。	鹿1_図1479_N2286_ムンイリマゲ
俵締め	タワラシメ	タワラシメ		
養蚕				
桑切り鋏	クワキリバサミ	クワキリバサン		鹿1_図1489_N677_クワキリバサン
桑摘み爪	クワツツメ	クワツツメ	指にはめるタイプ。	鹿1_図1491_N1055_クワキリバサミ
桑扱	クワコギ	クワコキ、クワコギ、クワスゴキ		鹿1_図1496_N1832_クワコギ
桑切り包丁	クワキリボウチョウ	クワキリボチョ、クワキリボウチョウ		鹿1_図1499_N810_クワキリボチョ 鹿1_図1501_N1833_クワキリボウチョウ
蚕網	ジョサアミ	ジョサアミ、イトアミ	除沙網。この上で蚕に桑の葉をやり、蚕が網目から上がってきて食べるので下には糞だけが残る。年齢によって網目の大きさが違う。	鹿1_図1508_N623-2_ジョサアミ
蚕網編み機		トコカエアミ編み機	円形につくる。	鹿1_図1520_N520_トコカエアミ編み機
簇	マブシ	マブシ	この上に蚕蓆をひいて蚕を飼う。	鹿1_図1515_N3060_マブシ
簇織機	マブシツクリ	マブシツクリ、マブシキ		鹿1_図1525_N933_マブシつくり一式
毛羽取機	マユノケバトリ	マユノフケトリ、マユノケバトリ、マユムキ、マユクリ	▼マユノフケトリ（日置郡松元町福山中） マブシからもぎとった繭の絹糸のフケ（くず）をとる道具。マダケを割って作ったやや傾斜した台の上に繭を並べておいて、台の高い方の端には鉄の棒が横に通してあって、その棒の端の曲りを回すと、棒は繭のフケを巻きとるようになっていく。フケをとられた繭は急斜面の方にころがり落ち、繭はフケに引かれて次々と斜面をのぼってフケをとられる。竹の台にすきまがあるのは、ついていた糞などが下に落ちるためである。	鹿1_図1532_N403_マユのケバトリ
蚕籠	ケゴバラ	マユバラ、ケゴバラ、カイゴバラ	鹿兒島では四角のほかには円形のバラ（網代編み浅底笥）も使用する。ケゴ（蚕）が小さいときに使用するので、落ちないよう目が細かい。	
給桑台	給蚕台	給蚕台		
糸取鍋	イトトイナベ	イトトイナベ		
その他				
茶蒸籠	チャベロ	チャベロ	網代編みの円筒形の籠で、中にもんだ茶を入れて下から湯気を通し、蒸し茶にする。桶形などもある。	鹿1_図1556_N708_チャベロ
茶籠	チャベロ	チャベロ	▼チャベロ（始良郡蒲生町漆） ベロは籠の意。茶上げ（煎った茶を乾かして完成する）に用いる竹籠。カゴとフタに分かれている。籠屋で作る竹製品の中では最も大きい。ホイロで採んだ茶を山に被せかける。土間に火を起こして、その上にチャベロを被せると、熱がチャベロの山の中にまわって茶を熱し乾かし香をよくする。バラで冷ましてはかけるのを繰り返して出来上がる。鹿兒島独自のもの。戦後になってから九州山地の焼畑地帯へ輸出された。網代編みで円筒形の籠を作るのも、南方からの影響。国立民族学博物館には中国湖南省の資料が収蔵されている。	鹿1_図1558_N1530_茶ベロ
砂糖車	ウシグルマ	ウシグルマ、サタグルマ	▼ウシグルマ（サタグルマ） さとうきび作地帯の甘蔗の植栽がさかんになるにつれ、搾汁具の牛車が工夫発明されて甘蔗作農家の貴重な製造用具の一つとして活用される。車輪木道具（木枠）を総称して牛車と呼ぶ。	
芋洗い棒	コギボウ	コギボウ	いもを洗う。鹿兒島ではイモフンという言い方をする。	鹿1_図1561_N2880_コギボウ
山樵				
原木伐採				
横挽鋸	ダンギイノコ	オオノコ、ノコ、ダンギイ、ダンギリ、ダンギリノコ、ヨコビキ	▼ダンギイ（西之表市） 材木の切断（横挽き）に使う。 ▼ダンギリノコ ヤマシ（山師）が使う大鋸。コビキノコと比べると、大きい点では負けないが、幅が狭く、直線形で、目はヨコビキになっていて、形態と性格はまるで違う。	鹿1_図1587_N1893_ノコ
	カイリヨウノコ	ノコ、カイリヨウノコ	▼カイリヨウノコ（西之表市） 窓付き鋸。大きなマドに木くずがたまり、よく切りやすいよう改良されたもの。	鹿1_図1601_N158_ノコ
前挽	ワッコ	ワッコ、ワキノコ、コビキノコ	ワッコ=ワクノコ。木・板を縦に割（わ）く鋸のこと。 ▼ワッコ（輝北町） 材からの板挽き（縦挽き）に使用する。 ▼ワキノコ 墨入れた線に沿って、縦に引き割っていくもの。 ▼コビキノコ（薩摩郡下飯村） 木を立てておいて縦に挽いていく。刃の形が猫背になっていて柄も斜めについており、両手で拝むようにもってひく。専門のコビキ（木挽き）が使った。	鹿1_図1627_N656_ワキノコ
両挽鋸	フタイビキ	フタイビキ（両引鋸）、ワキノコ	▼フタイビキ 2人で両側から挽く。 ▼ワキノコ 製材所で使用。	鹿1_図1652_N1652_フタイビキ（両引鋸）
切よき	ヨキ	ヨキ、キリイヨキ、カタテヨキ、ユキ	伐採用のヨキ。割れ目にヤを打ち込んで木を切り倒す。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
削りよぎ	ハツリヨキ	ハツリヨキ、ハツイヨキ、ハツイヨツ、イチヨバ、イチヨウバヨツ	製材用、側面をはつる。 ▼ハツイヨツ 大きな斧のことで、ハツルとは大木の側面を削り落とすことをいう。形がイチヨウの葉に似ているのでイショウバヨツと称していたところも多い。 ▼ハツイヨツ（東市来町）木材からの角材削り出し。	鹿1_図1677_N945_ハツリヨキ 鹿1_図1678_N1756_イチヨバ 鹿1_図1680_N1943_ハツイヨキ
割りよぎ	ワリヨキ		薪割り用ヨキ。割りやすいように刃に厚みがあり、重たい。	
鈍	ナタ	ナタ、ナタボウチョウ、コシナタ	▼ナタ（上屋久町）木材の枝等の切断。 ▼コシナタノサヤ（熊本県球磨郡五木村）二枚のうすい板を合わせ、その外をヤマザクラの皮ではりつめてある。 ▼ナタボウチョウ 包丁の形をしている鈍。トビのないものが多い。ヤンボーチョウとも。	鹿1_図1692_N120_ナタ 鹿1_図1696_N1256_ナタボウチョウ(2)
山刀	ヤマキイ	ヤンボーチョー、ヤマガタナ、ヤマキリ、ホウチョウ、ナタ	「鹿1_図1717_N3979_ヤマキリ」は、トカラ列島の焼畑用のもの。ヤマとは焼畑のこと。トカラの竹は地下茎で伸びて株立ちをするので、ヤブハレガマでは鼻先が引っかけり、切れないが、この形なら切って抜くことができる。ハナ（トビ）のない刃は切り抜く作業に向き、山に入るとツルやイバラを払うのによい。大きなサワラの解体にも使い、包丁としての機能もある。この形態はかなり応用性がある。トカラでは、杉の薄板で模型を作り、鹿児島島の鍛冶屋に注文していた。南九州ではヤマガラシとも。	鹿1_図1717_N3979_ヤマキリ
造林鎌	ヤブハレガマ	ナタガマ、ゾウリンガマ、ハライガマ、アツガマ、ヤブハレ、コバハレガマ、ヤブハレガマ	ゾウリンガマは杉の植林をやり始めてからの新しい名前。多くはヤブハレガマという。ヤブ、コバは焼畑のこと。 ▼ヤブハライガマ、ヤブハレ、造林鎌 柄の長さが100センチ前後の大きい鎌で、主として山林の仕事に用いられるが、道作りや漕さらえなどにも利用される。造林作業のとき下払いに、雑木や荒草を横になぎはらうようにして切る。刃の曲がりが特異で、作業能率が高い。 ▼ナタガマ 柄のとおりつけ方や刃の形態機能ともに鈍と鎌の両方を備えているために付された名称。柄の長さが100センチ前後の大きい鎌で、ヤブハライガマが軽いのに比べ、刃が厚いために重い。鈍と同様に叩くようにして切る。山の木の枝を払ったり、大きい雑木を切ったりするのに用いる。	鹿1_図1725_N674-2_ナタガマ 鹿1_図1736_N1680_ハライガマ
梃子	ツル	トリ（鉄製テコ）、ツル	丸太に引っかけてずらす道具。てこの原理を利用する。刃は本来上向きにして使う。 ▼トリ（大根占町）木材の移動。	鹿1_図1757_N1886_ツル
鷹口	トビ	トビ	丸太を引っ張る。	鹿1_図1763_N2628_トビ
手斧	チョウナ	ツノ		鹿1_図1771_N536_ツノ
皮剥	カワハギ	カワハギ、カワムキ		鹿1_図1776_N366_カワムキ
楔	ヤ	ヤ、フクロヤ、イヤー	▼ヤ（蒲生町）鋸で引いた後のすきまに打ち込むしみとり。 ▼フクロヤ 上部を叩いて割れないように、鉄が巻いてある。袋状になっていて、木を打ち込んでいる。	鹿1_図1781_N1187_フクロヤ
かくまわし	カケマンリキ	マンリキ、カケマンリキ	黎明館の収蔵品は柄がないが、柄を差し込んで、鉤を丸太の側面にかけて転がす。 ▼マンリッ（田代町）木材の回転移動。	鹿1_図1792_N1765_カケマンリキ
鋸	カスガイ	カスガイ		鹿1_図1799_N4100_カスガイ
鋸挽き台	ウマ	ウシ、マ、ウマ	▼ウマ（大島郡沖永良部島知名町） 材木を鋸でひき切るときに載せる台のこと。二本の丸太を交差し、その交差ししたところに細い木を貫いて支え用の柄としている。柄を外側に二つを向かい合わせ、材木を渡して、中間の位置で鋸を用いる。分布は沖永良部郡から徳之島、奄美本島、種子島にわたって同形のものがある。	鹿1_図1806_N2993_マ
梃子棒	バチ	バチ（木製テコ）	てこ棒。	鹿1_図1807_N166_バチ
道具箱	ドウグバコ	ドウグバコ	木挽きが持っていたもの。	鹿1_図1808_N4094_ドウグバコ
墨壺	スミツボ	スミツボ	▼スミツボ（熊本県球磨郡相良町） 自分で作ったものを使う人が多い。絹の丈夫なもの10mほどを入れる。車の下側、壺よりのところには竹管をはめてあり、糸がその上をよく滑るようにしてある。車の下の底には孔があって雨水などが落ちるようにしてある。壺にはネバジといって真綿がはいっており、ケズリスミを入れ水にしめて用いる。使い方は、壺部を上から掴むようにして持ち、掌の後端で車をおさえて、回りを調節したり止めたりする。糸をまきとるには、手で車を回して行う。	鹿1_図1810_N4095_スミツボ
墨刺	スミサシ	スミサシ	割竹の先を斜に削り出し、片側は細く割り、線が引けるように、片側はつぶして文字が書けるようになっている。	鹿1_図1811_N4096_スミサシ
鑢入れ	ヤスリツボ	ヤスリツボ、ヤスリイレ	▼ヤスリツボ（鹿児島市山田） 孟宗竹の細めのもので自作。鋸のメタテに使う大小のヤスリと歯並びをそろえる小槌をいれる。	
炭焼用具				
槌	ツチ	木ドンジ（木炭製造用）、ツチ（炭窯）、炭ガマ天井打木、炭ガマ天井ウチツチ	炭窯の天井の粘土を叩き固めるための槌である。	鹿1_図1820_N770_ツチ
柄振	マエカキ	マエカキ	▼マエカキ（大根占町）くず炭のかき集め。 白炭を焼くときに使用するものは鉄製。	鹿1_図1825_N168_マエカキ

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
炭篩	スンプイ	スミユイ、スンプイ、スミユリ、スミトオシ、ブイ、ブイソケ	▼スミユリ、スミトオシ（川辺郡大浦町大木場） スミフルイのこと。大木場部落には古くからの鍛冶屋があり、自家用のブイゴにつかう消し炭を作っているが、小石ほどの大きさにくだけた消し炭をふるう。農業用のアラトオシが円形であるのに対し、方形であり、作りもやや荒っぽい。くず炭を挿って、大きいものを選別する。 ▼スンプイ（川辺郡大浦町） 炭振りの訛り。ブイは片口の竹篋のことで、製炭の用具として用いるブリの意。杉板を曲げたものを縁にしてカラタケの身の部分を使ってショケ編みで粗く作る。炭窯から炭をとりだしたり、炭俵に炭をつめるときに用いるが、細かい粉炭をふるい落とす役、丸い俵の口に炭をいれるためのジョウゴの役もする。縁をよせると籠部はたわんで炭を俵に流し込みやすくする。	鹿1_図1828_N247_スミユイ
こもあみ機	コモガキ	ダッアン、コモガキ	▼ダッアン（志布志町） ダッ（俵）編み。	鹿1_図1831_M906_炭俵あみ器（こもがき）
	ツッノコ	ツッノコ	こも編みの時に使うおもり。	鹿1_図1832_N817_ツッノコ
綴じ針	トージ	トージ、トオシ	▼トオシ（志布志町） ダッ（俵）とオロ（炭俵の蓋）を縫い付ける針。	鹿1_図1836_N655_トージ
炭俵	ダッ、オロ	ダッ（炭俵）、オロツクリ、オロ（炭俵の蓋）	▼オロ（大根占町）ダッ（俵）に炭を入れオロで蓋をする。	
鉋	ナバナタ	ナバナタ、ハコナタ	ナバはシイタケのこと。枝を落としてしたりするのに使う。鹿児島には大分からシイタケ栽培が伝わってきた。	
手斧	ショウノウキリ	ショウノウケズリ（ツノ）、ショウノウキリ	樟をはつる手斧。樟を細かいチップにして蒸留し、樟脳をとる。江戸時代から長崎を介して専売、ヨーロッパに輸出していた。	鹿1_図1842_N638_樟脳削り（ツノ）
刺し	ブクリョウサシ	ブクリョウサシ	茯苓（ブクリョウ）、松の根につく菌で薬になる。これで当りをとり、掘り返す。	鹿1_図1844_N1793_ブクリョウサシ
木馬	キンマ	キンマ	▼キンマ、キンマノクラ（肝属郡大根占町半下石） キンマ（木馬）は炭焼地帯にはひろく見られる。キンマの道はナルギが敷いてある。炭を運ぶ道だけでなく炭木を切る山から窯場まで炭焼部落にはナルギの道が四方八方に通じている。キンマノクラは長い木材を運ぶときに用いるもの。どちらもいかにも細々としているのは軽く作る必要からである。木材や炭をつんで下り、次に上がってゆくときはキンマもキンマノクラも肩に担いで運ぶのである。キンマやナルギに種油を塗って使う例も多い。	
狩猟・畜産				
狩猟用具				
呼笛	ヨビ	ヨビ、ヨビブエ、アオバトブエ、シカノヨビブエ、キジノヨビブエ、イヌノヨビブエ	▼ヨビブエ イノシシ、シカ、キジ、ハトなどの鳴き声に似せた笛でこれらの獲物をおびき出し、鉄砲で撃ち獲った。 ▼アオバトブエ（蒲生町） 撃ち獲るためにアオバトを近くに呼び寄せる笛（鹿1_図1853_N3320_アオバトブエ） ▼シカノヨビブエ（田代町） 撃ち獲るために鹿を呼び寄せる笛。シカの肩甲骨で作ったもので、メスジカの声を出す。 ▼キジノヨビブエ 撃ち獲るために雉を近くに呼び寄せる笛。 ▼イヌノヨビブエ（田代町） 猟犬を呼ぶ笛。猟師同志の合図にも吹かれた。タカウソ（竹笛）などとも呼ばれた。	鹿1_図1853_N3320_アオバトブエ
罾	ワナ	ヤマインノワナ、イタチノワナ、イタチワナ、イタチバコ、シシワナ、イノシシノワナ、ワナ、ハダ、ギャガミイ（茅瓶）、メジロワナ、ユタバコ	▼ヤマ 罾。ヤマドリを生け捕りにする道具。①糸と弾力性のある竹または木で仕掛ける、②竹を編んで仕掛ける、③竹ヒゴにヤマモチをつける、④釣針に餌をつける、⑤竹で作るウタシカゴのヤマなど。 ▼ギャガミイ（徳之島） 鼠をおとりにして、周囲にトリモチを塗った串を立てておく。降りてきたタカ（サシバ）をとる。食用にした。	
くくり罾	ズクビイ	ズクビイ	▼ズクビイ（大口市） 猪の胴を締めて獲る罾。	鹿1_図1864_N1741_ワナ
箱わな	イタチバコ	イタチバコ	▼イタチバコ（薩摩郡宮之城町） 箱型、入口の戸板は松の厚板で重い。魚を餌にして、イタチが魚を引くと針が抜け、板が落ちて口をふさぐ。	鹿1_図1863_N885_イタチわな
虎挟み	ワナ	ヤマインノワナ、タヌキノワナ	▼ヤマインノワナ（鹿屋市） 猪の足を挟み捕える罾。もともとはヤマイヌ（オオカミ）をとる罾だった。 ▼タヌキノワナ（志布志町） タヌキの足を挟み獲る罾。	
弩弓	デッキュ	デッキ、でつきゅ、ドッキュ	デは台。台つき弓（キュウ）。鹿児島全県にはある。 ▼デッキュ（大崎町） 割り竹をスプリング状に合わせてそのばねを利用した弓。放し飼いの鶏や小鳥を撃ち取るのに用いられた。台木は樫材で作られ、中央に矢をつがえて射たという。矢羽には樫の葉をつけた（鹿1_図1873_N1023_でつきゅ）。ラオス北部、中国雲南省などでは現在も用いられている。 ▼ドッキュ イシユミ、オオユミとも。しかけを作り、矢を発射する一種の弓。古代中国において部くとして考案されたもの。弦を張るのに手間取るが、強い弓が引け、命中率も高い。	鹿1_図1873_N1023_でつきゅ
猟銃	鉄砲	鉄砲、種子島銃銃把、村田銃銃、村田銃、猟銃（単身単発有鶏）、猟銃（散弾）、改良火縄銃、散弾銃（村田銃）	大隅の山間部では火縄銃は明治時代の末頃まで狩猟に使われていた。その後管打ち銃、村田銃、折れ銃、連銃へと変化していった。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
弾作り	タマツクリ	タマツクリ	▼タマツクリ (田代町) 猪、鳩などを撃つ玉を造る。	鹿1_図1893_N95-1_タマツクリノドウ
山刀	ヤマカラシ	ヤマカラシ	猟師が大型の獲物にとどめを刺したり、射止めた獣を解体する時に使う山刀。短万型の細長い万包丁で、鞘(さや)に入れて持つ。 ▼ヤマカラシ 竹の鞘つきで、鹿の足革を使用しており、爪の部分が取っ手のすべり止めになっている(鹿1_図1898_N4234_ヤマカラシ)。	鹿1_図1898_N4234_ヤマカラシ
秤	ヤマチキイ	ヤマチキイ	獲物の肉を等分するための秤。秤のことをチキイという。その場で作る。 ▼ヤマチキイ (内之浦町) 山で解体した獲物を等分するための秤。	鹿1_図1901_N4220_ヤマチキイ
網	ツキアミ	ツキアミ	種子島南部の宝満池における鴨猟の一方法。この網をほうり投げて飛来したカモを取る。個人単位で行う猟法で、カモが通過しそうな所の木に足場を作って飛来を待つ。網は自家製で、下方をしぼり三角形状にして袋状にする。アザオ(張り竿)で張り、手竿をつける。夜明け前と日没前後の1日2回、カモを捕獲する。	
塚	センビキヅカ	センビキヅカ、センヅカ、ヤマンカン	ヤマト(山人。狩人の意)たちの間には、猪を千匹(あるいは九百九十九匹)ないしは百匹(あるいは九十九匹)獲ったら塚をたてる習俗があった。これをセンビキヅカ、センヅカあるいはヤマンカンといった。曾於市南三郷の山中には、一石彫りの片耳の猪の山の神像がある。	
畜産用具				
面懸	オモゲ	オモゲー、オモゲ、イタノオモテ、ウマノオモテ、ウムゲー、ウシノオモテ、イタオモテ、キオモテ	奄美・沖縄の曲線形のもの、鹿児島本土の直線形とがある。曲線形は突起が南西諸島のオモゲの特徴。ウマ、ウシ(特に子牛)ともに使用。ラオス北部とも共通する。 ▼ウシノオモテ(始良郡始良町下名) 牛の面の意味で、広く一般に用いられている。大別して2種ある。 ①牛の幼時に用いるもの：ただウシノオモテと言った時はこの幼時のものをさしている。まだ鼻を通してない牛を牛市などに引いて行くときなどに用いる。 ②鼻を通して後に用いるもの：成牛用のウシノオモテは、首から顔に網の輪をかけただけのもので、主として鼻グイを保持して、無理な力が鼻にかかぬようにする目的のものである。 ▼ウマノオモテ、イタオモテ、キオモテ(大島郡沖永良部品知町知名) 木製のもので、板面、木面などとも呼ばれ、面枷にあたるだろう。奄美の島々では現在も馬にクツワをはめる習慣はなく、これをオモゲ(オモガイ)とよんで用いる。堅木で作った2本の棒で、中央が内側に出ているものを鼻すじの両側へはめる。	鹿1_図1908_N367_イタノオモテ 鹿1_図1918_N2786_ウムゲー
轡	クツワ	クツワ、オモテツキクツワ、ウマクツワ		鹿1_図1931_N2791_ウマクツワ
鼻木	ハナグイ	ウシノハナワ、ハナグイ	▼ハナグイ(薩摩半島開聞町) 牛は五ヶ月ごろ鼻中隔に孔をあけ、ハナグイを通す。今は半月形の滑らかなものを多く用いるが、古くはタカヅラという蔓の皮つきのを二重によじったものを用いた。牛の手綱は右1本だけだが、鼻を通したばかりの痛い時に訓練するから出来るようになる。オモテ網で吊って鼻を保護する。 ▼ハナワ(沖永良部知名町) 奄美のほとんどの島では牛にこのようなハナグイを用いない。手綱の先を直接に鼻に通す。必ず左から差しこんで、右に結び目を作る。従って手綱は左側に1本あることになる点が九州本土とは逆になる。その時に結び目が抜けたり、鼻をいためないように、ハナワという木の玉をさえる場合が多い。手綱のより戻しの役もしている。	鹿1_図1937_N4052-1_ハナグイ
飼葉入れ	カセブネ	カセブネ、タブノウシブネ、エサバコ、ウシノフネ、ハンギリ(桶)	▼ウシノフネ(曾於郡大隅町中之内) 丸木を引って作った丸木舟型で餌入れになっている。フネアゲという台の上のせてある。近頃はウシノフネをやめて、ハンギリという桶を用いる例が多くなった。ウシノフネは重いので洗うことが難しいのに、ハンギリは外して洗って衛生的だが底が抜ける欠点がある。	鹿1_図1942_N201_タブノウシブネ
イモ切り	イモキイ	カライモキイ(甘藷切り)、イモキイ、イモキリ、イモクダクイ	▼イモキリ(指宿市池田) 訛ってイモキイ、辟くという言葉からイモクダクイとも。箱に洗ったカライモ、ジャガイモ、キャベツなどを入れて、柄を垂直に上下させて切り刻む。それを牛馬鶏豚などの餌として使う。	鹿1_図1950_N518_カライモキイ
押切	ワラキイ	ワラキリ、オシキリ、ハミキリ	押切。	鹿1_図1961_N3625_ワラキリ
口籠	クチアテ	ウシノクツカケ、クツカケ、クチアテ、シゴ(日向南部、縄製)	▼ウシノクツカケ、クツカケ(曾於郡大崎町新地) 口掛けの意である。作業中の牛に草などをたべないように口にはめるもの。薩摩ではほとんど用いないが、大隅の肝属郡・曾於郡から、日向にかけてはよく用いる。大隅側では竹能型を用いているが、日向南部に入ると、シゴといって、シュロ縄を使って平面的な円い網を作る。	鹿1_図1963_N441_ウシノクツカケ
鼻通し	ハナネジリ	ハナネッ(ハナネジ)、ハナヒネイ、ウマノハナネジリ	網を通してウマ・ウシの上唇にねじって鼻割りを通す穴を開ける。	鹿1_図1971_N1846_ウマノハナネジリ
より戻し	ビバ	ビバ	▼ビバ(大島郡与論村那間) 山羊をつなぐ時に網につける木片を言う。山羊は着着きのない動物で、これを用いると繫ぎ網のより戻しのはたらきをすることになる。	鹿1_図1972_N3870_ビバ
爪切り	ツメキイガマ	ウマノツメキイガマ	蹄鉄をあてるときの爪切り。馬牛ツメ切り道具には「ヤスリ」「ツメキイガマ」「カッサツ」などがある。	鹿1_図1976_N804-1_ウマノツメキイ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
牛馬の沓	ウシノゾイ、ウマノクツ	ウシノクツ、ウシノワラジ、ウシノゾイ、ウシノゾーリ、ウシノクツ、ウマノクツ	▼ウシノクツ、ウシノワラジ、ウシノゾイ（牛の草履） ワラジに似た作り方で、ウシノクツがウマノクツとちがう点は、台のほぼ中央、やや前よりに1つのチ（チチ）が上向きにでていることで、牛の2つに割れた爪によくはまることになる。それに対してウマノクツは台の中央にチは作らず、その代り台の側方に左右1つずつのチを作る。この作り方は南九州全域にわたって同様である。 沖縄奄美ではウシはゾイ（草履）というが、ウマはグチ、クツ（沓）という。	鹿1_図1980_N285_ウシノゾーリ
	タケボラ	ボラ、タケボラ、シオカセボラ	ウシの口に差し込んで、塩を入れてのませる（なめさせる）道具。	鹿1_図1984_N535-2_シオカセボラ
交通・運輸・通信				
人力運輸				
籠	テル	テゴ	鹿児島ではものを入れる竹の籠に限って「テゴ」の意味が用いられる。用途で名づけたり、運搬方法によって名づけたりする。	
		チャカゴ、チャツミノカゴ、チャツミテゴ	茶摘みの籠。茶摘み専用に使ったもの。	鹿1_図2012_N4091_チャツミノカゴ
		竹カゴ（マユカゴ）、マユテゴ、クワメゴ、クワカゴ、クワツミテゴ	養蚕用の籠。	鹿1_図2030_N3626_クワツミテゴ 鹿1_図2017_N5018_マユテゴ 鹿1_図2036_N829_マユテゴ
背負籠	カリテゴ	カリテゴ	カリテゴのカリはカルイ、すなわち背負いの意で背負い籠という意味になる。背負い運搬の一般的なものはカリテゴとカリゴとがあるが、数から言っても使用度から言ってもカリテゴがカリゴに較べてはるかに優勢である。したがってカリテゴは大きさ、形などいろいろと変異が多いのが特色になっている。ランドセル型は、負い縄2本を胴の底を通し、後背部で結び合わせた肩負いの背負い籠。ラオス北部ではモン族のみが使用する。	鹿1_図2086_N4272_カリテゴ
	ダッテゴ、キンザンテゴ	ダッテゴ、カリテゴ、キンザンテゴ	▼カリテゴ 金山テゴともいう。1本縄で背負う（鹿1_図2085_N4272_カリテゴ）。 ▼ダッテゴ 1本の負い縄で胴を巻いて、底を通して後背部で結び合わせ、肩で担ぐ。金山テゴともいう。かつて薩摩町、栗野、溝辺、牧園、枕崎周辺に金山があり、金鉱石を運んでいた。ラオス北部ではヤオ族のみが使用する。	鹿1_図2085_N4272_カリテゴ
	シタミ	テゴ、バラステゴ、ヤマテゴ、ムツイイレコ、カゴ、カルイカゴ、ヤマカゴ、テイル、コシゲテゴ、コシゲ、ハトテンゴ、メシカゴ、シタミ	▼シタミ（トカラ、十島） 1本縄で胴部を巻き、籠の前面でとめ、肩で背負う。ラオス北部ではタイダム族やタイプアン族などが使用する。	
	テル	テル、ティル、ヒラギ、大島テゴ	テルは奄美大島の額負い背負い籠。大島テゴというのはトカラ列島で、奄美から移住してきた人が使用していたもの。1本の背負い縄で胴をまわして、背負い縄の先を額に掛けて背負う。ラオス北部では、カム、アカ、クイ族など多数の民族が使用する。 ▼テル テルノオと呼ばれる1本負い縄を竹籠の胴部に巻き、負い縄を額にかけて物を背負う背負い籠である。奄美以南に分布し、トカラや三島村、薩隅では一本背負い縄を胴部に巻きながら、肩に背負う背負い籠がみられ、種子・屋久以北では2本負い縄を籠の底を通して肩で背負う背負い籠が圧倒的に分布する。 ▼テル（大島郡大和町恩勝） 奄美本島・徳之島・喜界島ではテルというのは額に緒をあてて運ぶ籠を言う。底は四角に上部は円形にカゴ編みで作られる。上部のまわり4か所に耳をつける。耳と底の四隅と口縁を補強する。奄美本島のものは口がやや開き気味。喜界と徳之島のものは口はややつぼまり気味に作られる傾向がある。テルノオ（テンヌウと訛る）を籠の耳に通してうしろで結ぶ。	鹿1_図2050_N3035_ティル
	セゴ	テル、テゴ、セゴ、カイテンゴ、カオテンゴ、カライカゴ、ヤマカゴ	▼セゴ（曾於郡財部町北俣荒川内） 底は四角で衆目編み、側面はカゴ編み、縁は巻口仕上げである。底の四角に4本、対角に2本の力竹をはめてあり安定している。紐が籠のくぼれた所にまわしてあり、負い縄が結び付けられ、それが底の力竹に結びつけられている。弁当や収穫物を運ぶのに用いる。	
運搬籠		ダカゴ、オーダガマ	ウマに背負わせて運搬する籠。	
天秤籠		カタゲテゴ、イオテゴ、カケテンゴ、ダウリカゴ	天秤に下げて背負い、運ぶ籠。	鹿1_図2094_N2967_ダウリカゴ
木の葉籠		クサキイテゴ	牛馬の草を刈りいれて運ぶ目の粗い竹籠。農家の男たちが自分で作り、年に10ほど使い捨てにする。大きな六つ目編みにする。背負うように縄をつけたり、棒で前後に担いだり、1つを肩にかけて運んだりする。	鹿1_図2095_N828_クサキイテゴ
手揚げ籠	テサゲテンゴ	テサゲテンゴ、サゲテゴ		鹿1_図2097_N2268_テサゲテンゴ
頭籠	アタマテゴ	ナカガイマング、アタマテゴ		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
背負子	カリコ(総称)	カリコ、カリ、カリコ、カリイコ、カレイコ、カレコ、トイサン(カレイコ)、オトコカリ、オナゴカリ、イングワ(球磨郡)	▼カリコ カリコはカリとも言われカルウ(背負う)ものの意である。球磨ではイングワとよぶ。負う運搬具としては最も普通のものであった。南九州の無爪、有爪の2種のカリコはそれぞれはっきりとした相違点をもつ。有爪のカリコは宮崎・熊本の山地から薩摩大隅一帯の山地に広いが、無爪のカリコは、桜島を中心に大隅半島の周辺一帯、甌島・種子島などが主な分布地であって、他ではほとんど見ることはできない。 ▼オトコカリ(有爪)、オナゴカリ(無爪)(曾於郡志布志町八郎ヶ野) ここでは有爪と無爪と両方が用いられているが、無爪の方をオナゴカリといて女子が用い、有爪の方をオトコカリといて男子が用いて、混同することはないが、オナゴカリの方が古くからあったという。	
	カリコ(無爪)、オナゴカリ	カリコ、カレコ、カリ、カリコ、カリコ、カレイコ、トイサン(カレイコ) カレイ、シマカリー、シマガレ、オナゴカリ	▼無爪型カレコ 男女とも使用。有爪のものが山林の労働に使われたものに対して、こちらは小ぶりですの民の運搬具であったといえる。 ▼カレイ、シマカリー(垂水市牛根、二川) 2本の杉の材のままを並べて横木を渡してあり、背に当る所はワラ縄をぎっしり巻いてある。負い綱と荷綱とは別になっていて荷はずつと高いところにつけるのが特徴である。ここでは女子も男子も用いるので、一家に大小数個あるのが普通で自製したもの。カレイとかシマカリーというのは、シマは桜島のごとで桜島から来たという人もいる。桜島では男子が使用し女子は頭頂運搬をする。 無爪のカリコは、桜島を中心に大隅半島の周辺一帯、甌島・種子島などが主な分布地。 ▼カリコ 丸い杉の自然枝を使って作られた無爪のもの。腰当てにはワラ縄が巻きつけられ、負い綱と荷綱は別々で麻製である。 ▼カリコ、カリイ(曾於郡輝北町百引) 丸い杉の自然枝を用いており、無爪である。腰当てにはワラの縄がぎっしりと巻きつけてある。負い綱と荷綱は別々で、ともに麻製である。横木は2本。	鹿1_図2115_N1945_カリコ
	カリコ(有爪)、ブンゴカリ	カリコ、カリ、カリ、カレコ、カイコ、カリコ、ブンゴカリコ、ブンゴカリコ、カレイバシゴ、オトコカリ、ブンゴカリ、ツメガリ、ショノヤマガレ(肝属郡佐多町古里)、ツメガレ(肝属郡根占町)	▼有爪型カレコ 佐多町古里ではショノヤマガレ(樟脳山背負い)と称した。原木を輪切りにして小屋まで運ぶのに、爪が突きだしているから縄がけをしなくても運べるし、傾ければ落下するので便利であった。山林の特殊な業として一緒に始まった。根占町ではツメガレといい、炭焼で使用した。 ▼カリコ、ブンゴカリコ(鹿肝属郡大根占町下石) 2本の削った堅木材は背中にあたるように反っている。爪が後ろに40ほどの長さに出ており、ヘフというワラ製の輪を腰下にあたる部分につけてある。荷は爪の上に負うのでそう高く負うことにならない。男女共にこれを用いる。豊後から炭焼きの人がこの地に伝えたのだという人もいいる。この部落には爪のないカリコは見られない。 有爪のカリコは宮崎・熊本の山地から薩摩大隅一帯の山地に広くみられる。 ▼ブンゴカリコ(熊毛郡南種子町西元) やや反った杉材を角形に削って用いている。斜め上向きに爪がついている。腰当てには藁製のヘフをつけ、シュロ縄で台木に固定されている。負い綱と荷綱は別々で、ともにシュロ製である。支え杖がついている。	鹿1_図2132_N1557_カイコ
背中当	シカタ	シカタ(熊本・宮崎の山地～薩摩大隅両半島、屋久・種子)、セアテ、スイタ(屋久島)	▼シカタ(肝属郡内之浦町岸良) ワラをシュロでくくりながら、長方形のシカタに仕上げている。上部に2か所、左右に1か所ずつ、シュロ製のミミがついてあり、シュロの負い綱が通してある。カリノウ(背負い綱)で背負う場合にクッションとして背中に当てる。 ▼シカタ(熊本・宮崎の山地～薩摩大隅両半島、屋久・種子) 背中当、腰当のこと。ワラ製品で楕円形に作られ、ワラの細束を中心から巻いて、綴ってある。山行きなどにはシカタを絡めて背に負い、カリノウを手で持つていく。荷と背の間にただ当てるはめて使う例が多い。カリノウ・シカタを使って縄で荷を背負う運搬法は、辺地、山地に点々とあり、熊本・宮崎の山地から薩摩大隅両半島の先まで、更には屋久・種子まで広く分布するが、奄美ではみられない。	鹿1_図2145_N36_シカタ 鹿1_図2155_N2283_スイタ
背負縄	カリノウ	カリノウ、カリナワ、カリノ、カイノ、カレイノ(熊本・宮崎の山地～薩摩大隅両半島、屋久・種子)、カンジロウ(甌島)	▼カリノ 肩に当るワラを組んで作った太い部分と、その先にシュロ縄の部分があり、この2本の縄を中央で繋いである。カリノウ・シカタを使って縄で荷を背負う運搬法は、辺地、山地に点々とあり、熊本・宮崎の山地から薩摩大隅両半島の先まで、更には屋久・種子まで広く分布するが、奄美ではみられない。カリノは背負い運搬の基本をなすもので、背負い民具はすべてカリノと複合することによって出来ているといってもよいだろう。 ▼カンジロウ(薩摩郡上飯村桑之浦) 藁製の負い綱で、肩当てを非常に太く編んである。シュロ縄で2本の縄をつないでいる。背負い運搬の基本をなすもので広く分布しており竹カゴやカリコなどへも応用されている。甌島以外ではカリノウ、カイノ、カレイノなどともよばれる。	鹿1_図2150_N211_カリノ(シカタ) 鹿1_図2160_N90_カンジロウ
額運搬縄	テルノオ	テルノオ、テンヌウ、ティルノオ、カサギンナ(トカラ列島以南)	▼テルノオ(大島郡大和町恩勝) 長さ約3m。シュロ縄を綴った幅広い部分の両端にやや太めの縄を結びつけてあり、丈夫でよく整った形をしている。籠の耳に通してうしろで結ぶ。テルノオだけを用いて稲束・薪束などを運ぶこともあるが、その時は束は縦にし、緒は額から束の後ろにまわして結ぶ。 ▼額運搬のテルノオに使う縄。頭にあてる。	鹿1_図2174_N138_テルノオ
頭当	カプシ	ハッシ、ハブシ、ハブシイ、カンブシ、カンメブシ、カンブシ、カプシ(川辺郡坊津町久志)、ハーブシ(奄美の沖永良部・与論の島)	▼カプシ 頭頂運搬することをカンメル、カメルなどといい、そのときに頭の上のせて荷の台にするものをいう。坊津町は薩摩半島では唯一の頭頂運搬地帯で南九州全体から見て、最も大きく丁寧な作られる。手拭を被った上から、これを水平にのせ荷をカメル。カンメブシはワラで作る。女子は仕事にでるときはこれを必ず手に持ってゆく。南九州で頭頂運搬をするのは天草の南部・桜島、坊津町・黒島など三島村、それに奄美の沖永良部島・与論島などで、坊津町以外はカプシは小さく、しかも粗製のものが多く。	鹿1_図2180_N145_ハッシ
網袋	オーダ	オーダ、クサイオーダ、クサオーダ		鹿1_図2187_N2613_クサオーダ

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
担ぎ俵	フゴ	ウブンオーダ、コエイネ、オーダ(奄美)、フゴ(南九州本土)	▼ウブンオーダ (大島郡与論町麦屋) 藁草を用い、タテを5か所で編んで一方をばらばらのまま残す。編み終わった縁を合わせて筒状にし、編み残したばらばらの部分を内側に折り曲げて底を閉じてある。上の縁につけられている紐を肩から背中にかけて運ぶ。 ▼オーダ (大島郡与論村古里) 奄美ではオーダといい、南九州本土ではフゴという名でよばれ、さかんに用いられている。全体は短筒筒形。ワラは乏しいのでワラ製品はほとんど見られない。農作業用のいろいろのものを運搬する。これを選ぶには縄をチに通して肩に担ぐ、縄先を鉤や鎌の柄に一巻きすると楽に運ぶことができる。これに対して本土のフゴは構造は全く同じであるが、2つを一对としてサシで肩に担ぐ。	鹿1_図2197_N4248-1_コエイネ
垂袴	コエムチオーダ	コエムチオーダ、オーダ	両側が袋になっていて下を絞ってある。ウマやウシに肥を背負わせて運ぶ。 ▼コエムチオーダ (大島郡沖永良部町住吉) 肥を持つオーダ、すなわち堆肥運搬のオーダで、オーダはモッコのような容器である。牛にウセル(被せ負わせる)運搬法の一つ。古いものでは、1本のサシのような棒を用い、その両側に縄を編んで作った円形のオーダを下げる。このオーダも下に穴があき、底をつりあげる構造になっている。	鹿1_図2195_N2714_コエムチオーダ
背負俵	トーラ	コエフゴ、コエドーラ、トーラ(背負い俵)	▼トーラ (薩摩郡下飯村瀬々野浦) ワラを主原料にし、コモガキを用いて編んである。編んで半分に折り、両脇をとじて袋状にしてある。ワラを編んだ後の紐や別にくくりつけた紐が7本出ている。両脇に取っ手がある。堆肥や農作物を運ぶ時に用い、負い縄をかけて背負う。両手でもって運ぶ場合もある。 ▼コエフゴ、コエドーラ (日置郡金峰町宮崎) 堆肥を入れるからの名で、別にコエドーラともいうのはコエタワラの詫ったものである。作り方はコモ状のものを2つ折りにして、両はしを太い縄で綴り、その縄をのばして肩にかける緒にする。ごく粗く作って使い捨てる傾向が強い。この中に堆肥、堆肥と化学肥料や種子をまぜたものを入れて、肩にかけて歩きながら、片手で堆肥を握ってまいていく。	鹿1_図2200_N241_コエドーラ
背負袋	カンザー	カンザー、カンザァ	▼カンザー (熊本郡南種子町平山) 種子島の全島でよく用いられる草籠の一種。野山に行くのに用いられ、鉈・鎌・弁当などを入れて、カリノで負っていく。カリノが外れぬように上下に耳緒がついてある。帰りに荷があるときはカリノでも直接に荷を背負い、カンザーはその荷の下にあてて背中当としても用いる。カンザーは背負い籠であると共にカリノのシュタにあたる役も兼ねている。	鹿1_図2207_N2024_カンザー
	カガイ	カガイ、イソカガイ、イレコ、クサキリカガイ、カンザー、コシカガイ	▼イソカガイ (薩摩郡上飯村平良) シュロ縄を編んで長い長方形のものを2重に折って両脇をトジ袋状にしてある。負い縄はシュロ製の1本の縄で、下部2か所に結びつけてある。口を閉じるために、左右に2本のシュロ縄がついてある。	鹿1_図2213_N56_カガイ 鹿1_図2222_N529_クサキリカガイ
背負籠	ツヅラテゴ	ツヅラカガイ	▼ツヅラカガイ (薩摩郡鶴田町紫尾、峠) ツヅラ(オオツヅラフジ)を用いて編んだ籠で、元来は山仕事の人が山行き弁当や、ナタ・ノコなどを入れて背負うために用いる細長い籠であったのが、一般の背負い籠となり、形も大きいものが作られるようになった。農作物などの運搬に用いられている。木の棒を用いて編む。作り方は難しいが、丈夫で何十年も形を保ったままに使用に耐えうる。	鹿1_図2253_N1179_ツヅラカガイ
担い籠	イネテゴ	イネバラ、ナエカゴ、イネテゴ、イネブイ、ナエテゴ	天秤に吊り下げてかつぐ籠。イネとはイナウで天秤で担ぐという意味。 ▼ナエカタゲ (志布志町) 苗代から植える田までの苗の運搬。	鹿1_図2258_N662_イネバラ 鹿1_図2265_N3251_イネテゴ
片口笊	ブイ	ツツラヘーソ、カタゲブイ、ブイ、ブリ、ソケ、ブイゾケ、ブイジョケ、テモッコ(対馬)、テブイ、ハネブイ、ブンギイ・スンブイ(炭ブイ)、エボ(工ブイ)(鹿児島県内)、飯島(タカベーソ)、エボ(大口周辺)	▼ブイ、ブイ 左右相称の竹籠で、広い直線的な口があり、そこには縁がつけてない。縁に杉枝を曲げて入れてある。堆肥や農作物の運搬に用いられ、土木工事の作業用にもよく用いられる。運搬には担ぎ棒を用いて振り分けに担ぐのが大きな特徴になっている。地域によって異なった形態をもつ。	鹿1_図2274_N496-1_カタゲブイ
	キブイ	キブネ、キブイ	▼キブネ、キブイ 鹿児島には判りものは少ないが、片口状に割ったブイ。薩摩半島・大隅半島の先端に分布している。	鹿1_図2276_N782_木ブイ
笊	シヨケ	ムンイリドイ、ヒヤーギ、セー、ハンスソー、ピンカー、クマデ、ソウケ、イットジョケ	一般的な笊のこと。	鹿1_図2300_N3008_クマデ 鹿1_図2305_N3539_イットジョケ
尖り棒(担ぎ棒)	オコ	タケヤマオコ、ヤマオコ、ヤマオーコ、オコ、オーホ、オウコ、ホコ、ニナイボウ	▼オコ ヤマオコ・オーホ・ホコともいわれ、直接、荷物の中へ棒の端を突き刺して担ぐもので、荷縄で棒に結わえつける面倒を避ける。元来、突き刺し漁具であったとか、ホコとしての武器であったとかの説があるが、奄美のオーホは先端部がホコの型をしており、それらの説を想定せしめるに充分なものがある。一方にだけ少し枝を残して滑り止めにしてあるものが多い。 オコは鉈または山鉈の意かもしれない。背にカルウ(負う)運搬法に対して肩にイノウ(担ぐ)運搬法の中心になる運搬具である。稲束・カヤ束・薪束などにオコの先を突きさして前後に担ぐ。単に両端が尖った棒であればよいわけだが、いろいろの型がある。 ▼タケヤマオコ (輝北町)、オーホ (龍郷町) 荷物をとがった先端に突き刺して担ぐ。鹿児島では竹で作るという特徴がある。(鹿1_図2308_N392_タケヤマオコ、鹿1_図2319_N3721_オーホ)	鹿1_図2308_N392_タケヤマオコ 鹿1_図2319_N3721_オーホ

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
天秤棒（担ぎ棒）	イネサシ	ミズサシ、カギ、サシ、ニノゲ、イネダシ、コイドリサシ、ニナーギ、イネサシ、イネカギ	<p>▼サシ イネサシともいい、カガイ・フゴ・肥タンゴ・水タンゴなどを運ぶもの。中央部を太く平らにして弾力性をもたせる。両端に木製の小さなクサビや鉄の止め金を打ちこんであるのがオコと異なるところ。担いでいく場合、両端が少しずつ上下に動き、いつときでも肩が休まることになる。水タンゴや肥タンゴを運ぶ時は、荷を両手で支えながら要領よく担い。波立つのを防ぐ。</p> <p>▼サシ、イネサシ、イネギ イネはイナイ（担ぎ）の意である。オコとサシとがイナウ（担ぐ）運搬具の中心である。漁村を中心に広く平地地帯にはサシでの運搬がみられ、しかもそれが山地に向かって、或いはカラウ（背負う）運搬法に向かってひろがり、侵食していく傾向がいちじるしい。昔は負い縄・負い籠・カリコで運搬していたが、今はサシでイナウようになったという話はしばしば聞かされる。道さえ良ければ、サシ・オコの運搬が有利であることが理由であろう。木や針金のカギをもって水桶・バケツ、ブリという竹籠をかけて運ぶ。すべりどめだけ付けたサシもある。</p> <p>▼イネカギ サシの部類にはいるが、両端に木や針金のカギをつけたもので、水タンゴやブイなどを担う。</p> <p>▼ニナイボウ、サシ（始良町）、ミズサシ（志布志町） 荷物を籠などに入れて、両端の突端部やカギにつりさげて担ぐもの。鹿児島では竹で作るとい特徴がある（鹿1_図2329_N176_ミズサシ）。</p>	鹿1_図2329_N176_ミズサシ 鹿1_図2353_N3464_イネダシ
	シンボウ	イナイボウ：シンボウ	真ん中に荷を下げて、2人で担ぐ。サシより太い棒で、両端に止めがない。仕明人たちが仕明ドックを下げていき、仕事場ではカガイモッコに入れた重い石を、シンボウの中央部に結わえつけ、2人で担ったという。	
肩棒	カタボウ	カタボウ	▼甌島、奄美、（ラオスのモン族）。長い方を持って支えながら、曲がっている部分に丸太などの長い荷物を乗せて肩を支点にバランスをとって担ぐ。	鹿1_図2376_N72_カタボウ
	カタアテ	カタアテ	首に巻くような形のクッション。カタボウを使う時に使用。	
担ぎ股	カタゲマタ	カタゲマタ、カタギマタ、カタギウマ	荷物を横に積んでほとんど肩で担ぐ。下ろす時は斜めに傾けて落す。もとは紀州にあったものだという。 ▼カタギマタ、カタギウマ（球磨郡相良町初神） 又杖を2つに割って、割れ口を外側にしてある。丸太を運ぶのに用いる。マツヅエという頂に小さいマタのある棒で支えてカタギマタを地上に立て、運ぶ丸太をマタの間に横に重ねて積む。それをカタギあげて、両手は足棒をもって運ぶ。丸太を何本も運ぶことができる。宮崎から熊本の山地には点々とみられる。	鹿1_図2380_N4055_カタゲマタ
畚	モッコ	モッコ、タケモッコ、ナワモッコ、モッコウ、カガリモッコ	▼タケモッコ 鹿児島県で圧倒的に多い形。2人で前後に水平に持つ形（鹿1_図2370_N4126_タケモッコ）。 <p>▼カガイモッコ（日置郡金峰町尾下） カガイが袋状であるに対して、ひろげると平面になる目の粗い縄で作ったモッコである。2つを対にしてサシで担いで運搬する。堆肥やイモ・大根などの運搬に用いる。中央が重みで下って袋状になるので、横にこぼれ落ちる心配はない。カガイという荒目の縄袋が南九州全域にあるのに対してこのカガイモッコは薩摩半島の先端にだけ濃い分布を示す。</p>	鹿1_図2365_N1500_モッコ 鹿1_図2370_N4126_タケモッコ
猫車	ネコグルマ	ネコグイマ、ネコグルマ、ネコ	▼ネコグルマ、ネコグイマ、ネコ（揖宿郡開聞町脇） 車輪は大きな幹を厚く輪切りにしたものを使う。車輪は曲った木を用いて被いがされている。使い方は2本の腕を両手に持って向こうに押し進めることが特徴になっている。車輪が1つなので山よりの細い道や、畑の畔道などには便利。南九州でネコグルマの分布している地方は薩摩半島の先の東部の開聞町から頼娃町・知覚町に及び、背に負う運搬法の発達していない地方なので、山道などにも使えるネコグルマが大いに利用されたのであろう。 <p>▼ネコグルマ（開聞町） 車輪の上の覆いの上に荷物を載せて、2本の腕木を両手で持って押しながら物運ぶ一輪車である。南九州では薩摩半島の先端部にだけ分布する（鹿1_図2372_N152_ネコグイマ）。</p>	鹿1_図2372_N152_ネコグイマ
荷車	ハコグルマ	ハコグイマ、ハコグルマ、ハコグイ、一輪車	箱車。ネコグイマの前と左右に板をつけたもので土砂などを運ぶ時に落ちないようにしている。 ▼ハコグイマ、ハコグイ、一輪車（指宿市池田、仮屋） それほどネコグルマと形がちがうわけでもないが、はっきりと名称をちがえて、混同して使うことはないようである。ネコグルマと違う点と言えば、腕木につづく台木が直線であること。車輪は車の先についていて荷台に影響しないようになってきていること。荷を入れる枠がついてあること。車を置きの支え木がついていないこと。分布をみると山川町・指宿市・喜入町などで、ネコグルマの分布地に隣接しており、更に鹿児島湾をへだてて対している鹿屋市の一部にも分布している。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
畜力運搬				
荷鞍	クラ	タヨンクラ、ウセグラ、ウシノセグエラ、タグラ、ジビキグラ、パコウクラ、ダシクラ、ニグラ、ダチンクラ、ウシクラ、マンクラ、ウマクラ、ウマニクラ	▼ウセグラ 牛馬に荷を負わせて運搬する鞍。丈夫な鞍骨2本を左右の横木で支える。ヒツグラ（荷車などを引く）は前の鞍骨がX字型で大きいのに対し、ウセグラは日本の鞍骨が曲木を使い同じような大きさ。鞍の下にはシタピラをおく。ハラオビ、ムナゲ、シイゲの帯をつけて、牛馬の腹、胸、尻にこの帯をかけ鞍を固定させる。ニノ（荷縄）で鞍にくくりつける。 ▼ウマのウセグラ（始良郡加治木町辺川） ウセグラのウセは負わせるという意味で、荷を負わせる鞍である。ニグラともいい、車などを引かせるヒカセグラに対する語である。ウシノウセグラをそのまま馬に用いることもあるが、馬の胴は大きく荷も大きいので、馬だけのものが一般には用いられる。前鞍骨と後鞍骨はほとんど同形だが、後の方が後ろに傾き方が強い。鞍骨の山部には赤金をかぶせ、ボウシ（星か）という小さな珠をいくつも飾りつけてある。 ▼ウシのウセグラ（大島郡知名町瀬利寛） ウシノウセグラのウセグラの意味は負わせる鞍の窓で、モガヤスキ・ジソリなどを引かせるためのヒカセグラに対する語である。 南九州の本土で牛の鞍といえばみなヒカセグラといってよい。それに対して、奄美の島々では牛の鞍はほとんどがウセグラで、ヒカセグラは見ることがない。田をすかせたり車を引かせる時さえもウセグラを用いている。	鹿1_図2438_N2090_ニグラ
出し鞍	ダシクラ	ダシクラ	▼ダシクラ（熊毛郡南種子町平山） ダシクラは馬に山から引き出す大きな木材を網で引きずらせるときに用いる鞍である。前鞍骨は松、または堅木の大きな丸太をX字に組合わせて作られ、大きく重いものであるが、後鞍骨は小さくなっている。	鹿1_図2424_N1416_ジビキグラ
引き鞍	ヒカセグラ	ヒカセグラ、ヒキグラ、タスググラ	▼ヒカセグラ（指宿郡開聞町十町） ヒカセグラはヒキグラともいい、犁を引かせて回を鋤くのでタスググラともいう。鞍骨はやはり前と後とを横木でつないだ形になっていて、後鞍骨はウセグラに似て曲っているが、前鞍骨は長く×字型に交叉して、引綱をつけるのに耐えられるようになっていく。	鹿1_図2409_N974_タグラ
馬車引き鞍	バシャクラ	サツマクラ	ヒカセグラの一種。馬車を引かせるときに用いる。高さが1メートル近くある大きなものでかなり重たい鹿児島独特のもの。柳宗悦がサツマクラと紹介した。	鹿1_図2472_N2842_バシャクラ
牛鞍	ウシクラ	ウシクラ、ウシエカー	奄美。曳かせるにも、荷を担がせるにも使用する。	鹿1_図2462_N2790_ウシクラ
下鞍	シタピラ	シタピラ、クラシタ、サンビヤ	▼シタピラ ウセグラ（鞍）を直接乗せると牛馬の皮膚を傷つけるので、その防止のために鞍の下にシタピラを置く。シタピラは赤い糸で刺して美しく飾ってある。 ▼シタピラ・クラシタ（指宿郡開聞町十町） ワラとシュロとで作ったクッションで、鞍を安定させる。鞍骨に固定してあるので、一緒にとり外す。これらの下に更に蓆か麻袋の布を敷くのがふつうで、これをクラシタと呼んでいる。 ▼サンビヤ シュロでできている。サンビヤとはシタピラのこと。下のことをシャという。	鹿1_図2518_N2358_シタピラ
鐙	カン	カン、クワン、ダシグワン、マワリカン	打ち込んで使用。	鹿1_図2532_N797_カン
橇	ソリ	ソリ、キンマ、ヒキヤシムン、ジグリ、ジソイ、ソイ、ゾイ、ウシキンマ	▼ヒキヤシムン 木ソリ。車輪のない運搬具で、黒糖製造用の燃料である柴山を山からおろす時期、牛に鞍をかけ、ヒキヤシムンを引かせた。丸木を2本使い、横木を2本通して作った車輪のない簡単な道具。 ▼ジソリ、ソイ、ゾイ、ウシキンマ（肝属郡大根占町半下石） 地橇。ただソイまたはゾイと呼ぶことが多い。キンマは人が引くに対してこれは牛が引くのでウシキンマと呼ぶ場合もある。ジソリははるかに広く南九州の山地にはどこにでもある。前がそり上がって作られる。牛に引かせるが、凹凸の多い道でも通れるので山道用に利用度が高い。山だし用にはブレーキをつけてあるのも時に見うける。ジソリよりもっと原初的なのはV字形の堅木の又を用いて作ったソリである。 ▼ヒキヤシムン この木の股を使ったものが沖永良部にあり、ヒキヤシギという。これと全く同じものは、ラオス北部のカム族やアカ族の間でも使用されている。	鹿1_図2573_N790_ソリ
橇車	ダシゴロ	ダシゴロ、ゴロタゲルマ、ズイグイマ、ズイゲルマ、ゴロタ、ゴロタグイマ	▼ズイゲルマ、ズイグイマ、ダシゴロ（日置郡伊集院町末永） ズイはソリのことで橇車の意味である。ズイゲルマよりもむしろダシゴロという名がひろく通用している。ダシは山から木材を出すこと、ゴロは丸太を輪切りにした車輪のこと。車を引くのは牛で、制動するには前部を下げて地にすらせるので坂を下っても転がらずに心配はない。狭い山道を、薪炭・木材などを運ぶのに盛んに用いられた。ダシゴロを引かせる専用の大型の雄牛をダンゴロベアと呼んでいた。	鹿1_図2576_N598_ダシゴロ
	ヤグイマ	ヤグイマ、ダシゴロ	▼ヤグイマ（鹿児島市岡之原町花野） 車にヤという幅があるのでついた名称で、これもダシゴロだという人もいる。ズイゲルマによく似ているが、相違している点は、車にヤがあり、鉄輪がはまっていること、制動のしかたは車の前部を地にすらせる代りに車体前部にハナスラセ（鼻擦らせ）という木が下向きに副えてあり、そのうえ車にハズリがついていてカジ棒につく網を引いて締められるようになっている点である。	
荷馬車	ニバシャ	ニバシャ、バシャ、ニグイマ	ヤゲルマ、タイヤゲルマを曳かせる馬車のこと。ニグイマはテグイマ（手車）に対する語。	
首輪	クビワ	クビワ		
はも	ハムン、ハモン	ハムン、ハモン		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
その他				
引綱	ヒキツナ	ヒキツナ(クラの換え綱)、ウチツナ、テナワ、シロナワ、シユロナワ、ピンスイナワ、バコウビキ、ヒキノウ、ヒキヨ、ニョー、ニヨ、ヒキニョウ、ウシニョウ(背負縄)、シキニョウ(引き縄)、ニノウ、マンガンチ、ウシロビキ	▼ニノ・クチツナ・ヒキツナ (伊佐郡菱刈町荒田) 牛馬に用いるニノ・クチツナ・ヒキツナなどは重要なので、その作製にも念を入れ、多くは正月二日の仕事始めや牛馬の節句という三月の節句に一年分を作ることが行なわれた。そして丁革に纏ったそれらの縄・綱は整然と美しい形に結んで、長押の上や戸板の上に掛けておく。呪術的な意味があるのだろう。	
滑車	カッシャ	クイマキ、コロ、カッシャ、ロクロ		鹿1_図2631_N2183-2_カッシャ
肥料樽	タル	ヒリョウダル、ウマダル、ウセダル、ウセゴイ、ウセダブ、ミッタゴ、タンゴ	▼ウセタゴ ウセタゴ(負わせ樽)という細長い肥桶から炭俵などもタテ位置に負わせるので技術がいる。鞍の上にヒッカケという木枠のをせ、それにニノを引っかけて使う方法が薩摩半島部にはある。	鹿1_図2634_N382-1_ヒリョウダル 鹿1_図2638_N1541_ミッタゴ 鹿1_図2657_N2376-2_コエタンゴ
漁撈				
漁船と付属品				
丸木舟	マルキブネ	スブネ、クリブネ(奄美)、マルキブネ、マルキ	▼スブネ 大木を山で割りぬき、粗形ができあがると、山おろしをして海岸で仕上げ。水を張って火で焙って船腹を広げるなどして完成する。沿岸の釣漁や網漁に用いられたが、奄美においては重要な交通運搬具でもあった。推進具には帆や櫂が用いられた。 ▼奄美スブネ(大島郡住用村見里) 奄美ではクリブネ(割り舟)ともいうがスブネ(素舟)が普通の名称である。タブノキは水を一杯入れても浮いていて漕ぐことができる。山で荒割りをしたあと、海岸で仕上げる。トモとオモテには輪状の部分を残し、これにイカリ綱をつける。イカリはふつう石を用いる。主に砂糖樽をつんで川を下るに使われたが、今は漁業に使う。 ▼種子島マルキブネ(西之表市住吉浜) マルキブネ、またはただマルキと称される。船材は種子・屋久に特産するヤクタネゴヨウという名の松の巨木を用いる。木を切る山方と船大工が共同して山で粗形を作る。舟の上面が舟形にできると、削る仕事に入る。荒ごしらえがすむと、牛馬に引かせて山出しをし、海岸で船大工によって仕上げがされる。漁業用が主たる用途である。	鹿2_図2666_N1_マルキブネ
サバニ	サバニ	サバニ	▼サバニ 厚板をくり抜いた底板と2枚の脇板をはぎあわせる。もともと松や楠をくり抜いた単材くりぶねであったが、杉が船材として優れていることがわかり、スギブネ(杉舟)が作られるようになった。現在奄美諸島で用いられているアイノコは、奄美大島にあったイタツケの工法を用いて作ったサバニ形の舟である。推進具は櫂と帆。	
板付け舟	イタツケ、スブネ	イタツケブネ、スイブネイ、アイノコ	半構造船 ▼スイブネイ 漁を業とする人、対岸に田畑山林を所有している人々の運搬具として用いられた。杉板で作られていて、イタツケブネともいう。その形態においてこのスイブネイとナハブネ(那覇舟)の特徴を取り入れたアイノコと呼ばれる舟がある。 ▼トカラのマルキブネ 2本のオモキと2枚のセイレ(底板)と脇板からなっている。もともと単材くりぶねであったが、はぎあわせるようになった。ナガザイ漁やサラ突き漁、ホロビキ漁の他に荷物の運搬等にも用いられた。推進具は櫂と帆である。	
	サツマガタ	サツマガタ、ゴンメツケ	構造船 ▼サツマガタ カワラ、ネイタ2枚、ワキイタ2枚の5枚の板からなっており、ゴンメツケともいう。チヨマで形取りをし、ハギアワセにはフナギを使用する。ヒユウガガタは幅が広く、帆走してホロビキ漁が可能なのに対して、サツマブネは船幅が狭く帆走に不向きであったが、船足が速く積載量も大きいので網漁やカツオ漁などによく用いられた。	
	カワブネ(川舟)	カワブネ、サンメツケ、サンメテンマ、ハコテンマ、サツブネ	▼サンメツケ 底板と2枚の脇板でできている舟で、鹿児島湾内や川内川のような河川で用いられる。釣漁や小型網漁に用いられるが、沖がかりしている漁船への連絡や、対岸への交通や牛馬、肥料の運搬などに用いられた。推進具には主に櫂と水棒が用いられた。 ▼カワブネ 鹿児島県随一の長流を誇る川内川では各種の舟が活躍していた。サツブネ(作舟)は、流れが蛇行して冠水しやすい菱刈地方では、日常の農作業に運搬具として必需品であった。宮之城下流のカワブネは川魚漁目的のためのもの。船底の水音を消すことと浅瀬を乗り切る工夫がなされている。	
櫓	ロ	ロ		
櫂	ヨホー	ユホウ、ユホ、ヨホー、ヨホ、イホウ、カイ、ウチゲー	奄美大島から南は櫂のみを用いる。トカラ列島では櫂と櫓を用い、トカラを越えると北は櫓を用い始める。	鹿2_図2684_N2488_カイ
帆	ホ	ホ、本帆(帆柱付)	帆布には「南無阿弥陀仏」などの文字が記されている。	鹿2_図2692_N2490_ホ
滑車	セミ	セミ		
舵	カジ	カジ	堅木の樫材が用いられる。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
あか取り	アカトリ	アカトリ、ユートイ(与論島)、アカトイ(沖永良部島)、アカトイ、アカグミ(南九州本土)	アカトイ・アカグミは南九州本土でも用いられる。アカは滄の意で、トイは取りの訛音で、ユウは流動物・液体をいう沖繩・奄美語である。下が丸くなっているのはマルキブネ用。板を組んで作ったものもある。 ▼アカトリ(西之表市安城) 杉、チョウナとノミで削り抜く。把手はすべらないように粗削りのままである。船底に溜まった塗を汲み捨てるのに用い、丸木舟用である。棒状の柄が内側についているものや、環状のものなどがある。 ▼アカグミ(竜郷町竜郷) 黒松の根元の芯をくり抜く。糸満漁夫のユトウイを模して製作したという。坐ったままで、船底の塗を汲み捨てるのに用いる。この形は沖繩・奄美諸島に多く見ることができる。 ▼ユートイ(大島郡与論村大金久) 与論島で漁業に乗るサバニという刳舟、それによく似た形のイタツケという舟底の水を汲みすてるに用いるものである。丸木を引って作ってある。底はやや丸味をもっていて、舟底に合うようになっている。アカグミに用いるだけでなく、網でとれた魚を籠に移すときにすくうにも用いるし、沖でとれた魚を刺身にして食うときのマナイタにもなり皿にもなる。 柄が後縁から直接に底部の中程についている型のものも時にみられる。この握り柄が中にある方が奄美型であって柄が後ろ外にある写真の型のは沖繩型で、サバニと共に沖繩から伝えられたものであるという。この形の丸いのに対し、矩形・長矩形のものが、南九州本土の漁船や、川内川・球磨川などの川舟に用いられている。	鹿2_図2705_N229_アカトリ
碇	イカリ	ヤマタロー、イカリ、イキヤリ	▼イカリ(南種子町平山) 椎の股木で作り、細長い石をシュロ縄で固定してある。爪先は砂にくい込むように尖らせる。多くは松枝を利用したヤマタロー(山太郎)とよばれる錨が用いられていた。ヤマタローは沖がかりにもよい(鹿2_図2720_N2150_イカリ)	鹿2_図2720_N2150_イカリ 鹿2_図2722_N2487_イカリ
舳い網	モヤイツナ	モヤイツナ		
羅針盤	ラシンバン	ホウバリ(方針)、ラシンバン		
ランプ	ランプ	船ランプ、カンテラ、ガス燈、ガスランプ、ガスランボ		
苫	トマ	トマ		
釣具箱	オキバコ	イソバコ(種子島、屋久島、枕崎)、イショバコ(奄美)、コバコ(指宿)、マクラバコ、オツバコ	▼イソバコ(上屋久町一湊) 榎、機密性を高めるために鎌継ぎの方法を用い、腐蝕しないように竹釘で固定してある。釣針、網針、テグス及びたばこ、マッチなどを入れるのに用いた。休むとき枕にしたからマクラバコともいった。 ▼イソバコ 漁師が沖へ出るとき、釣道具やタバコなどを入れて携行する小型の箱。県内でも呼び方が違い、イソバコ(種子島、屋久島、枕崎)、イショバコ(奄美)、トンコツ(甌島)、コバコ(指宿)など。いろいろな大きさや形のものがあ	
		カラト(阿久根・串木野)、オキピツ・オキピキ(内之浦・柏原)、オキバコ(宮崎の折生迫)	▼カラト(串木野市羽島) 釣針、テグス、鉢、擬餌針のほかたばこなども入れるのに用いる。不慮の遭難のために、底に米を入れたという(鹿2_図2761_N3277_カラト)。 ▼カラト(串木野市小瀬) 杉製で、中は底、中箱、落とし蓋と3段あって、上2段には中に小さい仕切りの板が入っている。中には漁業用の船上で使う小物をいろいろ入れる。柏原でオキピツと言うように、一番底には米を1升ほど入れておくという。日帰りの漁で出漁して帰港できなくてもこの米があつて助かった例があるという。	鹿2_図2761_N3277_カラト
		トンコツ	▼トンコツ(熊本県球磨郡五木村) 刻み煙草入れ。漁民のトンコツは上下2段の引き出しがあり、キセルと煙草など小物を入れ、小さい釣針などの漁具も入れている。オキテゴに入れて船に運び、船中では枕用にもなる。	鹿2_図2774_N471_トンコツ
沖籠		オキテゴ、オツテゴ	▼オキテゴ、オツテゴ(串木野市小瀬) 沖籠の意味である。浅い角籠で、小船の片隅に置くによい形をしている。竹籠だったが、南九州で例外的に丸型でない。中にガエ(曲物の弁当入)、シルノガエ(焼物製、味噌汁など入れる)、トンコツ(煙草道具、釣小物を入れる枕兼用の小さい木箱)を入れる。これとカラトとをサンという天秤棒で前後に担って船のつないである海辺までゆく。	
海漁撈具				
網漁具				
漁網	トビューアン	トビューアン、フスクアミ		
	ヨジゲシ	ヨジゲシ、ヨシゲジ	▼ヨジゲシ、ヨシゲシ(鹿児島郡始良町上名) 網の使い方から考えて、寄り返しの意ではないか。始良郡の別府川流域一帯には広くみられる川漁網であるが、他の地方では見られない。夏から秋にかけて雨の後、川に水が増して濁ったとき、水につかり、上にむかって網を構える。上流から押し流された魚が流れこむと、その瞬間をのがさないようにして網をあげ、魚をすくい取る。	
地曳網		サンゴアミ、アミジャコ(網)、ジビキアミ、ワラアミ、ウタセアミ	▼ワラアミ(西之表市) 海水に浸すと強度、耐久性が強まるうえに、光沢があり魚群を寄せ集めるのに適しているため、地引網などに用いられた。 ▼ウタセアミ 八代海の漁業の中で200年以上の伝統を誇る。出水市の名古浦に代々受け継がれたもので、八代海沿岸では日奈久にあるのみ。海底にいるキエビを、海底を叩くような方法で網の中に追い込む。 ▼ジビキアミ 種子島の庄司浦、田之脇浦は漁撈の中心がジビキアミ漁で、農作業のあいまを見て仕立てた。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
追込網		エビアミ、シモサアミ、タテアミ、カシアミ、アミ	▼タテアミ（名瀬市） 木綿の一重網で豚血染め、浮は寶貝、外海に面した岩礁に夕方入る晩方 にあげる。海老や磯魚がとれる。 ▼サシアミ その使用方法から2つに分けられる。①ウチアミ、ウケアミ、ピンアン などという、サンゴ礁の間に小さな網を張って磯魚が干満の潮に乗って 行き来する通路に仕掛ける。②サンゴ礁や岩礁の間にある魚を追い出 して網にかける。奄美ではリーフの割れ目の外側に網を立てるもので、 スタテ、アンスケ、シモサアミともいう。 ▼シモサアミ（名瀬市根瀬部） 木綿網で豚血染め、沈子は子安貝、浮子は扇型の杉板を用いている。一 種の追込み網で2～3人で行う。サンゴ礁の切れ目に仕掛け、サンゴ礁 の穴やすき間にある魚をトギヤで追い出したり、海面を叩いたりして 網に追い込む（鹿2_図2792_N361_シモサアミ）。	鹿2_図2791_N360_エビアミ 鹿2_図2792_N361_シモサアミ
投網	ナゲアミ	ナゲアミ		鹿2_図2801_N3912_ナゲアミ
さで網	サデ	サデ、タブ、クサビアン、イユーガアン、アゼ	▼サデ（徳之島町） 2本の竹に、芭蕉糸製布の網が付けてある。竹を交差させて持ち、魚を すくう。網先には寶貝のおもりが付けてある（鹿2_図2802_N144_サ デ）。	鹿2_図2802_N144_サデ
たも網	スクイアミ	スクイアミ、オオタビ、タビ、ガシチシャクシ		
延縄	ハエナワ	オオフカ（大ふかの釣り針）、マグロドウグ、タテナワ、ハエナワ箱、ハエナワカゴ、ハエナワ、サバナワとワク、フカナワのワク、アラハエナワのガエ、フグノベナワ、ナワカガイ、タル（延縄用）、イカリ（延縄用）	▼延縄のワク 種々あるが、多くは木で四角な枠を作り、底は糸を粗く張ったものである。きわだって格調あるものは熊本県の天草全体でみられるワク（ハエナワカゴとも）。竹籠で、丁寧なカゴアミである。一つのワクに入れて、それを20～30ほど船に積んででかけるため、軽くて積み上げられねばならない。その点でこのワクカゴは丈夫で適当だという。 ▼延縄のイカリ イカリもいろいろと変化がある。細々として、しかもきっちりとした形をしているのが特徴である。 ①（阿久根市折口浜）細い椀の棒に鉤をつけて針金でしっかりと固定し、切石を錘りとしてつけてある。この位置に錘りをつけておけば、海底に沈むと必ずイカリがささる形になるという。②（南高来郡国見町多比良）中央の棒、カギ、棒の中央の位置に錘りとして鉄の棒が二本結びつけられている。木製。	
すばる	スバル	ワタセ、スバル、スバリ、サデ、カキシヤ	▼スバル（西之表市国上） スバルは星座の昴の形に似ているところから命名された名称。浮子が切れて海底に沈んだ延縄や建網をとるために海底を引きずる。爪は弾力性があるので、瀬や岩場でも捨てることはない。延縄漁には必ず持参した（鹿2_図3385_N1025-1_スバル）。 ▼スバル（西之表市東町） 海底を引きずり沈んだ延縄や建網を引き上げるのに用いる。中央部の曳縄を持ち上げると先端のぜんまいを下にして立つようになっている。	鹿2_図3385_N1025-1_スバル
釣漁具				
イカ釣り竿	イカヒキザオ	イカヒキザオ、イカツリザオ、イカテギ、フイキチリブー、チサドク、クサビチリブウ		鹿2_図2812_N1467_イカヒキザオ
仕掛け釣	ヒツカケ	サバツリ、イサギツリ、アジツリ、チーカイ、アジサバー本釣り、イカツリドウグ、トンキユ、トンキユガナ、イカガナ、ナゲイカ、ヒツカケ	▼アジサバー本釣り（笠沙町片浦） 枠はカラタケ、錘から1～2尺間隔に6本のアジバリをつける。鉤にはハチキの鱗を薄くはいだものやビニールを3～4枚つける。漁礁の周辺で三角帆を張り流し釣りする。	鹿2_図2837_N3512_イカツリドウグ 鹿2_図2847_N4397_ヒツカケ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
疑似釣	イカエギ	エギ、トンキユカナ、イカエギ、イカのエギ、イカガナ、バカイカガナ、コウイカガナ、マブシイカガナ、イカエド、エドギ、エツケ、イキヤデイル、イキヤジリ、ヤキイキヤバリ、イカカギ	▼イカエギ ミズイカ（アオリイカ）を釣る擬餌鉤釣である。享保年間に薩摩の漁師によって考案されたといわれる。作り方は、魚形から蝦形へ、黒焼から模様焼、白焼き、エナメル塗り、布被せへと変化してきた。 ▼イカエギ（瀬戸内町西阿室） 節が目になるように木取りしてあり、目には赤玉をつけてある。鉤は鉛で竹釘で固定。ミズイカを釣る餌木で漁期は10～5月。20尋の曳縄で、餌木が海面下3尋のところで泳ぐように調整しながら船を漕ぐ。イカエギは薩摩の漁夫が発明したものといわれる。 ▼イカガノ、イカエド タコカナに似てイカをかけて釣る針であるが、イカガナの場合は餌をつけず、イカの眼につきやすい白や赤の布や、貝殻・ガラス王・鳥の羽などをつける点が違っている。つまり擬餌釣である。これはイカが運動能力が大きいことに原因している。	鹿2_図2875_N1466-2_イカエギ 鹿2_図2887_N1753-1_エドギ 鹿2_図2975_N3790_イキヤデイル
	イカカギ	イカカギ、イキヤカギ、イカトリカギ、タイ、ヒツカケ、シツテ、イカカケ	▼シツテ、イカカケ（串木野市島平） 八本の針金を放射状に出して長さ7cmほどのところで上向きに曲げ、長さ5cmほどのところで針にしてある。針金の根元を鉤りとして、中央の1本の針金に続いている。全体の高さは23cmほどで、上に長く釣糸をつなぐようになっている。みな自製である。イカを引っかけて釣る漁具である。岸、または船の上から魚を糸につけたものを海中にたらしおくと、アカイカなどがつく。その餌をゆっくり、近く浅いところに引よせるとイカもついてくる。それを上から見ながら、竿につけたシツテを寄せていって、急に上に引き上げると、イカにかかって引きあげられる。半ばは趣味的な漁法だが、古くから行なわれて来たものだという。	
	タコガナ	タコカナ、タコガナ、タコガノ、タコバリ	小船の上から糸につけたタコカナを海底に沈めてゆっくりと引いて走らせる。糸の先に針金をつけ、その先にサルカンをつけたタコカナが付けてある。タコは餌をとろうとタコカナの上ののるので手ごたえで強く引いてタコを釣り上げる。南九州にひろくみられるタコ漁法で、タコツボよりはるかに多い。タコカナには3つの条件がある。針の束が上に向いていること、おもりがついていて海底に沈むこと、餌を結びつけられるようになっていること、の3つをみたせばよいので、実に多種多様なタコカナが作られている。 ▼タコガナ（喜入町生見） 台は孟宗竹で、餌を巻くための針金があり、鉤は鋼製の2股である。鉄製の鉤2個を裏につけ、海底に沈んだ時、鉤が上向きになるようにする。餌（生魚肉）をつけ海底におろす。ゆっくりと船を進めるとタコが鉤にかかる。	
	ツノビキ	ツノビキ、ホロカシラ、サワラヒキナワ、ビリヒラスヒキナワ、シャクリ、ダクリ、サクイ、サクイのカタ、ホロ	▼ツノビキ（里村里） 牛角を成形して釣針を埋め込み、鶏の羽毛をつける。釣縄は本綿紐で二重に緋い、根元の部分はすりきれないようにセキヨマにしてある。ブリ、ヒラス、スズキ、カツオ、サワラ等の大型魚の捕獲に用いる（鹿2_図3012_N3346_ツノビキ）。 ▼ホロ 曳縄漁のことをホロビキというが、ホロとは鶏毛のことで、擬餌針に用いる。艶の良い雄の地鶏のものがよいとされる。マグロ、カジキ、カツオなどの大形魚を獲る。	鹿2_図3012_N3346_ツノビキ
	ヒコーキ	ウキ、ヒコウキ、ヒコーキ、カツオシビのホロ、イタボロ、ヘラ、サンセンの皮		鹿2_図3031_N3992_カツオシビのホロ
	サワラエギ	サワラ、エギ、サワラエギ(サバ型、トビウオ型)、ツチマー、ソウラガナ、サワラエギ、フクロエギ	▼サワラエギ（佐多町島泊） 目と体側に夜光貝をはめ、木目を生かしてサワラの形に成形してある。波間に操り、サワラを誘引するのに用いる。種子・屋久以南にみるサバ型の餌木より軽くてうすい（鹿2_図3345_N2480_サワラエギ）。 ▼ソウラガナ（瀬戸内町節子） 胴はヒトツバ（イヌマキ）、頭と尾は牛角、鱗は山羊毛を用い、全体を流線型に成形する。海中では牛角が鱗のふい銀色を発し、木目はムロやサバの縞模様似てくる。竿に吊るしたソウラガナを海面で風上から風下へ走らせ、サワラを舐めだして誘い、トギヤで仕留める（鹿2_図3349_N3878_ソウラガナ）。 ▼フクロエギ（喜界町赤連） 本綿布でサワラの形に縫い、背鰭尾鰭胸鰭は桐板を成形して入れる。黒に染め灰色になるまで粗い、縞は紺で描く。腹に鉤をつけて海中で正位を保つようにしてある。海面が泳ぐように操り、サワラを誘引する。	鹿2_図3345_N2480_サワラエギ 鹿2_図3349_N3878_ソウラガナ 鹿2_図3353_N2494_フクロエギ
釣針	ツリバリ、ハリ、アラバリ、マゲロツリバリ、カジキバリ、カツオバリ、サバツリ、タバメツリ、ソコツリ、サルカン、ナマリ、サワラツリイト、鱧釣縄、ガツサリナワ、柿渋染釣糸(絹・苧・木綿)、ツリイト、ツリナワ、ツリノウ、一本ツリ、一本ツリガエ、ハマシ、イシュナワ、イオツイヨマ、イカツリヨマ、ブリナワ、クサリマキ、オナワ、ナワバチ	▼ツリバリ 喜界島では珍しいアダンの葉の釣針があり、堅い葉の外側または葉軸にある鋸状の固い刺を鉤先として、巧みに切り取って用いる。ヤドカリを餌としてハゼを釣った。 ▼タバメ釣り（佐多竹之浦） タバメは海底に棲む磯魚で大物は5kgからある。釣り針にオモリ石をつけ、餌だけ出して海底におく。タバメは餌に食いつくとオモリ石を曳きずりながら逃げるが、潜って追いつくことができる。 ※ツリバリを必要としない種子島・屋久島の「ダマシ」や屋久島の鰻を釣る「センツナギ」、釣糸を必要としない佐多竹之浦の「タバメ釣り」がある。	鹿2_図3127_N4182_タバメツリ	
針入れ	ハリツツ(針筒)、ハイツツ(針筒)	竹筒を材料とするものが多いのが特徴である。防錆の機能があると思われる。		
針曲げ	ククミとハリマゲ、ククミ、ハリマゲ、針曲げ金床		鹿2_図3509_N82_ククミとハリマゲ	
糸巻	ワクノウ、イトマキ、ノーマキ、ノウカキ、ノオマキ、ワク、鯖ワク、ナワワク、カグラ、スガマ	ノウとは縄の意である。	鹿2_図3176_N3777_スガマ	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
縄巻き	ナワマキ	ナワマキ、ナガリドク、チングルマ		鹿2_図3008_N2931_ナワマキ
雑漁具				
鋸、箆（やす）	トギヤ、モリ	ショウラトギヤ（サワラ突き鋸）、サワラトギヤ、トギヤ、トウギヤ、イグン、オオツキ、オウツキ、サワラツキ用モリ、イザイ、ツバメモリ、ゴホンテ、サンボンテ、フタマタ、ミツマタ、三本イチギヤ、一本トギヤ、鉄砲ヤリ（イチギヤ）、トギヤ、カギ、タコツキ、ウツキ、ムリ、トギヤの柄、ソウラトギヤの柄、モリ、モリ（大フカ釣り用の鋸）、フカモリ、ハナエモリ、ヌギカン、テナザトギヤ	<p>▼モリ（東串良町川東） 離頭式鋸で、鋸は鉄材をうち抜いて作る。鋸の先端は鋭利に研ぐが、下端は肉からはずれないように太くしてある。鋸はフカから噛み切れないためのもの。ハエナワや定置網にかかったフカを突き刺して捕獲するのに用いる。</p> <p>▼セダチのモリ 上げ潮に乗って浅瀬にやってきた大型の磯魚を待ち受けてモリを投げ突きすのをセダチ（シダチ、オオバチツキ）という。ミツマタ、ウツキ、オウツキといった突き刺し具を使用し、サワラモリより小型だが、岩や瀬に当たるので頑丈に作られている。</p> <p>▼フタツマタ（阿久根市黒之浜） 6寸のフタツマタで一連ブシ。片方の鋸の根元を長くし、短い方を包み込むように固定する。岩石に当たっても、折れたり曲がったりしない丈夫さと、弾力性が要求される。潜水してアラやブダイ等の磯魚を突き刺すのに用いる。</p> <p>▼イチギヤ（知名町住吉） 鉄棒の先端を叩き鏡を作り、浮力を押えるために鉄棒の柄を長くしてある。柄はコサン竹。磯魚を潜水して突き刺すもので、柄の根元につけたゴムの弾力で、遊泳している磯魚を横から突いて捕獲する。</p> <p>▼ウツツ 魚介類を突き刺して捕る漁具。先端の鉄具が数本にわかれているが1本のもの（穴の中に隠れているタコや貝をとる）もある。突き刺した時抜けないようにカエシをつけたものが多い。</p> <p>▼トギヤ（大島郡瀬戸内町西阿室） 奄美の島々でもイザリは主として夜に、船または海岸を歩いて、海底の魚を突いてとる漁法である。このとき用いる話のことをトギヤという。トギヤは沖縄でも用いる言葉で、古い漁具である。又が三本あるものは、昼間に魚を突くのに用いられる。又が五本あるものは夜間用である。どちらも船上から突くためのもので大きく、これをとるにつける竿も長い。船上から灯で照らし、箱めがねのでいて魚を発見すると船をとめ、トギヤを入れて突く。とれるのはほとんど底魚である。夜の干潮時に海岸を歩いて魚を突くイザリでは、トギヤはもっと小さめで、三又のものを扱い、竿の長さも短い。</p> <p>▼トギヤ（徳之島母間） 離頭式鋸、中央に穴をあけ針金を通し、魚肉内で回転するような構造になっている。サンゴ礁に棲むアラやアオブダイなどの磯魚を潜水して突き刺す。突くと柄が抜けるが、曳縄をたぐり捕獲することができる。</p> <p>▼ソウラトギヤ（喜界町小野津） 鉄鋸部は鉄、柄をつける接統材は櫻材で、柄先をはめる穴を作り、鉄鋸部に銅線で固定してある。エギでサワラを誘い出し、鋸を投げ突き仕留るのに用いる。両鏡のナカデはトカラ以南によくみられる（鹿2_図3203_N3203_トギヤ）。</p>	鹿2_図3203_N3203_トギヤ 鹿2_図3206_N3806_トギヤ 鹿2_図3230_N459_モリ
弓矢	ユンガマ	ユンガマ、イチギヤ	<p>▼ユンガマ（知名町住吉） 浅瀬で海中の魚を射るための弓であるが、海中に潜って用いることもある。沖永良部・与論島では、昭和25年頃まで使用した（鹿2_図3241_N2664_イチギヤ）。</p>	鹿2_図3241_N2664_イチギヤ
手鉤	カギ	ウグン、ツリバリ、カギ、トウカキ、ケージャ、エビカキ	<p>▼カギ（和泊町） ステンレスの棒を尖らせて、釣針状に曲げる。根元を曲げて、柄の中央部にとめ回転しないように工夫してある。フカ、サワラ、マグロ、カメ等のような大物を鉤から引き上げるのに用いる（鹿2_図3244_N2648_カギ）。</p> <p>▼カケバリ（西之表市東町） 3寸のアラバリを太い針金に銅線で固定する。柄はコサン竹ホテイチクである。ガマ（穴）に追い込んだ磯魚をヤスで突いて、引き出すのに用いる。沈みやすくするために柄に錘をつけたものもある。</p>	鹿2_図3244_N2648_カギ
鉤		フカカケ、フカカギ、カケバリ、ウチカギ、カキジャー、カギ、イセエビハズシカギ、フダカケ、ハド		鹿2_図3466_N3822_ハド
磯金	アサリガイ	アサリガイ、クシ、ウニトリ、アセグシ、イソクジイ、アワビトイ、カキウチ、カイホリ、ケガサ、ケカキ、ハマグリカキ、マクリトリ、コブノリコサイ（ノリコサイ）、アオサトリ、モクゾ、センバ（ヒラクサトリ）	<p>▼クシ（西之表市納曽） 鉄棒の先をクチパン状に成形してある。アナゴやトコブシのような一枚貝を岩からはがすのに用いる。以前は先端が平たいものが多かった。</p> <p>▼クシ・クジイ 細長い鉄棒で、貝やウニなどをとる平凡な道具だが、柄の有無、長短、真曲の違いがあつたりする。名称もクシ（種子島）、カネモン（甌島）、イツノミ（志布志）、クジイ（串野）、アサリガイ（奄美）、クマデ（諸島、与路島）など。</p>	鹿2_図3262_N3475_イソクジイ 鹿2_図3266_N65_カキウチ
鋤簾	ケカキ	ケガサ、ケガキ、ケカキ	<p>▼ケガサ（指宿市西方、尾掛） 木製のケタ棒を組み、その下の桁には鉄製の長いクシがとりつけられている。ケタ棒の後ろには針金の網がとりつけてある。中央の枠板には太い柄がつけられており、その先に石の錘りがついている。このケガサで採るのはイックラゲ（イタヤガイ）という貝柱をとる二枚貝で、手こぎの船から海の中にこのケガサを沈めて、柄に結んだ網を引きながら進む。または、大きなイカリを海底に沈めて船を固定しておき、カグラ（輪軸のことで巻きあげて引きよせる方法も行なわれている。枠にとりつけた鉄簾が砂の中から貝を掘りだす。</p> <p>▼ケカキ（日置郡吹上町入来浜） 貝掻きの意で、貝を砂の中から掻きとる用具はみなケカキとよばれ、いろいろのケカキがある。量も普通にみられるケカキは、柄に横木をつけ、その下面に鉄板を曲げて植えてある。使い方は長い柄を肩に当て、両手で柄を押さえるようにして鉄板で砂の中を掻くように引いて後退する。柄のつけ根に綱をつけて、それを腰の後ろにまわして結び、肩と手と腰とで引くようになっている。主として薩摩半島の西岸の砂質海岸に分布するが、鹿児島湾内にも広く見ることが出来る。</p>	

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
笠	イカカゴ	イカカゴ、イカゴ、イカテゴ	▼イカカゴ、イカテゴ（日置郡東市来町川北、阿久根市折口牟田）イカとりの籠。南九州で用いられるものには2つの形がある。 ①薩摩半島の西岸、東支那海に沿う、吹上・日吉・東市来・市来・串木野の漁村でみられるもの。竹を編んで筒型に作り、タガをはめ縄でしめる。カエシをはめて、入ったイカが出られないようにする。長い延縄に間隔をおいてつけ、沈めておく。餌はいれない。この中に産卵に入るといわれる。 ②同様にイカカゴと呼ばれるもので、分布はほとんど重複するが、北の川内市の西方、阿久根市の折口にまで分布している。マダケの割ったものを用いて筒状の枠を作り、その外に木綿の網をはり、一方の口に竹でカエシを作っている。網はタールを塗る。延縄につけて海底に沈めておき、毎日引きあげて調べる。こちらの方が軽くて運び易いが、マダケの方によく入るといわれる。鹿児島湾内では、シバツケという方法が行われ、イカカゴは全然見ることができない。 ▼イカカゴ（吹上町入来浜）マダケのタガ2個にマダケを括りつけて筒形の籠を作り、片方はまとめて縛る。入口の内側にはマダケのカエシをつける。鎌石は2個、中にクロシバを入れる。延縄に30～40尋間隔にイカカゴをつけて、海底に沈めておくとモンゴウイカがとれる（鹿2_図3286_N3237_イカカゴ）。	鹿2_図3286_N3237_イカカゴ 鹿2_図3316_N4149_イカゴ
	タコツボ	タコツボ、オトリタコツボ、イイダコツボ	▼タコツボ（長島原北有馬町大江）南九州一帯の古い漁村ではどこでも見ることができる。一般に南部鹿児島県では深さがはるかに深い。延縄の親網に、タコツボの網を結んで百数十個を海底に沈め、毎日引きあげてみて入っているタコをとる。イイダコ用のには別に球形のイイダコツボがある。 ▼タコツボ（出水市名護）蛤の捕獲に用いる。延縄に蛤壺を150個程つけて海底に沈めておく（鹿2_図3334_N4245_タコツボ）。	鹿2_図3334_N4245_タコツボ
	ベカゴ	ベカゴ、ベテゴ	べは大眾向きでよく食べられる貝をいう。殻は先端部に鉛をつめてベゴマにする。回転すると音が出る。ベゴマにする。 ▼ベカゴ、ベテゴ（鹿串木野市島平）バイトリカゴの意である。べは巻貝バイの訛である。南九州の漁村一帯でみることができる。小籠の口を竹の皮部を用いて網状にし、その中央に口を作ってある。口部は変異が多く、木綿の網や金網をはったものなどもある。大隅地方では、これがとり外しのできるようになり、その名称はケーシとよぶ。長い延縄にベカゴを百ばかりとりつけて船で海底に沈めてまわる。カゴの中には餌、おもしろい石も入れてある。	鹿2_図3327_N3177_ベカゴ
	チンニル	チイシ、チンニル、チニル、チンニル	▼チニル、チンニル（大島郡湖永良部島和泊町和泊）スク（スズメダイの稚魚）という小さい魚を捕る漁具である。本体は直径が10 cm、深さが14 cmほどの壺で、その口のところに、帽子のツバのような縁がついている。その縁は下部は切って取ったようになっている。みな手製でヤマカズラの茎の蔓を用いて竹籠のカゴ編みと同じ編み方で作る。壺の部分に海藻を入れて、岩のそばなどにおき、岩かげを手でさくると、スクは逃げだして壺の中へ何匹もかくれる。それを魚籠の中へ流しこんでは、同じことを繰り返す。 ▼チンニル（和泊町和泊）ヤマカズラ（チンニルカズラ）でザル目に編む。入口はラッパ状に成形する。チンニルの筒に海藻を入れ、サンゴ礁のそばの海中に沈め、岩陰にいるスク（スズメダイの稚魚）を追い出すと小魚はチンニルの中に逃げ込む。	鹿2_図3279_N268_チイシ
	アリオ	アリオ、アリオ、エビアリオ、アリネ、アデオ	▼アリオ（喜界町上嘉鉄）シマダケのヒゴを使う。弾力性を強めるためにタテヒゴは厚目にとり、ヨコヒゴは皮ヒゴにして、2本を捻りタテヒゴを挟みながら編む。入口（クビ）は取り外しができるようにする。餌（海苔）を入れて魚道（海底）に固定しておき、磯魚を捕える。 ▼アリオ海で用いる漁具で、入口は上にある。アリネ、アデオなどともいう。マダケのヒゴを、弾力性を強めるためによりながら作る。ほとんどが漁師の自作となる。リーフの間の魚の通り道に入れ、動かないように石のオモリで固定する。	
	ガニカゴ	ガネテゴ、ガニカゴ、アミカゴ、カゴアミ、アルホ	▼アミカゴ、カゴアミ（垂水市牛根、二川）この名でよばれるものにはいろいろの変化があるが、平たく円形の竹籠でできているのが特徴である。口の内部の構造がなかなか巧妙に作られていて普通の筥のカエシのように固定されていない。入口を入ったところに餌を置いて、それを食べに集まった魚が、この筥の子をつい押し上げて中へ入る仕掛けになっている。鹿児島湾内の漁村にはひろく分布している。 ▼アルホ（笠利町佐仁）シマダケを半分に割ったものをシュロ縄でつづりあわせる。コモガキで編む。川を下るモクスカニやテナガエビなどをとるのに入口を川上に向けて据えておく（鹿2_図3288_N3886_アルホ）。	鹿2_図3290_N1056_ガネテゴ 鹿2_図3295_N3238_アミカゴ 鹿2_図3288_N3886_アルホ
	ボラカゴ	ボラカゴ		
魚威し	オドシ	ブイギ、ヨセアミのオドシ、ブイ（カツラコギ用）		鹿2_図3355_N3498_ヨセアミノオドシ
水中眼鏡	スイチュウメガネ	メガネ、スイチュウメガネ、フタツメガネ、ヒトツメガネ	▼フタツメガネ（南種子町平山）桑をくり抜いて作る。痛みをやわらげるために、眼窩に当たる部分を広くしてある。ガラスは水中で丁寧な割り、石で擦り丸く仕上げられる。糸と蠟で水漏れを防いでいる。種子島には糸満漁夫が伝えたという。潜水漁に用いる（鹿2_図3365_N2151_スイチュウメガネ）。 ▼ヒトツメガネ（里村里）枠は真鍮で使用者の顔にあわせて作る。袋は猫の皮を用い、水漏れを防ぐためにカッチ染めにした。袋の空気が眼鏡内に入り眼窩に食い込むのをやわらげる。潜水漁に用いる。フタツメガネに比べて視野が広い。	鹿2_図3362_N3376_スイチュウメガネ 鹿2_図3365_N2151_スイチュウメガネ
箱眼鏡	ハコメガネ	ハコメガネ、ビズルバック	▼ビズルバック磯魚やウニ、タコなどを捕獲するのに用いる箱眼鏡のこと。樽や桶を結び立てて作る円形のもの、板を四角に組み立てる角形のものがある。角型の場合は、磯漁や遠浅での潮干狩には適しているが、舟上では波の高い時など波を受ける度合いが強いため、海中を覗くのに不便である。それで、円型のをよく用いたという。	鹿2_図3371_N1849_ハコメガネ 鹿2_図3375_N1313_ハコメガネ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
落し鎌	オトシカマ	オトシカマ	落し鎌（木製・金属製）。海底に引っ掛った網などを切る。	
	カガイサラ	カガイサラ	かがり火を焚く火皿である。	
	ウルワリマタ	ウルワリマタ	さんご礁を突いて割る又木。	
浮子	ウキ	ウキ、アバ、デゴクアミのウケ（浮き）、ウケ	▼ウキ（南種子町西之表） 孟宗竹、ひび割れのない節を選び、網の紐をつける穴を開ける。皮をはいてひび割れを防ぐ。網の両端につけて目印とするために用いる。桐や樽、ガラス玉などのウキもある。	鹿2_図3396_N1286_ウキ 鹿2_図3404_N2198_ウキ
浮樽	ウキダル	キビナゴアミウキ、ウキダル		鹿2_図3417_N210_キビナゴアミウケ
錘	オモリ	イワイシ、チンカラアミ沈子、オモリ	▼イワイシ（西之表市国上） エビアミやタテアミの錘に用いた。奄美・沖縄では子安貝やシャコガイを網の錘に用いた。	鹿2_図3434_N2061_イワイシ 鹿2_図3447_N1641_オモリ
腰当て	ウチグリ	ウツグイ（ウチグリ）	地曳網引き用の腰あて。	鹿2_図3453_N472_ウツグイ
神楽棧	カグラ	カグラ（カグラとロープ一式）	地曳網や船を曳き上げるのに用いた。	
餌取り	アマメブクロ	アマメトリブクロ、アマメブクロ	▼アマメブクロ（三島村大里） 弓状のグミの枝に黒布（蝙蝠傘）の袋をつける。袋下半分は白木綿地で、下が狭くなっており、入ったイソアマメが出ないように括る紐がついている。岸壁などの平らな面に据え、竹の笹や木柴で払い込む（鹿2_図3470_N2912_アマメブクロ）。	鹿2_図3470_N2912_アマメブクロ
	エサツキ	エサツキ、ササラ	▼エサツキ（三島村片泊） ダイミヨウダケを24等分して先端を尖らせる。根元に丈夫な紐を押し込み、槍先が広がるように工夫してある。ササラともいう。キビナゴを突き刺すのに用いる。群に突き刺すと1回に5～6匹とれる（鹿2_図3475_N2917_エサツキ）。	鹿2_図3475_N2917_エサツキ
網針	アミバリ	アミバリ、アグリ	▼アミバリ（西之表市洲之崎） マダケ、弾力性のある部分を使用。網をすいたり、破れを補修したりする。滑りやすくするため種油を塗る。	鹿2_図3491_N1823_アミバリ
目板	イオゴ	イオゴ、メイタ	▼イオゴ（西之表市洲之崎） 網を仕立てる時、網の目を測るものさしで、アミバリとセットで用いる。地引網のアラテアミのように大きな目の網のイオゴは、板に2本のツカを立てたものを用いた。	鹿2_図3498_N1801_イオゴ
	ケタウタセアミ	ケタウタセ網用のマンガ	▼ケタウタセアミ 八代海の漁法の中で200年以上の伝統をもち、出水市の名古浦で受け継がれてきた。マンガと呼ばれる道具を使って、海底や砂の中にあるクマエビを追い出してとる。ワクの両脇に石の錘りをつけ、下側にはマンガ（馬鉄）の爪が溶接してある。	
魚串	テムチ	テムチ	▼テムチ（知名町住吉） 孟宗竹、ひび割れを防ぐために皮を剥いてある。シュロ縄の先には竹串がついている。潜水しながら魚を突き、竹串をとおしてつなく。	
魚桶	イオオケ	魚桶、イバチ、イオオケ	▼イオオケ（肝属郡高山町波見） 大小いろいろあるが、形としてはみな同じく楕円形の低い平桶である。漁村にはどの家にも必ずといってよいほどあり、魚を入れて運ぶためではなく、猫などにとられないように、保有するためのものであった。一方で料理にも用いられる。横木をはずして、蓋をとって裏返しておけば、これが広さも高さもちょうどよいマナイタ（俎）になる。イオオケの楕円形である理由は多分ここにあるのだろう。柄屋にたのんで作ったもの。古く南薩から阿多タンコとよばれる柄屋が村々を作って回っていたので、形に画一性があるのはそのためだろう。	
わかめ取り	メマキザオ	メマキザオ	▼メマキザオ（阿久根市阿久根浜町） メはワカメ（方名メノハ）のことで、メノハを巻きとる竿。これには一本竿と二本竿の2種があり、船の上から箱めがねでのぞいては、海底のワカメをまきつけてとる。	
川漁撈具				
網漁具				
かすみ網	ヒュウテン	ヒュウテン、ヒュウテン	▼ヒュウテン（川内川中流域） 長良川からやってきた人がもたらしたカスミ網の漁法。目の大きさは五分で、（櫓の）浮きがついている。昼間に使う時は、川の中に入って投げて、川下へまわって水を両手でしゃくって鮎を網に追いこむ。夜は浅いところへきているので、ヒュウテンを張り、川下から石を投げて追いこむ。	
投網	トアミ	トアミ	柿渋につけて干すと丈夫になる。	
さで網	サデ	サデ、サデアン、サデアミ、エビスデ	▼サデアミ 薩摩郡、始良郡で広くみられる。主に川や池で蝦をすくい取るのに用いられる。三角筒状の手網で、口は広くて袋部はとがっており、これをピンと張るためにスギ材で作った軽い三本の手がついている。魚の季節が過ぎれば、小さくたたむことができる。 ▼サデ、エビスデ（始良郡始良町） 川蝦、川魚用の手網。季節がすぎると、取り外して巻いて保存する。川辺の水草などのあるところに川上向けに保っておき、川上から足で追って、川蝦や川の小鱼をとる。薩摩郡・始良郡では濃い分布を示す。 ▼サデアミ（川内市大小路） 樫材の接継材（クマデ）で枠の杉材を張り、木綿網をつける。網の底辺が川底につくようにナカチツダケ（中突き竹）を操作して、足で川魚や蝦を追込み捕まえる（鹿2_図3528_N4156_サデアン）。	鹿2_図3528_N4156_サデアン

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
たも網	マチアミ	マチアミ、ニゴイカキ	▼ニゴイカキ（宮之城町） 孟宗竹製の楕円形の枠に網の袋をつける。雨で増水した時、川岸に流れを遮るように網を入れておき、流れ込む川魚を捕る。マチアミ（待ち網）ともいう（鹿2_図3531_N3262_ニゴイカキ）。	鹿2_図3531_N3262_ニゴイカキ
釣漁具				
かぎ針	ヒッカケバイ	ヒッカケバイ	引き掛け針。ひっかけ漁のかぎ針のこと。人が川にもぐって、泳いでいるアユをかぎ針で引っ掛けて獲る漁法をヒッカケという。	
	ハエナワ、ヨツケバイ		夕刻に餌を付けた鉤針を仕掛け、翌日早朝見回り、掛った獲物をとる。	
雑漁具				
手鉤（鰻鉤）	ウナギカギ	ウナギカギ、ウナッパイ	▼ウナギカギ（有明町野井倉） 弓なりに曲がった鉄のカギの先端には、2本の鋭く尖った鏡がついている。柄は杉。川や池にいる鰻を掃くようにして引っ掛けて捕る。大隅半島から宮崎平野にかけてよく見かける。 ▼ウナッパイ 川内川下流域やその支流でひろく使用されている穴釣り用の鰻の釣り針。針は細長く、麻の紐をつける。石垣の間や自然にできた泥穴の中にこれを差し込む。鰻が餌を口にしたことをみはからってサオだけを抜き取り、静かに待つ。餌を引き始めるころに、紐を引いて釣りあげる。	鹿2_図3542_N3364_ウナギカギ
鰻鉢	ウナギバサミ		湿田や溜池の中にいる鰻を挟んで獲るのに用いる。	鹿2_図3546_N4363_ウナギバサミ
	パチンコ	パチンコ、ウツキ、ウツツ		
筥	ウケ	ウケ、プブウケ、コイカゴ	川の上流、中流に流れをせいで仕掛け、ワタリガニや鰻をとる。タケを縦り、内外に竹輪を通して頑丈に作る。この場合はカエシは入口もつと奥の方へはめるものもある。同時に川の流れをせいでアバ(ウケゼキとも言ふ)を作る。杭をうちこんで石と柴を止め、川の中に漏斗状のせきを作り、その集まるところにウケを設置する。ウケの分布は南九州にずっと広く、南は奄美大島から熊本球磨川の上流までほとんど同じ形、同じ大きさのものをみることが出来る。 ▼ウケ（始良郡蒲生町大迫） 形はよく似ているが、垂直に立てて用いる。水が落ちこむところに立てておくと水はウケから流れだし、落ちこんだ鰻・鮒・鯉などをとる。口はなるべく大きく作り、カエシはなく、その代り鰻などが這い上れないように途中をやや細く作ってある。この種類のウケは分布は広くなく、始良郡の山地以外では見ないことはない。 ▼ウケ（大口市西太良） 漏斗状のウケ。カラタケを12等分にして先端を広げ、ヒゴで編んで固定する。鮒、鯉、鰻を捕るのに用いる。用水路、田の溝などに口を上流に向けて入れておく。 ▼コイカゴ（東郷町南瀬） 孟宗竹のヒゴで六つ目に編む。底は円形で上部は六角形である。入口には箸状のカエシをつける。魚の内臓などをシロ皮に包んで入れ、底に沈めておく。鯉や川魚がとれる。 ▼ウケ 川をV字型にせきとめ、その突端に仕掛けて、下るもくず蟹などを受けて捕る。 ▼ウケ（出水市） 孟宗竹のヒゴでザル目に編む。後に取り出し口をつける。蟹や川魚の捕獲に用いる。石や竹を用いてV字型のアバをつくり、開口部を上流に向けてつけておく（鹿2_図3550_N658_ウケ）。	鹿2_図3548_N737-2_ウケ 鹿2_図3550_N658_ウケ
鰻筥	ウナギテゴ	ウナギテゴ、ウナツカッツ、ウナツテゴ、ウナギスボ、ウナギツボ	▼ウナツカッツ（東郷町山田） キンチク竹の節を残して10等分にし、これをタテヒゴとしてヨコヒゴをザル目に編む。鰻取りの筥で、ミミズ、ドジョウ、魚の内臓など餌として入れて、川下に向けておく。上・支流では1本ずつ入れることが多いが、川口では50～60本とハエナワにつけることもある（鹿2_図3575_N4173_ウナツカッツ）。 ▼ウナギスボ、ウナギツボ いろいろな形がある。カラタケの最後の節を残して11本に割り、それをタテにして横竹一本をずっとまわしてカゴアミにする（東郷町釜淵）底は丸底編みのカゴアミ（出水郡東町）など。粗末な作りのものも多く、籠のほかに竹をそのまま筒にして、一方に竹編みのカエシをつけたものもある。	鹿2_図3575_N4173_ウナツカッツ
筥	ヒビ	ヒビ、タテヒビ	▼ヒビ 餌を入れ、くぼんだ方向を川下に向けて仕掛け、鯉、鮒、ダマエビ（テナガエビ）などを誘い込む。細い割竹を簀子状に編み、ハート形に成形してある。このヒビはインドネシアにも存在する。 ▼ヒビ（宮之城町屋地） 底板の縦の長さ半円周は2尺、タテヒゴ51本、カエンヒゴ31本。鯉、鮒、鰻等の捕獲に用い、サナギ、小麦粉を混ぜた泥の団子を餌にして川につけておく。川内川中下流に見られるヒビで、テコヒビに対して改良ヒビともいう。 ▼ヒビ（菱刈町荒田） カラタケのヒゴをコモガキで簀に編み、それをハート形に曲げる。天井と底もヒゴで作る。ハート形の二つの膨らみをソデといい、このソデの間の開口部をクチという。川魚、蝦、蟹の捕獲に用いる。ややとろんだあまり深くない川底に、餌を入れ下流に向けて沈めておく。 ▼ヒビ 鹿児島から宮崎にかけて川魚をとるための竹ヒゴで作った籠状の漁具。いろいろの形があるが、最もひろく見られるものは心臓形に近い形をしたもの。くぼみのところに隙間があり、そこから魚が入る。中に麦粉、麦糠と土をねったものを入れ、孔が下流に向くように川に浸け、石で重しをする。ハジという竹資を立てた誘導施設とともに用いることが多い。	鹿2_図3596_N197_ヒビ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
蟹釜	ガネテゴ	ガネテゴ、ガニテゴ、エビテゴ、エヒカゴ	▼エヒカゴ（吹上町仲之里） カラタケのヒゴ、底と蓋はアジロに編む、籠はザル目に編む。底は角丸の方形で上部は円形。横に入口を2か所に設け、カエシがついている。糠やケゴ（蚕の蛹）をシロ皮に包み、口を川の瀬の下流に向けてつけておくと川蝦がとれる。 ▼エビテゴ（薩摩郡宮之城町） エビ籠の意。底は角形だが口は丸くなっている。平たく簡単な蓋がついている。横脇下にカエシをつけてあり、そのままの広さで突き出ているが、入った蝦は出ることがないという。川魚は入らず蝦だけがとれる。作り方もごく簡単で、大水に流されても惜しくないといった風である。広い分布はみられず、川内川流域でだけよく見られる。 ▼ガニテゴ（薩摩郡東郷町） ワタリガニが秋になって下ってくるときに捕らえるもので、中に餌を入れ、カエシが川の下流の方に向くようにおく。形や大きさはいろいろあり、カエシを一方につけた筒形、あるいは丸い竹籠の落とし蓋のあるものの横腹下に孔を作りカエシをつけたものなどがあるが、どれもガニテゴとよばれる。	鹿2_図3593_N4083_ガネテゴ
魚威し	オドシ	ウナワ	追い込み漁で魚を脅して網に追い込むのに用いる。	
箱眼鏡	ハコメガネ	ハコメガネ		
餌入れ	ミミツボ	ミミツボ、ミミツボイ	釣り餌を入れて運ぶ竹筒である。	鹿2_図3618_N418_ミミツボ
餌入れ	ダシタカツ	オトイツボ、鮎のオトイ入れ、ダシタカツ	▼ダシタカツ 鮎のトモ釣りに使うタネユオ（オトリアユ）を入れておく竹筒。オトイタカツともいう。川に入って釣る人が持つ。ヒモの端を腰に巻き、竹筒は川に浮かべて引いていく。タネユオに針をつけ、遊ばせておくと、縄張り意識が強く、追い払いに来た鮎がひっかかる。	
	イワガタ	イワガタ	錘の鉛を溶かし铸込む鑄型である。	
収納・調製・運搬用具				
生簀	イケス	シタミ、ハマテゴ、イケス、イケスカゴ、イケスブネ、テゴ	▼イケス、テゴ 錦江湾沿岸はカタクチイワシの宝庫で、沿岸の漁民はこれを捕獲して、一時このイケスに短期開放流して鱈漁の餌とする。材質は孟宗竹、普通深さ230 cm、一辺が335 cm×250 cm、浮力を強くするために、打竹を丸いまま四面にとりつける。変形を防ぐために対角線上にチカラ竹を入れ、さらにヘギで全体を丈夫にしやりつけるようにしている。テゴまたはイケスという。 ▼イケスカゴ 大体方形の箱型と丸形の籠型に分けられるが、 ①丸型の方がはるかに多い。大小あるが、落とし蓋をもっている。釣ってきたタコ・イカ、網でとった瀬魚、小サバなどなんでも入れておく。潮変りのいい所に沈めたり、ウキを添えて浮かしておいたりする。口は相当に大きく作られているが蓋はきっちりと落とせるようになっている。 ②（指宿市今和泉、瀬崎）カツオやマグロ釣漁の餌に用いる魚を活かしておくために用いる。角型のカゴ編みで小さい魚を入れるため目はなかなか細かい。縁と四方の壁に孟宗竹の2つ割りを添えて補強してある。蓋は用いない。ロの所に太い孟宗竹を井桁に組んで浮きにする。 ▼イケスブネ（指宿市今和泉、瀬崎） 木の船型のもので、横板には多数の孔をあけて潮がかわるようにしてある。岸辺に網でつないだり、小さな碇をつけたりして固定する。	
魚籠	コシテゴ	カタギイテゴ、コシテゴ	▼カタギイテゴ（宮之城町） 腰に結わえる方形首くびれ広口型のビクで「コシテゴ」とも呼ばれる。口には釜のカエシと同じ蓋をする。釜漁、投網漁、釣漁に用いられ、蝦や魚がはねても飛び出ることがなく、魚の傷みが少ないという。 ▼コシテゴ 籠をヒモで括りつけることから生じた名称。川魚をとって入れるカゴのこと。腰にぴったり合うように楕円形になっているのが特徴である。口はラッパ状に広口になっていて、さらに入り口にはシタ（舌）がついているので、この中に入れられた獲物は逃げられない。	
	イビラク	ビク、テイル、マグウ、イビラク（奄美）、イベラク	▼イビラク（名瀬市根瀬部） シマダケでザル目に編む。イサリや貝拾いに用いるが、果物や農作物（球根、豆など）入れにもする。イビラクはビクのことであらみ地方の方言である（鹿2_図3675_N3710_イビラク）。	鹿2_図3665_N223_ビク 鹿2_図3676_N3785_イベラク
	ウナギカゴ	ウナギテゴ、ウナギカゴ	▼ウナギテゴ、ウナギカゴ（出水郡東町） 鰻専用であるが魚籠としても同じ形のものが多く見られる。鰻捕りに持って行くだけでなく、そのまま生簀として用いられる。やや深めの落とし蓋が特徴になっている。	
	タマスマグ	タマスマグ	マグは竹・蔓・草などで編んだ容器の一般名。魚の分け前をタマスといい、それを入れて持ち帰る籠。	
すかり	ククリ	ククリ、アンブル	▼ククリ（西之表市東町） 網地は木綿糸で柿渋染にして、末広がりになるように網目をふやす。潜水して天草や海人草の採取に用いる。アワビヤトコブシを捕るククリは小型である。	鹿2_図3699_N2299_アンブル
餌入れ	アマメカゴ	イソテゴ、イレコ、アマメカゴ、アマメテゴ	▼アマメカゴ（三島村片泊） シマダケでザル目に編む。磯魚釣の餌（アマメブクロで捕ったイソアマメイソガニ）を入れる籠である。	鹿2_図3658_N2925_アマメカゴ
水産製造加工				
魚干し	ミス	ミス	魚干し用ミス。	
鍋	ナベ	キビナゴナベ		
蒸籠	セイロ	カツオゼロ、ザコセイロ、セイロ、カツオブシカゴ、タナバタ、メゴ、ユデボシバラ		鹿2_図3711_N1915_セイロ

名 称	鹿兒島での主な呼称	鹿兒島での呼称	説 明	画像ファイル名
包丁	ホウチョウ	アゴボウチョウ、アイダチ庖丁、ピンタキイ庖丁、サツマ庖丁(身おろし)、削り庖丁(ハラビキ・セビキ・ツキボウチョウ)	▼カツオブシのホウチョウ カツオブシを製造する場合、ピンタキイ(頭切り)、ミオロシ(身下し)、アイダチなどの数種類の包丁が使われ、その用法により製品の良し悪しができる。	
まな板	マナイタ	マナイタ		
型	カツオブシノカタ	カツオブシノカタ	カツオブシの型(薩摩型・改良型・亀節)	鹿2_図3733_N4318-2_カツオブシの型
籠	カツオカゴ	カツオカゴ		
製塩				
	マゼクイベラ	マゼクイベラ	製塩用具。	
漁撈習俗				
ほら貝	ホラガイ	ホラガイ	合図をするのに吹く貝である。	
大漁旗	タイリョウバタ	タイリョウバタ	大漁旗。	
生糸・染織				
整糸用具				
管	クダ	クダ、バシヤクダ、バシヤスキ	イトバシヨウ(糸芭蕉)の皮からくずを取り除く竹管である。	鹿2_図3768_N2336_バシヤクダ
麻蒸桶	オイデオケ	オゴシキ、オゴシキオケ、アサゴシキ、オイデオケ	▼オゴシキ、オゴシキオケ、アサゴシキ、オイデオケ(大口市針持、釘野) 緒籠の意。麻緒をとるために麻の茎をむすに用いる大きな桶のこと。土間の上に吊って保存した。オイデオケ(緒茹で釜)という浅い大釜を庭先にすえ、釜のふちにはこの桶をのせるような大きなへワ(ワラ製の輪で蒸気が外にもれぬようにする)をのせ、割竹を釜の上に敷いて麻茎の束を立てる。大きなハネツルベ仕掛けて吊りあげたオゴシキオケを上から被せかけて麻をむした。	
綿繰り器	サネクリ	サネクリキ、ワタクリ、ワタノサネクリ、ザグリ	▼ザグリ(阿久根市) 綿花の種子を取り除く道具。ハンドルを回転させると、芯棒が回転し、木ネジによって、上の棒に回転が伝わる。綿花をいれて回転させると、綿花が先に送り出され、種子だけは後に繰り出される。	鹿2_図3781_N2235_サネクリキ
芋桶	オゴケ	イトトリオケ、オボケ、オゴケ	▼オボケ、オゴケ(始良郡加治木町今町) オオケ(緒桶)の意。うすいヒノキの曲げもので、へぎを重ねて補強されている。カバザクラ(山桜のこと)の皮で縫い合わせてあり、表面はベンガラで赤く塗ってある。南九州でみるものはほとんど同じに作られているので、相当大量生産されていたものだろう。	鹿2_図3796_N3571_イトトリオケ
緒入れ籠	セイレバラ	セイレバラ	▼セイレバラ(十馬村中之島) 紡ぐための緒を入れたり、紡いだ糸を入れる。内側は編袋編み、外側はゴザ目編みの二重編みの籠である。	
紡ぎ車	イトグルマ	イトグルマ、イトグイマ、ヒツパタ、ブンブンバタ、ブンブン、ハタ、イトクリ	▼イトグルマ 経糸、緯糸に、よりをいれたり、緯糸をヒに入れるためにタケクダに巻き取ったりする道具。 ▼イトグイマ、ヒツパタ、ブンブンバタ 糸繰車。繊維をつむぎ、糸にする場合に用いる機(はた)である。主として麻(あざ)、木綿、カンネンカズラ(葛)、からむし(苧麻)などの植物繊維に対して用いた。しかし戦後は麻の栽培が禁止されたこともあり、戦後はほとんど使用されなかったようである。	鹿2_図3809_N3215_イトクリ
	ヨリカケバタ	ヨリカケバタ		鹿2_図3818_N959_ヨリカケバタ
座繰	ザグリ	ザグイ、ザグルマ	▼ザグイ(出水市) 繭から絹糸を紡ぎ出す道具。ハンドルを回転させると、歯車を解して上段の木杵が回転し、前に突き出た棒が左右に動く。湯で温めた繭の糸口を引き出し、撚りをかけながら木杵に巻き取る。 ▼ザグイ 座繰。繊維をつむぎ、糸にする場合に用いる機(はた)である。蚕の繭から取れる繊維に用いるもので、湯で煮た繭から取り出した数本の繊維を纏って生糸にした。養蚕の盛んな地方では、戦後もしばらくは使用されていた。	鹿2_図3831_N4009_ザグルマ
糸枠	ワク	イトマキ、イトワク		鹿2_図3892_N3584_イトワク
揚枠	カセカケ	メドキ、ヒツカケ、アゲワク		鹿2_図3900_N626_メドキ 鹿2_図3906_N3213_アゲワク
機織り用具				
地機	ジバタ	ジバタ	地面(あるいは地面近くの板)に腰をおろし、経糸を腰で張りながら織る高機以前の機である。	鹿2_図3924_N116_ジバタ
高機	タカバタ	タカバタ、モメンバタ、ハタムン	棧に設けられた板に腰を掛け、経糸は機に取り付けられた巻き取り機で張る機である。	鹿2_図3928_N614_タカハタ
杼	ヒ	ヒ、ハタノヒ、ヒジチ、ヒジキ	▼ヒジチ、ヒジキ(大島郡和泊町手々知名) ジバタの杼。ほとんど直線的で、ややふくらんだ側にチコロツボという壺状の穴があり、ここにチコロを入れて、その糸の端を棧の上の小孔から出す。チコロは芭蕉糸を蚕の繭形に巻いたもので、内側から糸を引きだせるようになっている。ヒジチは堅木できていて重い。	鹿2_図3933_N28_ヒ 鹿2_図3950_N881_ヒ
管入れ	クダイレ	クダイル	クダ(管)は糸巻き用の竹。	鹿1_図0905_N1251_クダイレ
箴	オサ	オサ、フドウチ、フィジキ、アゼ、オサガマチ		鹿2_図3960_N968_オサ
	アゼ	アゼ、カケイト、オリアゼ		鹿2_図3978_N2219_カケイト

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
機針	シンシ	シシバリ、シシ、シューシ		鹿2_図3991_N1419-1_シューシ
締め機	シメバタ	シメバタ	緋の防染部を締める機で男が担当する機である。	
締め箆	シメオサ	シメオサ	締め機で使用する。	鹿2_図3999_N3224-1_シメオサ
締め桴	シメヒ	シメヒ	締め機で使用する。	鹿2_図4025_N3218-2_シメヒ 鹿2_図4156_N3221-28_シメヒ
	カスリカケ	カスリカケ、スミチハシガマ	芭蕉布を織るための道具。方言ではスミチハシガマという。これに緯糸を掛けておいて、白く残すところを芭蕉の屑糸でしっかりとくびる。根気のいる仕事であった。	
手工・諸職				
木工細工用具				
大割り包丁	クレワリ	クレワリ、クレワリボウチョウ、クレワイボウチョウ、アラワイボウチョウ	▼アラワイボウチョウ（桶屋道具） クレ板を作るには2種の包丁を用いる。荒割り包丁は杉材をマサ目の材に割るもので、刃は直線、刃をあててツチで叩く。ツチは重く、柄をすげる孔がいくつもあるのは、刃の背で磨減がひどいので、柄の向きをかえて使う必要があるためである。 ▼クレワイ、クレワイボウチョウ（桶屋道具） 荒割りした材から板目のクレ板をとるのに用いる。これはクレ板の曲りをつけるために刃が曲っており、柄にツツラ（黒葛）を巻いてあるものもある。やはり木槌で刃をたたいて割る。	鹿2_図4167_N4468_クレワリボウチョウ
鏟	ソトゼン	ソトゼン	▼ソトゼン（桶屋道具） 板を桶用に表面を削るのに用いるのがソトゼンとウチゼンである。ソトゼンの刃は直線でクレ板の外を削る。	鹿2_図4172_N2161_ソトゼン
	ウチゼン	ウチゼン	▼ウチゼン（桶屋道具） 板を桶用に表面を削るのに用いるのがソトゼンとウチゼンである。ウチゼンの刃は下に曲って内側を削るのに用いる。	鹿2_図4176_N2162_ウチゼン
手斧	チョーナ	マルチョーナ、ウスキリチョーナ、チョーナ	▼チョーナ 手斧。斧の一種でその歴史は古いが、今日では片刃、直線刃のチョーナは板をはつより大材の角を削る、力のいる荒い仕事に用いられる。蛤刃、両刃のチョーナは船大工の間で盛んに使用されている。	鹿2_図4187_N1949_ウスキリチョーナ
正直台	ショウジキダイ	ショウジキガンナ、ショウジキ、ショウジキダイ(大樽用)	桶屋道具。桶職人（タンコドンという）がクレ板の側面を平らに削る時用いられる大きな台鉋。真直の長い台を持つ。水漏れを防ぐため、クレ板の側面をより直線的に平らに削るための鉋である。	鹿2_図4192_N3854_ショウジキガンナ
曲尺	バンジョウガネ	バンジョウガネ	さしがね。	
コンパス	コンパス	コンパス	底板、蓋の円を描くのに用いる。	鹿2_図4199_N4462_コンパス
野引	ケビキ	ケビキ	コンパスと同様に用いる。	
型定規	オケノカタ	カマ、タルカタ、オケノカタ、カタツケ	▼カマ（桶屋道具） 水漏れを防ぐためには、クレ板の側面がぴったりと合わなければならぬ。その角度を計るには何枚ももっているカマという曲線定規を用いる。桶の直径の大小に従って、これで測りながら削る。	鹿2_図4201_N540-1_カマ 鹿2_図4203_N3740_タルカタ
腹当	ハラアテ	ハラアテ、ハライタ	▼ハライタ（桶屋道具） ゼンを使う時は、ハライタ(腹板)という舟型に曲ったものを腹に当てる。舟型の凹面の方を帯にはさみ、中央の台状の部分で刃をうける。ゼンは両手で手前に引きながら用いるからである。	
槌	ツチ	コツツ(木槌)、チチ、サイジチ、サツツシ	タガを締めるため、タガに添えたシメギを叩くのに用いる木槌である。	鹿2_図4222_N3795_サイジチ
締め木	タルシメ	タルシメ、ノミ(ヘラ)、シメギ	タルやオケの外側にはめ込んだタガを打ち、タガを締めるのに用いる。	鹿2_図4224_N3743_タルシメ
	マワシノコ	マワシノコ、ヒキマワシノコ	底板や蓋を削り回すのに用いる。	鹿2_図4229_N4467_ヒキマワシノコ
竹割	タケワリ	タケワリ	竹を四つ割りにするのに用いる。	
錐	キリ	テマワシキリ、キリダイ、クルマター、メグリキリ		鹿2_図4233_N2332_クルマター
藁細工用具				
藁すぐり	ワラスグイ	ワラスグイ、ワラスグリ	▼ワラスグイ（国分市川原、萩之元） ワラスグリ（藁選り）の詠り。不用な部分を取るために稲藁を選ぶ道具。いろいろの形のものがあるが、最も一般にみられるのは手持ち用のもので、長さ20cmほどの横木に長さ10cmほどの鉄釘を4、5本植え、それに長さ15cmほどの柄をつけたもの。センバコギの歯を一本置きに欠いたもの、センバコギ型に作って竹や木の歯をたくさん植えたものなどもワラスグイとして用いられる。	鹿2_図4237_N429_ワラスグイ
藁切り	ワラキリ	ワラキリ、ワラキイ	藁切り。	
藁打槌	ワラウチゴロ	ワラウチ、ワラシュキ、ワラウチゴロ、ワラウツゴロ	▼ワラウツゴロ（指宿市池田、仮屋） ワラウツ（藁打ち）の詠りで、ゴロは愛称的な卑称語で擬人的によんだもの。ワラウチ砵のこと。ほとんどが重くて堅い木の丸太をもって作る。土間隙にはワラウツ(藁打ち台)の石もおいてある。その日の作業に用いるだけの藁をワラスグイでスグリ、束ねてからワラウツゴロで打つ。	鹿2_図4259_N1628_ワラウチ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
縄織機	ギッチョ	チナハキヤマ、ツナカチャー、ツナカキ、ツナカツ、チノウチバタ、ファイギッチョ、ギッチョ	▼ツナカツ、ツノウチバタ（始良郡栗野町真中馬場） ツナカキとは綱をなう意。丈夫な太い綱を作るには綱をより合わせて1本にするが、その作業用具であり、3人掛りの仕事である。数は少ないが南九州全域にみられ、いろいろ変化があるが、原理はみな同じである。 ▼ファイギッチョ、ギッチョ（日置郡松元町福山） ファイは振り、ギッチョは片寄りといった意味で、回転軸からでている横木が一方にだけ長くなっていることを現わすのだろう。手ないの縄に、撚りを入れて丈夫にし、締ったものにするのに使う。南の島々まで広くみられる民具で、農・漁村の戸ごとに持っていると言ってもいい。みな自作する。	鹿2_図4282_N2661_チナハキヤマ
こも編み	コモアミ	コモガキ、コモダイ、ダツアミキ、ミノアミドグ、ハタ・ハタムン（奄美）	▼コモガキ 農村、山村、それに漁村までも含めて、最も多くみられる加工用具。名称はこもを編むものが多いのでコモガキとかコモダイというものが広く使用されているが、編むものによって、ダツアミキ（炭俵）とか、ミノアミドグ（蓑）などとよんでいる。奄美一帯ではコモガキをハタ（機）とかハタムン（機物）という例が多い。	
錘	ツツノコ	テシロ、コモカッソコ、コマ、ツツノコ、ツツゴロ	▼コマ、ツツノコ、ツツゴロ コモガキの編み紐・細み縄のことをアンボとって、これを巻きつけて前後に垂らす木製の短い隊はツチ（槌）というのが普通だが、大隅半島一帯ではコマとよぶ。ツチは愛称的にツツノコ、ツツゴロなどともよんでいる。このツチを垂れる横木の刻みをフス（臍）というのでも広くみられる。奄美の珊瑚礁地帯にはツチに木を用いないで、やや長目の石灰岩の石を拾い集めて使う例が多い。	鹿2_図4329_N2228_テシロ
猫蓆編み	ネップソノハタ	ネップソノハタ、ネップ	▼ネップソノハタ（日置郡金峰町尾下） ネップ（ネコブク）を2、3人が並んで手で編む。蓆とちがって細縄ばかりで編まれているので、何十年でももつ丈夫なものである。1枚作るのに、縄ないから始めて編み終るまで2人で1ヶ月近くかかる。ネコブクは熊本の八代付近から球磨にかけて多いが、薩摩・大隅には少なく、尾下部落にはどの家にも10枚ほどずつあり、機ももっているのは例外である。奄美の島にも点々とある。	
蓆機の筈	コテ	ムシロコテ、ムシロオサ、カマガキコテ、ムシトゴテ	▼ムシトゴテ 大隅町岩川では昭和初期のころは天草からムシト編みの職人がやってきていた。編むためのムシトゴテは持参していたが、10戸のうち1戸くらいは自家用荷ムシトを編む家があった。 ▼ムシロコテ、カマガキコテ（日置郡金峰町尾下） 蓆や吹を織るにはムシロコテを使う。ネップソノハタをそのまま、枠の横木をすこし下げて使えばよい。タテノの張り方はネップの場合と同様だが、そのタテノをムシロコテ（ムシロオサとも言い、奄美ではムシロフドチという）の穴に1本ずつ通す。吹をカマガキというが、ムシロと全く同じうち方をする。やや短いカマガキコテを使う。	鹿2_図4314_N483_コテ
カガイモッコ台	カガイモッコダイ	カガイモッコダイ	▼カガイモッコダイ（日置郡金峰町尾下） カガイモッコを作るに用いる器具である。井型の枠で、長い方の枠木は縄を掛けて張る木釘がさしてある。	
木枠	カガイカタ	カガイカタ、カガイ製作用ワク、カタ	▼カガイカタ（薩摩郡鶴田町紫尾、峠） ツツラカガイ（黒葛製背負籠）を編むときに用いる木の枠。大小いろいろの大きさのものが用意してある。	
草鞋編み台	ゾオリダイ	ゾオリダイ、フッカケ	▼フッカケ（川辺郡大浦町中組） 引つけの靴ひだり。宮崎の東諸郡あたりではゾウリダイ（草履台）とよんでいる。この大浦町では濃く分布している。一般にみて薩摩半島一帯のものは2本カギで、宮崎県のは3本カギであるように見られる。坐った膝の下に台を敷き、まっすぐ前に向けておく。草履でもワラジでもどちらでも作れ、使い方は同じだという。	鹿2_図4343_N235_ゾオリダイ
鼻緒立て串	ハナヲタテグシ	ハナヲタテグシ		鹿2_図4344_N3079_ハナヲタテグシ
竹細工用具				
竹割鉋	タケキリナタ	タケキイボチョ、タケキリナタ、ナタボウチョウ、タケワリ、タケワリボウチョウ	▼ナタボウチョウ ナタボウチョウは鉋の形をした包丁の意で、長さは28cm、刃の幅は4cmほどあり、竹を割ったり、へぎを削り出したりするのに用いる。 ▼タケワリ、タケワリボウチョウ 竹割りに用いるが、刃がうすくて、細いへぎを作るのに適している。	鹿2_図4362_N796-2_タケキイボチョ
竹割	タケワリ	タケワリ、タケワイ、ヨツワリ	▼ヨツワリ 竹に割り目を十字に入れた中にこれを挟んで4つに割るためのもの。檜で作られた2枚の羽を中央に切りこみを作ってはめこんである。これを掌にはめるようにもって竹を押し下げて割ってゆく。手のちょっとした動かし方で調節して4本とも均等に割ってゆく。	鹿2_図4368_N806_タケワイ
ひごひき籤引	ホネヒキ	ホネヒキ	鉄製の板に小さい穴があけてあり、主として笠に使う竹骨を円く作るためのもの。タケワリで細く割ったものを穴に通して引くと、穴の形に削られる。	
からす口	カラスグチ	カラスグチ、カラグチ、カラス	バラの縁は編み竹の端を曲げて、外縁と内縁とで挟みツツラで結う。そのとき外縁と内縁とを挟んで固定するのに用いる。縁をカラスグチの嘴にはさんでツツラの輪を押し下げると、しっかりしまる。	鹿2_図4380_N1005-2_カラスグチ
錐	インギ	インギ	キリのことで、例えばバラの縁をツツラで絞るような場合に、ツツラを通すにはこれを用いて孔をあけるのである。	
箕箒	ミオサ	ミオサ	箕を作る際、タテのへぎを整理するのに用いる。糸状の細い竹のへぎ200本ほどをこれに通し、3本の竹をよせて締めて固定する。いわばへぎの縄糸を1本交代に上下にふりわけて整理固定するので箒と言う。	
箕刀	ミガタナ	ミガタナ	ミオサで整理したタテへぎの間へ檜の皮のヨコを通すときにこれで叩いてよく締めるのに使う。檜の木製の重い包丁型のもの。	
皮切	カバキリ	カバキリ	箕を作る際、ヨコに入れるヤマザグラの皮（カバという）を幅2.5cmに切るのに用いるもの。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
ベンチ		ベンチ(竹細工用)、ハガネキリ		
大工・左官用具				
手斧	チョーナ	ツノ、ウスクボリ	白のくぼを剥るのに用いる。	
鉋	カンナ	カンナ、メンガンナ、鉋の台		
鋸	ノコ	胴まわし鋸	円板を削り抜くのに用いる。	
鉋	ヒラギワリ	ヒラキワリナタ、ヒラギワリ、ヒラギワリホウチョウ		
ボルト錐	ボロ	ボロ	T字型に柄を着けたネジ錐。桁や梁の柄穴や、ボルトを通す大きな穴をあける時などに使用。	鹿2_図4409_N2683-4_ボロ
鑿	のみ	クギノミ	釘を打ち込むための穴をあけるのに用いる。	鹿2_図4410_N548-1_クギノミ
墨壺	スミツボ	スツツボ、スミツボ		鹿2_図4414_N1665_スツツボ
曲尺	バンジョウガネ	バンジョウガネ	さしがね。	鹿2_図4423_N1667_バンジョウガネ
野引	ケビキ	ケビキ	削る線を押し付けするのに用いる。	鹿2_図4426_N1363-1_ケビキ
槌	ツチ	ツチ、ドンヂ	柱や束などを打ち込むのに用いる。	鹿2_図4429_N1287-2_ドンヂ 鹿2_図4430_N1429_ツチ
コテ	コテ	コテ、ヘラ	苗床のナラメイタと同じ形で、壁や床を平に塗るのに用いる。	
屋根葺用具				
大鉄	ヤネバサミ	ヤネバサミ、ヤネバサン、ススキリバサミ	▼ヤネバサン 刃幅がひろく柄が短い。屋根ヒラ・ツマ・軒端の茅や麦藁を刈りそろえるのに用いる。 ▼ヤネバサミ ヤネカヤを切り揃えるのに用いる。剪定鉄とよく似ているが刃の幅がよほど広い点が違っている。	鹿2_図4458_N1959_ヤネバサミ
屋根葺き鎌	ヤネフキガマ	ヤネフキガマ、ヤネガマ、ヤネトンガマ、ヤネフツガマ、ヤネキイガマ、ノキバリガマ、ヤネカマ	▼ヤネフツガマ 地方によってヤネキリガマ、ヤネガマ、ヤネトンガマとも。柄が長いので茅根の深い部分の縄を切るのに便利である。また先が尖っているで屋根の上から突き刺し、ヤネバリの突き刺す場所を屋根裏にいるコドイ(助手)に指図したりした。 ▼ヤネキイガマ ノキバリガマとも。屋根を葺く時、最初に作るネツケの端の部分の切ると、葺き終わった軒端の茅を切り揃えるのに使った。時代が下ると、ヤネバサンで切り揃えるのが便利になり、この形の大鎌が姿を消していった。 ▼ヤネカマ 軒端の茅・葦を切るに使う。	鹿2_図4464_N民362_ヤネフキガマ
屋根叩き	ヤネタタキ	ヤネタタツ、タタツポ、ノキタタキ、ヘラ	▼ヤネタタツ カヤアゲ、ノキバタタツの名称もある。カヤアゲはふいた茅の表面を揃えるのに下から上につき上げるように叩く。ノキバタタツやメシゲは屋根ヒラの整形よりも主に軒端を揃えるのに利用した。 ▼タタツポ 叩き棒でヘラともいい、重い木でできている。葺きながら、また葺き終わった面を叩いて揃え、落ち着かせる。	鹿2_図4465_N3410_ヤネタタツ
針	ハリ	ハリ、ヤネバリ	▼ヤネバリ 鹿児島ではカラタケ製のものが多い。先端を鋭く削り、その近くに縄を通すための穴を開ける。先の部分は節を利用し、割れたり裂けたりするのを防ぐ。	鹿2_図4471_N3738_ハリ
茅上げ	ヤネアゲ	ヤネアゲ、カヤアゲ、カヤサシ	▼カヤアゲ、カヤサシ 地上にいて茅束を屋根に上げる役が、カヤアゲとかカヤサシという一方を尖らせた竹竿に茅束をさして上げる。	鹿2_図4481_N507_カヤアゲ
槌	ツチ	ツチ、ツルハシ、ブタヨキ、タタキ、ゲンノウ、コタタキ、ビザン	▼ゲンノウ 石を割ったり、石にヤを打ちこんだりするのに用いられる。薩摩ゲンノウ・肥後ゲンノウの別があり、薩摩の柄は扁平になっている。 ▼コタタキ 石の面を整えるのに用いる仕上げの用具。石の面に横線を入れて面を仕上げるに用いる。 ▼ビザン 石の面を整えるのに用いる仕上げの用具。これで石の面を叩くと、肌が磨いたのとちがう趣きがある。	鹿2_図4484_N2411_ツルハシ 鹿2_図4491_N2415_タタキ
鑿	ノミ	マルノミ、ハツリノミ	▼ノミ 石の中を削りとったり、こまかい彫りの仕事に用いる。 ▼トッコ 錘の一方をノミのように尖らせたもので、ノミよりも力の要る仕事に用いる。	鹿2_図4494_N2639_ハツリノミ
矢	ヤ	イヤー	▼ヤ 石に打ちこんで割るための楔のことで、大小いろいろあり、今は鉄製だが、古くはユスノキの芯材に鉄輪をはめたものを用いた。	
梃子	カナテコ	カナテコ	鉄製の棒で、支点を利用して物を持ち上げるのに用いる。	鹿2_図4497_N1886-1_カナテコ
鍛冶用具				
鞆	フイゴ	フイゴ	送風するのに用いる。	鹿2_図4506_N4105_フイゴ
研磨機	砥石車	砥石車	回転する砥石で、打ち上げた刃物の整形調整や砥ぎに用いる。	
槌	コツチ	コツチ	熱した材を叩くのに片手で持って用いる。	鹿2_図4510_N1960_コツチ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
紙漉き用具				
蒸し桶	カジオケ	カジオケ、コシキオケ	▼コシキオケ（熊本の八代市宮地、鹿児島島の始良郡蒲生） カジ・コウゾを枝のまま釜にかぶせ、蒸して皮をむく。	
	ガンヅメ	ガンヅメ		
	ハンズ	カメツボ、ハンズ	貯水用に用いる。カメの胴の半分の高さで切った広口になっている。	
紙叩き台	ウチパン	ウチパン	▼ウチパン、タタキ棒（熊本の八代市宮地、鹿児島島の始良郡蒲生） アクを抜いた梶皮の白い繊維の束をウチパンという大きな木の板にのせ、タタキ棒（蒲生ではウチベ、五木ではサイズチ）で四方からたたいて、梶皮繊維をばらばらにし短かくする。	
叩き槌	タタキボウ	タタキボウ、ミズウチボウ、ウチベ（蒲生）、サイズチ（五木）		鹿2_図4521_N1092_ミズウチボウ
糊解き壺	ノリトキツボ	ノリトキツボ	紙の繊維をつなぐ糊を溶くのに用いる。	鹿2_図4523_N1090_ノリトキツボ
柄杓	ヒシャク	ヒシャク		
紙漉槽	フネ	フネ、スキフネ	▼スキフネ 松の木で作った木箱で、繊維と糊を入れて水を張りよくかき混ぜるのに用いる。	
攪拌棒	マゼ棒	マゼ棒	水を溜めたスキフネに、紙の原料のバラバラになった繊維と植物粘汁とをかき混ぜるのに用いる。	
まんが	マンガ	マンガ（万鋏）	大きな櫛状のものでスキフネの中をよくかき混ぜる。	鹿2_図4528_N1060_マンガ
漉桁	ケタ	ケタ（桁）、スキゲタ	天井の竹竿から吊り下げ、スをのせて液をくみあげ、左右、前後に揺り動かし繊維を落ち着かせるのに用いる。 ▼スキゲタ（熊本の八代市宮地、鹿児島島の始良郡蒲生） スキス（漉簀）をのせる枠で、天井に張った3本の吊り竿に吊り上げてある。スキゲタにのせた簀で水を汲んでゆすると紙の繊維がスキスの上に沈着する。	鹿2_図4533_N1064_ケタ
漉簀	ミス	スキス、ス、ミス	天井の竹竿から吊り下げ、ケタにのせて液をくみあげ、左右、前後に揺り動かし繊維を簀に落ち着かせるのに用いる。	鹿2_図4538_N1066-1_ミス
	ヘラスボ	ヘラスボ		
乾板	乾し板	ハリイタ、カミイタ	▼ハリイタ、カミイタ（熊本の八代市宮地、鹿児島島の始良郡蒲生） 紙を干す。洗濯用のハリイタの幅が2倍ほどになった大きさの板で、檜・桂の木がよい。	
刷毛	乾しハケ	乾しハケ、カミバケ	▼カミバケ（熊本の八代市宮地、鹿児島島の始良郡蒲生） ワラシベで作ったハケで、ハリイタに張りつけてのばす。	
裁板	キリダイ	キリダイ、キリイタ	漉きあげた紙を乾燥させた後、キリイタの上ののせ、キリパンをあてて規格通りの寸法にカミキリホウチョウで切る。	
定木	キリパン	キリパン	紙を規格に合わせて裁断するための板。	
紙切り包丁	紙切り庖丁	カミキイボチョ、カミキリボウチョウ、カミボウチョウ	紙を裁断するための包丁。	鹿2_図4553_N853-2_カミキイボチョ
鉱業				
堀削・採鉱用具				
鶴橋	ツルハシ	ツルハシ		
尻当て	シリアテ	シリアテ		
保安照明具				
松明	タイマツ	タイマツ		
松明台	トボシダイ	トボシダイ		
ガス燈	ガストウ	ガストウ		
製錬				
石臼	イシウス		金鉱用石臼（上・下）	
汰鉢	ユリバチ	ユリバチ、ユリパン		鹿2_図4584_N4412_ユリパン
坩堝	ルツボ		金製錬用ルツボ	鹿2_図4586_N920-2_金精錬用ルツボ
乳鉢	ニューバチ		金製錬用鉄乳鉢、金製錬用乳鉢	鹿2_図4594_N923_金精錬用乳鉢
蒸発皿	ジョウハツザラ		金製錬用蒸発皿	鹿2_図4595_N921-1_金精錬用蒸発皿
商業				
交易用具				
枡	マス	マス、ハカリマス	計量マス（1斗マス・5升マス・1升マス・5合マス・2合マス・1合マス）、本番枡、計りマスなどの種類がある。	
秤	ハカリ	ハカリ、チキリ、チキ、チキイ、キンチキイ、キンゾウ、キンニョ、キンチヨ（さおばかり）		鹿2_図4629_N239_ハカリ
	ヒョータンばかり	サオばかり、ヒョータンばかり、チキイ		鹿2_図4656_N4400_チキイ
分銅	フンドウ	フンドウ、チキ、チキインコ		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
算盤	ソロバン	ソロバン、七つ珠算盤		
矢立	矢立	ヤタテ		鹿2_図4667_N725_ヤタテ
金融の種類				
銭入れ	ゼニイレ	ゼニイレ		
金庫	キンコ	キンコ		鹿2_図4677_N1663_キンコ
広告用具				
看板	カンバン	カンバン		
衣				
衣服				
普段着	コシギン	コシギン、シゴッタナシ、タナシ、スギン、セガミタナシ	▼コシギン、シゴッタナシ、タナシ、スギン（鹿児島市小山田町）男女にかかわらず着用した農村の作業着・普段着で腰までしかないで腰衣の意。木綿の縞または緋で、夏は単衣、冬は袴に作る。袴もない簡単なもので、袖はマッソデ（巻き袖）になっている。 ▼セガミタナシ（飯島上飯村瀬上）瀬上地区で作ったタナシのというブランド名称。クス（葛）の荒目の布で作ったコシギン。夏用の仕事着としては麻のように涼しくて丈夫なものだった。	
綿入れ着物	タナシ	木綿タナシ、仕事タナシ、コダナシ、タナシ、ナガタナシ	▼タナシ（始良郡福山町）藍染めされた木綿の綿入れ。綿は薄く入れてある。袖は巻き袖で、前ひもはない。裏地も木綿で、青の格子縞と赤の縦縞に染め分けられている。木綿の布地を織って、後から藍で染めたもの。	鹿3_図0034_N1427_タナシ
仕事着	マキソデ	マッソデ、マッソデハンテン、仕事着	袖を細く絞った巻き袖の上着物である。	
	クズタナシ	クヅタナシ	▼クズタナシ（薩摩郡下飯村長浜）クス（葛）の自然色の地に絹の白の縦縞が細く入ったもの。肩あては白の木綿、襟はクズの地そのまま。 ▼クズタナシ（飯島）クス（葛）の茎の繊維で作ったタナシという仕事着のことである。タナシというのは九州から沖縄まで聞かれる言葉で、手無しの意味だとされ、手というのは袖からでている袂のことで、それがないので、タナシといえは筒袖の仕事着ということになる。	鹿3_図0045_N1400_クズタナシ
襦袢着物	ツヅリ	ツヅリ、ツヅレ	古布をパッチ状に綴り合わせたもので、ドンザとも呼ぶ。	鹿3_図0049_N1320_ツヅリ
冲着物	ドンザ	ドンザ、ドンジャ、ヒッカケ	▼ドンザ、ドンジャ（阿久根市折口浜）南九州一帯の漁夫の労働着。着古した木綿の布、綿も入れて、上から木綿糸でぎゅーりとサシコ（刺子）にしたものである。袖は邪魔にならぬよう細い筒袖。丈の長いものは船上で寝る時の夜着も兼ねる。漁夫の仕事着であり、防寒具であり、雨具でもある。山川辺りではシオハレとも呼ばれる。	鹿3_図0055_N7_ドンジャ
	ニンブ	ニンブ(下飯村)、ウンジョウ(奄美・沖縄)	▼ニンブ、ウンジョウ共に裂き織りの仕事着のこと。裂き織りというのは、古い木綿の布地など細長く裂いたものを緯にして経は太い木綿糸などを用いて織ったもの。ニンブは飯島の下飯村瀬々之浦、ウンジョウは奄美大島や沖縄の方言だが、共に裂き織りの布、またはそれで作った作業着を意味している。	鹿3_図0073_N2500_ニンブ
袖無	ソデナシ	ソデナシ、カタギン		
	チャンチャンコ	チャンチャンコ		鹿4_図0030_N2806_チャンチャンコ
袷	アワセ	アワセ		鹿4_図0012_N2788_アワセ
単衣	ヒトエ	アサガタヒトエ、アサガッタ、ヒトエ、かすりのヒトエ	▼アサガッタ（曾於郡有明町）緋地に白の縦縞と緋の入った女物の麻の単衣。肩あては白の木綿。縦糸・横糸とも麻糸だけで織られている。	鹿4_図0001_N2771_八重山上布長着(白緋) 鹿4_図0013_N2797_ヒトエ
芭蕉布	バシャギン	バショウフ、バシャギ、バシャチバラ、バシャギン	▼バシャギン（大島郡輪泊町和泊）淡黄色の芭蕉布の地に、使用した糸の太さの違いから横縞がはいっているように見える（鹿3_図0143_N1592_バシャギ）。 ▼バショウフ、バシャギン（南西諸島）バショウフとは芭蕉の繊維で織った布のことである。バショウフで作った着物を奄美ではバシャギンという。涼しくて洗たくがきき、サラリとしてべとつかず、高温多湿などにはあつらえむきの衣服である。奄美大島の糸芭蕉は高級なものとして沖縄に輸出されていた。 ▼嫁に行く時には、新夫のものと自分のものを織って持参するものであった。	鹿3_図0143_N1592_バシャギ
晴着	ハレギ	ハレギ	着物、アワセの紋付、紋服、花嫁衣装、硫黄島の九月踊り衣裳、稚児着、晴着、ヒトエ、カタツケ着物	
	モンツキ	モンツキ	紋付。	鹿4_図0017_N2795_モンツキ
初着	ウブギン	ウッギン	▼ウブギン（奄美、トカラ列島、三島村硫黄島、鹿児島）赤子を初めて俗世間に出す時に着せるもので、マツイなどと呼ばれる後襟につけられた糸の縫い取りや、種々の物を縫い込んだ袋にその特徴がある。マツイというのは、人の霊魂の意味で、首の後から出入りするといわれる。ウブギンの後襟にマツイをつけるのは、健固な人間の霊魂を縫いつけ、赤子の魂を固め、悪霊の侵入を防ぐ呪術であると考えられる。	
羽織	ハオリ	手織り木綿の羽織、羽織、紋付羽織		鹿3_図0168_N364_手織り木綿の羽織 鹿4_図0023_N2791_ハオリ
綿入れ	ワタイレ	ワタイレバオイ、綿入れ羽織、ワタイレコ、綿入れ		鹿3_図0194_N2189_ワタイレ
半纏	ハンテン	半纏、はんでん、ハッビ(杜氏用)		

名称	鹿兒島での主な呼称	鹿兒島での呼称	説明	画像ファイル名
ねんねこ半纏	ネンネコ	ヨツアゼのネンネコ		
袴	袴	野袴		
襦袢	ジバン	ジバン、ジupan、襦袢、肌襦袢		
股引	バッチ	バッチ		
腰巻	メダレ	ウシトマエダレ、腰巻、シタムン	メダレは下着の腰巻だけでなく、その上から巻いて着ける巻きスカートもある。	
褌	フンドシ	フンドシ		
前掛	マエカケ	マエアテ、マエカケ		
夜着	ヨギ	ヨッ、ヨギ、ソデツキコヨギ	夜着、袖付小夜着	
帯	オビ	テオリオビ、ハンハバオビ、クルウビ、スゴキウビ	手織り帯、反幅帯、クルウビ（スゴキウビ）	
	ナゴヤオビ	ナゴヤオビ		鹿4_図0022_N2803_ナゴヤオビ
帯締め	オビシメ	オビシメ		
端切れ		タナシ布、植物繊維を利用した織物、芭蕉布、麻の布切れ、生地、クス布、木綿布、麻布、大島紬	▼大島紬 泥染めを伝統としており、染色技術はわが国の古代染色技法を伝えるものである。泥染めの原料は奄美大島群島に群生するテーチ木(車輪梅)の汁と田んぼの泥。かつては島民の日常着として着られていた。	
糸		麻の糸、イッサキの糸、麻の緒、木綿の緒、クス糸、クス糸のツメ、木綿糸、絹糸、ピータナシの繊維	▼ピーダナン（下甌村、瀬々野浦） 芙蓉の幹の繊維で織った着物。ピーは芙蓉のこと。タナシは、南九州ではタモトのない仕事をいうが、甌島では木綿以外の植物繊維で作った夏の着物をいう。甌島でも瀬々野浦だけに作られ、盆のころになると誰もがピータナシを着て楽しんだ。	
脚絆	キャハン	キャハン		
草履	ゾーリ	ゾーリ、イッサキの山ゾーリ、ワラジ、ヤマゾーリ、ジョイ		鹿3_図0301_N180_イッサキの山ゾーリ
	タケカワゾウリ	タケカワゾウリ	真竹の竹皮を用いた草履で、足裏がべとつかず、涼気がある。	鹿4_図0033_N2866_タケカワゾウリ
下駄	ゲタ	ゲタ、サンゲタ	▼サンゲタ 下駄の台にサシバ(挿し菌)を挿した高下駄で、雨の日に履く下駄。	鹿3_図0334_N2422_ゲタ
	カジキゲタ	カジキゲタ、カジゲタ、ゾウリゲタ	▼カジキゲタ、カジゲタ、ゾウリゲタ（始良郡栗野町） 加治木下駄。栗野地方で農家が副業に作ったものを始良の加治木の町で売りさばいたための名称。旧藩政時代から鹿兒島県下に名を知られた日常履きの下駄。竹の皮の草履を杉の台につけた簡単素朴な作り。	鹿4_図0035_N2682_カジキゲタ
足半	アシナカ	アシナカ、アシナカブラジョイ	足裏に当たる部分が半分くらいの長さの草履で、野良や山に出かけるときに履く。	鹿3_図0353_N317_アシナカ
草鞋	ワラジ	ワラジ、コンツワラジ	▼ワラジ（始良郡加治木町） 祭用。神社の祈年祭、田植祭に踊られる棒踊りの踊り子が用いる。長い紐または緒があり、両脇に4つ出ているのをちともナバともいう。 ▼ムシャワラジ（始良郡加治木町） 祭用。夏の諏訪神社の祭りや秋のホゼ祭に踊られる太鼓踊りの踊り子が履く。前部は草履と同じ作り方で、鼻緒をすげえある。ワラジよりやや短く、幅はやや広い。	鹿3_図0349_N2142_ワラジ（対）
	サバ	イソサバ(ワラサバ)、サバ、ワラサバ	さんご礁で履いたものである。	
	ワラグチ	ワラグチ	▼ワラグチ（大島郡沖永良部島） ワラグチの訛りで藁沓の意であるが、沓のように足を包みこむ形態ではなく、厚い草履である。サンゴ礁の上をあるくために履く。底の厚さがワラジよりはるかに厚く、ねじってあるのでサンゴの突起やウニの棘などが通りにくい。水を吸って重たいのが欠点で、昼用は幅を狭く、夜用には幅を広く作って使い分ける。	
蓑	ミノ	茅：カヤミノ 棕櫚：シュロミノ、ニョー、ニョーサ 藁：ワラミノ クバの葉：クバミノ、 蘭草：イミノ、ビニユニユ(与論島)	▼カヤミノ（肝属郡大根占町） 茅で作った蓑。材料としては茅が古く、次に藁、次にシュロ。裏側は網目の構造をしている。 ▼ミノ 高尾野町野平、高山町富山はかつてカヤミノの産地として有名であった。昭和になったころから、丈夫で長持ちすること、保温性があり冬に着たら暖かいことなどの長所があったシュロミノにかわっていった。 ▼クバミノ クバはピロウのことで若葉を裂いて編んだもの。 ▼イミノ（大島郡与論村） イは三角蘭で島ではビと呼ぶ。ミノはニニユと発音しビニユニユである。イノアミハタを用いて編む。与論島では茅が少ないため、肩の雨がよかくかかるところだけを茅を用いて作ることがある。	鹿3_図0382_N542_カヤミノ 鹿3_図0406_N1407_シュロミノ（棕櫚蓑）
着蓑産	ヒミノ	ヒミノ	▼ヒミノ（鹿兒島県串木野市） 雨蓑に対して日蓑の意味。体をかがめ易くし、背に密着させなくするため、背がゆとりがあるように結ぶ。コモガキを用いて編むので簡単に自作できる。ぐるぐる巻きにして持ち運ぶ。田植から草取りに至る背を日にさらす作業の多い時期によく用いる。日置郡・薩摩郡・始良郡、宮崎平野一帯でよく見られるが、大隅の肝属郡・曾於郡では稀に使われる。	鹿3_図0412_N213_ヒミノ
腰蓑	コシミノ	コシミノ		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
笠	カブイガサ	(竹皮)タカンパッチョ・パッチョガサ、(クバの葉)コバガサ・クバガサ、(棕櫚)チグガサ(沖永良部)、(蘭草)イガサ・ジンガサ・ジンガラガサ・ジンガラボシ(奄美)、(スゲ)スゲガサ	▼タカンパッチョ 農村の仕事用の被り笠。竹の皮で作った粗末な笠である。南薩地方ではタカンパチ(竹番匠笠)とも呼ばれ、もっとも一般的な晴雨兼用の笠であるが、竹の皮は水をはじいて濡れないので、主に雨天の時に用いられる。これを作る作業のことを縫うという。 ▼コバ笠、クバガサ(南島) クバの若葉二枚を使って作っており、漁に行く時や田畑の仕事をする時に使う。 ▼チグガサ(沖永良部島) チグとは、島ことばでシロの意味。棕櫚の皮で作った笠のこと。作り方はタカンパッチョと同様で、竹のヒゴで押えて作る。これは雨ざらし日ざらしに強いので、山行き用の笠として用いられた。 ▼イガサ、ジンガサ(肝属郡高山町) ジンガサともいうのは、蘭は燈心(ジン)に使うから。八月踊りに使うオドリガサというのもあり、笠がすっぽりと顔をかくすのがよいとされる。蘭笠は一般的には日除け笠として用い、軽さが好まれる。 ▼イガサ(蘭笠) 奄美地方ではジンガラ笠、またはジンガラボシと呼ばれ、女子が農作業の日よけに用いていた。中心を山型に高くしてそこから放射状に下へひろげ、蘭で編んである。県内各地で踊りの時に二つ折りにして使われるものは、オドイガサ(踊り笠)ともいわれている。	鹿3_図0426_N2327_スゲカサ 鹿3_図0431_N1007_クバガサ
	タカンパッチョ	タカンパッチョ	▼パッチョガサ、タカンパッチョ 低い円錐形の平笠。素材や製法はツボガサと同じ。この笠を作ることを“笠を縫う”という。	鹿3_図0416_N515-2_タカンパッチョ
	ツボガサ	ツボガサ	▼ツボガサ(指宿市今和泉) 頂部がゆるい丸みのある笠で、竹と竹の皮でつくる。日除け笠で男女とも用いた。笠のツボの中を風が回るので涼しい。笠と頭の間にはキグチという竹の皮をまいた輪が入っていて風が吹き通る。	
	オドイガサ	イガサ	▼イガサ(蘭笠) 県内各地で踊りの時に二つ折りにして使われるものは、オドイガサともいわれている。八月踊りのオドイガサは顔を隠すという意味があり、笠がすっぽり顔を隠すほどよいといわれている。	
マント	ニジュウマント	ニジュウマント		
コート	コート	コート	コート(スモック、道行)	鹿4_図0027_N2789_コート
風呂敷	ウツクイ	ウツクイ、ウチュクイ、ウチュキイ	▼ウツクイ、ウチュクイ、ウチュキイ(大島郡知名町) 鹿児島県でウチュクイは風呂敷の意に用いられるが、奄美の島々では風呂敷型の女子の被り物をいう。被り方はいろいろある。中年以上の女子は本土で手拭をかぶるように、日常多くはウツクイを被っている。	
手拭	テノゲ	テノゲ、テネゲ、テンゲ、チョノゲ、ユーテ、ユーチェ	テノゲは手拭の訛である。仕事の時の汗ふき、日よけや、入浴の体ふき、洗面などに用いる。各地で踊りに欠かせないものだが、もとは神をまつる時に用いる神聖なものであり、それが祭りの時の芸能に用いられ、さらに余興に用いられるようになった。種子島では先祖を送る盆踊り、トカラでは巫女、奄美ではノロが被って祭りにのぞむ。	
襟巻	クビマキ	クビマキ、フクロクビマキ	▼クビマキ、フクロクビマキ(北部海辺部落) ネルの布を縫い合わせて筒状にしただけのもの。船で海に出るとき海上の寒い風を除けるために被る。天草荻北町ではショウユクロ、熊本県ではショイテコという。形が細長い筒状で底がない点が醬油籠に似ているからではないか。	
手袋	ドヅラ	ドヅラ	▼ドヅラ(北部海辺部落) 防寒用の手袋。クビマキ分地対で用いられる。ドは槽のことだろう。袋状に作ったサシコ(刺子)の布袋2つを紐でつないである。槽をこぐとき、紐を首にかけ、これをグローブのように手にはめる。	
煙草入れ	トンコツ	トンコツ、トンコツ、タバコイレ	漁民のトンコツと山民のトンコツは形状が異なる。 ▼トンコツ(熊本県球磨郡五木村) 刻み煙草入れ。漁民のトンコツは上下2段の引き出しがあり、キセルと煙草など小物を入れ、小さい釣針などの漁具も入れている。オキテゴに入れて船に運び、船中では枕用にもなる。山民のトンコツは、(印籠形)両側に紐を通し、腰に下げる。刻み煙草1俵のまま入れることができる。	鹿3_図0463_N287_タバコイレ 鹿3_図0470_N1994_タバコイレ
煙管	アタバイ	アタバイ	アタバイ(阿多張り)と呼ばれる真鍮製キセル。日置郡金峰町阿多で作られている。外の地からきたキセルは「クダイモン」と呼んで区別した。吸い口の返しに特徴があり、ヤニが口に入らず、タバコ盆で叩いても変形しにくい。	
煙管入れ	キセルサシ	キセルサシ	山からフジソその他の巻いている蔓または巻かれた木をとってきて、磨いて作る。キセルの雁首が蔓のすきまを通してまわりから差し込まれ、抜け落ちることがない。	
化粧用具				
洗面盥	ビンダレ	ビンダレ	洗面用の盥で、嫁入り道具の重要な一品であった。	鹿3_図0483_N1130_ビンダレ
髪留	カンザシ	カートメ、ギハ	奄美諸島で用いられた髪留めである。	
櫛	ツゲグシ	ツゲグシ	黄楊の材料を使って作った木櫛のこと。解かし櫛、梳き櫛、毛筋立てなどの種類がある。髪に入りやすいため、ひっかからずによく梳かれ、髪アカもよく取れて歯の根元にたまり、肌ざわりのよい櫛である。	鹿4_図0049_N2814_ツゲグシ 鹿4_図0051_N2816_ツゲグシ
裁縫用具				
裁縫箱	サイホウバコ	サイホウバコ、ハリバコ	裁縫道具入れの箱である。	鹿3_図0494_N1179_サイホウバコ(ハリ箱)
紘台	クケダイ	クケダイ	クケとは縫うという意味。縫う布を張るのに用いる。	鹿3_図0500_N2094_クケ台
火のし	ヒノシ	コテ、ヤキゴテ、ヒノシ	炭火で熱するアイロンである。	鹿3_図0516_N2458_ヒノシ
アイロン	アイロン	アイロン		鹿3_図0521_N2391_アイロン

名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
裁縫機	ヤキペラ	ヤキペラ		
	コテ	コテ		鹿4_図0078_N2687_コテ
裁縫笥	ヘラ	ヘラ		鹿4_図0077_N2831_ツゲ製ヘラ
裁ち鉄	サイダンハサミ	ハサミ、サイダンハサミ		
洗濯用具				
洗濯籠	センタクカゴ	センタクカゴ		
洗濯罎	センタクトライ	センタクトライ		鹿4_図0081_N2694_センタクトライ
洗濯板	センタクイタ	センタクイタ		
張り板	アライバリイタ	アライバリイタ	洗い張り板(板張り)。	鹿4_図0080_N2880_アライバリイタ
伸子張り	アライバリタケ	アライバリタケ	割竹の両端に針を取り付けたもの。布を洗い張りするとき、布の両端に針をさして、布を張るのに用いる。	
張り手	ハリテボウ	ハリテボウ		
砧	チンタ	チンタ	▼チンタ(大島郡沖永良部島) 砧の訛った名称。タブノキで作られた台で、中央に櫛の棒をはめこんである。別に2本の槌を添える。硬く、縫うのにも着るのにも困る布を叩いて繊維をやわらげる。布を棒に巻きつけて台にはめ、両手に持った槌で軽く叩くと、棒はゆっくり手前に回転して、布は少しずつ膝の前に解けてくる。	
食				
貯蔵用具				
水樽	ミツタイ	ミツタイ(水樽)、ミズダル	▼ミズタル、ミンタイ(曾於郡大崎町) 畑仕事、田仕事などにゆくときに飲用水を入れて牛車の隅やリヤカーなどにのせて運んでいく樽。個人用のタケンツボ(竹の壺)に対して、多人数の家族用である。天板にはマダケの筒が差し込んであり、水の注ぎ口になっている。	鹿3_図0532_N429_ミツタイ(水樽) 鹿3_図0535_N1287_ミズダル
醤油樽	ショイダイ	ショウユダル、ショユダル、ショイダイ	醤油を発酵・造醸するのに用いる。中に溜まっているもろみに円筒状の糞を立てて、中ににじみ出てきた醤油を汲み出す。	鹿3_図0536_N843_ショウユダル 鹿4_図0087_N2703_ショウユダル
手樽	テダイ	テダイ(手樽)、タル		
樽	サタシダル	サタシダル	砂糖樽に用いたもの。	
味噌樽	ミソダイ	ミソダル、ミソダイ	どこの家の台所にもあったもので、各家で味噌を自製していた。クレ板には板目を使い、水分が抜けないように、空気が流通しないように工夫してあった。	鹿3_図0544_N1357_ミソダル
味噌桶	ミソオケ	ミソオケ(味噌ダル)		
甕	ミンガメ	ミンガメ、ミンガム、ミズガメ	年の暮れに殺した正月豚から取ったラードを貯蔵するのに用いる。蟻等がつかないように、肩部につけた耳に紐を通して吊り下げて用いる。	鹿3_図0586_N1507_ミンガミ
	ショウチュウガメ	シューガミ、ショウチュウガメ		鹿3_図0604_N2016_ショウチュウガメ
	ショウユガメ	ショウユガメ		
	クルガミ	クルガミ		
	ハンズ	ハンズ、ハンド、甘酒半胴(ハンズ)	半胴。カメツボの胴部を半分の高さから切った姿に似ているところから名付けられた名称で、甘酒を作ったり、飲料水を溜めておくのに用いる。	鹿3_図0684_N2515_甘酒半胴(ハンズ)
壺	ツボ	ショーチューツボ、サトツボ、ツボ(ジュウゴへ)、ツボ(五十ベツボ)、ダッキョツケ、壺、サトウ壺、醤油壺、ミソツボ、アマンイレ(スツボ)、カメツボ、火消シツボ、シオカラツボ、ショイツボ、ウメツボ、オチャツボ、トウワシ、イチユワシ、トウツクイ、トウワシガミ、ツボ(耳あり)、サツマツボ、ハンツボ、ツボ(アンバガメ)		
醤油瓶	ショイビン	ショイビン		
醤油入れ	ショウユコダシ	ショウユコダシ、ショウユダシ、カタクチ、サーク	醤油を醤油樽から小出しするのに用いる。	鹿3_図0700_N335-1_ショウユコダシ(壺)
米櫃	コメビツ	コメビツ		鹿3_図0724_N1059_コメビツ
味噌入れ	ミソコダシ	ミソノコダシ、ミソコダシ、コダシ、ミソイレ、ミソバチ	▼ミソコダシ、コダシ(鹿児島県鹿屋市高隅町) 味噌小出し。味噌樽から当座に使うだけのものを小出ししておくための手桶。鍋蓋形の特有の蓋があり、手やその前に杓子をはめるための切れ込みが作られていて、きっちりとはまる仕組みになっている。	鹿3_図0707_N416_ミソノコダシ 鹿3_図0710_N671_ミソイレ
飯入桶	メシタンゴ	ニギメシタンゴ、メシタンゴ、ニギリメシタンゴ	▼ニギリメシタンゴ 野山に握り飯などを持ってゆく小物の桶製品。	鹿3_図0728_N624_ニギメシタンゴ
水汲み桶	ミツタンゴ	ミズタンゴ、ミツタンゴ	タンゴ(樽)の名称を持つが、泉や各川から水を汲むのに用いる桶である。ミツサシという天秤棒の両端に掛けて担ぐ。	
手提げ桶	テオケ	テオケ、オケ		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
魚鉢	イオバチ	イオバツ、イオバチ、イヨバチ、ウオバチ、イヨツケダイ、イチオケタンゴ、ウオオケ	▼イオオケ（肝属郡高山町） 魚桶。大小あるが、楕円形の低い平桶。きっちりとかぶさる蓋の上に棧をつけ、さらにその蓋を押えるための長い横木を通すようになっている。魚を入れて運ぶのではなく、猫などにとられないように、魚を保有するためのもの。一方、蓋を裏返しておけば、広さも高さもちょうどよい俎になる。	鹿3_図0748_N460_イオバツ
茶桶	チャブイ	チャブイ		
豆腐入れ籠	オクサンテゴ	オカベテゴ、オクサンテゴ(サゲテンゴ)	豆腐を買いに行き、買った豆腐を入れるのに用いる。その他の物も入れて提げて運ぶ。	鹿4_図0094_N2808_オカベテゴ
塩籠	シオテゴ	シオケ、シオテゴ	▼シオテゴ（鹿児島市） 食塩を入れるテゴ。テゴは手籠の意、小籠のこと。籠の部分はバラ編みで円錐形に作る。縁は丈夫につくられて、ツヅラでしめてある。単純な手がつく。昔の塩はニガリが多くて吸湿性であったので、南九州ではシオツポは不適当、ニガリが尖った先からしたり落ちるようにならされている。	鹿3_図0773_N398_シオケ（シオテゴ）
吊り籠	エジョケ	ツイジョケ、エジョケ、ティンブリ、ツリジョケ、エスケジョケ、サゲジョケ、イザクテゴ	蓋付きの籠で食べ物を入れて風通しのよい所に吊り下げて腐敗を防ぐのに用いる。吹上の伊作で作られ、イザクテゴの名でも知られる。戦後沖繩に向け盛んに輸出された。	鹿3_図0782_N産894_エジョケ
飯籠	メシカゴ	メシカゴ、イシヨマゲ、ハンメマゲ	▼ハンメマゲ（大島郡瀬戸内町） 飯米マゲの意で食料入れの籠。マゲは竹・蔓・草などで編んだ容器の一般名。カライモの煮たのを入れて運ぶのに使う。山行きときは木陰の枝に吊っておく。風が通るので腐りにくい。 ▼イシヨマゲ マゲは竹・蔓・草などで編んだ容器の一般名。イシヨマゲともいうのは磯マゲで海にいくとき弁当を入れて持参する。	
弁当籠	チューハンテゴ	チューハンテゴ		
貯蔵籠	カヤゴ	カヤゴ	▼カヤゴ（大島郡三島村竹島） カヤは茅、ゴは籠の意味。きっちりとほまる蓋がついている。貯蔵するのに用いると、湿気が入らず、虫もつかないという。細い束紐をぐるぐると巻き重ね、目が細かく表面が漆のように光っている。	
籠	メゴ	メゴ	目籠の意で、多くはヘゴで編まれている。オカメザサで編まれた洗濯メゴもある。	
枡	ツガ	ツガ、升、一斗升	ツガは竹筒のマス意である。	鹿3_図0802_N141_ツガ（枡）
漏斗	ジョウゴ	ジョウゴ、陶製ロート、ジョゴ		鹿3_図0809_N産2383_ジョウゴ
天秤棒	ミズサシ	ミズサシ		
灰汁たらし	アクウス	アクウス、アクタラシ	▼アクウス、アクタラシ（国分市萩之元） 灰汁をとるためのもの。軟らかい石で作られていて、横の下側に竹の管を通して灰汁が流れ出るようにしてある。籠の灰をとって置いて、この中に入れ上から水を注ぐと、下の竹管から灰汁がしたり出るので集めて使う。灰汁は、石鹸代わりに使ったり、旧五月節用のアクマキ（チマキ）を作る。	
製造用具				
搗き臼	キウス	ウス、キウス、ウシ、ツキウス 用途により、味噌搗き：ミソツキ、ミソツキウス 餅：モツツキウス 脱穀：コメツキウス	▼ウス（西之表市） 松材を用いたツキウスで、高さ20cmのところできびれた形に削ってある。1人または2人で米や粟の脱穀や精白、製粉に用いる。 ▼ツキウス ヒキウスやスリウスに対する名称。ただウスといえばこのツキウスのこと。大別すれば、大人数で味噌つき、餅搗きなどにつかう大きいものでミソツキウスとよばれるものと、1人2人で米・粟などを脱穀したり、精白したり、餅を搗いたり、その他日常に使うモチツキウス、コメツキウスと呼ばれるものに分けられる。	鹿3_図0818_N864_キウス 鹿3_図0819_N1475_ウシ
挽臼	イシウス	イシウス、コナヒキウス、ダゴウス、ヒキウス、シキュシ	粉挽き用の臼で、六分画の目のものが多い。	鹿3_図0831_N420_コナヒキウス 鹿3_図0843_N1312_イシウス
	トウフウス	ヒキウス、トウフウス	▼豆腐臼 豆腐用の水にかした大豆をひいてゴジルを作るのに用いる小さめの石臼。すられて流れ出たゴジルは口溝から流れるのをバケツに受ける。ウスノデ（臼の台）は石材、木材があったり、トウフウスは深目、コナウスは浅目。アマザケウスにも使える。固作りの甘酒は米粒をつぶすために臼で摺って温めて飲む。	
	ヤエギ	ヤエギ、ヒキギ	▼ヤエギ（鹿児島市吉野町）臼を回す部分。ヒキウスの柄	
挽臼台	ヒキウスダイ	キツ、ハコデ、キブネ、ヒツオケ、トウフダイ、ウスブタ、ハチ、フネ、イシシマゲ	南九州で見られる数少ない割り物。ヒキウスを乗せる台で出てくる大豆汁を受けて流し出す機能を持つ。タブノキを割ったものが多い。 ▼イシシマゲ（大島郡与論町） 石臼台とか石臼籠という意味の名称。石臼で豆腐用の大豆などを挽くときでできる豆腐の原液をためるための盆に相当するもの。トキウススキの若葉を用いる。溜まっても漏らないのは緻密に強くしめてある。与論は緻密な石材もなく大きな木もないので、ススキと竹で作ることになったのだろう。	鹿3_図0862_N612_キブネ（ヒツオケ） 鹿3_図0865_1067-1_ヒキウス一式
堅杵	テギネ	テギネ、キネ、ミソツキキネ、ミソギネ、サシギネ、チチ、アズイン、コメツキキネ、ミソギネ、アジム、アジン(与論島)	▼テギネ 堅杵。奄美では島ごとに小変異があるが、堅杵はアジン。与論島ではアジム、アージムといい、南九州のなかで最も大きい。	鹿3_図0880_N625_テギネ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
横杵	ヨコギネ	キネ、コメツツギネ(米搗き杵)、モツツギネ(餅つきぎね)、モチツツギネ、ナデギネ、セージチ、アジン、チチ、ナリワリチチ、モチギネ、ヨコギネ	▼ナデギネ 横杵。奄美ではシチ(槌の意)ともヤマトアジンとも呼ぶ。	鹿3_図0910_N269_キネ
蒸籠	セイロ	セロ、セイロウ、セイロ、カヤゴセイロー、ダンゴセロ、セーロ	方形、円形、編物あり。 セロもコシキも蒸気を通して物を蒸す点では共通しているが、用途には多少異った点がみられる。両者共に今日でも餅つきや味噌・醤油の醸造にはなくてはならないものである。 ▼セロ 蒸籠。蒸気を通して物を蒸す器。餅米・麦・大豆・団子・菓子などを蒸すのに幅広く使用される。木製の箱形であり、蒸し物の量によって積み重ねができる。セロそのものには底がなく、シキを敷くためのサン(横木)が2本ついている。	鹿3_図0932_N144_カヤゴセイロー 鹿3_図0934_N202_セイロ 鹿3_図0954_N2152_セイロ
甑	コシキ	コシキ、クシキ、マイゼロ、クシキオケ	▼コシキ 底のない桶形のもので大小いろいろあるが、どの家でも大カマ用の大きいものもっている。底に孔のあいた焼物のものもある。奄美大島では中がうつろになったピロウの木を横に切ってコシキにした。餅つき、味噌つきに用いる。 ▼マイゼロ 竹を網代編みで円筒状に編み上げたセロと、網代編みの蓋からなる。	鹿3_図0957_N607_コシキ 鹿3_図0963_N373_マイゼロ
	ヘワ	ヘワ、ナベスケ	▼ヘワ 薬を束ねた輪。鍋からでる蒸気が横に漏れず、コシキの底にいくように、鍋とコシキのすきまをふさぐ。コシキの大きさに合わせていろいろの大きさのものがああり、みな自製する。	鹿3_図0965_N299_ヘワ
	シキ	シキゴ、シキ、カタクチゾケ	▼シキ 敷簀子。コシキのすき間のある底に敷いて穀物の粒がこぼれぬようにする。ワラかカヤで作る。 ▼シキ セロに使うシキは孟宗竹を割ってスタレ状に編んだものや、時には細い竹や葦の茎を結び合わせたものもある。さらに、シキの上には、穀物などが下に落ちないように布を敷く。種子島以南の島々では、布の代用にソテツの葉や芭蕉の葉を敷くことが多い。 苗代川焼でできたコシキのシキには熟したヘチマを乾燥させて繊維状にしたものを用いることが多い。コシキは蓋がないのが普通で、ワラやカヤで作ったシブタという特別の蓋を用いることもある。	
豆腐箱	トウフバコ	トウフバコ、トーフバコ、シボリ器、トーフ製造箱、豆腐つくり箱	▼豆腐の箱(指宿市西方) 底板は縦横に細溝を通し、その溝の所々に孔があけてある。箱のワクは、これも孔のあけてある板をはめている。蓋は落とし蓋。底板に箱ワクをのせ、木綿を敷いて、凝固しはじめた豆腐の汁を流し込み、蓋を押し込んで上からおもしの石で押さえる。水は孔から絞り出されて、固い自家製の豆腐ができる。	鹿3_図0988_N1003_トーフバコ
豆腐まぜ棒	トウフマゼ	トウフマゼ	楕円形の竹の輪。長い竹の幅せまいものを2つに曲げてサジ状にして根本はくびったもの。豆腐を煮ている時この輪でかきまぜると泡が消えて吹きこぼれない。	
醤油濾し	ショイノス	ショイノス、ス(醤油のスカゴ)、ショウユコシ、ショウユマゼクイとス、ショウユノス、ショウユザル、モロミワケ(醗分け)、ショイテゴ	▼ショウユノス(醤油の笥)、ショウユテゴ 醤油を自家製造している家で用いる。熊本ではショウユカゴ。醤油桶で発酵した醤油の中央に立て、中のものを外に出し、カゴの中にとまる醤油を柄杓でくみだして用いる。底のあるものは古い形らしい。	鹿3_図0996_N391_ス(醤油のスカゴ)
醤油まぜ棒	ショイマゼ	ショイマゼ、マゼ、ショウユノエブリ、マゼクリ	▼ショウユノエブリ マゼクリとも。醤油が発酵してできるまでの約3か月、毎日かき混ぜるもの。形にもいろいろある。 ▼ショウユノエブリ、マゼクリ(始良郡隼人町長浜) 煎った大豆・裸麦をバラに入れてコウジにし、醤油桶に入れ、塩と水を加えて発酵させる。約3か月でショウユができるが、それまで毎日かき混ぜるに用いる。	鹿3_図1012_N1392_マゼ
焙炉	ホイロ	焙炉箱、ホイロ(茶トリガマ)	▼ホイロ(始良郡蒲生町) 茶を摘んだあとホイロで煎ってバラの上で手でもむ。柔らかくなるまでもんだものをチャベロの山の上に被せかける。	
茶籠	チャベロ	チャベロ、チャセンカゴ(大崎町)、チャゼロ・チャイイカゴ(東串良町)	方形、円形あり。カゴ型のチャベロが流行する以前は、底に木や竹を並べた箱型のものであり、それに油紙をしいて使ったと伝える地方も多い。 ▼チャベロ(始良郡蒲生町) ベロは籠の意。茶上げ(煎った茶を乾かして完成する)に用いる竹籠。カゴとフタに分かれている。籠屋で作る竹製品の中では最も大きい。ホイロで採んだ茶を山に被せかける。土間に火を起こして、その上にチャベロを被せると、熱がチャベロの山の中にまわって茶を熟し乾かし香をよくする。バラで冷ましてはチャベロにかけのを繰り返して出来上がる。	鹿3_図1015_N383_チャベロ
砂糖まぜ	サトウツクリ	フィラ、サタフィラ、サタピラ		鹿3_図1021_N1667_フィラ
蘭引	ツプロ	焼酎蒸留器、ツプロ式焼酎蒸留器	蒸留酒としての焼酎を作る装置。諸味を大きな鍋に入れ、カマにかけの。その上にヘワを乗せ、コシキにツプロ(錫製、プリキで作ることもある)を組み合わせた蒸留器を置く。その下で火を焚くと、アルコール分が蒸発し、その気体はツプロの天井の部分で冷やされ、液化する。それは液受けに落ちて外に流れ出るしくみになっている。	鹿3_図1029_N144_ショウチュウジョウリュウキ 鹿3_図1033_N2252_ツプロ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
油締め	アブラシボリ	アブラシボリ、アブラシボイ、アブラスメ、アブラスメキ、アブラシボリキ、アブラウツシキ、サクユキ	▼アブラシボリ、アブラシボイ、アブラスメ（川辺郡大浦町中組） ほとんどがカタシ油でつばき（カタシとよぶ）やざんか（ヒメガタシ）の実をしぼるものである。3枚のカシの厚板を横木でルーズに止めてある。これをつきウスの上に置いて使う。コシキで蒸したカタシの実をシロ皮に包んでおさむ。別の板の間にクサビをうちこむと、油はしぼられて垂れ落ちる。第1と第2の板の中央内側には3条の溝がほられていて油が流れやすくしてある。白の中にどんぶりを置いて油をうける。薩摩半島・大隅半島部でアブラシボリと言えはこの形のものばかりといってよい。 ▼アブラシボリ（鹿薩摩郡宮之城町田原） こちらはだいたい複雑な構造をしている。台木には丸い壺孔があり、前の竹管に通じている。上下2枚の板があり、下板で孔にはまる杵を押すようになっている。蒸したカタシを孔に入れて、2枚の横板の間へ両脇から木のクサビをうちこむと、油はしぼられて前の管から流れ出る。タノキで作ってある。薩摩郡・始良郡などでよくみうける型である。	鹿3_図1039_N798_アブラスメキ
餅桶	モットイオケ	モットイオケ、餅桶	搗き上げた餅を白くぼから取り上げるための桶で、円形笊のバラを用いることも多い。	
鮓桶	スシオケ	スシオケ	寿司桶（酒寿司桶）。	鹿4_図0155_N2899_スシオケ
諸蓋	モロブタ	モロブタ	方形の杉板製の箱で、餅の保存、味噌の糍を寝かせたり、煮染め入れに用いる。	鹿3_図1053_N2472_モロブタ
笊	バラ	用途によって： ケゴバラ（糞蜜）、コヒキバラ（粉挽き）、スシバラ（スシなどを入れる）、ジャコバラ（雑魚を干す）、ウバラ（麴を寝かせる）など。 サンバラ（奄美）、ミーゾーキー、ムイバーラー（沖繩）	バラというのは平たい竹籠のことである。ふつうは筵やモロブタなどを使うところにバラが利用される。精粗さまざまあるが竹製品のなかで生活とのつながりが最も深い民具といえる。穀類などを干したり収納したり、多人数が集まる祝いの席などでは、握り飯や煮染めを入れる食器としても日常よく利用されている。大きさも用途によってもいろいろ種類がある。奄美にはサンバラ、沖繩にはミーゾーキー、ムイバーラーなどと呼ばれる浅底の平笊があり、南九州のバラと同じように使われるが、南の島々では、榎などを籾（ひ）る時にも使われる。	
茶煎り箒	イリボウキ	イリボウキ、製茶用ホウキ、イリボーキ	釜入りの茶葉を炒るときや、釜から茶葉を取り上げるのに用いる。	
刺し串	クシ	クシ、イヨグシ、コッパグシ	物を刺して直火で乾燥させるための竹串である。	
菓子型	カシガタ	カシガタ、クワシガタ		
播鉢	スリバチ	スリバチ	多くは苗代川で焼かれた陶器で、内側に鋸歯状の鋭い線が刻み込まれており、この刻線とスリコギの頭とで豆腐や魚肉を摺りつぶす。	
捏ね鉢	コネバチ	コネバチ		
芋切り	コッパキイ	コッパキイ、コッパキリ、コッパツキ、イモキリ、イモクダクイ	▼イモキリ（指宿市池田） 訛ってイモキイ、砕くという言葉からイモクダクイとも。箱に洗ったカライモ、ジャガイモ、キャベツなどを入れて、柄を垂直に上下させて切り刻む。それを牛、馬、鶏、豚などの餌として使う。	
よもぎ絞り	フッシブイ	フッシブイ	▼フッシブイ（川辺郡知覧町） フッシボリの訛りで、フツというのは蓬のことで、茹でた蓬を絞るという名称。3月の節句のフッノモチを作るためのもの。本体をワラ縄で編んで作ってあり、一方は口のように開いている。編むのに用いた杵の2本の棒はそのまま残しておく。春のはじめに若いヨモギを摘んできて、灰汁を入れた湯で茹で、水にさらしてからこの袋の中に入れてしぼる。一方の棒を固定し他方の棒をねじるとよくしぼれる。	
炊事用具				
羽釜	ハガマ	大釜、ハガマ、鉄ハガマ、鉄釜		
鍋	ナベ	ナベ、イシナベ、イリガマ、イリナベ、鉄ナベ、油鍋、シルナベ、サナベ、ドナベ、テッナベ、アルミ鍋、ヒラガマ、サギナベ（下げ鍋）、スイナベ、ジユウナベ、カマナベ	カマナベは、竈で使う大きな広口の平鍋の名称である。大量の煮もの、茶葉煎り、焼酎蒸溜や蒸すための湯沸かし、砂糖の煮つめなど多様な機能を持つ。これも、中国西南部など南方とのつながりの深い鍋である。	
蓋	カマフタ	カマフタ、ハマタ、ナベフタ、シュウタフタ、ハガマフタ カマタ、カマンタ（奄美）	鍋にかぶせればナベフタ、釜にかぶせればハガマフタ。奄美ではカマナベに被せるところから、カマタ、カマンタという。南九州本土ではみられず、種子島、三島、十島、奄美の島々に広くみられる。木製の普通の鍋蓋と違う点は、煮ると同時に蒸すための機能をも果たすことである。鍋の面よりも高く盛り上がるほどの野菜などを入れ、水蒸気がこのナベフタの中をめぐって蒸されながら煮えることになる。	鹿3_図1131_N161_カマツタ（釜フタ）
鍋敷	ナベスケ	ナベスケ、ハガマスケ、ナベイシ、ナベスケ、ナベシティー	▼ナベスケ（大島郡沖永良部島） 藁草を裂いたものを束ねて束を作り、それを括って外側で振って止めてある。ハブシという頭頂運搬用具の輪と同じ作り方で、どちらも作って使ってどんどん捨ててしまうので、さほど丁寧に作らない。竹のタガのものがみられる。 ▼ハガマスケ（始良郡隼人町） 杉材を用いて自製。三角のものをナベスケ、四角のをハガマスケ。柄がついている。南九州の一角でナベスケはほとんどがこの三角形のものをを用いる。	鹿3_図1152_N623-1_ハガマスケ 鹿3_図1157_N1012_ナベイシ
鍋掴み	ナベトリ	ナベトリ、ナベトイ、ナベオロシ、テトリ、ハガマトイ	ナベトリ、ナベオロシ。薬製、鍋や釜のふちをもって火から下ろす。小判形の本体を2つに曲げて使うタイプ（南九州本土）と、左右が各2枚の葉をあわせた形になっていて、これで挟むタイプ（種子島全域、屋久島）がある。	鹿3_図1170_N1953_ハガマトイ
鉄瓶	カナジョカ	カナジョカ、チヨカ、クロジョカ、鉄ピン、チユカ、鉄チヨカ、ヤカン、土ピン、カナチヨカ、チユカ、ユワカン、チユカ、酒沸鉄瓶		

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
薬缶	ヤカン	ヤカン		
五徳	ゴトク	ゴトク(五徳)		
焔板	キイバン	キイバン、キリバン、マナイタ、マネタ	▼キリバン(始良郡隼人町) 切り盤。マナイタが訛ってマネタとも。キリバンは足がついていて野菜を切るのに用いられるのに対して、マナイタは足がついておらず魚や肉の類の料理に用いられる。使い分け呼び分けている家も多い。キリバンは板敷の上で使用するのにに対し、マナイタは井戸端などの地上に直接置いて使う。	鹿3_図1210_N592_キイバン(マナイタ) 鹿3_図1213_N931_マナイタ
芋洗い	イモアライ	イモアライ、イモフン、イモフミ	▼イモアライ(指宿市西方) カライモ(さつまいも)を洗うものでイモフミともいう。松の2節を用いて作ったもの。上部は両手に持つように向かい合った2枝を残し、下部はあるだけの枝を残して放射状に出ている。桶にカライモと水を入れて、これを挿し入れ、両手で左右に回すとイモは互いに摺れ合いながら洗われ皮が取れる。	鹿3_図1221_N428_イモフン
	イモフミブネ	イモフミブネ	▼イモフミブネ(川辺郡川辺町) 芋洗槽。カライモ・サトイモを洗う石の桶。昔は足で踏み洗いしていたための名で、今は松の枝でイモフミという器具を用いてこのブネの中で洗う。	
柄杓	ヒシヤク	ヒシヤク		鹿3_図1230_N2023_ヒョウタンビシヤク
瓢箪	ヒョウタン	ヒョウタン、種入れヒョウタン		
杓子	シヤクシ	ケジャクシ、シヤクシ(シヤモジ)	▼ケジャクシ 二枚貝である月日貝の片方を用いたもの。	鹿3_図1241_N1443_ケジャクシ 鹿4_図0123_N2714_シヤクシ
杓文字	メシゲ	メシゲ、飯杓子、カマメシゲ、大シヤモジ		
	ミソシヤモジ	ミソシヤモジ、ミソマゼ		
播粉木	スリコギ	スリコギ、サンショウのスリコギ	香がいい・固いという理由で山椒の木がひろく利用される。中には長い丸材のものがあるが、ヤグラ、バカなどと呼ばれる支点の機能を持った仕掛けと組み合わせて使用される。 ▼スリコギ(日置郡日吉町) きわめて長いスリコギ。バカ台という穴のあいた板を柱などに括りつけ、上部を差し込んで手で持つ代用にする。ツケアゲ(さつま揚げ)を作るとき魚肉を摺り、麦粉と混ぜ合わせるのに使ったり、団子、味噌をつくるときなどに用いる。ふつうの両手でするスリコギもある。	
播粉木台	ヤグラ	ヤグラ、バカ、バカダイ	▼ヤグラ、バカ 長いスリコギの支点の機能をもつ。タテ長の板の中央部にスリコギの末(すえ)が入る程度の孔の開いたヨコ板を直角に組み込んだもので、スリコギの末がほんの少しかかる程度の高さの柱に縛りつける。これを支点として、スリコギの下部を握り時計方向に回し、スリバチの中の豆腐や魚肉をすり潰す。スリコギの動きが安定し、力の働く効率が高く、よく摺れるうえに、中味をよくこねあわせることができるようになる。	鹿3_図1262_N297_バカダイ
素麺すくい	ソウメンカケ	ソウメンカケ	板に竹の串を植え込んで作る。	鹿3_図1264_N1554_ソウメンカケ
茶すくい	チャスクイ	チャスクイ	茶すくい。	鹿4_図0122_N2712_チャスクイ
水囊	ソバアゲ	ソバアゲ	取っ手のついた六ツ目編みの箆で、茹でたソバをすくいあげるもの。	鹿3_図1265_N573_ソバアゲ
	ダゴアゲ	ダゴアゲ、ダゴスクイ	▼ダゴアゲ、ダゴスクイ(串木野市上名) 湯の中で茹でて浮き上がってくるのをこれですくいとる。茹でたソバ、ソーメンなどもすくいあげる。	
篩	フリ	フリ(団子粉ふり)、シノ(ブイ)、フルイ		
卸し器	オロシ	オロシ、タカオロシ、センオロシ、オロシキ	▼オロシ(揖宿郡開聞町) 厚板に柄がついている。竹をけずって作ったクツ(杭、釘)を強く打ちこんである。大根やカライモをおろすのに用いる。自家製。 ▼オロシ、タカオロシ(加世田市益山) タカは竹のこと。2本の横木の間に竹の歯をはめてある。大根、人参、カライモなどを細くおろす。	鹿3_図1281_N1111_タカオロシ
大根削り	デコンケズリ	デコンノコツパキイ	干し大根用の大根を、薄い円板状に削り出すのに用いる。	
包丁	ホウチョウ	ナリワリ、煙草切りボーチョ、たばこ切り、タバコキザミ、トウフ切り包丁、ヤラフキリキ、ナリキリボーチャ、ホウチョウノサヤ	切る材料に合わせてさまざまな形の包丁がある。	
べんけい	ホチエ	ホチエ、ツト、ホテ、ホタ	▼ホチエ(薩摩郡宮之城町) 薬などを束ね括ったものの総称で、ホテ、ホタともいう。鮎などの川魚を串刺しにしたものをイロリの火の周囲に立てて乾かし、これに差して火棚から吊しておけば何か月でも保存されて、だし用に使われる。もっと大きい物は、カライモコツパを串にさして乾燥させるのに用いたり、鎌の刃を挿し込んでカマサシに用いるものもある。蚊火もホチエという。	鹿3_図1300_N426_ツト(ホチエ)

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
笊	シヨケ	シヨケ、キッタメジヨケ、ソーケ、コジヨケ(イモジヨケ)、イボシヨケ、米アゲソケ、アミソケ、コソケ、アメシボリザル、ミジヨウケ、カタクチソケ、アラテ(荒籠)、ブンギイジヨケ、一斗ジヨケ、ソウケ	▼シヨケ 一般に底の浅い丸形の竹製容器を指し、野菜や穀物などを入れる食関係の民具である。シヨケ(南九州)とかソケ(薩南)、ソーケ(種子島)、ソーキ(宮古島)、ソーギ(石垣島)、ソービ(喜界島)、スギ(与那国島)、セー(徳之島)など。	鹿3_図1310_N736_キッタメジヨケ 鹿3_図1333_N2028_ソウケ
	サンカクジヨケ	サンカクジヨケ	三角ジヨケ。	鹿3_図1335_N2098_三角ジヨケ
	ヤサイキリテゴ	ヤサイキリテゴ	野菜切りテゴ。切り刻んだ野菜をまな板から落とし込む笊である。	鹿4_図0131_N2869_ヤサイキリテゴ
木笊	キブイ	キノコツ、キブイ、カタクチソケ	▼キブイ 木で作ったブイ(笊)という意味からきた名称である。現在の時点では、根占町、大根占町、田代町、高山町、大隅町、郡山町、喜入町、川辺町、坊津町の各地で存在が確認されている。根占町丸峰とはキノコツと呼ばれ、杉の根株の切り出し部分を芯の方から引って作ったところからきた名称である。食器としての笊の機能と、脱穀調整具、運搬具としてのブイジヨケの両機能をもつ。	
杓文字差し	シャモジタテ	シャモジタテ、キツタテ、カマフタカケ、キイタテ	丸竹の側面に切り込みを入れて穴をあけ、様々なものを刺し立てるのに用いる。	
食器				
飯櫃	メシビツ	オヒツ、メシバチ、メシビツ、メシバチ、ヒツ、メシビツ、メバチ		鹿3_図1354_N753_メシビツ
お櫃入れ	カヤゴ	カヤゴ、オヒツ、ワラカゴ	茅をキンチクのへぎに編み上げた籠で、オヒツを入れる保温容器として用いる。	鹿3_図1365_N560_ワラカゴ
重箱入れ	サゲジュ	ジュウバコ、ニジュウバコ、オジュウ、サガイジュウ、サゲジュウバコ、サゲジュ	▼サゲジュ(鹿屋市) 手さげ式の重箱入れのことで、いくつかの重箱とそれを入れる木の箱から成っている。木の箱は、朱塗りになっていて日用品ではなく、ことあらたまった時のものであることがわかる。かつて県下の農漁村では春の一日を清遊する風があり(花見をオデバイという)精一杯の御馳走を詰めた重箱をサゲジュに入れて運んだ。	
弁当箱	ベントウバコ	ベントウバコ、ベントウバコ、ベントウバコ	竹の筒を切り出し、入れこ状にして作ったものが多く見られる。	鹿3_図1393_N111_野遊用弁当箱(箱付三重) 鹿3_図1413_N2395_ベントウバコ
めんば	ガエ	ナカゴイ、ガエ、ガイ、メンバ、マゲワツパベントウ	▼メンバ(熊本県球磨郡相良村) 山地での炭焼、木こり、焼畑などの作業に弁当の飯をいれていくもの。曲物をカバサクラで縫い合わせてある。 ▼ガエ 南九州の漁村でひろく聞かれる。小さい漁船の乗組員はほとんど持っていて、たっぷり2食分入る。海水などがしみ込むこともないといい、これと一緒にシルコガエという壺形の焼物の容器に味噌汁を入れて船に乗る。竹板を曲げたものも見られる。	鹿3_図1418_N548_ナカゴイ 鹿3_図1422_N2451_ガエ
弁当行李	コイ	コイ	ゴイは行李の意。網代編みで小判状に編んだ弁当行李。郡山町常盤地区(現鹿児島市)が産地であった。	鹿4_図0138_N2876_コイ
飯盒	ハンゴウ	ハンゴウ		鹿3_図1426_N2535_ハンゴウ
膳	ゼン	オゼン、ゼン		
高膳	タカゼン	タカゼン、タカジン	脚のついた膳のことで、地主、士族、商家などが日常の食事においてもタカゼンを使用した。常民は冠婚葬祭のときに脚のない平膳を使用した。共用することが多かった。	鹿3_図1457_N838-3_タカゼン
箱膳	ハコゼン	ハコゼン、ダレヤメゼン	家の主人が用いるもので、一人膳である。茶碗や箸など食器が収納されている。	鹿3_図1468_N1436_ハコゼン
盆	スズリフタ	スズイフタ、スズリフタ	奄美地域で使われる。祝事用の料理を盛るお盆である。	鹿3_図1476_N754_スズイフタ
	ボン	キジボン、カイセキボン、ボン		鹿3_図1484_N664_キジボン
	トンダフ	トンダフ	中国風のお盆で、分けられた小皿に料理を盛るのに用いる。	鹿3_図1492_N792_トンダフ
角樽	サカダル	ツノダル、サカダイ、サケツツ	婚姻儀礼等に用いる。	鹿3_図1499_N1017_ツノダル
酒入れ	サケツツ	シュツツ、サケツツ	▼サケツツ(日置郡金峰町) 屋外での酒宴などのとき酒を待参するための竹製の酒器。竹の一節を使い、それに小さい筒口を1つはめて、そこから酒を注ぐ。竹の皮ははいて割れにくいようにし、モウソウ竹の肉の厚さを利用して壺形に作り、胴には素朴な線を彫って飾りとしてある。取っ手の横木は竹ではなく木で曲線に刻んでのはめてある。全体ベンガラで赤褐色に塗られている。	鹿3_図1509_N903_シュツツ
	サケイレ	サケイレ	サケ入れ(鋳)。	
酒筒入れ	シジ	シジ、酒筒入		
盃	サカヅキ	サカヅキ		鹿4_図0171_N2723_サカヅキ
盃台	サカヅキダイ	サカヅキダイ、盃台(盃膳)、杯台	杯をのせる台。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
水筒	スイツツ	スイトウ、フキツツ、カヅツ、タケンボラ(曾於地方)、ミツタイ(根占町)、タケンツボ(大根占町)。スイツツ(出水郡東町)、ミズタカヅツ(阿久根)	▼タケンボラ 農作業のときに飲料水を入れて持って行く竹で作った容器。大きな孟宗竹を利用した竹筒が運搬できる唯一の道具で丹精込めて作られた。地方によって名称や使い方に違いがみられる：タケンボラ(曾於地方)、ミツタイ(根占町)、タケンツボ(大根占町)。スイツツ(出水郡東町)、ミズタカヅツ(阿久根)。 ▼タケンツボ(肝属郡大根占町) 竹の壺の意。主として山仕事に行くものが飲用水を入れて負っていく。大きい孟宗竹の2節または3節を用いて作る。上の節の隅に水出しの孔があけてあり、木の棒をさしこんでふさぐようになっている。蓋の上部が多めに残してあるので、そこを流れ出る水を口づけに飲む。横の底と上部に孔をあけて丈夫な縄を通して負う緒がつけてある。	鹿3_図1522_N88_スイトウ 鹿3_図1535_N2105_スイトウ
徳利	トックリ	トックリ、トウククイ		鹿3_図1539_N39_トックリ 鹿3_図1553_N1479_トウククイ
椀	ワン	ワン、スイモノワン		鹿3_図1574_N846_ワン
茶碗	チャワン	チャワン		
井鉢	ドンブリ	ドンブリ		
皿	サラ	サラ	木皿、クワシガラ、小皿、黒漆塗皿、朱漆塗皿、ガラスガラ、菓子皿、松岡小皿、唐草紋大皿、鶴岡蒔絵皿などさまざまな種類がある。	鹿4_図0174_N2930_サラ
鉢	ハチ	料理鉢、カサネバチ、ウセバチ		
茶碗籠	メゴ	チャワンメゴ、ワラビカゴ、メゴ、ヘゴメゴ	▼チャワンメゴ(鹿児島県岡之原町) メゴは目籠とも書けるように目の大きい籠である。ヘゴという羊歯の茎で作るのでヘゴメゴともいう。水に強いので洗った茶碗などを入れるのには適当で、何年でも作ったときと同じような色艶を保っている。	鹿3_図1621_N598-1_チャワンメゴ
茶碗入れ	チャブネ	チャブネ、チャワンメゴ、チャブダイ	▼チャブネ(宮崎県小林市) 長円形で、足は三本。メラサというこの地方に多い良質の杉材で作られている。(急須や湯呑茶碗を入れる) 来客用にも自家用にも兼用される。足をつけるのは古い桶の基本的な形であったかと思われる。	鹿3_図1641_N615_チャブネ 鹿4_図0121_N2711_チャブネ
その他				
吹煙器	ミットウ	ミットウ	吹煙器、蜜盗(みつとう)。蜂蜜採集の際に、巣に煙を吹き掛け蜂の動きを弱らせるのに用いる。	
卵焼き	こがやき鍋	こがやき鍋	厚焼き玉子焼きを作るのに用いる。	
束子	ソラ	ソラ	たわし。棕櫚の皮をまとめて束にして、茶碗や鍋、羽釜を洗うのに用いる。	鹿3_図1661_N2316_ソラ
飯型	マンカンメシシカタ、ツツダシ	マンカンメシシカタ、ツツダシ	赤飯の型。	鹿3_図1664_N870_ツツダシ
爛徳利	爛付、はと	爛付、はと		鹿3_図1668_N165_カンツキ(爛付)
	カラカラ	カラカラ		鹿4_図0169_N2614_カラカラ
蕎麦切り板	ソバキイタ	ソバキイタ	▼ソバウチドゥグ ソバキイタの上でソバを押し伸ばす棒をメンボウという。ソバキイタのない家では台所のゼンダナの戸を外して使ったり、キイバンで代用する場合もある。	
住				
家屋				
梯子	クラハシ	クラハシ、クラハシゴ	普段は外して、横に倒してある。高倉に上るときに、入口に掛けて用いる。ほとんどが7段の作りである。	
畳	タタミ	シマダタミ		
風呂	イシプロ	イシプロ、フロオケ	▼イシプロ 凝灰岩を削って湯船を作り、ツプロと呼ばれる鉄製のたき口をつけたもの。水抜きの栓はノンといい、木を円柱形にしてタオルを巻いて打ちこむ。沸かすのに3~4時間かかるが、冷めにくい。 ▼石風呂(始良郡始良町木津志) 石で作った風呂桶。焚きものが多くいり、沸きにくい、一度沸くとさめにくくて、よく温まるのがよいという。1つの石を削って作ったり、大きいものになると口のある部分から下と、上の縁部とを別石で作ったりするなど、2つ、3つの部分を接着したものがみられる。	
洗い桶	アライオケ	アライオケ	フロ用。	
鉈掛け	ナタカケ	ナタカケ	▼ナタカケ(薩摩郡鶴田村) 孟宗竹の節ごとに穴をあけて鉈の柄をさすようにしたもの。これに対し鎌はカマサン(鎌挿し)。	
手水鉢	ツツバチ	手水鉢	▼ツツバチ 手水鉢。石造りで、便所、井戸、玄関の傍、縁側などにいろいろの形で備えた。	
屋根材	ヒラギ	手割りクエ(ヒラ木)	屋根を葺く材料で、杉板が用いられる。	
釣瓶	ツルベ	ツイベオケ、井戸車、フバジー、クミアゲウイ、イドグルマ、つるべ用滑車、手押しポンプ、イドツルベ		
釣瓶取り	ツルベトリ	ツルベトリ	漁業で使用する「スバル」のようなもの。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
井戸杵	イガワノフチ	イガワノフチ	▼イガワノフチ（川辺郡川辺町太古殿） 農家の同族的集団が共同で使ってきた井戸の杵である。南九州では木製の井桁はほとんど見かけず、このような石を削り抜いたものが使われる。	
収納具				
箆筒	タンス	タンス、小タンス		
長持	ヒツ	ヒツ	嫁入りに持参する櫃である。	
柳行李	ヤナギゴオリ	ディーゴオリ、タケゴオリ、ヤナギゴオリ	旅行のとき物入れに用いる。	
衣桁	イコウ	イコウ	着物を掛けておくのに用いる。	鹿4_図0032_N2879_衣桁
照明具				
油皿	コトボシ	コトボシ	ランプ以前。皿の中に菜種油をいれ、木綿を拭りあわせたものや藁草などを芯にして灯をともしていた。	
燭台	トボシダイ	トボシダイ、ローソクタテ、ショクダイ	「とほし台」が蠟燭立を指す。蠟燭立ての他に、石油のコトボシをのせるものもある。	鹿3_図1746_N1026_ローソクタテ
行灯	アンドン	アンドン、手提げ行燈、テサゲアンドン、テサゲチョウチン、テサゲアカイ		鹿3_図1754_N554_アンドン
提灯	チョウチン	知覧傘提灯、チョウチン、弓張提灯、盆提灯	▼チョウチン（国分市上井、清水） 灯を持って戸外に出る場合はこれを用いる。木杵の角形。まわりの面は杵に紙をはっているが、前面だけは格子になっていて開閉できる構造になっている。底はトタン板を敷き、天板には大きな穴をあけてある。南九州には竹骨を回してつくった普通の提灯が極めて少なく、その役をするのがこの角形チョウチンである。 ▼知覧傘提灯（チランカサチョウチン） 傘形に作ったもので、南九州市の知覧で作られた。いざというときに武士の武器にも代用されたという。	鹿3_図1764_N543-1_知覧傘提灯
龕灯	ガンドウ	ガンドウ、ガンド、安全燈（航海用）		
カンテラ	カンテラ	テダゲランプ、ガンドウ（航海用）、ガンロウ、フナランポー		
ランプ	ランプ	ダンボ、サゲランプ、カンテラランプ	カンテラランプは住居用。 ▼カンテラランプ（大島郡瀬戸内町） 中に入っているカンテラはトタンで、首のところからでたネジで細い芯を上下させるようになっていて、ランプはがっちりと固定されて熱に触れない工夫もしてある。安定して握りもよいので、置いて吊るしても提げても使えるようになっていて。	鹿3_図1792_N1160_サゲランプ
松明台	カガイザラ	カガイザラ	▼カガイザラ（垂水市牛根） 肥松のマツノツガを燃す台として作られたもの。これをイロリの灰の中にさし、灯皿の上にマツノツガを燃やした。八田網の鉄の火棚を真似て作り始めたものか。	
	トボシダイ	トボシダイ、アカシダイ	▼トボシダイ（熊本県球磨郡相良町） トボシダイ、アカシダイとも。トボシ・アカシは肥松のことで、それをこの台の上で燃して灯火とする。イロリの灰の上や牛小屋、土間、庭などに置いて、アカシを燃し、継ぎ足しては燃し続けてその光で夜業を行った。	鹿3_図1801_N704_トウミョウダイ 鹿3_図1803_N1309_カガリダイ
蚊火	ホチエ	ホチエ、ホタ	▼ホチエ（肝属郡大根占町） 火種を持つためのもの。薬の端をなつた縄がついていて腰に下げるようになっていて。薬の中にはマテバシイなどの材が枯れ朽ちたものを包み込む。山に出かけるときに、この先端に火をつけて出かける。長短作っておけば山仕事の最中、煙草の火があるし、煙が出てカヤブヨ除けにもなる。焼き魚などの串を刺して保存するものにもホチエがあり、用途からは共通点はないが、名称は全く同じであるのは外形が似ているからであろう。	
暖房具				
火吹き竹	ヒオコシ	ヒオコシ、ヒフキダケ、フウクシ	前夜灰をかけて寝せた火を、朝残っている火種を吹いて、火を起こすのに用いる。燃えが悪いときに火勢を強めるのに風を吹き込む。	
十能	ヒスコ	ヒスコ	ヒスコとは火をすくうという意味。	
火鉢	ヒバチ	ハコヒバチ、ヒバチ、ナガヒバチ		鹿3_図1824_N1135_ヒバチ
	テアプリ	テアプリ	手焙り。	
	ハコヒバチ	ハコヒバチ	箱火鉢。	鹿4_図0183_N2783_ハコヒバチ
炬燵	コタツ	コタツ、ヒバコ		鹿3_図1838_N347_コタツ
湯湯婆	ユタンボ	ユタンボ、ユダンボ		鹿3_図1847_N2492_ユタンボ 鹿4_図0193_N2740_ユタンボ
囲炉裏	イロリ	ユルイ、ジロ（奄美沖縄）	▼ユルイ、ジロ 煮炊きをしながら、照明・暖房をとる場所であり、家族が団欒するところ。奄美や沖縄では、ジロ（地炉）と呼ぶことが多く、自在鉤を用いず、三つ石を用いる。	
火箸	ヒバシ			
その他				
箆	ホウキ	テボーキ、ホウキ、シユロボーキ、ウチボウキ、ホーキ、ササボーキ、ニワボウキ	▼ササボウキ（大島郡三島村黒島） デメダケ（大名竹）で作るテボウキ。葉が枯れても枝から落ちない性質を利用したもの。	鹿3_図1852_N20_テボーキ 鹿3_図1859_N2498_ササボウキ（小）

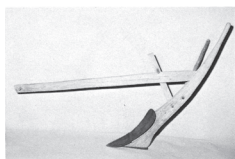
名 称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説 明	画像ファイル名
熊手	マツバカキ	マツバコサツ、クサキ、カマツバカツ(落松葉掻き)、タンモントイカツ(新取り鉤)		
自在鉤	ジザイカギ	ヅテカギ、ズデカツ、ジデカキ、ジデカツ、ジゼカツ、ジゼカツ、ジザーギ、ジザイカギ、ジゼカツ、ズデカツ(シユデカツ)、ジデカギ、ジザイカギ、ジゼカギ、ズゼ、ジゼ	▼ジゼカツ 鹿児島でジゼカツ、ジデカツ、ズデカツ。奄美でズゼ、ジゼ。ユルイ(囲炉裏)などの上からつるし、鍋やチョコカ類をかけるための鉤。材料に竹を用いることが多く、つり鉤には又の部分が裂けにくく燃えにくいグミノキが使われることが多い。鉤がずり落ちるのを止める横木はコザルという。 ▼ジゼカギ 自在鉤のことでジゼカツのように訛って発音される。節数は、3、5など奇数でないといけないという。自在鉤の竹の面はつややかに磨かれていないといけないと言われ、磨かれて鏡の代用になるほど。自在竹の上のトメギに桑の木を使うのは雷除けだという。	鹿3_図1875_N508_ジデカキ
屏風	ツイタテ	ビョーブ	囲炉裏の火に当たるとき、背中の上に立てて暖をとるのにも用いる。	
本箱	ホンバコ	ホンバコ、手箱		鹿3_図1905_N119-3_ホンバコ
枕	マクラ	木枕、箱枕、婦人枕、マクラバコ、キヤマックワ、マクラ、タタミマクラ		鹿3_図1911_N833_マクラ(竹製) 鹿3_図1914_N1351_タタミマクラ
竜吐水	ボンバチ	ボンバチ、ミツキ(水突き)、ボンブ、龍吐水		鹿3_図1916_N372_ボンバチ
煙草盆	タバコ盆	タバコボン、タバコボン(ヒットウラー)		鹿3_図1939_N1336_タバコボン
煙管	キセル	キセル	煙管(山元張り、阿多張り)。	鹿4_図0198_N2626_キセル
団扇	ウチワ	フバザー、ピロウ製ウチワ		
靴	カバン	コブキ、シュロ製ランドセル、ツカゴ		鹿3_図1956_N336_シュロ製ランドセル
錐	キリ	ロクロギリ		鹿3_図1960_N1139_ロクロギリ
炭入れ	スマイレ	スマイレ、スマバコ	炭入れ、炭箱。	鹿3_図1973_N305_スマイレ 鹿4_図0189_N2735_スマバコ
七輪	シチリン	シチリン		鹿4_図0187_N2742_シチリン
火消し壺	火消し壺	火消し壺	真っ赤なおきを入れ、消し炭を作るのに用いる。	鹿3_図1965_N863_ヒケシツボ
蠅叩き	ハエウチ	ハエウチ、ヘタタツ	ハエを叩き殺すのに用いる。棕櫚の葉の根元を割いて糸で編んで作る。葉の骨が山形になっているので、ハエは叩いてもつぶれることはない。	鹿3_図1987_N1979_ハエウチ
鼠取り	ネズミトリ	ネズミトリ	籠形、箱形あり ▼ネズミトリ(川辺郡知覧町) 箱型、落とし蓋に重みをつけるため漆喰塊がついている。餌に触れるとひっかけてある紐が外れ、滑車仕掛けで重い蓋が落ちてネズミの体を箱の中に押さえるようになっている。	鹿3_図1991_N80_ネズミトリ
お虎子	オマル(木製)	オマル(木製)		
鍵	クラノカギ	クラノカギ	L字形。蔵の鍵。	鹿3_図2029_N2336_クラノカギ
年中行事・信仰・娯楽など				
社会生活				
ほら貝	ホラガイ	ホラ貝	▼ホラ(日置郡吹上町下和田) ホラガイを吹いて部落に集会などの通報をする。通報用以外にもホラを吹くことは相当多く、節句の際や山に行つてよいことを部落民に知らせるために神主が吹いたりする。太鼓や鉦と共に大切な報知用具であった。	
	モアイバコ	モアイバコ		
半鐘	ヨセガネ	ヨセガネ、青年ガネ、ニセガネ	寄せ鐘の意でこれを打つて部落の人々を寄せ集めることから来ている。青年ガネとかニセガネ(ニセはニオとかいて青年のこと)と呼ぶところも多いのは、この警鐘の管理が多くは部落の青年組に任せられているからである。写真は部落に近い路傍に吊されているヨセガネで鉄板を横木から吊り下げたもの。町の鉄工所で作らせた。まわりの孔は音と関係があるという。部落の集会所に撞木があって、それで板の中央をたたく。半鐘を高く吊した部落もあるが、むしろこの形の方が数は多い。	
信仰				
田の神	タノカミ	タノカミ	▼田の神像(鹿児島市) 笠状の大きなシキをかぶり、右手にメシゲ、左手にスリコギを立てて持つ。田の神舞を舞う神職の姿がモデルになっていると思われる。	鹿3_図2044_N2352_タノカミノウ(石像) 鹿3_図2046_N2462_タノカミ
	デオドン	デオドン	▼デオドン(日置八幡神社) 日置郡日吉町八幡神社で行われる「お田植祭」の際、神社境内に立つ大型偶人像。	
石敢当	セッカントウ	ユタノシンタイ、セッカントウ	▼ユタ 奄美群島のユタはいわゆる巫者。ノロは女性のみであるが、ユタは男性も相当数いる。占いをおこなったり、呪術行為をする時には必ず神がかりをする。 ▼セッカントウ 鹿児島ではセッカントウ、沖縄ではイシガントウなどと呼ばれ、三叉路の突き当たりを立てられたり、石垣に組み込まれたりされている石の碑がある。形は長方形や、上部が三角形に尖ったものが普通。邪悪な神の進入を辻の突き当たりのところで防いだり、遮断したりする力をもつと信じられており、一種の石神信仰の対象となっている。	

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
船霊様	フナダマ	フナダマサマ	船にはフナダマサマと呼ばれる船の神がいて、船の災難や豊漁を船人に知らせてくれるとひろく信じられている。神体は船の中央の帆柱を立てる支柱（ツツという）に納める。	
竈神	ウガマサア	ウガマサア、ウガマドン	大竈に椽や殿という敬称をつけたもの。ふつうは土間の奥隅に築いてあり、そばにふつうの竈の大小をいくつか並べている。ウガマナベとかカマナベという浅い大鍋をいつもはめこんでいる。カマドであると共に、神であると信じられている。	
絵馬	バゲ	バゲ、バギョウ、エマ	バゲ、バギョウ。あちこちの神社で小絵馬が奉納されている。古来、神に馬を奉納することが神宝や神服を神に捧げるのと同じような意味を持っていた。神馬は神霊を鎮める力を持ち、神と馬とは一体のものとして考えられてきた。生馬を奉納することはいろいろな点で都合なので、木製馬形、土製馬形、さらに板製の小絵馬、大絵馬が一般的となった。	
船額	センガク	センガク	タグヒツノカンサーへの供え物。	
神衣	カミギン	ノロの神衣	▼カミギン ノロ（祝女）が普通の着物の上からうちかけて着るパシヨウ布や木綿の白い着物。ノロ以下の神人（カミンチュウ）によって作られる。ノロが死亡すると、カミギンを着たまゝの姿で埋葬された。カミギンの下に中国製のドギン（上着）、カカン（巻きスカート）を着せる。	
首飾り	ハブラダマ	ハブラダマ	ガラス玉首飾。	
	タバネ	タバネ、ナナハベラ	▼タバネ 白鷺の羽を3枚ほど束ね、それに各々7つの3cmほどの大きさの逆三角形を赤白交互に2列につけた小道具。タバネ、ナナハベラとも。	
民俗知識				
膏薬入れ	クスリイレ	クスリイレ、ベニノヨウキ	ハマグリ。	
焼針	エーバリ	エーバリ	民間療法に用いられる。	
薬研	ヤゲン	ヤゲン	▼ヤゲン（熊本県唐津郡相良村） ノロ（祝女）が普通の着物の上からうちかけて着るパシヨウ布や木綿の白い着物。ノロ以下の神人（カミンチュウ）によって作られる。ノロが死亡すると、カミギンを着たまゝの姿で埋葬された。カミギンの下に中国製のドギン（上着）、カカン（巻きスカート）を着せる。	
魔除け	マヨケ	マヨケ、シチマーブイ		
	マヨケノアワビ	マヨケノアワビ	魔除けのアワビ。牛・馬小屋に下げたり、門口に置いたりする。	鹿3_図2123_N388_マヨケノアワビ
民俗芸能・娯楽				
仮面	メン	タカメン、カズラ面、メン、ボゼの面、ボゼマラ、サガシボゼ、面踊りの面、諸純シバヤ面、トシドン	▼トシドン（下飯村） 大海日の夜、下飯村や鹿島村などの子供のいる家を訪れる。座敷に上がりこみ、子供たちを脅したり諭したりしたあと、年餅を与えて去っていく。この年餅を食べないと年をとることができないといわれている。 ▼ボゼ（悪石島）、メンドン（硫黄島） 旧暦7月16日、ボゼは十島村悪石村の盆踊りの最中に出現する。一方、メendonは旧暦8月1日と2日、三島村硫黄島で行われる八朔踊りに現れる。どちらも見物人を脅すなどして大暴れる異形の来訪神である。龍の面で、頭にすっぽりと被るところに特徴がある。 ▼諸純シバヤ面（瀬戸内町） 芝居は踊りと人形劇からなり、国の重要無形民俗文化財に指定されている。 ▼面踊りの面（西之表市深田） 10月24日、西之表市深川神社の願成就に奉納される面踊りの面。 ▼メン（三島村黒島） 旧暦8月1日、三島村黒島で行われる面踊りに使用される。 ▼タカメン（三島村竹島） 旧暦8月1日、三島村竹島で行われる面踊りに使用される。	鹿3_図2127_N2368_タカメン 鹿3_図2130_N158_メン（カズラ面） 鹿3_図2138_N2364_メン 鹿3_図2148_N1795_サガシボゼ
花笠	ハナガサ	ハナガサ	▼ハナガサ（坊津町上之坊） 竹の骨組みに紙を張り、それに御幣状の白紙をつける。後に長く尾が垂れているものと、そうでないものがあり、年令の上下の差を表現している。十五夜綱引きの前に、村の中の道をまわり歩く青年たち（スチマワリという）が被る笠。	
	ナンコダイ	ナンコダイ	ナンコというお互いの手の中の数を読み当てる拳を行うとき、互いに拳を出す台。	鹿3_図2194_N332_ナンコダイ
	インテゴ	インテゴ、ギッチョ、イハ	丸木の片方を削り、地面に置いて、棒で叩いて、丸木を飛ばす競技に用いる遊び道具。	鹿3_図2208_N2547-1_ギッチョ
おはじき	イシナゴ	イシナゴ	巻き貝の蓋を利用したおはじき。	
竹馬	ダダ	ダダ	ダダ（竹馬）は、乗って遊ぶ竹馬とは異なる。	
竹とんぼ	タケトンボ	タケトンボ		鹿4_図0277_N2666_タケトンボ
凧揚げ	タコアゲヨウイトマキ	タコアゲヨウイトマキ		鹿4_図0280_N2669_タコアゲ用イトマキ
闘鶏	トウケイヨウノケン	トウケイヨウノケン	闘鶏用のシャモの足につける剣である。	鹿4_図0282_N2638_闘鶏用のシャモの足につける剣である。
虫籠	蛍かご、鈴虫かご	蛍かご、鈴虫かご		鹿3_図2216_N773_ホタルカゴ
	コウル	コウル		鹿3_図2225_N1986_コウル
	チンヂキ	チンヂキ		鹿3_図2226_N1987_チンヂキ
	ゴッタン	ゴッタン	動物の皮を張らず、白木板で作った三味線。	鹿4_図0290_N2764_ゴッタン
水鉄砲	ミズシャクイ	ミズシャクイ	水鉄砲。	

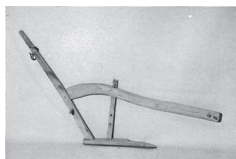
名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
	ネン	ネン	木の杭で、地面に立っている相手ネンに打ちつけ倒し、自分のものを地面に立てる遊び。	鹿3_図2230_N2548-2_ネン
鯛車	タイグイマ	タイグイマ	鯛車。日向神話に基づいて鹿児島神宮で作られる玩具である。	鹿3_図2231_N2570_鯛車
香箱	コウバコ	コウバコ	化粧箱。	鹿4_図0287_N2653_コウバコ
初鼓	ハツツヅミ	ハツツヅミ	鹿児島神宮で作られる玩具で、両側につけられた大豆で鼓面を打つボンボンという音で悪霊を払うという。	
	シタタキタロジョ	シタタキタロジョ	尾をしきりに動かす鳥の形に似せて作った玩具。	
羽子板	ハゴイタ	ハゴイタ		鹿3_図2237_N2576_ハゴイタ
弾き猿	サイノキノボイ	サイノキノボイ、ハジキザル	悪霊を払うと言われる。	
面子	カッタ(面)	カッタ(面)	互いに地面に打ちつけ合い、相手を引っくり返したり、すくったりしたら勝ち。相手のものを自分のものとする遊び。	
人生儀礼				
斗掻き	トカキ		年祝い。男性の八十八歳の年祝いの配り物。	鹿3_図2242_N857_トカキ(斗掻き)
扇子甕	ズシガメなど	ズシガメ、屋型墓、ホネガメ、ツシガメ、カメカン、アヤメ	骨壺。	鹿3_図2246_N76_ズシガメ(扇子墓)
年中行事				
注連縄	シメナワ	シメナワ		
削りかけ	ケズリカケ	ケズリカケ	▼ケズリカケ 木の枝を何度か薄く削ったもので、豊かな実りを祈願する小正月の飾り物として用いられる。南九州では悪霊払いにも用いられる。	鹿3_図2266_N1773_ケズリカケ
祝い棒	ハラメボウ	ハラメボウ、祝い棒(ハラメ棒)、ダセチツ、ハラメン棒、ハラメ棒、ハラダセ、ハラダヒ、ダセンボ、新嫁への祝い物	▼ダセチツ 揖宿郡山川町では1月14日の夕方、この一年間に嫁のきた家の子供たちが訪れ、唱えごとをしながらダセ棒で庭先を突く。子孫繁栄と豊作を祈願する行事である。 ▼ハラメボウ(三島村竹島) 皮を剥ぎ、その部分に木の皮や葉をつけて、ツガ松の火でいぶすと、皮や葉の部分が白く、その他が松の油煙で黒くなる。1月14日の夜、14歳以下の男の子たちが各家々を訪れ、この棒で長持や櫃をたたいてまわる。(ハラウツという) ▼ハラメボウ(垂水市終原) 刀状に削り出し、使う子供の名とハラメ棒などを記す。1月14日の夜、小学生以下の男の子たちが、この一年間に嫁を迎えた家々を訪れ、この日のために作られた垣根をこの棒で打ち壊す。(カキウチという) ▼ハラメボウ(大口市下木場) 福作りのセンを使い、左手に強い力を入れて、左巻のケズリカケを削り出し、先を男根状に作る。1月14日の夜、7歳から14歳までの男の子たちが、この一年間に嫁を迎えた家々を訪れ、この棒で突くようにする(ハラメウツという)。その後は、実がよく生えるといつて、梅の木や柿の木などの成り木に掛けておく。 ▼ダセチツ(山川町利水) 皮を剥ぎ先を尖らし、使う子供の氏名や年月日を記す。1月14日の夜、この一年間に嫁を迎えた家々を訪れ、この棒で庭の土を掘る。	鹿3_図2288_N1709_イワイボウ(ハラメ棒) 鹿3_図2292_N1772_ハラメンボウ 鹿3_図2316_N1763_新嫁への祝い物
	ヒョックリダシ	ヒョックリダシ	竹筒に男根を埋め込み、紐を引くとヒョッコツと出て来る。新婚夫婦の前でこれを出し、祝う。	
	オガタナ	カタナ、オガタナ、メガタナ	▼オガタナ(内之浦町岸良) 皮を剥ぎ、その部分に剥いだ皮をぐるぐる左巻あるいは×状に巻き、アカシ(松)の煙でいぶす。1月14日の朝、14歳以下の男の子たちが各家々を訪れ、このオガタナで橙の幹をたたく。(ナレナレという) ▼メガタナ(内之浦町岸良) 皮を剥ぎ、ケズリカケの部分のきれいなカール状にするため、炭火で焙り、小刀で削り出す。小さなオガタナと共に床の間、墓、門口に飾った。このとき、門口のしめ縄飾りを取り外し橙の木に掛け、門口の右にオガタナ、左にメガタナを飾った。	
ホダレ	タノカンサー、ツルノトイ、ホダイガヤ、ホダレ	▼タノカンサー(国分市郡田) 1月14日、山から採ってきた葉の小束、柳の箸、モロムギ、マンガンモチ、焼酎等を箕の中に入れてオカマサア(お釜様)の上に東の方向に向けて供える。15日の朝、小豆粥を炊くとき秋の初穂の米を入れる。この粥の重湯に茅の葉をぬらし初穂の親がらをつけ、稲の実った姿を作る(ホダレヒツという)。さらに、マンガンモチをさした柳の箸とモロムギの枝とを刈り穂の葉に包み、12か所(閏年は12か所)をくくり、家の柱にしぼりつける。小正月が終わると軒下に差しておき、苗代作りのとき最初に親をまいた近くに、上の部分だけを立て、しとき、焼酎を供え豊作を祈る。葉は保存し苗取りのときに苗を束ねるのに用いる。 ▼ツルノトイ(南大隅町丸山) 前年の初穂を小正月に精米し、粥をたくとき茅の穂を粥につけ親殺をつけて鶴の形に作ったもので、田の神として田植のとき水口に祀る。 ▼ホダレ(西之表市安納) 1月15日の朝、前年秋の初穂の葉と親がらを用いてホダレヒツをして、カシワゴユとマイマイ(左巻き模様棒の棒)を添え軒端に差す。彼岸の中日に苗代田の水口に祀る。	鹿3_図2263_N2116_ツルノトイ	
アワホダイ	アワホダイ	アワホダイ	割竹の竹に小さな丸木の皮を削ったものをさし込んだもので、実った粟穂の作りもの。小正月に飾る。	鹿3_図2338_N127_アワホダイ

名称	鹿児島での主な呼称	鹿児島での呼称	説明	画像ファイル名
	アワンホ・コメンホ	アワンホ・コメンホ、アワンホ	▼アワンホ、コメンホ（末吉町南之郷） 1月14日に、から竹を小刀でケズリカケ状の削り出す。根の方は火にあぶり曲げて、掛けるようにする。穂の部分には、粟餅2個、米餅2個をつける。これは、粟や米が実った姿であるという。大黒様、床の間、仏壇、内神に掛けて供える。穂先の餅が抜けて落ちると豊作になるとい（鹿3_図2339_N1776_アワンホ・コメンホ）。 ▼アワンホ（有明町伊崎田） 竹の先の肉の部分に裂き、皮のついている側にニトコノキを差し、ゼンナワ（銭縄）をつける。1月14日の夜、男の子たちと青年たちが家々を訪れ、これを受ける。（福神舞という）	鹿3_図2339_N1776_アワンホ・コメンホ
	メノモチ	メノモチ	▼メノモチ（大口市篠原） 1月14日の早朝、鳥がとまらないうちに榎の枝を取ってきて、四角の紅白の餅を枝に差し通し、その先に柳のケズリカケを差した紅白の丸餅を差す。部屋の隅に飾り、18日におろす。枝は保存しておき、雷の鳴るとき燃やすと、雷が逃げるという。	
大黒像	デコッサア	デコッサア	▼デコッサア（知覧町永里） 米俵の上に坐り、袋と小槌を持った姿に削りだしたり、墨で描いたりして作る。1月14日の夜、青年たちが藁、笠の姿に仮装しこの1年間に新築した床の間を入れた家を訪れ、このデコッサア（大黒様）と共に多くの財産（目録）を授ける。送られた家では守り神として保存する。	
もぐら打ち棒	モグラウチボウ	モグラウチ棒(ホテ)	▼モグラウチ棒（大口市曾木、堂崎） 曾木のは竹の穂の先に藁づとを作り付ける。堂崎のは藁づととのものでモグラウチ棒とも呼ぶ。1月14日の夜、14歳以下の男の子たちが各家々を訪れ、この棒で庭や畑を打つ。行事名もモグラウチという。	鹿3_図2361_N1696-1_モグラウチ棒(ホテ)
柳箸	ヤナギノハシ	ホダレヒキのハシ、ホダレガイノハシ、ヤナギバシ	▼ヤナギノハシ（大口市篠原ほか） 皮を剥ぎ頭部にケズリカケを削り出す（肝属郡佐多町のはケズリカケがない）。 1月14日の晩、ホダレヒキといって、材料に包丁を通さず長いままで料理したものを、この箸で食べる。その晩は手の届かない場所に置き、翌朝背伸びして取り、背が高くなったなどと言って喜ぶ。15日の朝はカヌを炊き、ケズリカケをむしり取り、そちらの方で食べる。	鹿3_図2371_N1091_ホダレヒキのハシ
土人形	ツチニンギョウ	東郷人形、人形、郷土人形、土人形、帖左(キヌサ)人形、高砂人形、ヒナジヨ	▼帖左人形 素焼きに色付けした土人形である。犬や猫、金太郎、力士、武者など百近くの種類がある。昭和の初めごろまで、子供が生まれると土人形を贈る習慣があった。	鹿3_図2393_N485_郷土人形(娘) 鹿3_図2411_N1713_帖左人形(イヌコロ) 鹿3_図2422_N2050_帖左人形 鹿3_図2446_N2281_ヒナジヨ
金助マリ	カガリマリ	キンスケマリ	▼キンスケマリ（鹿児島市） 三月節句に天井から雛壇の上につるす飾り物。松竹梅、牡丹に唐獅子、御所車など豪華な刺繍が施してある。 フケマイとも。	鹿3_図2460_N793_金助マリ
	薩摩糸雛	サツマイトビナ		鹿4_図0298_N2640_サツマイトビナ
ガラガラ舟	ガラガラブネ	ガラガラ舟、サンガツブネ	▼ガラガラブネ（坊津町） 薩摩半島南部の坊津町や山川町で、男の子の初節句を祝って贈られる。五月の節句には男の子たちが浜辺や通りをひいてまわる。	鹿3_図2468_N2540_ガラガラブネ
灯籠	ツロ	ツロ(灯籠)、ツーロ、タツゴラ、マガ(シャクトリ)		
	ツト	十五夜のツト(ひげわんツト)、十五夜のツト(内神ツト)	▼オツッサーノツナ（お月様の綱）（田原町大原） 8月15日に青年たちが茅を根引きし、地面に長く伸ばして綱を左巻きに作る。これとは別に十五夜のお月様に供えるための小さな綱を作る。綱は蛇に似せて作ってあり、頭と尾が作ってある。月の上る前、広場の一段高い場所に頭を月の上る東の方角に向けて左巻きに供える。これは、一年中そのまま飾られている。 ▼十五夜のジョイ（財部町水久保） 十五の神は荒々しい神であるといわれ、これも荒々しく仕上げられる。村境の道路の上に張った縄に大小二つを下げ、十五夜の神様に供え、朽ちるまで下げておく。 ▼ツト（国分市土井） 藁の根元を括り、裏返しにしてツトを作る。穂先は下の方に下げる。8月15日の末明、子供たちは浜辺に行き、人の踏まない砂をこれに入れて持ち帰り、神社の境内に下げ、その下で綱を作る。	
	ソラヨイ	ソラヨイガサ、コシミノ(ソラヨイ用)、ソラヨイハカマ	▼ソラヨイ 旧暦8月15日の夜に、知覧町で行われる豊作を祝う行事。藁製の帽子、ミノ、ハカマを身につけた子供たちが、土俵のまわりに輪をつくり、歌を歌いながら相撲の四股を踏むのに似た単純な動作を踊る。 ▼ソラヨイガサ（知覧町中福良） 藁を円錐形にして、中程を結わえ帽子状に作る。上部に突起物をつけたり、顔を隠すためのすだれ状の藁をつけたりして、年令の上下の差を表現している。十五夜ソラヨイ行事のときに男の子たちが被る笠。ヨイヨイ笠などとも呼ばれ、大隅・薩摩半島部の茅引きの行列に見られる、茅そのものを被る風習と共通するもの。 ▼ソラヨイハカマ（知覧町中福良） 藁の根元を簡便に編んである。カサと同様十五夜ソラヨイ行事のときに、12～13歳の子供たちが腰につける。子供たちは、輪になり「ソラヨイソラヨイ」と唱えながら、角力の四股を踏むのに似た動作をする。	鹿3_図2488_N1801_ソラヨイガサ 鹿3_図2490_N1803_コシミノ(ソラヨイ用)
	クセモンボウ	クセモンボウ	1月6日に子供たちが各家をまわり、庭を突いて祝うのに用いる。	鹿3_図2515_N136_クセモンボウ(福祭文様)
	ノボリ	ノボリ		鹿4_図0300_N2754_ノボリ

農業・養蚕【耕耘・播種】



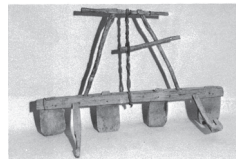
鹿1_図0061_N3998_ススキ



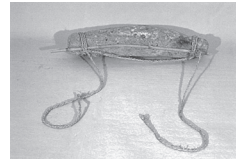
鹿1_図0085_N977_オコシ



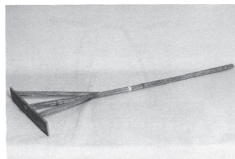
鹿1_図0117_N1771_モウガ



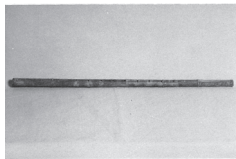
鹿1_図0559_N1552_ウネタテ



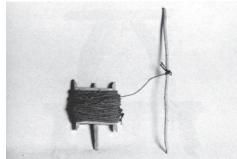
鹿1_図0132_N2325_イシビキ



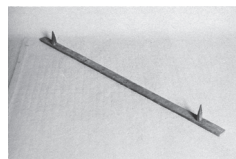
鹿1_図0183_N3782_スリチャ



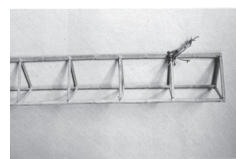
鹿1_図0169_N1208_ナラメ棒



鹿1_図0194_N2093_タウエナフ



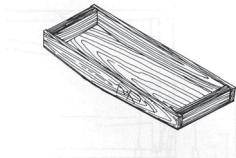
鹿1_図0200_N949-1_シャク棒



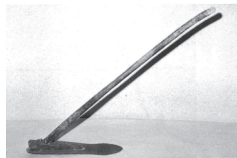
鹿1_図0214_N736_カタツケ(田植用カタツケ)



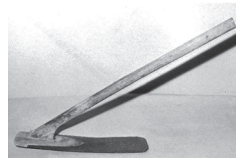
鹿1_図0220_N1133_実植えアネ



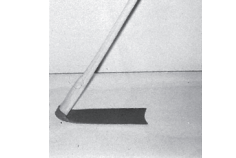
鹿1_図0226_N1965_ナエブネ



鹿1_図0416_N1900_ヒラクワ



鹿1_図0424_N2232_オデグワ



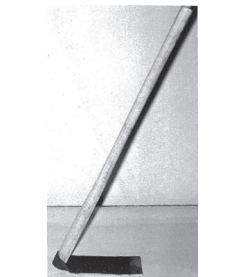
鹿1_図0276_N3155_トンゲ



鹿1_図0293_N1233-2_トーゲ



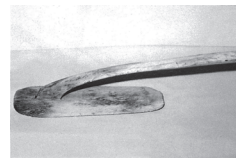
鹿1_図0325_N533_鉄



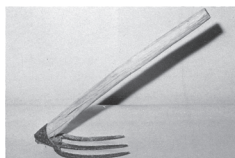
鹿1_図0251_N2587_ヒルバ



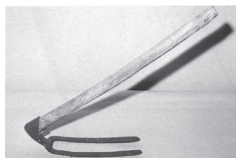
鹿1_図0256_N2725_タウチグワ



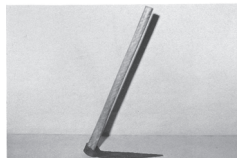
鹿1_図0396_N706_イタグワ(板鉄)



鹿1_図0479_N3552_ミツマダグワ



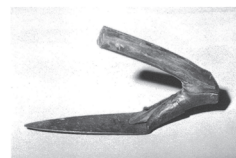
鹿1_図0477_N3398_フタマタ



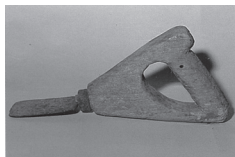
鹿1_図0518_N2584_トゲヘラ



鹿1_図0521_N2927_テグワ



鹿1_図0539_N864_フェラ



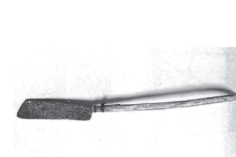
鹿1_図0553_N3965_ヘラ



鹿1_図0563_N1108_カブキリ



鹿1_図0571_N3120_アブシウチブリ



鹿1_図0573_N2257_アゼキリ

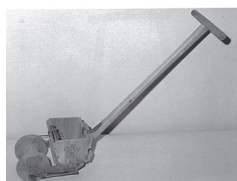


鹿1_図0580_N640_種モノ入れ

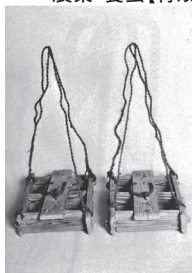
農業・養蚕【育成・管理】



鹿1_図0581_N927-1_耳付種壺



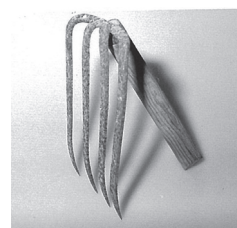
鹿1_図0583_N707_ムギマキ機(麦播機)



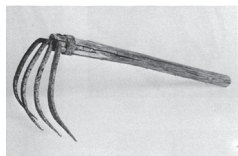
鹿1_図0587_N178_タゲタ



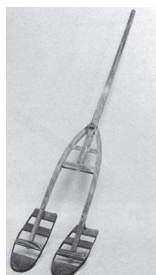
鹿1_図0608_N646_ガンヅメ



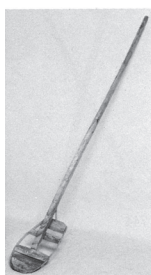
鹿1_図0617_N1154_ガンヅメ



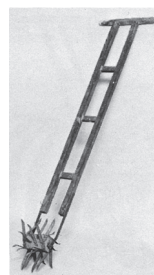
鹿1_図0636_N2248-2_ガンヅメ



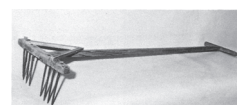
鹿1_図0716_N423_ソロッパ



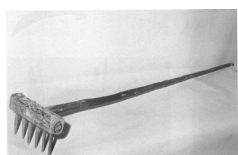
鹿1_図0724_N1517-1_ゲタ(取っ手なし)



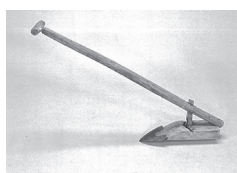
鹿1_図0713_N1471_車



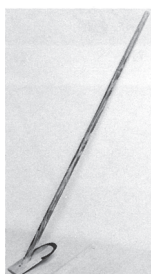
鹿1_図0797_N489_カカジイ



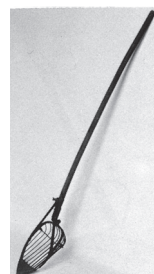
鹿1_図0809_N3778_クサカキ



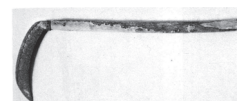
鹿1_図0742_N2279_ナカヒキ



鹿1_図0744_N3412_ナカヒキ



鹿1_図0755_N346-1_麦用土入れ



鹿1_図0833_N673-3_カマ

農業・養蚕【収穫】



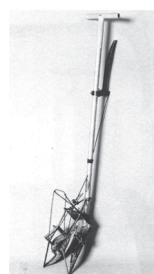
鹿1_図0848_N1364-2_カマ



鹿1_図0866_N1314_キビキリ



鹿1_図0877_N2867-2_ハカマオトシカマ

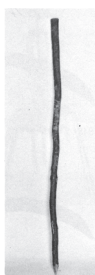


鹿1_図0883_N2099_イネカリキ

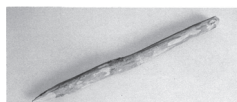


鹿1_図0887_N4158_キンツツ

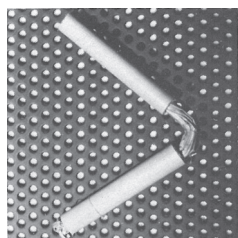
農業・養蚕【脱穀・調製】



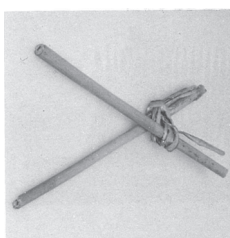
鹿1_図0890_N3181-2_田イモ掘棒



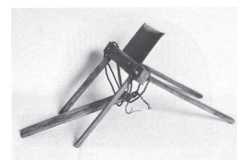
鹿1_図0896_N3707_ネン



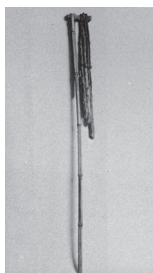
鹿1_図0903_N3797_コシギ



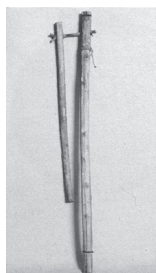
鹿1_図0900_N2335_クダ(テクダ)



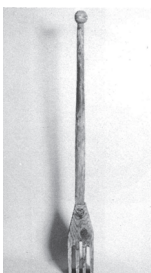
鹿1_図0945_N2055_センバ



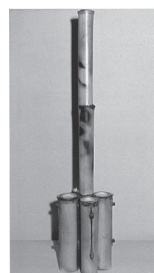
鹿1_図1135_N219_メグイボウ



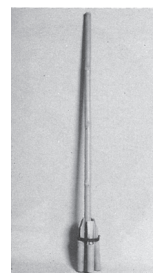
鹿1_図1174_N2860-2_ムギウチブットー



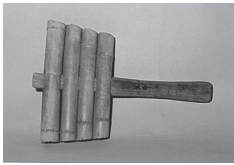
鹿1_図1183_N11_サシ



鹿1_図1195_N2165_ムギサシ



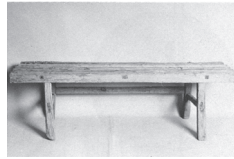
鹿1_図1198_N3145_ガッターイ



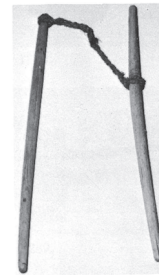
鹿1_図1204_N2908_ムギタツポ



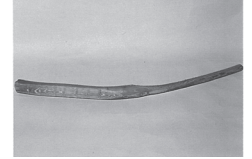
鹿1_図1209_N450_ス(麦打ち台)



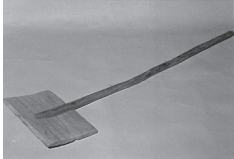
鹿1_図1214_N1490_ムギウチダイ



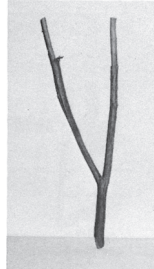
鹿1_図1225_N2281_マツボ



鹿1_図1246_N2262_タキ棒



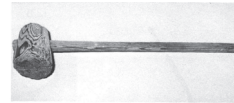
鹿1_図1290_N482_ナタネウチ(ナタネたたき)



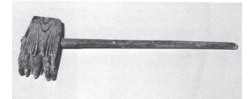
鹿1_図1260_N3992_マタボウ



鹿1_図1264_N768_ドンジ



鹿1_図1271_N179_ドンジ



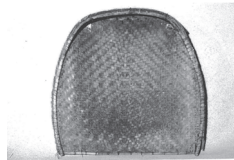
鹿1_図1279_N3011_チイチ



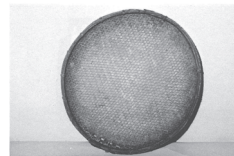
鹿1_図1284_N3569_ドンジ



鹿1_図1011_N481_ミ



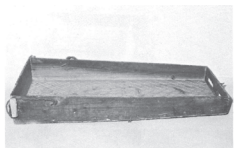
鹿1_図1012_N732_ミ



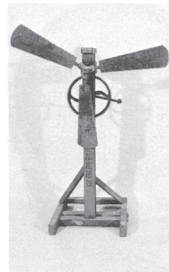
鹿1_図1036_N1345_サンバラ



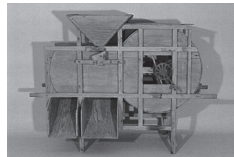
鹿1_図1044_2756_ハラ



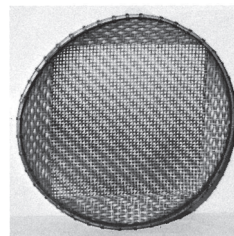
鹿1_図1029_N4054_イタユリ



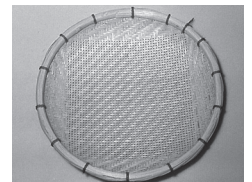
鹿1_図1051_N767_センプウキ



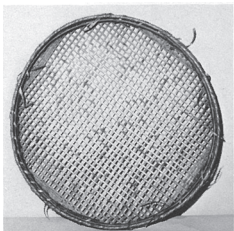
鹿1_図1067_N2084_トウミ



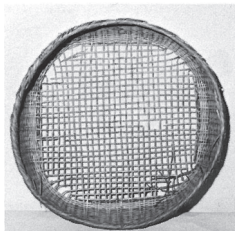
鹿1_図1097_N2430_コメトオン



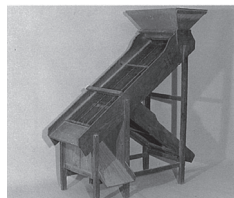
鹿1_図1110_N2757_フミユイ



鹿1_図1096_N2367_モントオン



鹿1_図1100_N2434_モントオン



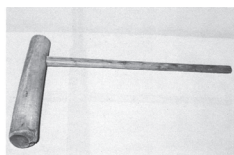
鹿1_図1131_N1003_千石通し



鹿1_図1293_N10_キネ



鹿1_図1333_N3865_アジン



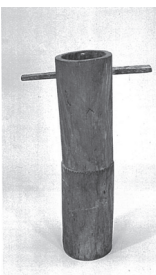
鹿1_図1337_N1104_キネ



鹿1_図1370_N2819_ウス



鹿1_図1392_N2246_スリウス

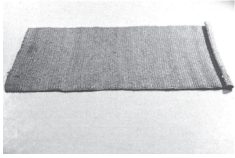


鹿1_図1397_N3826_スリウス

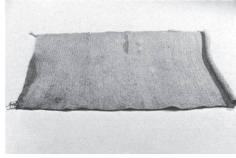


鹿1_図1399_N3924_スルス

農業・養蚕【収納】



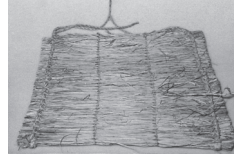
鹿1_図1437_N2726_ニクブ



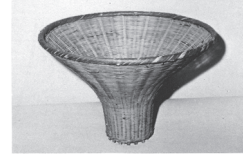
鹿1_図1445_N3012_ネイック



鹿1_図1453_N3505_コッパイレカマス



鹿1_図1454_N2147_クブキ



鹿1_図1466_N3588_タケジョウゴウ

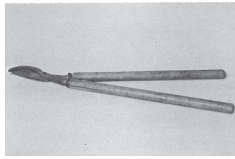
農業・養蚕【養蚕】



鹿1_図1472_N1476_トマス



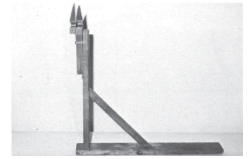
鹿1_図1479_N2286_ムシイリマダ



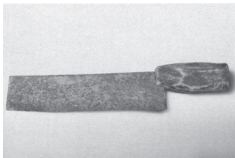
鹿1_図1489_N677_クワキリバサン



鹿1_図1491_N1055_クワキリバサミ



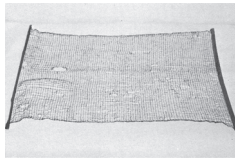
鹿1_図1496_N1832_クワコギ



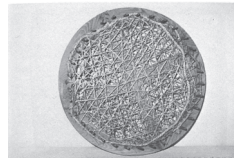
鹿1_図1499_N810_クワキリボネヨ



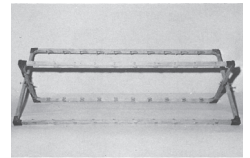
鹿1_図1501_N1833_クワキリボウチョウ



鹿1_図1508_N623-2_ジョサアミ

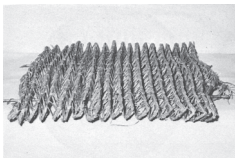


鹿1_図1520_N520_トコエアミ編み機

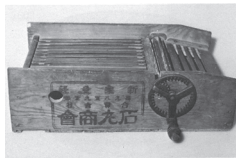


鹿1_図1515_N3060_マブシ

農業・養蚕【その他】



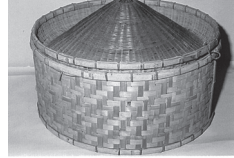
鹿1_図1525_N933_マブシつくり一式



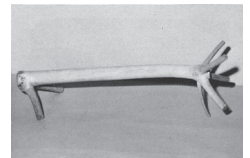
鹿1_図1532_N403_マユのケバトリ



鹿1_図1556_N708_チャベロ

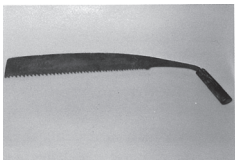


鹿1_図1558_N1530_茶ベロ

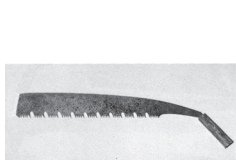


鹿1_図1561_N2880_コギボウ

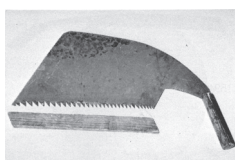
山樵【原木伐採】



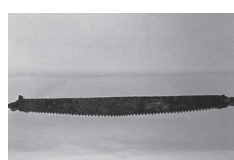
鹿1_図1587_N1893_ノコ



鹿1_図1601_N158_ノコ



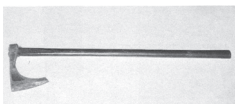
鹿1_図1627_N656_ワキノコ



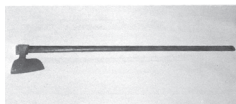
鹿1_図1652_N1652_フタイビキ(両引鋸)



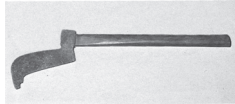
鹿1_図1677_N945_ハツリヨキ



鹿1_図1678_N1756_イチョバ



鹿1_図1680_N1943_ハツイヨキ



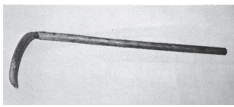
鹿1_図1692_N120_ナタ



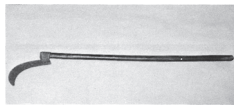
鹿1_図1696_N1256_ナタボウチョウ



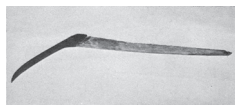
鹿1_図1717_N3979_ヤマキリ



鹿1_図1725_N674-2_ナタガマ



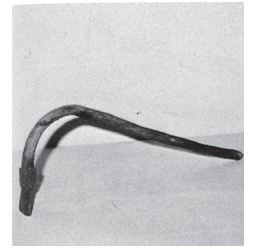
鹿1_図1736_N1680_ハライガマ



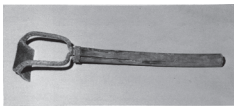
鹿1_図1757_N1886_ツル



鹿1_図1763_N2628_トビ



鹿1_図1771_N536_ツノ



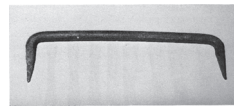
鹿1_図1776_N366_カワムキ



鹿1_図1781_N1187_フクロヤ



鹿1_図1792_N1765_カケマンリキ

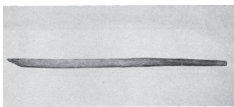


鹿1_図1799_N4100_カスガイ

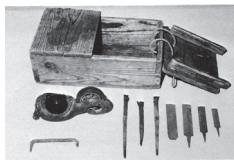


鹿1_図1806_N2993_マ

山樵【炭焼用具】



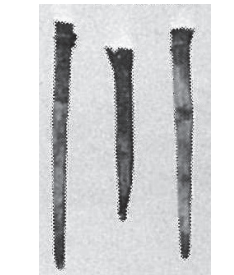
鹿1_図1807_N166_バチ



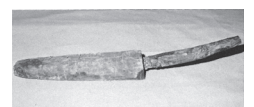
鹿1_図1808_N4094_ドウグバコ



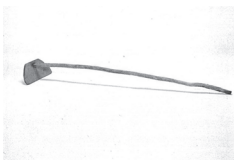
鹿1_図1810_N4095_スミツボ



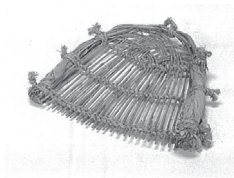
鹿1_図1811_N4096_スミサシ



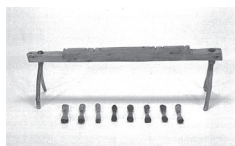
鹿1_図1820_N1843_ツチ



鹿1_図1825_N168_マエカキ



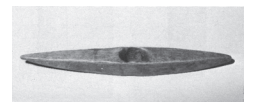
鹿1_図1828_N247_スミュイ



鹿1_図1831_M906_炭俵あみ器(こもがき)



鹿1_図1832_N817_ツツノコ

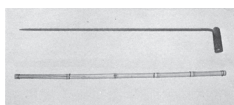


鹿1_図1836_N655_トーン

狩猟・畜産【狩猟用具】



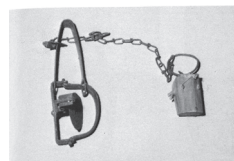
鹿1_図1842_N638_樟脳削り(ツノ)



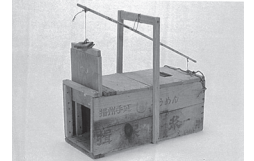
鹿1_図1844_N1793_ブクリョウサシ



鹿1_図1853_N3320_アオバトブエ



鹿1_図1864_N1741_ワナ

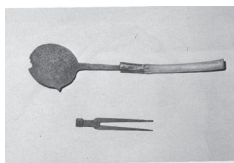


鹿1_図1863_N885_イタチわな

狩猟・畜産【畜産用具】



鹿1_図1873_N1023_でつきゅ



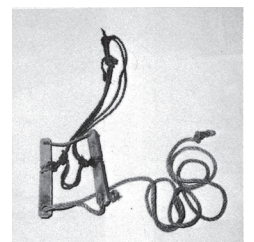
鹿1_図1893_N95-1_タマツクリノドウグ



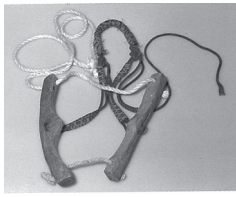
鹿1_図1898_N4234_ヤマカラシ



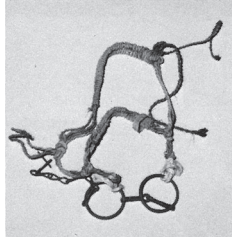
鹿1_図1901_N4220_ヤマチキイ



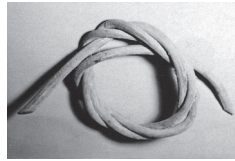
鹿1_図1908_N367_イタノオモテ



鹿1_図1918_N2786_ウムゲー



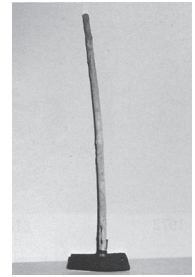
鹿1_図1931_N2791_ウマクツツ



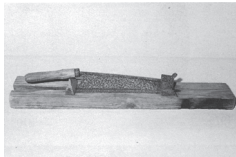
鹿1_図1937_N4052-1_ハナガイ



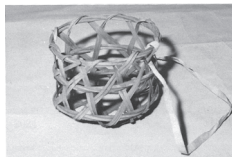
鹿1_図1942_N201_タブのウシブネ



鹿1_図1950_N518_カライモキイ



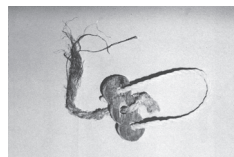
鹿1_図1961_N3625_ワラキリ



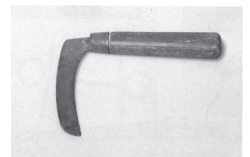
鹿1_図1963_N441_ウシノクッカケ



鹿1_図1971_N1846_ウマノハナネジリ



鹿1_図1972_N3870_ビバ



鹿1_図1976_N804-1_ウマノツメキイ

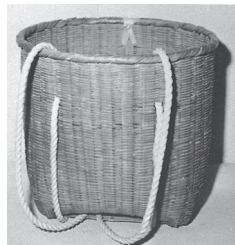
交通・運輸・通信【人力運輸】



鹿1_図1980_N285_ウシノゾーリ



鹿1_図1984_N535-2_シオカセボラ



鹿1_図2012_N4091_チャツミノカゴ



鹿1_図2030_N3626_クワツミテゴ



鹿1_図2017_N5018_マユテゴ



鹿1_図2036_N829_マユテゴ



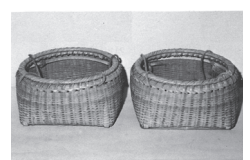
鹿1_図2086_N4272_カリテゴ



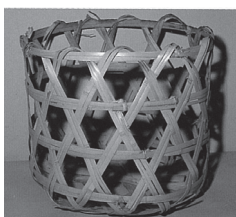
鹿1_図2085_N4272_カリテゴ



鹿1_図2050_N3035_ティル



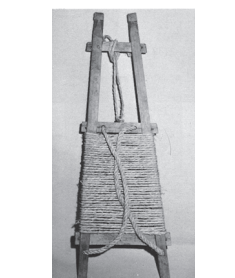
鹿1_図2094_N2967_ダウリカゴ



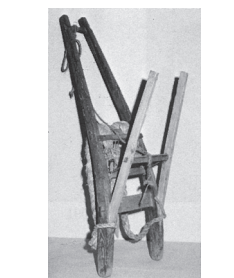
鹿1_図2095_N828_クサキキテゴ



鹿1_図2097_N2268_テサゲテンゴ



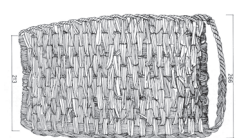
鹿1_図2115_N1945_カリコ



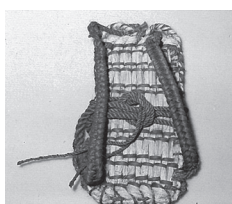
鹿1_図2132_N1557_カイコ



鹿1_図2145_N36_シカタ



鹿1_図2155_N2283_スイタ



鹿1_図2150_N211_カリノ(シカタ)



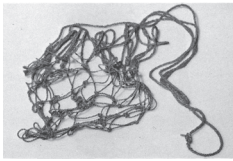
鹿1_図2160_N90_カンジロウ



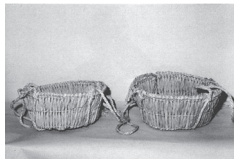
鹿1_図2174_N138_テルノオ



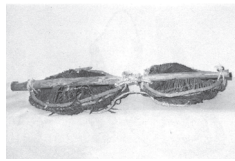
鹿1_図2180_N145_ハッシ



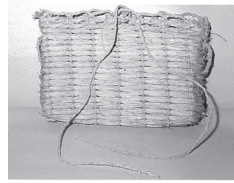
鹿1_図2187_N2613_クサオーダ



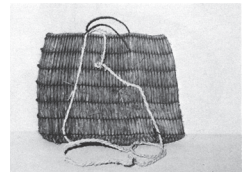
鹿1_図2197_N4248-1_コエイネ



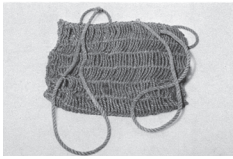
鹿1_図2195_N2714_コエムチオーダ



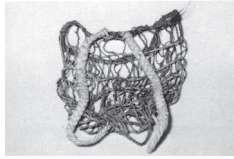
鹿1_図2200_N241_コエドーラ



鹿1_図2207_N2024_カンザー



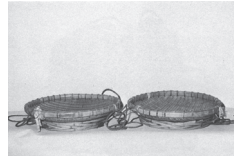
鹿1_図2213_N56_カガイ



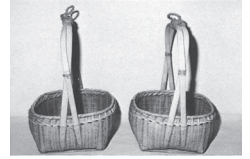
鹿1_図2222_N529_クサキリカガイ



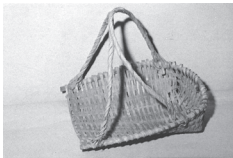
鹿1_図2253_N1179_ツヅラカガイ



鹿1_図2258_N662_イネバラ



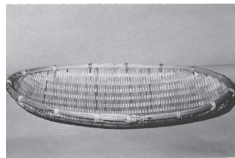
鹿1_図2265_N3251_イネテゴ



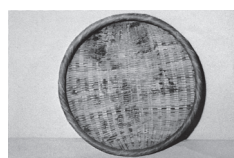
鹿1_図2274_N496-1_カタゲブイ



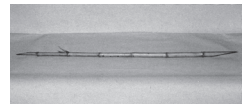
鹿1_図2276_N782_木ブイ



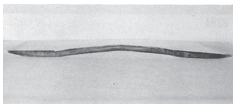
鹿1_図2300_N3008_クマデ



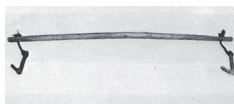
鹿1_図2305_N3539_イットジョケ



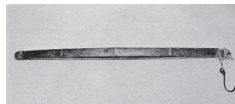
鹿1_図2308_N392_タケヤマオコ



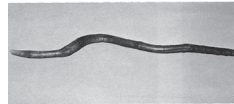
鹿1_図2319_N3721_オーホ



鹿1_図2329_N176_ミズサシ



鹿1_図2353_N3464_イネダシ

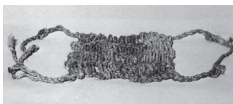


鹿1_図2376_N72_カタボウ

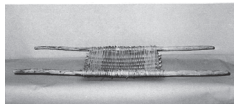


鹿1_図2380_N4055_カタゲマタ

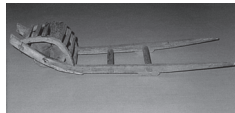
交通・運輸・通信【畜力運搬】



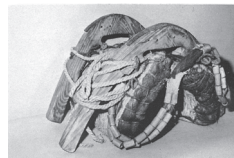
鹿1_図2365_N1500_モッコ



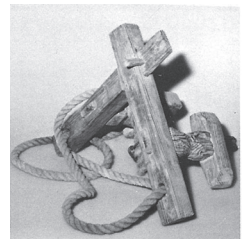
鹿1_図2370_N4126_タケモッコ



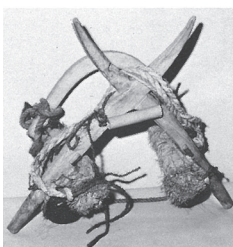
鹿1_図2372_N152_ネコグイマ



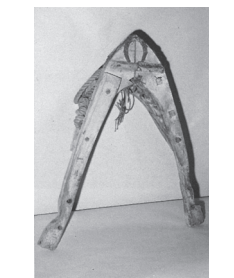
鹿1_図2438_N2090_ニグラ



鹿1_図2424_N1416_ジビキグラ



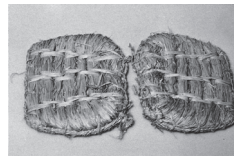
鹿1_図2409_N974_タグラ



鹿1_図2472_N2842_バシャクラ



鹿1_図2462_N2790_ウシクラ

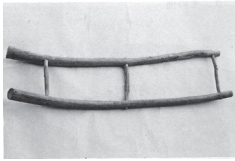


鹿1_図2518_N2358_シタビラ

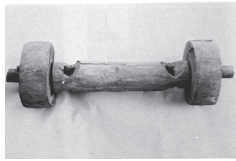


鹿1_図2532_N797_カン

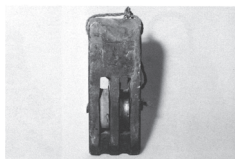
交通・運輸・通信【その他】



鹿1_図2573_N790_ソリ



鹿1_図2576_N598_ダシゴロ



鹿1_図2631_N2183-2_カッシャ



鹿1_図2634_N382-1_ヒリョウダル



鹿1_図2638_N1541_ミツタンゴ

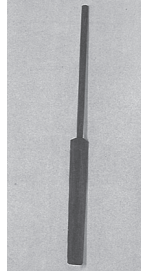
漁撈【漁船と付属品】



鹿1_図2657_N2376-2_コエタンゴ



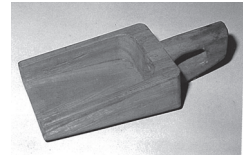
鹿2_図2666_N1_マルキブネ



鹿2_図2684_N2488_カイ



鹿2_図2692_N2490_ホ

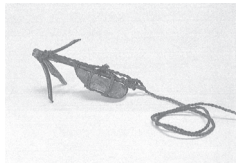


-1鹿2_図2705_N229_アカトリ

漁撈【海漁撈具】



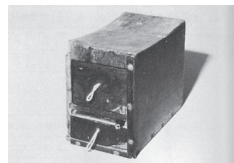
-2鹿2_図2720_N2150_イカリ



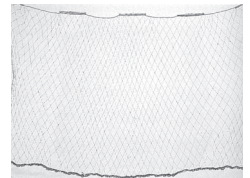
-3鹿2_図2722_N2487_イカリ



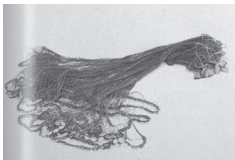
鹿2_図2761_N3277_カラト



鹿2_図2774_N471_トンコッ



鹿2_図2791_N360_エビアミ2



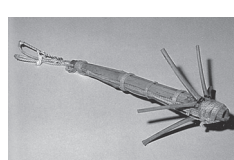
鹿2_図2792_N361_シモサアミ



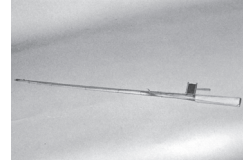
鹿2_図2801_N3912_ナゲアミ



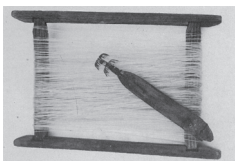
鹿2_図2802_N144_サデ



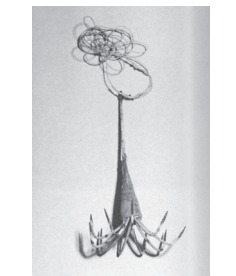
鹿2_図3385_N1025-1_スバル



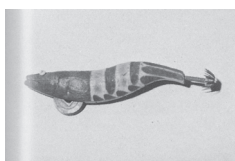
鹿2_図2812_N1467_イカヒキサオ



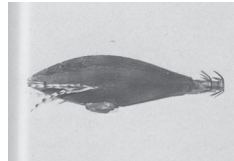
鹿2_図2837_N3512_イカツリドウグ



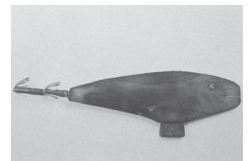
鹿2_図2847_N4397_ヒツカケ



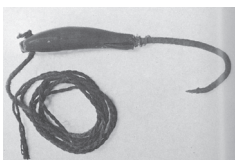
鹿2_図2875_N1466-2_イカエギ



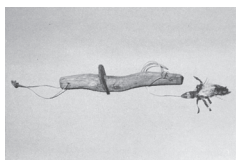
鹿2_図2887_N1753-1_エドギ



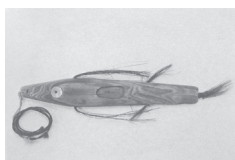
鹿2_図2975_N3790_イキャアイル



鹿2_図3012_N3346_ツノビキ



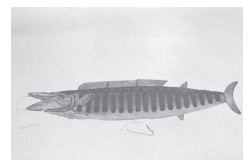
鹿2_図3031_N3992_カツオシビのホロ



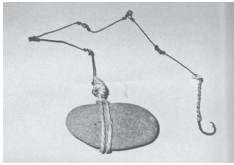
鹿2_図3345_N2480_サワラエギ



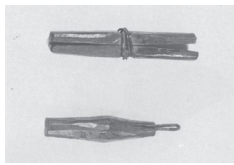
鹿2_図3349_N3878_ソウラガナ



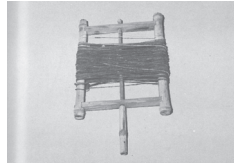
鹿2_図3353_N2494_フクロエギ



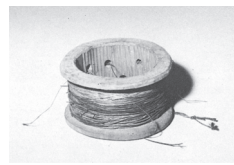
鹿2_図3127_N4182_タバメツリ



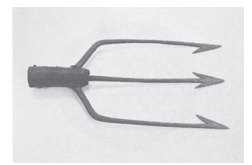
鹿2_図3509_N82_ククミとハリマゲ



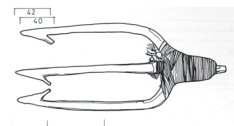
鹿2_図3176_N3777_スガマ



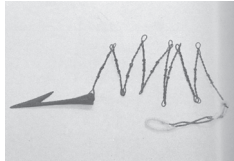
鹿2_図3008_N2931_ナワマキ



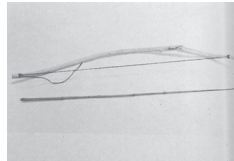
鹿2_図3203_N2810_トギヤ



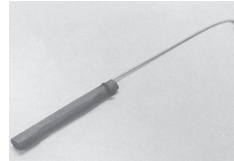
鹿2_図3206_N3806_トギヤ



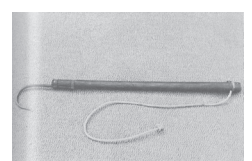
鹿2_図3230_N459_モリ



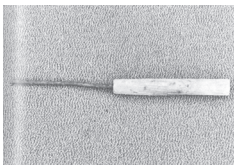
鹿2_図3241_N2664_イチギヤ



鹿2_図3244_N2648_カギ



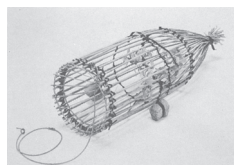
鹿2_図3466_N3822_ハド



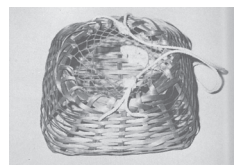
鹿2_図3262_N3475_イソクジイ



鹿2_図3266_N65_カキウチ



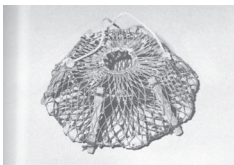
鹿2_図3286_N3237_イカカゴ



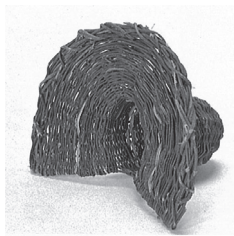
鹿2_図3316_N4149_イカゴ



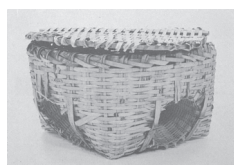
鹿2_図3334_N4245_タコツボ



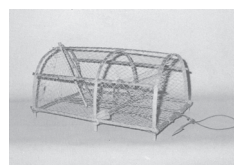
鹿2_図3327_N3177_ベカゴ



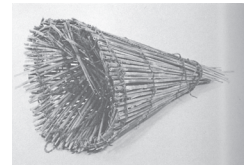
鹿2_図3279_N268_チイシ



鹿2_図3290_N1056_ガネテゴ



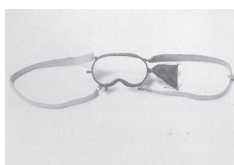
鹿2_図3295_N3238_アマカゴ



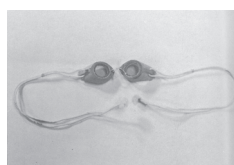
鹿2_図3288_N3886_アルホ



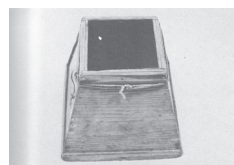
鹿2_図3355_N3498_ヨセアミノオドシ



鹿2_図3362_N3376_スイチュウメガネ



鹿2_図3365_N2151_スイチュウメガネ



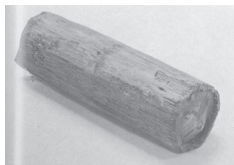
鹿2_図3371_N1849_ハコメガネ



鹿2_図3375_N1313_ハコメガネ



鹿2_図3396_N1286_ウキ



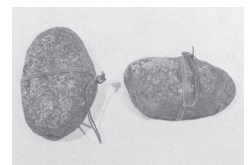
鹿2_図3404_N2198_ウキ



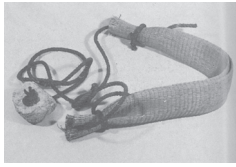
鹿2_図3417_N210_キビナゴアミウケ



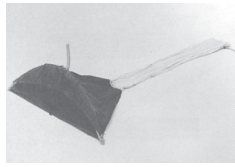
鹿2_図3434_N2061_イワシシ



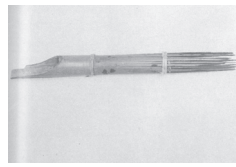
鹿2_図3447_N1641_オモリ



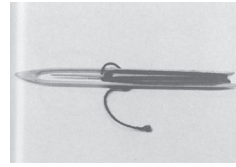
鹿2_図3453_N472_ウグイ



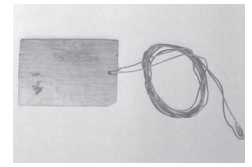
鹿2_図3470_N2912_アマメブクロ



鹿2_図3475_N2917_エサツキ

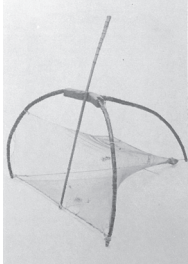


鹿2_図3491_N1823_アマバリ

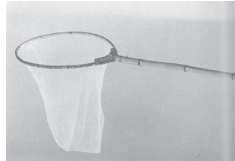


鹿2_図3498_N1801_イオゴ

漁撈【川漁撈具】



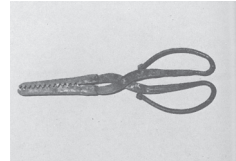
鹿2_図3528_N4156_サデアン



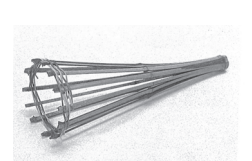
鹿2_図3531_N3262_ニゴイカキ



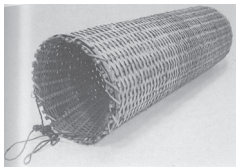
鹿2_図3542_N3364_ウナギカギ



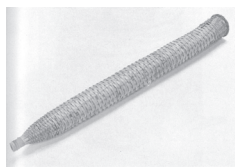
鹿2_図3546_N4363_ウナギバサミ



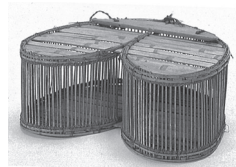
鹿2_図3548_N737-2_ウケ



鹿2_図3550_N658_ウケ



鹿2_図3575_N4173_ウナツカガツ



鹿2_図3596_N197_ヒビ



鹿2_図3593_N4083_ガネテゴ

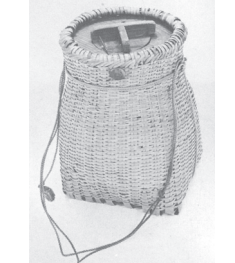


鹿2_図3618_N418_ミミツボ

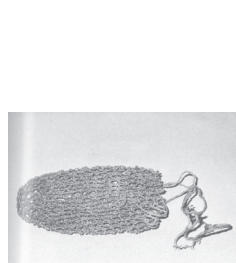
漁撈【収納・調製・運搬用具】



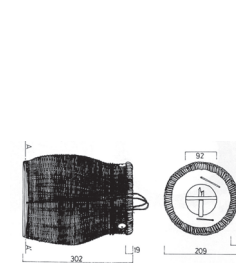
鹿2_図3665_N223_ビク



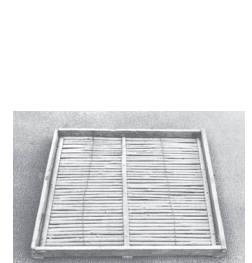
鹿2_図3676_N3785_イバラク



鹿2_図3699_N2299_アンブクル

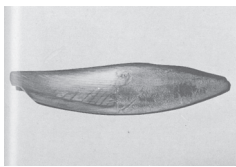


鹿2_図3658_N2925_アマメカゴ

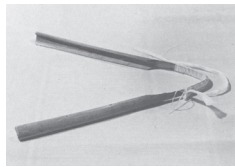


鹿2_図3711_N1915_セイロ

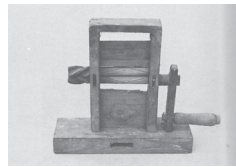
生糸・染織【整糸用具】



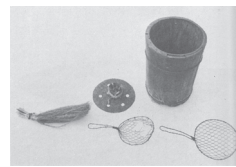
鹿2_図3733_N4318-2_カッオブシの型



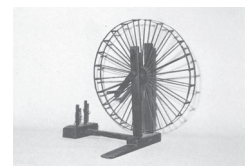
鹿2_図3768_N2336_バシヤクダ



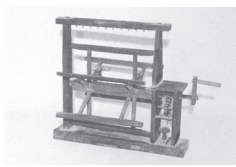
鹿2_図3781_N2235_サネクリキ



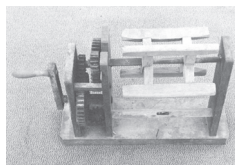
鹿2_図3796_N3571_イトトリオケ



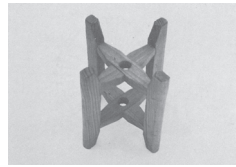
鹿2_図3809_N3215_イトクリ



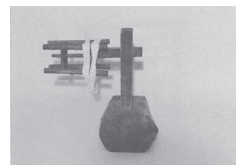
鹿2_図3818_N959_ヨリカケバタ



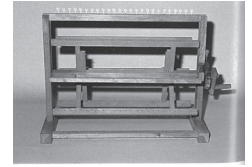
鹿2_図3831_N4009_ザグルマ



鹿2_図3892_N3584_イトワク

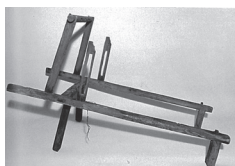


鹿2_図3900_N626_メドキ

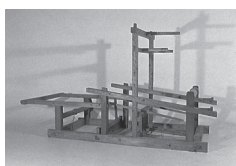


鹿2_図3906_N3213_アゲワク

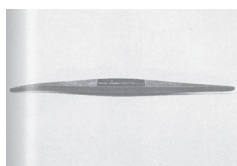
生糸・染織【機織り用具】



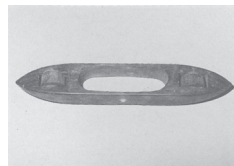
鹿2_図3924_N116_ジバタ



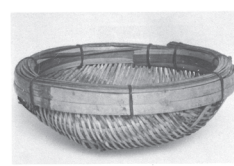
鹿2_図3928_N614_タカハタ



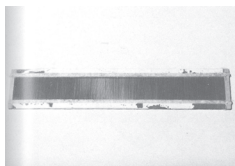
鹿2_図3933_N28_ヒ



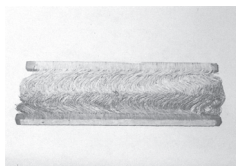
鹿2_図3950_N881_ヒ



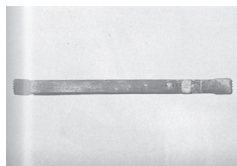
鹿1_図0905_N1251_ウダイレ



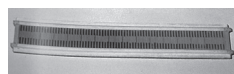
鹿2_図3960_N968_オサ



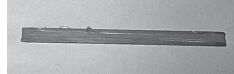
鹿2_図3978_N2219_カケイト



鹿2_図3991_N1419-1_シユーシ

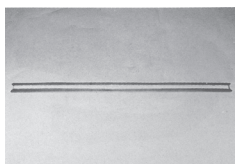


鹿2_図3999_N3224-1_シメオサ



鹿2_図4025_N3218-2_シメヒ

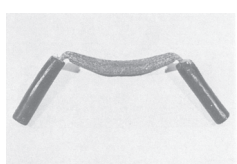
手工・諸職【木工細工用具】



鹿2_図4156_N3221-28_シメヒ



鹿2_図4167_N4468_クレワリボウチョウ



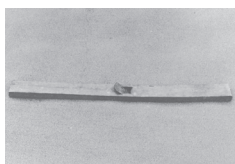
鹿2_図4172_N2161_ソトゼン



鹿2_図4176_N2162_ウチゼン



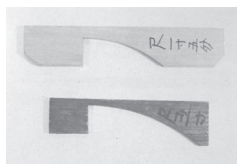
鹿2_図4187_N1949_ウスキリチヨウナ



鹿2_図4192_N3854_ショウジキガンナ



鹿2_図4199_N4462_コンバス



鹿2_図4201_N540-1_カマ



鹿2_図4203_N3740_タルカタ

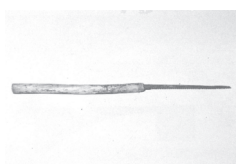


鹿2_図4222_N3795_サイジチ

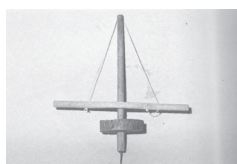
手工・諸職【藁細工用具】



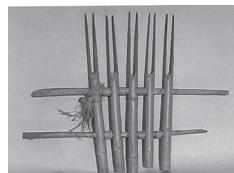
鹿2_図4224_N3743_タルシメ



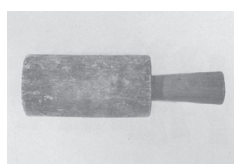
鹿2_図4229_N4467_ヒキマワシノコ



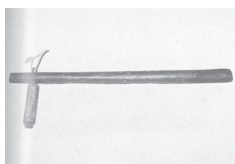
鹿2_図4233_N2332_クルマテ



鹿2_図4237_N429_ワラスグイ



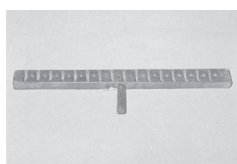
鹿2_図4259_N1628_ワラウチ



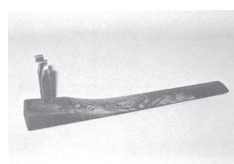
鹿2_図4282_N2661_チナハキヤマ



鹿2_図4329_N2228_テシロ



鹿2_図4314_N483_コテ

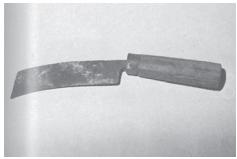


鹿2_図4343_N235_ゾオリグイ

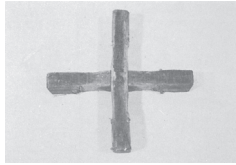


鹿2_図4344_N3079_ハナラタテグシ

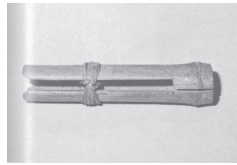
手工・諸職【竹細工用具】



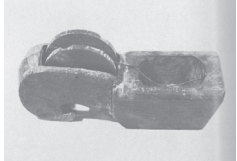
鹿2_図4362_N796-2_タケキイボチヨ



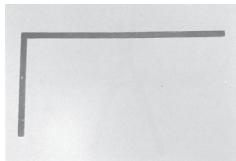
鹿2_図4368_N806_タケワイ



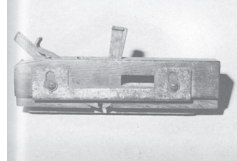
鹿2_図4380_N1005-2_カラスグチ



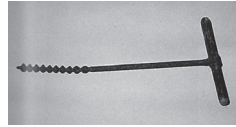
鹿2_図4414_N1665_スツボ



鹿2_図4423_N1667_バンジョガネ



鹿2_図4426_N1363-1_ケビキ



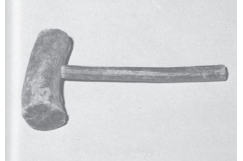
鹿2_図4409_N2683-4_ボロ



鹿2_図4410_N548-1_クギノミ



鹿2_図4429_N1287-2_ドンゾ

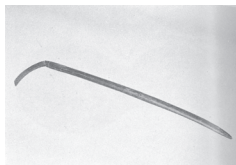


鹿2_図4430_N1429_ツチ

手工・諸職【屋根葺用具】



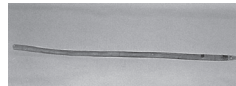
鹿2_図4458_N1959_ヤネバサミ



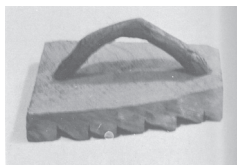
鹿2_図4464_N民362_ヤネフキガマ



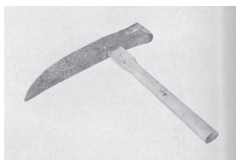
鹿2_図4465_N3410_ヤネタタツ



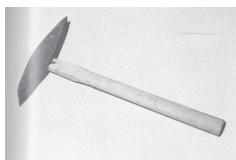
鹿2_図4471_N3738_ハリ



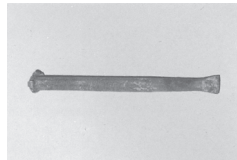
鹿2_図4481_N507_カヤアゲ



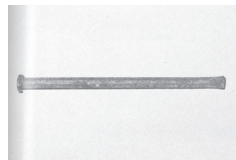
鹿2_図4484_N2411_ツルハン



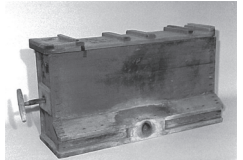
鹿2_図4491_N2415_タタキ



鹿2_図4494_N2639_ハツリノミ

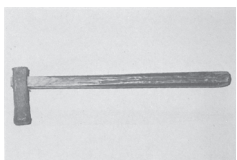


鹿2_図4497_N1886-1_カナテコ

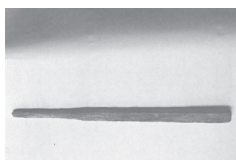


鹿2_図4506_N4105_フィゴ

手工・諸職【鍛冶用具】



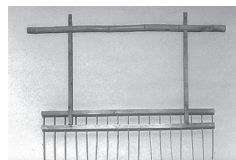
鹿2_図4510_N1960_コヅチ



鹿2_図4521_N1092_ミズウチボウ



鹿2_図4523_N1090_ノリトキツボ

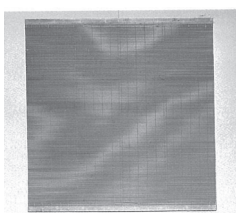


鹿2_図4528_N1060_マンガ

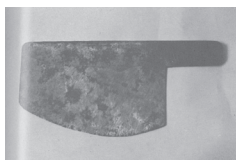


鹿2_図4533_N1064_ケタ

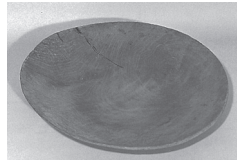
手工・諸職【紙漉き用具】



鹿2_図4538_N1066-1_ミス



鹿2_図4553_N853-2_カミキイボチヨ



鹿2_図4584_N4412_ユリバン

鋳業【製錬】



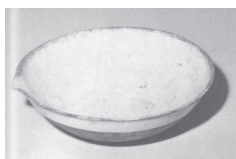
鹿2_図4586_N920-2_金精練用ルツボ



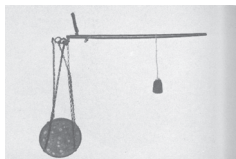
鹿2_図4594_N923_金精練用乳鉢

商業【交易用具】

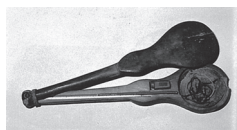
商業【金融の種類】



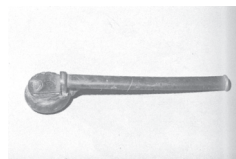
鹿2_図4595_N921-1_金精練用蒸発皿



鹿2_図4629_N239_ハカリ



鹿2_図4656_N4400_チキイ

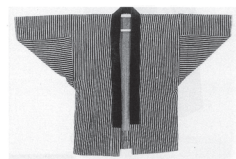


鹿2_図4667_N725_ヤタテ

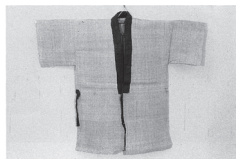


鹿2_図4677_N1663_キンコ

衣【衣服】



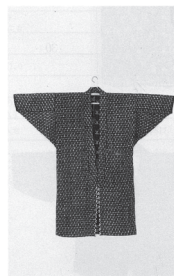
鹿3_図0034_N1427_タナシ



鹿3_図0045_N1400_クツタナシ



鹿3_図0049_N1320_ツヅリ



鹿3_図0055_N7_ドンジャ



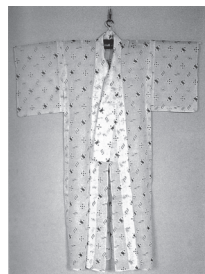
鹿3_図0073_N2500_ニンブ



鹿4_図0030_N2806_チャンチャンコ



鹿4_図0012_N2788_アワセ



鹿4_図0001_N2771_八重山上布長着(白緋)



鹿4_図0013_N2797_ヒトエ



鹿3_図0143_N1592_バシャギ



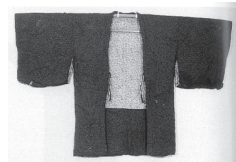
鹿4_図0017_N2795_モンツキ



鹿3_図0168_N364_手織り木綿の羽織



鹿4_図0023_N2791_ハオリ



鹿3_図0194_N2189_ワタイレ



鹿4_図0022_N2803_ナゴヤオビ



鹿3_図0301_N180_イッサキの山ゾーリ



鹿4_図0033_N2866_タケカワゾウリ



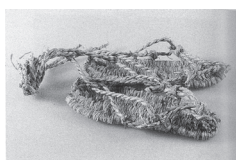
鹿3_図00334_N2422_ゲタ



鹿4_図0035_N2682_カチキゲタ



鹿3_図0353_N317_アシナカ



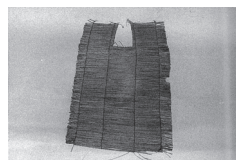
鹿3_図0349_N2142_ワラジ(対)



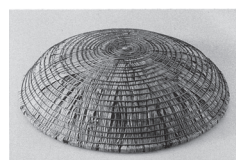
鹿3_図0382_N542_カヤミノ



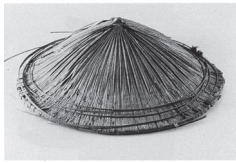
鹿3_図0406_N1407_シュロミノ(棕相糞)



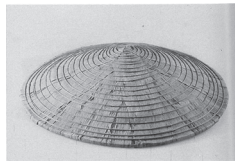
鹿3_図0412_N213_ヒミノ



鹿3_図0426_N2327_スゲカサ



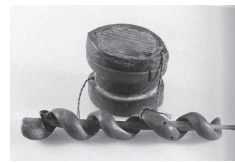
鹿3_図0431_N1007_クバガサ



鹿3_図0416_N515-2_タカンバッチョ



鹿4_図0027_N2789_コート

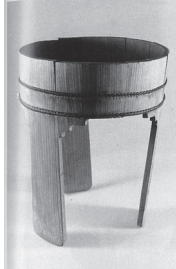


鹿3_図0463_N287_タバコイレ



鹿3_図0470_N1994_タバコイレ

衣【化粧用具】



鹿3_図0483_N1130_ピンダレ



鹿4_図0049_N2814_ツゲシ



鹿4_図0051_N2816_ツゲシ

衣【裁縫用具】



鹿3_図0494_N1179_サイホウバコ(ハリ箱)



鹿3_図0500_N2094_クケ台

衣【洗濯用具】



鹿4_図0081_N2694_セントクタイ



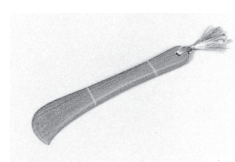
鹿3_図0516_N2458_ヒノシ



鹿3_図0521_N2391_アイロン



鹿4_図0078_N2687_コテ



鹿4_図0077_N2831_ツゲ製ヘラ

食【貯蔵用具】



鹿3_図0532_N429_ミツタイ(水樽)



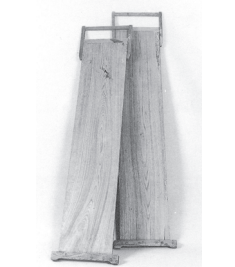
鹿3_図0535_N1287_ミズダル



鹿3_図0536_N843_ショウユダラ



鹿4_図0087_N2703_ショウユダラ



鹿4_図0080_N2880_アライバリイタ



鹿3_図0544_N1357_ミンダラ



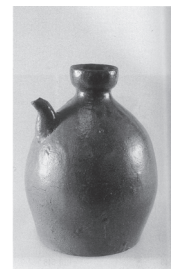
鹿3_図0586_N1507_ミンガミ



鹿3_図0604_N2016_ショウチュウガメ



鹿3_図0684_N2515_甘酒半胴(ハンズ)



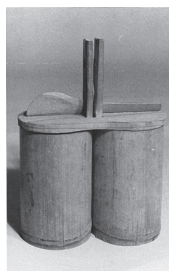
鹿3_図0700_N335-1_ショウユダラ(壺)



鹿3_図0724_N1059_コメビツ



鹿3_図0707_N416_ミノノコダシ



鹿3_図0710_N671_ミソイレ



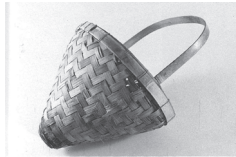
鹿3_図0728_N624_ニギメシタンゴ



鹿3_図0748_N460_イオハツ



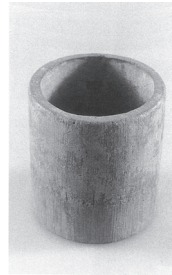
鹿4_図0094_N2808_オカベテゴ



鹿3_図0773_N398_シオゲ(シオテゴ)



鹿3_図0782_N産894_エジョケ



鹿3_図0802_N141_ツガ(枡)



鹿3_図0809_N産2383_ジョウゴ

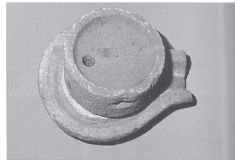
食【製造用具】



鹿3_図0818_N864_キウス



鹿3_図0819_N1475_ウシ



鹿3_図0831_N420_コナヒキウス



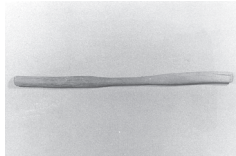
鹿3_図0843_N1312_イシウス



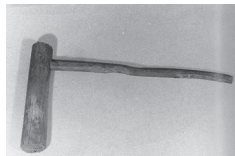
鹿3_図0862_N612_キブネ(ヒッコケ)



鹿3_図0865_1067-1_ヒキウス一式



鹿3_図0880_N625_テギネ



鹿3_図0910_N269_キネ



鹿3_図0932_N144_カヤゴセイロー



鹿3_図0934_N202_セイロ



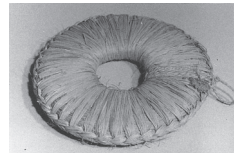
鹿3_図0954_N2152_セイロ



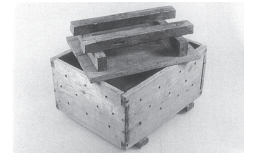
鹿3_図0957_N607_コシキ



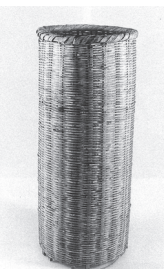
鹿3_図0963_N373_マイゼロ



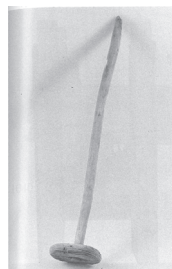
鹿3_図0965_N299_ハワ



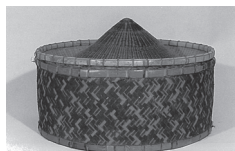
鹿3_図0988_N1003_トーフバコ



鹿3_図0996_N391_ス(醤油のスカゴ)



鹿3_図1012_N1392_マゼ



鹿3_図1015_N383_チャベロ



鹿3_図1021_N1667_フィラ



鹿3_図1029_N144 ショウチュウジョウリュウキ

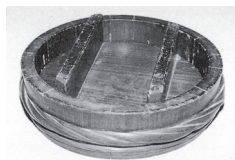
食【炊事用具】



鹿3_図1033_N2252_ツプロ



鹿3_図1039_N798_アブラスメキ



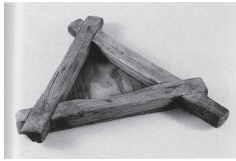
鹿4_図1055_N2899_スシオケ



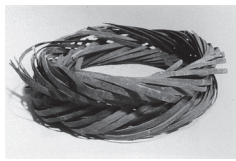
鹿3_図1053_N2472_モロブタ



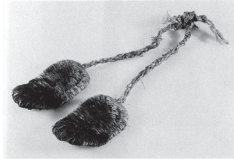
鹿3_図1131_N161_カマツタ(釜フタ)



鹿3_図1152_N623-1_ハガマスケ



鹿3_図1157_N1012_ナベイシ



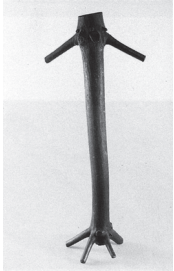
鹿3_図1170_N1953_ハガマトイ



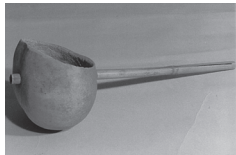
鹿3_図1210_N592_キイバン(マナイタ)



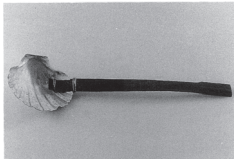
鹿3_図1213_N931_マナイタ



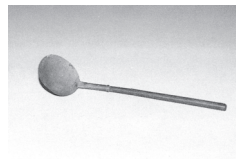
鹿3_図1221_N428_イモフン



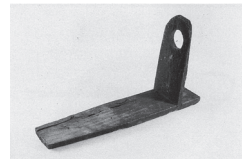
鹿3_図1230_N2023_ヒョウタンピシャク



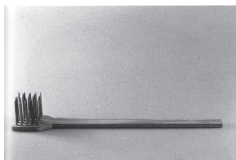
鹿3_図1241_N1443_ケジャクシ



鹿4_図0123_N2714_シャクシ



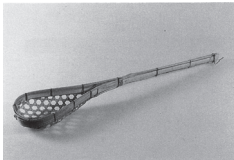
鹿3_図1262_N297_バカダイ



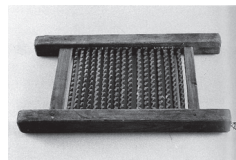
鹿3_図1264_N1554_ソウメンカケ



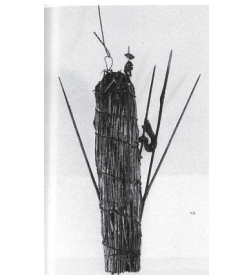
鹿4_図0122_N2712_チャスクイ



鹿3_図1265_N573_ソバアゲ

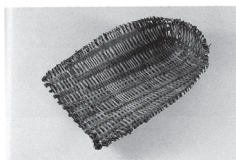


鹿3_図1281_N1111_タカオロシ

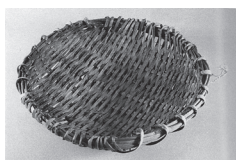


鹿3_図1300_N426_ツト(ホチエ)

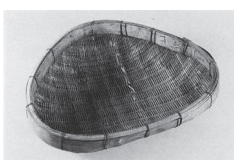
食【食器】



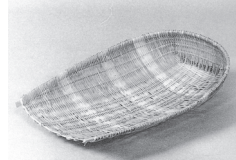
鹿3_図1310_N736_キッタメジヨケ



鹿3_図1333_N2028_ソウケ



鹿3_図1335_N2098_三角ジョケ



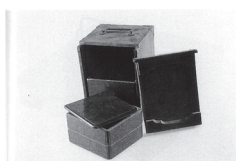
鹿4_図0131_N2869_ヤサイキリテゴ



鹿3_図1354_N753_メシビツ



鹿3_図1365_N560_ワラカゴ



鹿3_図1393_N111_野遊用弁当箱(箱付三重)



鹿3_図1413_N2395_ペントウバコ



鹿3_図1418_N548_ナガゴイ



鹿3_図1422_N2451_ガエ



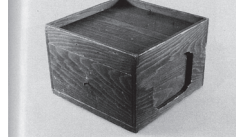
鹿4_図0138_N2876_コイ



鹿3_図1426_N2535_ハンゴウ



鹿3_図1457_N838-3_タカゼン



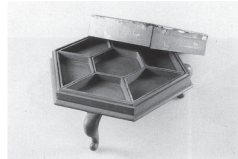
鹿3_図1468_N1436_ハコゼン



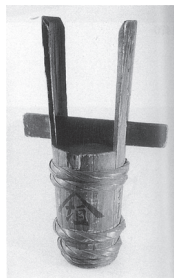
鹿3_図1476_N754_スズイフタ



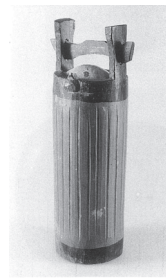
鹿3_図1484_N664_キジボン



鹿3_図1492_N792_トンダフ



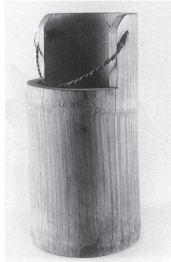
鹿3_図1499_N1017_ツノダル



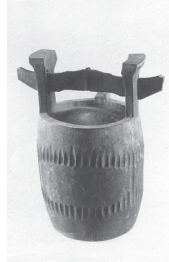
鹿3_図1509_N903_シュツツ



鹿4_図0171_N2723_サカズキ



鹿3_図1522_N88_スイトウ



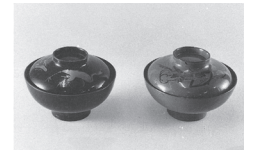
鹿3_図1535_N2105_スイトウ



鹿3_図1539_N39_トックリ

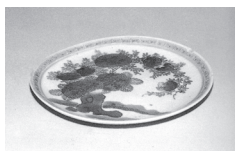


鹿3_図1553_N1479_トウツクイ



鹿3_図1574_N846_フン

食【その他】



鹿4_図0174_N2930_サラ



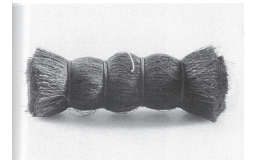
鹿3_図1621_N598-1_チャワンメゴ



鹿3_図1641_N615_チャブネ



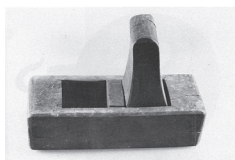
鹿4_図0121_N2711_チャブネ



鹿3_図1661_N2316_ソラ

住【収納具】

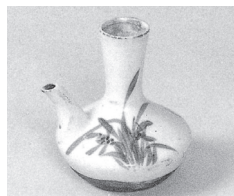
住【照明具】



鹿3_図1664_N870_ツツダシ



鹿3_図1668_N165_カンツキ(罫付)



鹿4_図0169_N2614_カラカラ



鹿4_図0032_N2879_衣桁



鹿3_図1746_N1026_ロソクタテ



鹿3_図1754_N554_アンドン

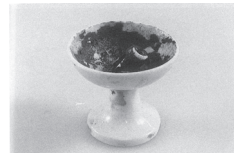
住【暖房具】



鹿3_図1764_N543-1_知覧傘提灯



鹿3_図1792_N1160_サゲランプ



鹿3_図1801_N704_トウミョウダイ



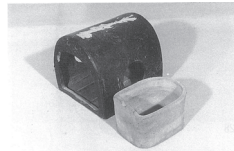
鹿3_図1803_N1309_カガリダイ



鹿3_図1824_N1135_ヒバチ



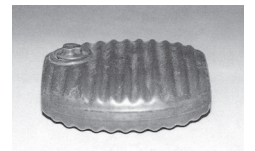
鹿4_図0183_N2783_ハコヒバチ



鹿3_図1838_N347_コタツ



鹿3_図1847_N2492_ユタンボ

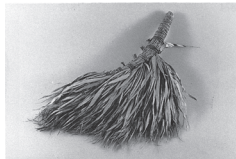


鹿4_図0193_N2740_ユタンボ

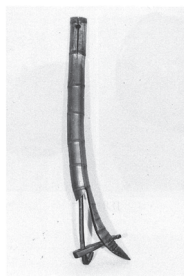
住【その他】



鹿3_図1852_N20_テボーキ



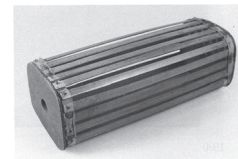
鹿3_図1859_N2498_ササボウキ(小)



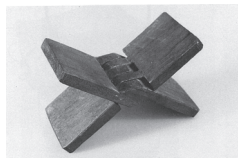
鹿3_図1875_N508_ジデカキ



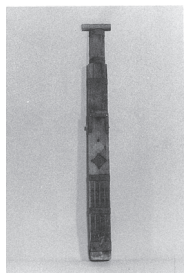
鹿3_図1905_N119-3_ホンバコ



鹿3_図1911_N833_マクラ(竹製)



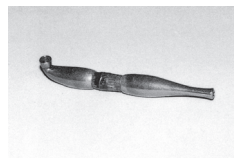
鹿3_図1914_N1351_タタミマクラ



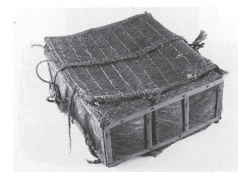
鹿3_図1916_N372_ボンバチ



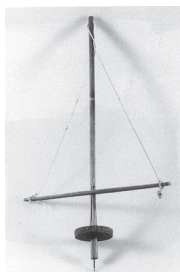
鹿3_図1939_N1336_タバコボン



鹿4_図0198_N2626_キセル



鹿3_図1956_N336_シュロ製ランドセル



鹿3_図1960_N1139_ロクロギリ



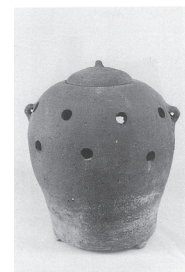
鹿3_図1973_N305_スマイレ



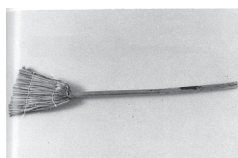
鹿4_図0189_N2735_スマミバコ



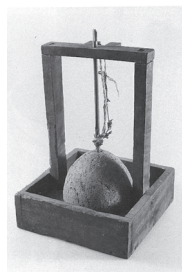
鹿4_図0187_N2742_シチリン



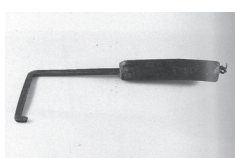
鹿3_図1965_N863_ヒケシツボ



鹿3_図1987_N1979_ハエウチ



鹿3_図1991_N80_ネズミトリ



鹿3_図2029_N2336_クラノカギ

【信仰】

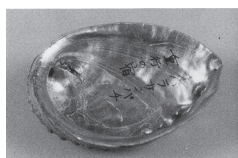


鹿3_図2044_N2352_タノカミゾウ(石像)



鹿3_図2046_N2462_タノカミ

【民俗知識】



鹿3_図2123_N388_マヨケノアワビ

【民俗芸能・娯楽】



鹿3_図2127_N2368_タカメン



鹿3_図2130_N158_メン(カズラ面)



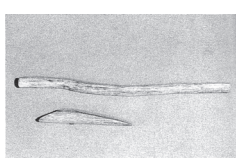
鹿3_図2138_N2364_メン



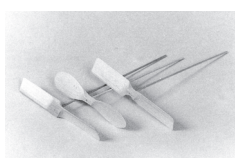
鹿3_図2148_N1795_サガシボゼ



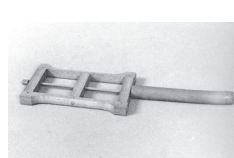
鹿3_図2194_N332_ナンコグイ



鹿3_図2208_N2547-1_ギツチョ



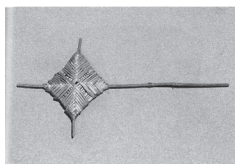
鹿4_図0277_N2666_タケトンボ



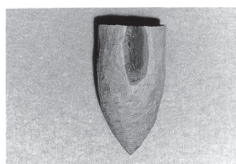
鹿4_図0280_N2669_タコアゲ用イトマキ



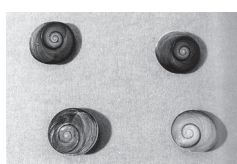
鹿4_図0282_N2638_闘鶏用のケン



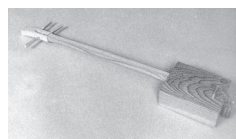
鹿3_図2216_N773_ホタルカゴ



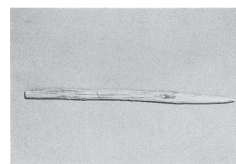
鹿3_図2225_N1986_コウル



鹿3_図2226_N1987_チンチキ



鹿4_図0290_N2764_ゴットン



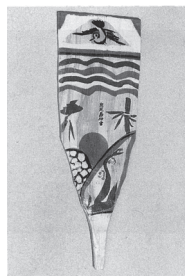
鹿3_図2230_N2548-2_ネン



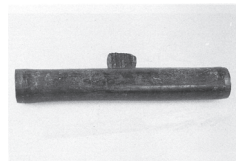
鹿3_図2231_N2570_鯛車



鹿4_図0287_N2653_コウバコ



鹿3_図2237_N2576_ハゴイタ



鹿3_図2242_N857_トカキ(斗掻き)



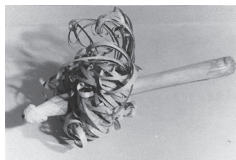
鹿3_図2246_N76_ズシガメ(厨子墓)

【人生儀礼】

【年中行事】



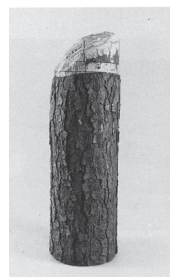
鹿3_図2266_N1773_ケズリカケ



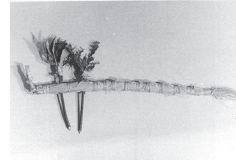
鹿3_図2288_N1709_イワイボウ(ハラメ棒)



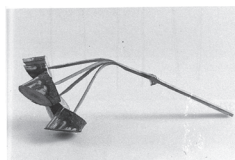
鹿3_図2292_N1772_ハラメンボウ



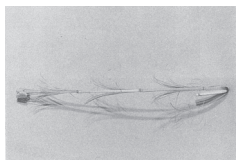
鹿3_図2316_N1763_新嫁への祝い物



鹿3_図2263_N2116_ツルノトイ



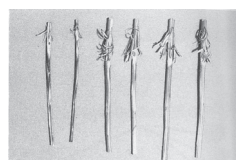
鹿3_図2338_N127_アワホダイ



鹿3_図2339_N1776_アワンボ・コメンボ



鹿3_図2361_N1696-1_モグラウツ棒(ホテ)



鹿3_図2371_N1091_ホダレヒキのハン



鹿3_図2393_N485_郷土人形(娘)



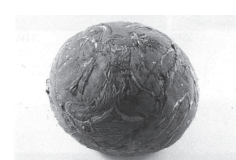
鹿3_図2411_N1713_帖佐人形(イヌコロ)



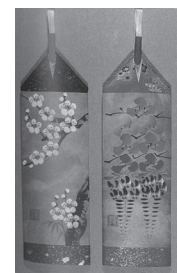
鹿3_図2422_N2050_帖佐人形



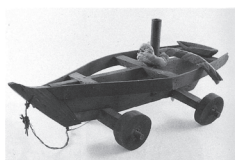
鹿3_図2446_N2281_ヒナジヨ



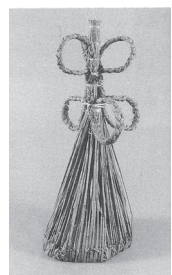
鹿3_図2460_N793_金助マリ



鹿4_図0298_N2640_サツマイトビナ



鹿3_図2468_N2540_ガラガラフネ



鹿3_図2488_N1801_ソラヨイガサ



鹿3_図2490_N1803_コシミノ(ソラヨイ用)



鹿3_図2515_N136_クセモンボウ(福祭文棒)



鹿4_図0300_N2754_ノボリ

鹿児島県の民具名称 ——広域的比較研究を目指す試み——

川野和昭

1. はじめに

『南九州の民具』（慶友社・昭和 43）を著した小野重朗は、この著の冒頭で南九州の民具の特異性をその素材に求め、「竹や草の民具」、「石製の民具」が多いことを指摘し、それが亜熱帯的な風土と竹の生育、火山の多さ、畑作的、非稲作的な農耕という南九州の植生や地質を含めた環境と生業の上に成立していることを主張した。また、緻密な仕事ではあっても工芸的な造形までに至らなかったこともその特徴として挙げている。

さらに、小野の重要な視点は、本土文化圏（南九州・薩南諸島）と奄美文化圏（奄美諸島）とに、「民具の分布境界線」のあることを指摘し、その民具の相違を、「異質の文化」と理解するか、「同質の、しかし古型の原型に近い文化」と理解するかを探求することが、民具研究の課題であり、研究を前進させる方法であると提示したことである。そこには、地域の悉皆調査に基づく分布図から変異と変遷を比較検討しようという小野民俗・民具学の研究方法が明確に示されている。

そのためには、小野が指摘した「一つ一つの民具について変異と変遷と分布」のうちの「変遷」を除いて、「克明にたどってゆく」道を歩むことである。まさしくそこにしか「この学問を進める方法はなさそう」なのである。つまり、このことが民具研究を文化比較のための研究へと推し進めていく方法であるということである。

さて、これまで筆者が鹿児島県歴史資料センター黎明館の民俗学分野の学芸員として、民具資料を用いた比較文化の展示を試みようとするときに、最も困難さを感じてきたことは、国内の各博物館が公開してきた収蔵目録類の名称を見ても、比較しようとする民具が具体的に描けないということであった。つまり、多くの場合標準名称や地域名称での記載が中心であり、その結果、展示のシナリオを作成するためには、現地に行って一つ一つ確認するしかないという困難さが伴うのである。地域の民具資料をもって地域の文化を抽出しようとするとき、民具資料はあまりにも日常的でありすぎ、文化レベルの議論・展示に成りにくく、地域の人が振り向きもしない懐古趣味的な展示という評価に終わってしまいがちなのである。日本列島の中で自分の地域の文化史的位置づけを試みようとするれば、必然的に広域的な比較という方法を取り入れるしかない。そのとき、一つの民具資料の名称をもつ

て具体的な像が描けないということは、県立レベルの博物館においてすら致命的なことであった。このことが今日の博物館における民俗分野の位置を危うくしている一因となっているのではないかとさえ思われたのである。つまり、民具資料の名称の問題は、地域を越えた広域的比較を試みようとするとき、極めて重要な鍵を握っているということである。

幸い、鹿児島県歴史資料センター黎明館の民俗学分野では、昭和 43 年建設のための準備室の開設以来、県内を 15 区分した有形民俗資料調査を、鹿児島民俗学会に委嘱して実施し、調査した民具一点一点についてカード化し、報告書を作成しながら収集を重ね、開館実施設計をする時点では、県内の民具の名称はもとよりその具体的形態、分布等について大方把握できる状態にあった。前掲の一覧はその後の収集を含めて収蔵目録として把握している地域名称を示したものである。

ここでは、そのいくつかの民具について、一つの民具に付された多様な地域名称の差異と具体的な形態差について紹介したい。そのことによって、同一の名称を持ちながら、形態的には必ずしも一致しない事実を紹介してみたい。そのことは、先に指摘した具体的形態が描ける名称の在り方を求めていくためにも必要な作業となると考えるからである。

また、鹿児島県は、行政区画として奄美諸島を含んでいる。このことは、小野重朗が指摘しているように、一つの民具の鹿児島と奄美諸島の地域名称の差異と形態的差異とを比較することで、その相違を、「異質の文化」と理解するか、「同質の、しかし古型の原型に近い文化」と理解するかを探求することを可能にする。

以下、こうした視点で具体的な民具のもつ多様な地域名称が示す多様な機能的特徴と形態的特徴について紹介し、地域名称の持つ文化史的な意味と限界性について述べてみたい。

2. 民具の地域名称が持つ具体と限界

1) 耕耘・播種

(1) オコシ

オコシという地域名称が示す民具は、機能的には牛馬に曳かせて田畑の土の荒起こしをする犁を示す。しかし、形態的には長床型と短床型とがあり、さらに刃先が鉄製のものと木製の長床の先端部分そのまま刃先となっているものがある。また、長床型はカラスキとも呼ばれ、南方を含めた外国

から移入されたもので、より古形のものであると認識されている。特に、さらに、奄美諸島では、床部が長く、それが地面をずって進むのでシマイザイ（鳥・甍り）と呼ばれ、奄美諸島在来のものであると認識され、曳く腕木は猫の背のように湾曲し、犁先はペン型の袋とじの形態を持ち、凸面を上にして取り付けてある。この刃先部は、同地域の小型の手鋏であるフィラの刃先部が凹面を上にして取り付けてある違いはあるものの、同類系のものである。一方、短床型のもは鹿兒島では改良犁とも呼ばれ、奄美諸島で大和犁と呼ばれ、鹿兒島から移入されたものと認識され、いずれも新しい形であると認識されている。

このように、鹿兒島ではオコシ、スキという地域名称だけでは、機能的な特徴は理解できても、その多様な形態と具体的に対応させることが困難なのである。

(2) ワタイモガ

この地域名称は、水田稲作に使用されるモガ（馬鋏）に由来するが、幅広の平板数枚を歯部として、大きく間隔を開けて取り付けられている。この特徴を「ワタル（渡る）」と呼んだ名称であり、機能的な特徴を示す名称としてはウネタテモガの方がわかりやすい。しかし、ワタイモガの名称の方が広く用いられており、畑作優占の鹿兒島の生業の特徴をよく表している民具であるが、これらの地域名称から平板を用いていること、その枚数の差などの具体的形態を描くことは不可能なのである。

(3) オデグワ

この地域名称は、オデ（台）とクワ（鋏）を組み合わせた名称である。檜などの堅木を台木として風呂状に成型し、鉄の刃を嵌め込んだいわゆる風呂鋏である。しかし、この地域名称は、台木を重視して付されており、鉄の刃のない木のみ鋏の存在がうかがわれる名称である。実際、イタグワ（板鋏）という台木のみ鋏が存在する。また、祭事ではあるが、大隅、薩摩、日向地域では、打ち植え祭りと称される春の田打ち行事では、木の股木を鋏として用いて、田に見立てた境内を打ち起こすことも見られるのである。しかし、この地域名称では、その中心的機能としての引き鋏、つまり、手前に引くように土を起こす機能の姿は見えてこないし、種子島のオデグワあるいはマムシノビンタという地域名を持つ鋏は、柄と台木との角度が大きく、打ち起こす機能も持ったものもある。やはり、こうした地域名称を越えて、機能的特徴や形態的特徴を表現し分ける名称の確立に向けた努力が必要があるであろう。

(4) トング

トング（唐鋏）は奄美諸島の地域名称で、トゲ、トウガなどという名称も持つ。その名称から南方を含めた外国から来た鋏であると認識されていることがわかる。刃幅は狭く、刃先は三日月形に成型され、柄の取り付け部は刃部の根元を裏表から挟むように鍛接され、柄と刃の角度は70度以上と大きく、土を打ち起こす打ち鋏である。アラジバテ（焼畑）や砂糖黍畑などの荒起こしに用いられる。この鋏とほとんど

同じ形態と木の藺生的特徴を持つ鋏は、中国広西壮族自治区など中国南西部で現在も用いられている。薩摩藩が18世紀に編纂した『整形図説』は、その形態的特徴を余すことなく描き、「南島鑿」という名称で紹介しており、やはり「南方」という認識を持っている。こうした打ち鋏は、大隅、薩摩、日向地域では、ヤマクワと呼ばれ、コバ（焼畑）や植林作業などで土を打ち起こすのに用いられる。この鋏は、高知山地の焼畑地帯でもトウグワの名称で分布する。どうやら、南方からの焼畑文化と深くかかわりを持つ鋏である可能性が高い。

これに対して、大隅、薩摩では、地面に打ち込んで手前に引き起こす小型の片手で持つ手鋏が見られる。特に三島村ではテグワの地域名称で焼畑の耕起などに用いられ、甌島ではユリホリトウガの地域名称で、海岸の急斜面に生えているカノコリを掘るのに用いられている。トングとの系譜関係が考えられる小型の片手鋏である。

(5) ヘラ

ヘラ（篋）は、柄木に鉄製の細長い薄板の刃をつけ、手元から向うに突き出すようにして、イモの苗植えや収穫、除草作業に用いられ、トカラ列島から奄美諸島、八重山諸島までにかけてみられる小型の手鋏の一種である。フィラ、ピラなどという地域名称を持つ。ただ、このヘラという地域名称は、大隅、薩摩地域では、鋏の刃部に付いた土をそぎ落とすための、竹を平たく削り出した篋にも、クワベラ（鋏篋）、タケベラ（竹篋）として見られ、さらに、トカラ列島のアワヤマ（粟栽培の竹の焼畑）の穂摘み具にもみられる名称であり、機能、形態ともに異なる多様な民具に付される名称である。その地域名称による機能、形態の差異は表現していない。

さらに、奄美大島や加計呂麻島には、トゲベラという地域名称を持つ、形態的にはトングとヘラの両者の特徴を持ち、使い方も打ち込んで手前に引き起こすトングの機能的特徴と、手元から向うに突き出すヘラの機能的特徴を併せ持っている。現在のところ、ヘラがトカラ列島から奄美諸島、八重山諸島にかけてのみ分布するのに対して、トゲベラは奄美チベット寄りのプータンの東部のタシヤンツェ地域に、形態的、機能的にも完全に一致するものを収集できている。

以上、耕耘・播種に関する民具に関して代表的な民具を取り上げて、地域名称が形態的特徴と機能的特徴をさまざまに組み合わせながら一つ一つの民具に付されていることがわかる。しかし、その多様性ゆえに当該地域外の人々にとって、当該地域的名称からは、具体的な形態を描くことは、極めて困難である。このことは民具学を進めていくうえで致命的である。

次に、同様な視点で育成・管理に関する民具を見てみたい。

2) 育成・管理

(1) タゲタ

タゲタ（田下駄）の地域名称が大隅、薩摩全域的に見ら

れ、大隅東海岸地帯にアシダという地域名称も認められる。形態的には、縦方向にした薄い杉板を方形に組み、中央部に足を置く板を平らに置き、四隅から対角交差させるように棕櫚縄をつけて、綱を引き揚げながら足を持ち上げ移動する。機能的には、カシキ（緑肥）の踏み込み用に用いられている。種子島にみられるフンコンゲタの地域名称はそのことを物語っている。湿田に沈まないために用いられるという例は聞かれない。

(2) ソロッパ

ソロッパは、前方を半円形に成型した板の底に、複数の竹ないしは鉄製の爪を植え込み、柄木を取り付け、水田の稲株の間を押したり引いたりしながら前に進み、除草と中耕をする除草具兼中耕具の地域名称である。ムタズイ（湿田を擦る）やヒガレダカカジイ（干からびた田を引っ掻く）という地域名称はその機能的特徴をよく表している。ゲタ（下駄）、ジョイ（草履）、セッタ（雪駄）などの地域名称は爪を埋め込んだ板の形態的特徴をそれぞれに見立てた名称である。

一方、ハッタンボ（八反歩）は、一日に八反歩もの広さの田の除草ができるという機能的な特徴を表す名称である。板にはめ込んだ歯の部分、回転車の形に改良されたものである。

また、ガンヅメ（雁爪）の名称は、その形態が雁の爪の形が似ているという形態的特徴をとらえた名称である。短い丸木の柄に爪を打ち込み、手に持ち稲株の間に打ち込み起こし、除草するとともに、稲株の中耕も行う、除草具兼中耕具である。霧島地域では、大正期まで競作会の賞品として、ガンヅメが与えられるほど長く使用された。

(3) ナカヒキ

ナカヒキ（中曳き）は、畑作の陸稲や粟、蕎麦、小豆、大豆などの作物の畝間を後退しながら曳いて中耕と土寄せをしたり、大根などの播種のための畝たてをする道具の地域名称である。ヒッグワイ（曳き割り）やテスキ（手掬）という地域名称は、手で曳いて後退しながら用いる掬という機能的特徴に基づく名称である。ウネタテ（畝立て）はまさに畝を立てるという機能を表す名称である。この民具にも形態的に、長床型と短床型、鉄製の刃のみの無床型とがあり、これらの地域名称からはその判別は困難である。

また、ケランテ（螻蛄の手）という地域名称を持つ民具も、刃先の形態が螻蛄の手に似ているところから付された名称である。手で曳いて後退しながら用いられ、機能的には畝間の中耕、豆類の播種に使用され、ナカヒキの類型に入るものである。

これらの民具も、地域名称が形態的特徴と機能的特徴をさまざまに組み合わせながら一つ一つの民具に付されていることがわかる。その結果、当該地域における生業技術の細部は理解できるとしても、かえって、その多様性ゆえに当該地域外の人々にとって、当該地域の名称からは、具体的な形態を描くことは、極めて困難である。広域的比較の上に文化的比較を試みようとするとき、民具学を進めていくうえで致命的

である。

次に、同様な視点で収穫に関する民具を見てみたい。

3) 収穫

(1) ツメ・タケベラ

ツメ（爪）は、トカラ列島のアワヤマ（梗粟栽培の竹の焼畑）の穂摘み具である。銅板を親指の爪の形に切り出し、爪先の内側を研いで刃を成形したものである。粟の穂首を人差し指と中指の内側に抱き、親指にはめたツメの刃先を押し付け摘み取る。日本列島の穂摘み具が、穂首に刃部を添えて、振じるようにして切り取るのと大きく異なる機能を持ったものであるのに対し、東南アジア一帯で用いられている薄板の腹部に刃を埋め込んで、中指と薬指の内側に穂首を抱き込み、刃に引き付けて摘み取る帆摘み具と似た機能を持っている。

一方、ヘラもトカラ列島のアワヤマの粟の穂摘み具であるが、ツメとは違い小径の丸竹の片方をナイフ状に削り出したもので、刃部に穂首を押し付けて振じるように摘み取る穂摘み具である。形態的には竹篋である。耕耘具の部でも指摘したように、地域名称からは耕耘の機能と収穫具との区別は認識できない。沖縄諸島のイザラや日本列島各地の穂摘み具に繋がるものである。

(2) アサングイ

アサングイは、物をあさる杭という意味である。鉄製の細い杭を真っ直ぐな柄木に取り付けたものであるが、中には除草具兼芋苗植え具であるフィラと同じように九の字形の柄木に、鉄製の細い薄板の刃をつけたものもある。また、漁具として貝類を起こす民具にもこの地域名称が用いられており、その判別は地域名称だけでは不可能である。

(3) クダ・ムギコギイタ

クダ（管）の意で、三島村の島で使用される麦の脱穀用具で、板の先端部に木口と並行に二つの穴を空け、そこに長短二本の丸竹を差し込んだものである。右利きの人用には、左側の棒を長く、左利きの人用には右側の竹を長くして差し込み、竹管とは逆の側に座り、片手を長い棒の先端に置き、一方の手に麦束を握って、穂先を二本の管の間に挟み、クダの先を締めて麦束を手前に引いて脱穀する。ムギコギイタ（麦扱ぎ板）という名称も形態的にも機能的にも全く同じ民具なのである。このクダという地域名称は、麦を扱ぎ落とすという竹管にのみ注目した名称である。

ところが、このクダという名称は、奄美諸島で細く短い二本の竹管を紐等で連結し、掌に持って稲穂を挟んで扱ぎ落とす脱穀具も、芭蕉の緒を扱いて屑を取り除く民具も、紡織作業で糸を巻き取る竹管も指す。つまり、この地域名称、形態からは、収穫具としての機能を判別することは不可能なのである。

一方、ムギコギイタという地域名は、機能が麦の穂の脱穀にあること、その材料が板であるという理解はできるが、最も大事な機能を果たす部分の竹管を想起することは不可能で

ある。ここに正しく民具学における名称の問題点が潜んでいるのである。

(4) メグイボ

メグイボ(廻り棒)は、柄木の先端に回転する打撲部を取り付けた脱穀具で、柄木を手を持ち、打撲部を回転させながら穀物の穂や実を打ち付けて脱穀する。大隅、薩摩、日向ではメグイボの地域名で呼ばれている。小野重朗は、『南九州の民具』で、打撲部の形態から回転軸に数本の細木を板状に編んだものを取り付けたA型、回転軸に太い一本の棒を取り付けたB型、回転軸はなく数本の細木を束にして柄木の先端に紐で吊るしたC型、同様に回転軸がなく一本の太い棒を柄木の先端に縄で吊るしたD型に四分類して比較検討し、この民具が、D型を原型とし、B型あるいはC型を経て縣を生み出したとする系譜論を展開した。一方、奄美諸島では、ムギウチブツト(麦打ち棒)とか、マメウチボとか脱穀対象の穀物名称が付された名称が見られる。この地域名称だと、回転部の有無の判別ができないうえ、一本棒を手を持って打ち付ける脱穀棒との判別もわからない。さらに、打撲部よりも柄木が短いという形態的特徴の判別はなおさらである。小野重朗は、この奄美諸島の型を先に示したD型のさらに古形に分類している。しかし、筆者は、この型は中国雲南省や、広西壮族自治区などの中国南西部に分布することを確認しており、そのつながりが深いものであることがわかっている。やはり、この民具についても、A、B、C、D型という形で分類するに終わらず、分類の根拠とした形態的特徴を付した名称とすべき必要性がわかる。そのことによって、中国における分布が明らかになり、比較することができれば、奄美の型とD型とは系譜を異にするものである可能性も出てくる。単にメグイボという地域名称や、「連枷」という漢字名を越えて、地域内比較はもとより近隣アジアを含めた広域的比較が可能となり、民具学が文化史の研究に寄与する道が開けてくることが期待される。

(5) マッポとムギウチダイ

南九州では、刈り取った麦藁の束の根元を巻き締め、束の穂先を台に叩き付けて穂を脱穀する脱穀方法がとられてきた。その麦束の根元を巻き締める脱穀具がマッポ(巻棒)であり、穂先を打ち付ける脱穀具がムギウチダイ(麦打ち台)である。

①マッポ

マッポ(巻棒)は、2本の棒を細い縄で連結したもので、地域名称を挙げれば、マッポ、マキダケ、ムギウチボウ、ムギウツベ、シメウツポ、カラハシなど多様なものであるが、カラハシという名称を除けば、巻く、締める、打つという機能的特徴と竹、棒という形態的特徴に依拠する地域名称である。カラハシという地域名称は、「カライモ」、「トイモガラ」、「トキツ(玉蜀黍の意)」にもみられるように、そのものが中国、東南アジアを含めた南方の外国からやってきたものであることを表している。

また、形態的には縄の連結の仕方によって、3つに類型で

きる。一つは、一本の木あるいは竹の棒の先端に縄を結束し、他の一本の棒は先端を尖らせ、先端から縄の長さ下がった所に結束したものである。二つ目は、二本の木あるいは竹の棒の先端どおしを縄で結束したものである。三つ目は、二本の木あるいは竹の棒の中央部どおしを縄で結束したもので、実物資料は確認されていないが、筆者の聞き書きによって薩摩町で使用されていたことが確認されている。

以上でもわかるとおり、多様な地域名称にも関わらず、これらの名称から三つの類型を判別することは全く不可能である。現在のところ試みに、一つ目の型をN字連結型麦束巻き締め打ち付け棒、二つ目を門字連結型麦束巻き締め打ち付け棒、三つ目の型をH字連結型麦束巻き締め打ち付け棒と呼ぶことを提案している。この名称に基づけば、ラオス北部を中心とした巻き締め打ち付け棒は勿論、東南アジアを含めて広域的な巻き締め打ち付け棒比較が可能となり、筆者が意図する南九州の民俗文化の位置づけが可能となってくる。

つまり、この名称に基づいて比較検討すれば、棒の素材と長短、縄あるいは紐の素材と長さ、脱穀対象穀物の違いを除けば、その具体的な絵姿が描ける。さらに、中国南西部やラオスを含めて東南アジア全域の巻き締め打ち付け棒は、N字連結型麦束巻き締め打ち付け棒のみであり、穀物の対象が稲であることを除けば、その素材が木、竹ともに一致するが、中国南西部やラオスを含めて東南アジアは分布しない。

さらに、日本国内をみると、N字連結型麦束巻き締め打ち付け棒は、薩摩・大隅のみで、南の島嶼部にも全く分布しない。さらに、旧薩摩藩領域を越えて北にも分布しない。また、門字連結型巻き締め巻き締め打ち付け棒は、旧薩摩藩領域を越えて九州山地の焼畑地帯、四国山脈の焼畑地帯に分布がみられる。しかし、旧薩摩藩領域内でも始良地区の北部、曾於地区、肝属地区、大隅半島地域、薩摩半島地域及び島嶼部を含めて、琉球諸島、八重山諸島に至るまで分布しないのが特徴である。さらに、H字連結型巻き締め打ち付け棒は、鹿児島県のみ分布する資料である。

つまり、N字連結型麦束巻き締め打ち付け棒が中国南西部やラオスを含めて東南アジアから鹿児島に直接伝播し、鹿児島で門字連結型巻き締め巻き締め打ち付け棒とH字連結型巻き締め打ち付け棒とが生み出され、そのうち門字連結型巻き締め巻き締め打ち付け棒のみが九州山地から四国山脈の焼畑地帯に伝播していったと考えてよい。まさに、民具学が文化史研究を担うことが可能となるのである。

次に、ムギウチダイを見てみよう。

②ムギウチダイ

ムギウチダイは、マッポで締めた麦束の穂先を叩き付けて脱穀する脱穀具である。その地域名称を挙げると、ダイ、ムツドコ、ムギウチダイ、ムギウチダナ、トボシダイ、ス、ムツタキ、ウチイタ、ムギウチイタ、タツパン、イタ、パン、ウチイシ、ウス、ムギスリイシと多様な名称を持つ。これらの名称を見てみると、ダイ(台)とかス(簀)、イタ(板)、パン(板)、ウス(白)、イシ(石)という普通名詞の

みの名称が見られ、これだけの名称からは脱穀具の具体的絵を描くことはできない。それらを、素材、形態の特徴、機能的特徴とを合わせ分類すると、現段階で八つに分類することができる。それを列挙すると、四本足の台の天井部に丸竹、半割り、或いは板状に割った竹を篋の子状に並べて取り付けられた竹材篋の子縁台型麦打ち付け台、四本足の台の天井部に、木の丸太や削りだした角材を篋の子状に並べて取り付けられた木材篋の子縁台型麦打ち付け台、鞍骨状の曲がり木を二つに割り左右の足とし、その片側（前面）に小径の丸竹、半割りに割った竹を篋の子状に取り付けた竹材篋の子鞍骨型麦打ち付け台、鞍骨状の曲がり木を二つに割り左右の足とし、その片側（前面）に木の小径丸太、板状に割った木を篋の子状に取り付けた木材篋の子鞍骨型麦打ち付け台、平らな厚板に左右二本の足を付け、斜めに傾けて立てた平板斜め置き型麦打ち付け台、平らな自然石の裏側に支えを鉄んで、斜めに傾けて立てかけた平石斜め置き型麦打ち付け台叩き台、豎白をそのまま横に寝かせて用いる豎白横置き型麦打ち付け台叩き台、珊瑚の一種である菊目石をそのまま地面に置いて、麦の穂を擦りつけたり、麦束の穂先を打ち付けて脱穀する菊目石型擦り付け打ち付け台である。

以上、南九州に見られる麦を脱穀するための打ち付け台の名称を、素材、全体の形状、置き方の状態等の細部について検討を加えてきた。この名称に基づけば、鹿児島はもとより日本列島及び、ラオス北部を中心とした東南アジアを含めて広域的に、脱穀するための打ち付け台の比較が可能となり、筆者が意図する南九州の民俗文化の位置づけが可能となる。たとえば、東南アジアをフィールドにして、長年少数民族の生活を記録してきた故山崎久勇氏によれば、竹材篋の子縁台型麦打ち付け台や竹材篋の子鞍骨型麦打ち付け台の存在が、ミャンマー・シャン州のシャン族の収穫具として明らかにされており、筆者も聞き書きではあるが、ラオスのルアンパバーン県ロンラオ村のモン族が、竹材篋の子鞍骨型麦打ち付け台を使用していることを確認している。また、平板斜め置き型麦打ち付け台も、ラオスのフアパン県リヤク村のタイプアン族が利用していたベンティーカオ（叩き付ける・稲）という名称の稲の脱穀具を蒐集している。さらに、板の両脇に脱穀粒の飛散を防止するための板を取り付けた形の資料を、ラオスのボンサーリー県ブンタイ県ポートン村のタイルー族から蒐集している。また、平石斜め置き型麦打ち付け台についても、尹紹亭によれば、中国雲南省西双版纳のタイ族が、稲の脱穀に使っていることを報告している。

こうしてみると、少なくとも六種類の名称は、ラオスを含めて東南アジア全域の穀物を脱穀するための打ち付け台を、比較するに耐えうる民具資料の名称とすることができる。

(6) ミ・バラミ・バラ

ミ（箕）は、脱穀作業で脱穀した穀物から柄屑を取り除いて穀物のみを取り出す脱穀具である。また、精米作業で穀物の殻や糠を取り除いて、人間が食べられる状態の穀物の実を得るための精米道具である。ミの中に穀物を入れ、ぐるぐる

揺すって浮いてきた屑を手で掴んで取り除き、さらに上下に煽って糠などの屑を外に飛ばして、穀物の実だけを選び出す。鹿児島では、ミという名称を付された民具には、ヒオキミ（日置箕）、チョウサミ（帖佐箕）という地域名称を持つ、ゴザ目編みのU字形の片口箕と、バラミ（バラ箕）という地域名称を持つ網代編みのU字形の片口箕とがある。しかし、この二つの箕には網目の違いとU字形という形態的特徴とは別に、もう一つ大きな違いがある。それは、前者がU字に開いた先と逆の奥の両隅が折り曲げられ、内側で縫合されているのに対し、後者は、両隅は折り曲げが見られず全て編み上げているのである。しかし、製作地名の日置や帖佐にミという呼称を付しただけでは、この違いは判別できない。このことは、網代編みという網目の名称に箕という名称を付しても同様である。現在のところ筆者は、それらの違いを表す名称として前者を竹へぎゴザ目編み両隅折り曲げ縫合片口箕、後者を竹へぎ網代編み総編み上げ片口箕と名付けることにしている。この名称を基準にして鹿児島以北の日本列島のミを見ると、一枚樹皮製両隅折り曲げ片口箕、一枚樹皮製両隅折り曲げ縫合片口箕、樹へぎゴザ目編み両隅折り曲げ縫合片口箕、竹へぎゴザ目編み両隅折り曲げ縫合片口箕、竹へぎ網代編み両隅折り曲げ縫合片口箕に分類できる。

しかし、奄美諸島には竹へぎ製のバラ、サンバラという地域名称を持つ、二つ越し二つ潜りの網代編み総編み上げの浅底箕の円形箕と、三つ越し三つ潜りの網代編み総編み上げの浅底箕の円形箕が分布する。現在のところ前者を竹へぎ二つ越し二つ潜り網代編み総編み上げ浅底箕円形箕、後者を竹へぎ三つ越し三つ潜り網代編み総編み上げ浅底箕円形箕という名称を付しておくことにしている。

実は、鹿児島には、脱穀具や精米具としての機能は、ヒオキミやチョウサミに譲ったが、乾燥具、運搬具、みそ発酵具、食器などの機能を持った、バラ、ウバラ（大バラ）という地域名称を持つ竹へぎ二つ越し二つ潜りの網代編み総編み上げの浅底箕と、竹へぎ三つ越し三つ潜りの網代編み総編み上げの浅底箕が存在する。バラミという地域名称もこれに由来した名称である。

こうした名称を視座として、日本列島と周辺アジアの箕の全体を眺めてみると、おおよそ次のような様相が見えてくる。

両隅折り曲げ縫合片口箕は、日本列島では北海道（アイヌ）、青森から鹿児島まで分布し、そのうち鹿児島のは北側からサンカによってもたらされた技術である。一方、南アジアのブータンのヒマラヤ寄りの北部、中央部、西部地域にも見られ、水田稲作、蕎麦・麦畑作地帯に見られる。それに対し、両隅総編み上げ片口箕と網代編み円形箕の分布を見ると、東・南中国海を取り囲むように分布することがわかる。特に、ヴェトナム北部のライチョウ省モッポウ村（モン族）における、網代の片口箕と網代の円形箕との併存は、これら二つも箕が、折り返しのない総編み上げの技術であるという特徴を持ち、その出自が共通していることをよく物語っている。さらに、上江洲均が紹介している円形箕の縁の片方だ

けを低くして屑が出やすくした台湾のアミ族のサタブスの存在や、ラオス北部のヴェトナム国境沿いに住むタイダム族が使用するドンファット（浅底策・煽る）と称する、先がすばまった栗の実の形をした箕は、円形箕と片口箕との中間の形であることを推量させる。日本列島の中で鹿児島は、円形箕の文化地域に位置することを理解できるのである。

かつて、下野敏見は「南日本の民具と基層文化」（『隼人文化』第4号 隼人文化研究会 昭和53年）と、それを受けた「大和の箕・琉球の箕一片口箕と丸箕をめぐる諸問題一」（『鹿児島民具』第2号 鹿児島民具学会 昭和56年）で、片口箕と円形箕を検討した。前者では、片口箕を大和文化圏の民具と位置づけ、韓半島の片口箕もこの範疇に入れ弥生文化とし、琉球を「丸いファラ（バラ）」を用いる「非箕的農耕社会」で「非日韓」で、縄文文化であるとする。それに対し後者では、青森から琉球諸島に至る日本列島、台湾、韓国の箕を取りあげ、片口箕使用圏としてトカラ列島を南限とする韓半島文化圏、大和文化圏を設定し、丸箕使用圏としてトカラ列島を北限とする琉球文化圏、台湾文化圏を設定している。しかし、先述した筆者の研究成果によって、この下野の箕に関する一連の議論は、大きく修正されなければならない。

また、2013年12月のプータン行で発見し、収集してきた竹へぎ二つ越し二つ潜り網代編み方形箕の存在は、さらにこれまでの箕の検討に新たな視点を与えてくれる。方形箕は、フィリピン北部のイフガオ族の水田稲作でも使用していることが分かってき、さらなる資料の蓄積と、円形箕との関係の検討が迫られる。さらに、一枚樹皮製四隅折り曲げ縫合方形箕の存在の可能性が高まってきたのである。

4) 交通・運輸・通信

ここでは、運搬具である背負い籠を例に取りあげてみたい。小野重朗も指摘したように南九州から南西諸島の地域に分布する背負い籠は、大きく4つの型に分類できるが、特に籠と負い縄のかけ方の関係に注目して試みることにする。

(1) カリテゴ

カリテゴの地域名称の構造は、「カリ」が「背負い」という意味をなし、「テゴ」が「籠」という意味をなす。つまり、「背負い」という機能的特徴を表す名称と、「テゴ」という形態的特徴を表す名称とから成り立っていることが理解される。形態的な特徴を挙げると、竹籠の前面の上側の縁の左右に、二本の負い縄の一端をそれぞれ取り付け、その二本の負い縄の端を籠の底を潜らせて、背面に回しそれぞれの端を結束し、肩で背負う背負い籠である。

この型の背負い籠は、鹿児島県の内、大隅、薩摩、日向のほぼ全域に分布するが、特に北薩摩地域、始良北部にかけて色濃く分布し、一部大隅半島の西海岸、大隅東部、桜島周辺、大隅東部等に分布する。ただ、鹿児島市から吹上砂丘沿いの日置地区、薩摩半島部の南薩摩地域、大隅半島先端部東海岸の佐多や内之浦地域には分布が見られない。

しかし、カリテゴという地域名称では、どのように背負う

のかという機能的特徴と、負い縄が何本、どのように籠に付けられているのかという形態的特徴は、理解することはできない。名称に含まれていないことになる。地域での生活レベルの分類ではこれで十分なのであろうが、これでは文化史を問題とする学問的レベルでは、役に立つ名称とはならない。特に、広域的に比較するときには不十分である。

したがって、この籠の名称としては、「二本の負い縄」が取り付けられていること、その負い縄の端を「籠の底を潜らせる」という形態的特徴を加味し、さらに「肩で背負う」という機能を加えた名称が必要となる。その結果「二本負い縄底通し肩負い籠」という名称が浮かんでくる。この名称を用いた背負い籠の分類に基づいた目録が作成されれば、鹿児島県で作成された目録であろうと、青森県で作成された目録であろうと、同じレベルで理解可能となり、広域的比較展示も可能となりうる。

(2) キンザンテゴ・ダツテゴ

この背負い籠は、キンザンテゴ（金山籠）、ダツテゴ（茅製俵・籠）という地域名称を持つ。この地域名称の構造は、「キンザン」が「金山」という意味をなし、「テゴ」が「籠」という機能的特徴を表す名称と、「テゴ」という形態的特徴を表す名称とから成り立っていることが理解される。地域名称が示すように、鹿児島県の内、枕崎や旧薩摩町、横川町など、かつて摩藩の金山が営まれていた地域の周辺にのみ分布する。しかし、カリテゴと同様に、どのように背負うのかという機能的特徴と、負い縄が何本、どのように籠に付けられているのかという形態的特徴は、名称に含まれていないことになる。この籠は、「一本の負い縄」が取り付けられていること、その負い縄を「胴部の外側面に巻き」、その両端を「籠の底を潜らせる」という機能を加味し、「肩で背負う」という機能を加えた名称が必要となる。その結果「一本負い縄胴巻き底通し肩負い籠」という名称が妥当といえる。

(3) シタミ

シタミという地域名称は、どのような構造を持ったものかよく分からない。ただ、かつて、大和朝廷の隼人司に仕えた「作手隼人」が朝廷のために作った竹細工製品の一つにこの名が見られるが、その具体的な形は分からない。また、民俗例としては、宮崎県北部の日之影町辺りに見られる、底部と胴部とが方形で、肩部が斜めで、首部が口縁部に向けて広口になる形を典型とする竹へぎで編んだ魚籠の名称として認められる。

この型の背負い籠は、鹿児島県の三島村と十島村にのみ分布し、他の地域には分布しない。

(4) テル

テル（籠）という地域名称を持つ。この単なる籠形態的特徴を表す名称のみでは、何のために用いる籠なのか、ましてどのように背負うのかという機能的特徴と、負い縄が何本、どのように籠に付けられているのかという形態的特徴が分からない。この背負い籠は、一本の負い縄で籠の胴体を巻き、その負い縄を前方に延ばし、負い縄の両端を籠の背面で結合

し、額で背負うという背負い籠である。こうした形態的特徴と機能的特徴とを併せ考えると、一本負い縄胴巻き額負い籠という名称が妥当となってくる。

以上、籠と負い縄の取り付け方、背負い方という形態的側面と機能的側面の特徴を捉えながら付したこれらの名称は、地域名称では不十分な部分を補った名称ということになる。このことによって、日本列島における背負い籠を、地域名称を越えて広域的に比較できるようになる。

さらに、このことは日本列島に留まらず、筆者がこれまでにラオス北部を中心に蒐集してきた東南アジア大陸部の背負い籠についても、この4種類の名称で分類できるのである。たとえば、東南アジア大陸部においては、二本負い縄底通し肩負い籠は、モン族のみが背負う背負い籠であり、一本負い縄胴巻き底通し肩負い籠は、ヤオ族のみが背負う背負い籠であり、一本負い縄胴巻き前面留め肩負い籠は、白タイ族、ラオ族、タイダム族、タイプアン族などタイ族系の民族が背負う背負い籠であり、一本負い縄胴巻き額負い籠は、タイ族系、カム族、アカ族、クイ族など複数の民族が背負う背負い籠であることが分かる。つまり、日本列島においては、地域的な分布に見える背負い籠が、こうした4種類の名称を用いて比較することによって、民族の文化の差異として見えてき、日本列島の民俗文化の多様性を議論する文化要素として理解することができるということである。それは、まさに民具研究が比較文化史の研究の現場に立つということに他ならない。次に、運搬具である担ぎ棒を例にして、同様な試みをしてみたい。

(5) オーコ

南九州から南西諸島にかけての地域の担ぎ棒を見ていくときに、どこの部分が比較の指標になるのであろうか。それは材料であり、棒の両端部分の形態的特徴、肩に当てる部分の形態的特徴であり、担ぎ方という機能的特徴であろう。これらの差異に基づいて分類し、名称を与えていくと、ほぼ以下のようなようになる。

①オーコ、ヨホ、アホ

この地域名称は、オーコ、ヨホ、アホなどが矛という意味をなし、両端の尖った形態的特徴を表す名称のみで成り立っていることが理解される。

この担ぎ棒は、稲束や薪の束などの荷物を刺すため、木の棒の両端を四角錐形に削出して鋭く尖らせ、中央部は肩に当たる側を湾曲させて方形に削出し、一人の人間が尖頭部の一端に荷物を刺し上に持ち上げ、次に片方を刺して、バランスを取って肩で担ぐ担ぎ棒である。この形態的特徴と機能的特徴を併せ考えると、木製・両端四角錐形尖頭削出し・肩当て部方形湾曲削出し・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒という名称が導き出される。この型の天秤棒は、鹿児島県の内、奄美大島や徳之島を中心に奄美諸島に分布し、他の地域には分布しない。

②オコ、ヤマオコ

オコ、ヤマオコの地域名称の構造は、オコは矛という意味

をなし、両端が尖った形態的特徴を表す。ヤマは主に山で使用されるという機能的特徴を表す名称で成り立っていることが理解される。しかし、この名称では、なんのために用いる棒なのか、どのようにして担ぐのかという機能的特徴と、肩に当たる部分を含めた全体の形態的特徴は、名称に含まれていないことになる。このオコ、ヤマオコについて、形態・機能に基づきその点を考慮した名称として、両端四角錐形尖頭削出し・肩当て部方形湾曲削出し・枝付き突き挿し型一人担ぎ棒、木製・両端三角錐形尖頭削出し・肩当て部三角削出し・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒、竹製・両端逆側削ぎ・枝付突き挿し型一人担ぎ棒、竹製・両端逆側削ぎ・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒という名称が導き出される。

③イネサシ、サシ

この地域名称の構造は、イネは担うという機能的特徴を表す名称で、サシも担うという機能的特徴を表す名称で成り立っている。両端に荷物を吊り下げて担ぐ担ぎ棒である。また、奄美大島では、クヤシボコと呼ばれるが、これは、形を壊したホコという形態的特徴を表現した名称である。いずれにしても、これらの地域名称だけでは、形態的な側面はまるで表現できていないうえ、機能的にも荷物をどのように担うのかという機能も分からない。そこで、①と②と同様の視点で分類してみると、木製・両端木口彫込付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒、木製・両端木口駒付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒という名称を付すことができる。

④イネサシ、イネカツ、ミッサシ

この地域名称の構造は、イネは担うという機能的特徴を表す名称で、サシも担うという機能的特徴を表す名称で、ミッサシも担う対象の水を意味し、機能的特徴を表す。名称の中でカツだけが鉤という形態的特徴を示す名称である。①、②、③と同様の視点で分類してみると、木製・両端木口鉤付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒という名称が導き出される。

⑤イナイボウ・シンボウ

この地域名称の構造は、イネイは担うという機能的特徴を表す名称で、シンは真、本当のという、ボウは棒という形態的特徴を示す名称である。この担ぎ棒は、木の棒(丸太)の両端の木口を残して切り、棒の中央に荷物を吊して、人間が2人で前後を肩で担ぐ棒である。①、②、③、④と同様の視点で分類してみると、木製・両端木口・丸棒・中央吊り下げ型二人担ぎ棒という名称が導き出される。

以上、担ぎ棒を素材、全体の形態、両端の形態の細部、荷物の付け方、担ぎ方という形態的側面と機能的側面の特徴を捉えながら、南九州から南西諸島の背負い籠の名称を検討してきた。その結果、地域名称では不十分な部分を補った名称の設定が可能となってきた。このことによって、日本列島における担ぎ棒を、地域名称を越えて広域的に比較できるようになる。

さらに、このことは日本列島に留まらず、筆者がこれまでにラオス北部を中心に蒐集してきた東南アジア大陸部の担ぎ

棒についても、この類型の名称で分類できるのである。たとえば、東南アジア大陸部においては、木製・両端四角錐形尖頭削出し・肩当て部方形湾曲削出し・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒は、ヴェトナム北部バックワン県トムソオン村の赤ザオ族（赤ヤオ族）が担ぐリャンモンと呼ばれる担ぎ棒に見事に対応する。また、①の木製・両端三角錐形尖頭削出し・肩当て部方形削出し・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒は、ヴェトナム北部バオラック県ナーザン村のサンチー族が担ぐサムと呼ばれる担ぎ棒と肩当て部が三角形に削り出されている以外は、細部にわたり一致する。さらに、②の竹製・両端逆側削ぎ・枝なし突き挿し型一人担ぎ棒は、ラオス北部のルアンパバーンの船着場で、梶皮の運搬に用いられていた竹製の担ぎ棒、ヴェトナム北部バックワン県トムソオン村の赤ザオ族（赤ヤオ族）が担ぐ竹製のリャンモンと一致する。また、③の木製・両端木口彫込付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒は、ヴェトナム北部バオラック県コックスー村のロロ族が担ぐバットウーと呼ばれる担ぎ棒と細部にわたり一致する。さらに、木製・両端木口駒付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒は、素材が竹であることを除けばラオス北部のタイ族系の諸民族が担ぐメーカーンと呼ばれる担ぎ棒や、ヴェトナム北部バオラック県ラオバック県ラオバック市場でヌン族が担いでいたカーンやヴェトナム北部ムーカンチャイ県サイルーン村の黒ザオ族（黒ヤオ族）が担ぐリャンアムと呼ばれる担ぎ棒、ヴェトナム北部バックワン県トムソオン村の赤ザオ族（赤ヤオ族）が担ぐ竹製のリャンモンと一致する。また、④の木製・両端木口鉤付・方形削出し・吊り下げ型一人担ぎ棒は、ヴェトナム北部の赤ザオ族が担ぐドモンと呼ばれる担ぎ棒に対応する。さらに、⑤の木製・両端木口・丸棒・吊り下げ型二人担ぎ棒は、素材こそ竹との違いはあるものの、ヴェトナム北部のサンチー族が80 kgにも及ぶ重量の木製横臼を、女性二人で1,000 mの高地から運び降ろす担ぎ棒と一致する。ラオス北部のタイ族系の民族は、12月が結婚の季節で、その時期になると竹の丸太を家の根太に通して、その両側を担いで家を移転させる風景をよく見かけるが、これも竹のシンボウと考えてよからう。

こうしてみると、南九州から南西諸島の担ぎ棒のそれぞれの属性に基づいて付した名称に拠れば、先述した背負い籠と同様に、担ぎ棒もまた、国境を越えた日本列島の民俗文化の多様性を議論する文化要素として理解することができるということである。

次に、魚撈具である魚籠を例にして、同様な試みをしてみたい。

5) 漁撈・収納・調整・運搬用具

(1) カタギイテゴ・コシテゴ・イオテゴ、ウナツテゴ、ウティグ、イビラク、アギウベラク

この型の魚籠は、底部・胴部を方形に編み、胴部の経ヘギの左右両端の数本を相互に横に曲げて、菱四つ目編みで肩部を首部の付け根に向けて括れるように斜めに編み上げ、さら

に残っている胴部の経ヘギと新たに緯ヘギを追加して、首をラッパ状に広口に編み上げた魚籠である。腰に付けて、サカテゴ、エビテゴなどと呼ばれる釜漁や投網などの網漁で獲った獲物を入れる魚籠で、投網を打ったり、移動するときに腰にフィットしてコロコロしないので、獲物の魚が傷まないという。また、深みに入っても魚籠から獲物が出ないし、肩部があるのでエビが跳ね出たりしないともいう。

カタギイテゴという地域名称は、肩部で一旦編み方が途切れるという形態の特徴から付された名称で、この名称から魚籠という機能的特徴はもとより、先にあげた形態的特徴を思い描くことは不可能である。コシテゴという地域名称も腰につける籠ということは想定できても、これが魚籠であり、その形態的特徴を想起することはできない。イオテゴ、ウナツテゴという地域名称も、イオが魚を、ウナツは鰻を意味し、それが魚籠であるのか釜であるのか判別は難しい。また、ウティグ、イビラク、アギウベラクは、奄美大島、喜界島、徳之島の地域名称である。ウやイはイオ（魚）を入れるという機能的意味を表し、ビラク、ベラクは籠という形態的特徴を表す名称であろう。特に、アギウベラクは籠という形態的特徴を表す名称であろう。特に、アギウベラクは、徳之島の地域名称で、アギは魚の鰓をさす語で、肩部の編み目の形態的特徴からきた名称である。しかし、いずれにしてもこれらの地域名称が魚籠であり、しかも、先にあげたような形態的特徴を想起することは不可能である。

この多様な地域名称を越えて、どの部分の形態が比較の指標になるのかという視点で分類し名称を与えてみると以下の5類型になる。方形斜め肩首括れ広口有舌型魚籠、方形斜め肩首括れ広口無舌型魚籠、方形斜め肩首括れ筒口無舌型魚籠、方形水平肩首括れ広口無舌型魚籠、方形小肩首括れ広口有舌型魚籠がそれぞれである。

以上、形態の細部特に肩部の形態、首部から口縁部にかけての形態的特徴に焦点を当てながら、南九州から南西諸島の魚籠の名称を検討してきた。その結果、地域名称では不十分な部分を補い、その魚籠の像を、形態と機能の特徴を捕らえながら具体的に描くことができる名称の設定が可能となってきた。勿論、理論上からは有舌の要素が加わることによって、さらに増えることが予想はされるが、ここでは現在確認できる資料に限定して作業を行った。しかし、それでもこのことによって、日本列島における魚籠を、地域名称を越えて広域的に比較できるようになる。

なお、こうした魚籠は不思議なことに、日本列島では佐賀県の東与賀町、岐阜県の徳山村、明智町の三箇所にしかその存在が確認されていない。

さらに、このことは日本列島に留まらず、筆者がこれまでにラオス北部を中心に蒐集してきた東南アジア大陸部の及び台湾の魚籠についても、この類型の名称で分類できるのである。たとえば、東南アジア大陸部においては、方形斜め肩首括れ広口有舌型魚、方形斜め肩首括れ広口無舌型魚ともに、ラオス北部でタイ族系の民族及びカム族の間に色濃く見られ

る。その周辺のタイ、ヴェトナム、中国雲南省や中国広西壮族自治区のヤオ族、フィリピンのタガログ族などにも見られ、台湾においてはアミ族にのみ分布し、台湾でこの型の魚籠を所有して居れば、アミ族であると判断して間違いはない。方形斜め肩首括れ筒口無舌型魚籠については、中国広西壮族自治区の壮族の間に色濃く分布し、遠くネパールにも分布する。また、方形水平肩首括れ広口無舌型魚籠は、ネパールにも分布する。さらに、方形小肩首括れ広口有舌型魚籠は、ラオス北部のタイラー族の間にのみ見られ、タイラー族のオリジナルではないかと思われる。

こうしたこれらの魚籠以外にも、大きな問題として釜の検討も残されているが、釜については筆者の「南九州の特徴ある民具―地域名称を越えた属性に基づく民具名称の試み―」（『神奈川大学 国際常民文化研究機構 年報3』2011年度）で議論しているので参照されたい。

3. 終わりに

このように、地域名称から離れて、その民具資料のどの部分が比較の対象となりうるのかという視点をもって、形態的特徴や機能的特徴を、統一的なルールに従った客観的名称に反映させることによって、民具研究が国境を越えて比較文化史の研究に資する学問としての役割を果たすことができるのではないかと考える。これまで、民具学もまた民俗学同様に、あまりにも地域名称・民俗語彙にこだわりすぎてきたのではないかと。勿論、民俗語彙が持つ有効性を否定するものではないが、それとは別の方法も模索していくことは必要であろう。研究対象の民具資料が有形である以上、その形態及び構造の特徴を細かく細部にわたって工学的に検討し分類し、それに基づいた名称を伏すことも一つの道であろう。そうした意味で、かつて小野重朗が南九州で展開した二つ家を中心

とした民家の研究や運搬具である背負い縄、背負い籠籠、収穫具である麦打ち台、廻り棒などの有形民俗資料研究は、我々の前に一筋の道を指し示している。

筆者は、ここ十数年「内なる鹿児島を探る民俗の旅」という旗印を掲げ、南九州の民俗文化を日本列島や東南アジアという広がりの中に位置づける広域的比較研究の試みを続けてきている。そしてその成果を、勤務していた鹿児島県歴史資料センター黎明館の民俗展示に反映させてきた。その展示の過程で常に感じていた広域展示の最大の課題は、民具資料の具体像を描く共通言語、共通名称が確立されていないことであつた。各博物館の収蔵目録では何であるかぐらいまでは分かっても、相手方の収蔵庫まで調査しないと比較指標となるべき部分の具体的な形態が分からず、発掘調査報告書を紐解きながら資料の確定を進める考古学分野の学芸員を羨望の眼差して眺めていた。今回の「民具の名称に関する基礎的研究」に参加できたのを期に、積年の思いを整理することに努めてきた。本稿では、運搬具のカリコ、シカタ、カブシ、カタボウ・カタアテ、ウセグラ、ヒカセグラ、漁労・船のスブネ、イタツケ、アイノコ、ヨホ、カイ、アカトリ、イカリ、漁労・海漁労具のエギ、ツノビキ、サワラエギ、トギヤ・モリ、ユンガマ、アサンガイ、チンニル、アリョ、イカカゴ等については触れることができなかつた。また、手工・諸職、衣、食、住についてはほとんど検討できなかった。これらの点については、今後とも検討を続けたい。

前掲した名称一覧は、いまだ未完成のものではあるが、これを足掛かりとして、全国の県立博物館の民俗分野の学芸員による民具名称の研究が進展することになればと、密かに期待している。

なお本稿は、筆者の前掲「南九州の特徴ある民具―地域名称を越えた属性に基づく民具名称の試み―」を基に、加筆、修正を加えたものである。